

うつせみのあなたに

第3巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
第1部 09.02.17~09.03.08	
09.02.17 ああでもあり、こうでもある	6
09.02.18 差別化	17
09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい	27
09.02.20 まぼろし	39
09.02.21 トリトメのない話	52
09.02.22 架空書評：奪還	62
09.02.23 おいしくない社会	71
09.02.24 あきらめない	83
09.02.25 最後のとりでを守る	95
09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ	107
09.02.27 イエス・アイ・キャン	118
09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに	128
09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？	131
09.03.02 女か男か？	141
09.03.03 ヒトは本を読めない	150
09.03.04 作者はいない	158
09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって	169
09.03.06 毎度ありがとうございます	183
09.03.07 ゆうれいをはらう	196
09.03.08 こんなことを書きました（その4）	210
第2部 09.03.09.~09.04.18	
09.03.09 要するに、まなかな、なのだ	218
09.03.10 女心を男が歌う	229
09.03.10~12 でまかせしゅぎじっこうちゅう	239
09.03.13~15 でまかせしゅぎじっこうちゅう	252
09.03.26~27 かわる（1）～（5）	265
09.03.28~29 かわる（6）～（10）	277

09.03.30	なる (1) ~ (3)	294
09.03.31	なる (4) ~ (6)	302
09.04.01	なる (7) ~ (8)	312
09.04.02	なる (9) ~なる (10)	321
09.04.03	たとえる (1) ~ (2)	333
09.04.04	たとえる (3) ~ (4)	342
09.04.05	たとえる (5) ~ (6)	353
09.04.06	たとえる (7)	364
09.04.07	たとえる (8)	370
09.04.08	たとえる (9)	375
09.04.06~09	でまかせしゅぎじっこうちゅう	382
09.04.17	たとえる (10)	392
09.04.18	こんなことを書きました (その5)	404
あとかぎ		
	あとかぎ	412
	『うつせみのあなたに 第1巻~第11巻』の各記事タイトル	413
奥付		
	奥付	432

はじめに

はじめに

本書を第3巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第3巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いるという仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.03.08 こんなことを書きました(その4)」、そして第2部の最終記事「09.04.18 こんなことを書きました(その5)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

第 1 部 09.02.17～09.03.08

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

◆ああでもあり、こうでもある

2009-02-17 08:59:17 | Weblog

そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。このブログでは、そういうことについて、このところ考え続けています。飛び入りの方も大歓迎ですので、ご一緒に、ああでもない、こうでもない、だけでなく、ああでもあり、こうでもある、と欲張りながら考えてみませんか？ たった今、

「ああでもあり、こうでもある」

と書きましたが、きょうはそんな感情から出発したいと思っています。で、思い出したのですが、心理学では、同一の対象に相反する感情を抱くことを、

「アンビバレンス = ambivalence = 両面価値 = 双価性 = 両価性」

と呼んでいるそうです。

よく考えれば、貪欲ですね。積極的で頼もしくもありますね。「2度おいしい」という言い方を、連想しちゃいます。あれって、いろいろな場面が想像できるし、いろいろな意味にとれて、2度に限らず、何度もおいしい体験ができることにまで夢がふくらんだりして、わくわくしませんか？ エッチな響きも感じるのは、自分だけでしょうか？ お恥ずかしいです。いや、パソコンに向かって、一人でにやにやしている場合じゃないのです。

「2度おいしい」って、どういう意味なんでしょう？

ありゃ、やっぱり駄目です。良からぬ妄想が脳裏をかすめます。ちょっと、深呼吸してみます。

*

失礼いたしました。深呼吸のついでに、腰痛体操をしまりました。このところ、親に代って家事をする割合が急に増えてきて、腰が痛くてしょうがないのです。いやー、家事って本当に大変ですよ。さて、

＞そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。

と、冒頭に書きましたが、本＝書物も、そうですね。書店、あるいは図書館で実際に目にもすることもできるし、手で触れることもできます。本＝書物が、商品であることは言うまでもありません。だから、お金と交換して購入し、消費される対象になります。溜め込む＝保存もできますし、廃棄＝処分されもします。その意味では、スーパーの棚に並んでいるケチャップ、または電気製品の量販店に陳列されている洗濯機と同じです。

資本主義経済が、あらゆるものを商品にしてしまう

ことは、みなさんをご承知の通りです。ヒトがいい例ですよ。テレビという商品で、毎日みなさんをご覧になっている、芸能人、ミュージシャン、コメンテーター、モデル、政治家も、広義では全部商品です。

一人ひとりが違うヒト＝人格ではないか？

とお思いになる方もいらっしゃるでしょう。確かに、そうです。でも、テレビやメディアに登場して、その映像なり「発言＝音声」の見返りとして、出演料やギャラ（※政治

家の場合には、間接的なお給料＝ギャラ）をもらっている限りにおいては、やはり、商品です。

購入され、消費され、保存され、いつかは廃棄される

運命をたどります。

テレビの番組がいっせいに入れ替わるさいに特番のバラエティーが組まれますが、大きなスタジオにありとあらゆるジャンルの、芸能人や有名人が登場しますね。あれを思い浮かべてください。ヒトが商品であることを実感できる絶好のチャンスですよ。お笑い芸人、元お笑い芸人、俳優、元俳優、スポーツ選手、元スポーツ選手、歌手、元歌手、モデル、元モデル、元専門弁護士、元専門大学教授、元専門政治家、元専門作家、分類不可能でタレントとしか言えなくて存在価値がよく分からないヒト、元からずっと分類不可能でタレントとしか言えなくて存在価値がよく分からないヒト……切りがないですね。そうしたヒトたちのごく一部が、一堂に会しているさまを見て、やはり、

一人ひとりが「違う個性的なヒト＝人格」だ

とお感じになりますか？ もしお感じになるとすれば、ご家族とか、親しい方とか、お知り合いが、そうした番組に出ている、あるいは、かつて出ていらっしやった、または、自分がすごく鼻根（ひいき）にしているヒトがいる、という特殊な思い入れが、そう言わせているのではないのでしょうか？ こんな言い方は、失礼ですね。ごめんなさい。ですので、ちょっと不快に思われる方がいらっしやるのを承知のうえで、あえて申しますが、今例に挙げたような特番に出ている方々は、

取り替え可能＝インターチェンジアブル＝interchangeable、つまり disposable＝ディスプレイザブル＝使い捨て可能

ではないのでしょうか？ 広い意味での差別発言になりますね。重ねて、お詫び申し上げます。真面目なお話をしている途中で、ぽろりと出てしまった失言＝暴言として、お許しくださいませ幸いです。

失言と言えば、現総○の失言、ちょっとひどすぎやしませんか？ この国は、あの国に追随する傾向がありますが、お馬○さんをトップに選んでしまったという点でも、一足おくれて追随していますよね。Wことブッ○ユ（※父子の、特に子のほうです）だなんて、言ってませんよ。念のため。書いてはいますけど。

で、現○理ですけど、あのヒトの失言は、受けようとしてやっている過失なのでしょうか？ そうだとすれば、ほんまもんでっせー。まだ「確信犯」のほうが救われます。それで、あってほしいです。ご本人が本拠地だと勘違いなさっているアキバを始め、ハローワーク、市場、街頭、学校、いろんな所に出現するのはいいのですが、その都度、失言しちゃうのですよね。何だか、出現＝失言、出没＝陥没、神出鬼没＝露出沈没という感じ、じゃないでしょうか？

あのヒトは極端な例ですけど（※ほんまかいな？）、この国の内閣総理大臣および各大臣ならびに副大臣そして国会議員たちは、みんな

取り替え可能＝インターチェンジアブル＝interchangeable、

つまり

disposable = ディスポーザブル = 使い捨て可能

という気がしませんか？ 実際、敗戦以後の歴史を振り返ってみると、これまでがそうであったという思いが強いのは、自分だけでしょうか？

あるヒトがいなくなっても、その代わりを務めるヒトがすぐに見つかるから大丈夫。他のヒトとの組み合わせも簡単。理系、工学、および経済・経営の分野でいう「モジュール」という言葉と似ていませんか？「おらっ、またゴタクを並べやがって！」ああ、その声は幻聴！ やめてくださいよ。けっこうマジなお話をしているんですから、ゲンチョーさん。

「何がマジだよ。おめえ、自分のことを柵に上げて、さっき、お偉いさんを馬鹿呼ばわりしていなかったか？」いえいえ、○を使って処理をし、それなりに敬意を表したつもりなのですけど。「○を使って敬意を表した、だと？ しゃらくせーこと言うな。2千円

詐欺野郎めが」まだ、あのお話にこだわっていらっしゃるのですか？ 依然として被害者の方から連絡がないんですよ。「こう見えてもなあ、おれは――」ゲンチョーさん、幻聴だから、こう聞こえても、じゃないんですか？「ったく、もう、この屁理屈野郎が。じゃあ、言い直すよ。こう聞こえてもなあ、おれは、曲がったことが大嫌いなんだ」ええ一つ。意外なお言葉。曲がったことが、お嫌いなんですか？ 曲がったことが、ない。曲がった……？ 何だか、もよおしてきました、ゲンチョーさん。「もよおしてきた、だと？ 気持ち悪いやつだな」

曲がった、曲がる、曲がれば……。あれ、まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今

では、ないかいのう？

「スプーン曲げ少年少女たち」

全国の元・「スプーン曲げ少年少女たち」のみなさん、現在はどうしていらっしゃるますか？ 火付け役は、ユリ・ゲラーさんでしたよね。懐かしーい。いい仕事していらっしゃいました。あれは、いつのことでしょう？ テレビ局のスタジオから、この国の人たちにむかって、今から念力を送るから、一緒に曲げてみないか、みたいなことを言うんですよ。自分も、家にあるスプーンを何度手にしたことか。そのたびに失望しました。

曲がらない――。ぜんぜん、曲がらない。曲がったのは、への字の口と、へそだけ。

でも、曲げたという連絡が、あちこちからテレビ局に寄せられるんです。主に、少年少女たちから。真偽については、このブログでは問題にしません。念のため（※念力のため、ではありませんよ、念のため）、申し添えます。そうした議論をなさりたい方は、しかるべきサイトがあると思いますので、どうか、そちらでなさるよう、お願い申し上げます。で、元・全国の「スプーン投げ少年少女たち」のみなさん、あれから道を間違った方、つまり進むべき道を曲がっちゃった方は、いらっしゃいませんでしたか？ 心配しております。

あのころは、超能力ブームでしたよね。それに加えて、U F O = 未確認飛行物体 = 空飛ぶ円盤。今のお子さんたちにU F Oなんて言っても、焼きそばだと思われるのがオチでしょうか？ あんまり、最近は見聞きしませんよね、あの言葉。ああいうのは、今、流行らないのでしょうか？ オーラとか、スピリチュアルのほうに、お客さんが行ってしまっているのでしょうか？

U F Oと言えば、矢追ディレクター、今も、追い続けていらっしゃるようで、何よりです。中岡俊哉という方も、あのころにご活躍されていらっしゃいましたね。ご本を、本屋さんでよく立ち読みしていました。超常現象とは違いますが、ネッシーも、スプーン投げやU F Oや心霊写真なんかといっしょくたにされて、当時の番組に「不思議なお話」という形で、出まくっていた記憶があります。

エキサイティングでした。スリリングでした。おしっこが漏れそうになるくらい。失礼。いつの時代でも、ヒトは「不思議」を求め、「不思議」を楽しむ。時には、「不思議」のためにお金すら出す。これも、「ただの尻尾のないおサルさん」からズレてしまって、「ただの尻尾のないおサルさん + α 」 = 「狂えるおサルさん」 = ヒト = 人間様へと、晴れて変貌したさいの副産物なのではないでしょうか？

振り返れば、自分にスプーンが曲げられないことを知ったのが、駄目押しだったのかもしれない。ああした騒動のあと、割と現実主義者の少年になりました。スプーン曲げよりも、海老一染之助・染太郎さんたちの……。ここまで来たら、もう一発このブログのワンパターンをやらざるを得ません。いったんは、終了を宣言しましたが、もよおしてまいりました。もう、駄目です！

では、イントロからやり直させていただきます。海老一染之助・染太郎（=えびいちそめのすけ・そめたろう）さん、と言えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞=感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

「いつもより余計に回しておりませう」「弟は肉体労働、兄は頭脳労働、これでギャラは同じ――」

お正月になると、「おめでとうございます」と叫びながら、必ずテレビの特番に出てきた、ご兄弟の芸人さんです。覚えていらっしゃるでしょうか？ 弟の染之助さんが和傘を高速で回しながら、その傘の上で毬（まり）とか、柀（ます）とか、急須（きゅうす）なんかを転がすのです。扇子か手拭いかを口にくわえて、すごく真剣に回し、転がすのです。

一方では、兄の染太郎さんがそばで見守りながら、トークで場を盛り上げるのです。染太郎さんがお亡くなりになり、現在では、染之助さんがお一人で芸を続けていらっしゃるのか。自分は、テレビ画面に吸い込まれるようにして、その芸とトークに魅了されていました。

で、自分などは、スプーン曲げよりも、海老一染之助・染太郎さんたちの芸や、サーカスの綱渡りや、大きなボールの上に乗ってバランスを取りながら、相方の投げるさまざまな物をどんどん頭上に積み上げていく曲芸に、「不思議」や「ヒトの力の神秘」を感じました。すごーい、どうして、あんなことができるんだろう、なんて思いながら。

もちろん、並々ならぬ努力と練習の賜物でしょう。でも、あれくらいの芸になると、何千人、あるいは何万人に1人くらいの素質も要るのではないのでしょうか？ ゴルフでも、水泳でも、アイススケートでも、そうだと思います。現実かどうか疑わしい超能力に驚嘆するのもいいですが、現実として存在し、目にすることができる、ヒトの類まれな才能をたたえるほうが、個人的には合っています。

*

さて、

>そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。

> ああでもあり、こうでもある

> 2度おいしい

> 取り替え可能=インターチェンジブル= interchangeable、つまり disposable = デイスポーザブル=使い捨て可能

に話を戻します。みなさん、以上並べたフレーズたちが、どう結びつくのかと、疑問を抱いていらっしゃるのではないのでしょうか？ ややこしいことなので、どのように言葉で説明したらいいのか、自分でも悩んでいるのですが、要するに、

ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違うことへの欲求を抱く習性がある

と言いたいのです。分かっていたでしょうか？ 言葉を換えると、

「制服=ユニフォーム= uniform =画一的=そっくり」を着ることの気楽さと一体感も「いい=快感である」し、「私服=私だけは別=他の人とは違うのよ」を着て自己主張や自己顕示をするのも「いい=快感である」

となります。ここでのキーワードは、「いい=快感である」です。なんだかんだ言っても、結局は、

ヒトは快か不快かを基準にして行動する生き物

です。つまり、「どっちが気持ちいいか」を選択しながら生きている。もう少し理屈っぽく言いますと、

「気持ちいい」を選択し、「気持ちよくない」を排除しながら生きている

と言えそうな気がします。でも、こう書いたところで、果たして本当にそうだろうかという疑問を、自分は抱いてしまうのです。というのも、

「気持ちいい=快」と「気持ちよくない=不快」とは、反意語=反対語=対義語だろうか

で迷っているからなのです。言葉を使って思考を「処理=整理」し、文章として固定化
する場合には、

言葉が欠陥品であることに敏感であり意識的でなければならない

と常に思っています。言葉が欠陥品であるということは、言葉を作り出しているとされるヒトという生物の知覚および情報処理能力に限界がある、ということにほかなりません。その意味では、

言葉はヒトを真似て作ってある

とも言えます。逆に、

ヒトは言葉を真似て知覚し思考している

とも言えます。

自らが作ったものに振りまわされるというのは、ヒトが古今東西を問わず経験している「状態=常態」ではないでしょうか？ その典型的な例として、反意語=反対語=対義語を挙げたいのです。ここで、蓮実重彦=蓮實重彦という名を思い出しました。自分は、同氏の著書と訳書から、今述べたようなものの見方を、学びました。突然ですが、

あなたはSですか、それともMですか？

この質問をエロい意味でとってください、けっこうです。どうでしょう？ あなたはサディスト（or サディスティック）ですか、それとも、マゾヒスト（or マゾヒスティック）ですか？ どちらでも、ないですか？ 両方の要素がありますか？ 時と場合によりますか？ TPO次第で変わるから一定していない、ですか？

ジル・ドゥルーズという人の書いた本の邦訳である『マゾッホとサド』の訳者が、蓮実重彦＝蓮實重彦氏です。内容や詳細はすっかり忘れてましたが、要約すると、

いわゆるSとMとは反意語でない

ということが書かれていたと記憶しています。比喩的に言えば、反意語というより、両者のベクトルが違うという意味だったような気がします。これもまた、蓮実重彦＝蓮實重彦氏が、何かに書いていらっしまったことですが、マルセル・プルースト作の、例のとてつもなく長い小説『失われた時を求めて』は、「長い」の反対が「短い」ではないことをめぐって書かれた作品である、という意味の文を読んだ覚えがあります。間違っていたら、ごめんなさい。

というわけで、正直なところ、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」を反対の感情、あるいは感覚としてとらえていいのかどうか、整理がつかないのです。みなさんは、どうお考えですか？ ややこしいですね。たぶん、言葉が欠陥品であるということに加えて、ヒトが言葉という欠陥品に「慣れきっている＝依存しきっている＝疑いを持たなくなっている」ために、いわば「落とし穴＝陥穽＝罟」に、はまり込んでいるのではないか、と思えてならないのです。

上で、超常現象の話をしましたよね。「超常現象」の対義語が「日常」だと仮定してみましよう。日常の中で――その真偽は別にして――たまに超常現象という話題をテレビや本や雑誌で見聞きするからこそ、わくわくどきどきもし、不思議だという気持ちを堪能できるのではないのでしょうか？ また、曲芸や類まれな才能の話もしましたよね。曲芸やサーカスは、本来、「ハレ＝晴れ＝非日常」の時に催されるものだった、という考え方があります。

一方、「ハレ＝晴れ＝非日常」の反対は、「ケ＝褻＝日常」だとされています。「ケ＝褻＝日常」の世界に生きるヒトが、たまに「ハレ＝晴れ＝非日常」の時空を作り、そこでお祭りや儀礼を行い、その刺身のつまとして、曲芸やサーカスや芝居＝劇といった娯楽＝芸能を催すからこそ、そうした娯楽＝芸能が妖（あや）しげで、これまた、わくわくどきどきするものだったのではないのでしょうか？ 毎日が正月やお祭り、毎日が超常現象だったら、ヒトは飽きるどころか、不思議を堪能できなくなり、たぶん、辟易（へきえき）＝閉口＝うんざりしてしまうでしょう。

ですので、

「AかBか」だけでなく「AもBも」という際のAとBとは、「一見」相反するものでなければ、ヒトは満足＝納得できない。

そんな気がします。この「一見」が曲者（くせもの）ですね。ヒトが、反対だと思いこんでいけば、それでいいのだ。そのように大雑把に考えるのが楽なのですが、そういうスタンスを「杜撰（ずさん）＝いい加減＝テキトー＝手抜き＝ちょっと違うのではないか」と、自分なんかは感じてしまうのです。損な性格だと思います。こんなことを考えても、いいことなど、これっぽっちもないのですから。でも、やっぱり、考えちゃうんですよ。困ったものです。

反意語＝反対語＝対義語については、保留したほうが、よさそうです。近いうちに、また、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある、と考えながら書きたいと思います。

で、そこのところを保留したうえで、

>ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違うことへの欲求を抱く習性がある

と、

>「制服＝ユニフォーム＝uniform＝画一的＝そっくり」を着ることの気楽さと一体感

も「いい＝快感である」し、「私服＝私だけは別＝他の人とは違うのよ」を着て自己主張や自己顕示をするのも「いい＝快感である」

だけを、きょうは、手っ取り早く、片づけてしましましょう。何だか、にわか大工さんのやっつけ仕事みたいですが、実際このブログは、素人の「哲学がしたーい」ですから、致し方ありません。間借りしているブログサイトの文字数制限も、気になりますので、そろそろまとめに入ります。

ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻（おり）に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

なんていう説明で、きょうの記事を終えたいと思います。キーワードは「飽きやすい」でした。

09.02.18 差別化

◆差別化

2009-02-18 08:49:02 | Weblog

>ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻（おり）に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

きのうは、上にコピペした文章で、記事を終えてしまいました。今読み返してみると、第1センテンスと第2センテンスに、かなり無理な跳躍がみられます。第2センテンスと第3センテンスのつながりも、しっくりきません。お恥ずかしい限りです。きょうは、第1および第2センテンスの飛躍の修復から始めたいと思います。で、キーワードが「飽きやすい」だということは確かなのです。ですので、たとえば、ヒトの特徴を2つ挙げると言われたら、自分なら次のように答えるのではないかと思います。

*ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である。

これは日々実感しています。自分の言動を考えても、まわりにいる人たちの言動を見ても、テレビや新聞やウェブサイトを見ても、つくづくそう思います。で、きのう書きましたように、反意語＝反対語＝対義語＝異義語であると、とりあえず共通の認識があるらしい数々のペアの言葉たちに対し、自分はかなりの疑問を抱いているのです。

自分が見聞きするすべてのペアについて、そうした不信感を持っているのですから、大変です。別に、そんなことを気にせず生きていくのが楽に決まっています。それは百も承知です。百歩譲って、そうしたペアが反対であると認めてしまい、たとえば、このブログで記事を書いていくとか、そんな心持ちでやり過ぎていくとか、そんなことができれば、気楽だし、うつも悪化しないだろうなあ、と思います。でも、できそうもないのです。

ただ、いちいち反対語のペアが出てくるたびに、それ突っかかっていたら、しんどくて仕方ありません。ですので、反対語のペアを、このさい十把ひとからげにして、気持ちの整理だけをしておこうという姑息な手段を選択しようと決めました。で、次のような仮説（かせつ）を仮設（かせつ）しておきたいと思います。以下のAとBは、いわゆる反意語＝反対語＝対義語＝異義語のペアだと考えられているものです。

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。写真のネガとポジが代表的な例。AからBへ、BからAへの移行が、ほぼ瞬間的に可能であるという特徴を持つ。また「一瞬にして自分を変える」「ポジティブをネガティブに転じる」に類似した、ある種の分野で用いられている、レトリック＝言葉の遊び＝キャッチコピー＝宣伝文句＝惹句＝作り話＝トリック＝錯覚＝嘘という、応用例もある。この中に含めてよさそうなペアの候補としては、愛と憎、快と不快、「いや＝だめ」と「ええ・はい＝いいわ・いいよ」、幸と不幸、うれピーとかなピー、味方と敵、友達と見知らぬ人、痴漢とたまたま電車内で隣合わせた人、前進と後退、進化と退化、などが怪しい。

(2) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「範囲語」であるらしい。AとBの意味の素(もと)は、かなり混じりあっているにもかかわらず、言葉の響きによって、反対の意味であるという印象を招いていると推測される。つまり、構成要素が同じ「範囲＝枠」の中で入り乱れている。構造的には、連続体という比喩も有効であろう。また、時間的推移により、構成要素間での位置関係が変化しやすい。また、そもそもペアが反意であるという根拠＝理由が薄い＝弱い場合も、ここに含めていいと考えられる。変化に注目した場合には、プリズムのイメージに近い。見方や視点を変えると、異なったもののように知覚されるという特徴がある。正規品と類似品、オトナとコドモ、単数と複数、悪人と善人、聖人と流神(とくしん)者、聖人と俗人、超人とふつーの人、すごいヒトと凡人、本物と偽物、本人と影武者、本人と偽者、天動説と地動説、「ヒトは空を飛べる」と「ヒトは空を飛べない」、幽霊の存在の肯定と幽霊の存在の否定、「(人間関係における)上」と「(人間関係における)下」、などが典型例かもしれない。この中に含めてよきそのような他のペアの候補としては、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、ハレとケ、「本当です」と「間違えました」などが怪しい。

(3) AとBは、「反対語」というよりも、むしろ「相対語」であるらしい。AとBの間には、反対関係ではなく、相対的な「位相＝段階＝階段＝雛壇(ひなだん)」が存在すると推察される。したがって、その段階のどこにいるかによって、反対関係とは言えない関係が生じる。多くの場合、測定器や測定用機器によって物理的に観察でき、かつまた数値化可能だという特徴を備えている。以下の典型例は、比喩としてではなく、物理的に確認可能な場合を想定していることに注意されたい。熱いと冷たい、暑いと寒い、右と左、無痛と苦痛(※SMではなく医学的意味で)、厚いと薄い、高いと低い、長いと短い、遠いと近い、「でかい」と「ちっちゃい」、「これだけ」と「こんなに」、東洋と西洋、速いと遅い、すっぴんと厚化粧、など。

ここで、ひと休みしてよろしいでしょうか？ みなさんも、お疲れになったのではないのでしょうか？ 少しだけ、話をずらしましょう。反対の意味を表すのに、漢語系の日本語の単語に「無」「不」「反」「非」「脱」といった語を頭に被せますよね。まるで、「否定のかつら」みたいです。英語にも、ありますよね。

unhappy「不幸な」、immoral「不道德な」、antisocial「反社会的な」、disorder「無秩序」、irregular「不規則な」、illogical「非論理的な」、ignorance「無知」、deodorant「脱臭剤」、nonsense「無意味」、anarchy「無政府状態」

よく見ると、おなじみの単語が透けて見えませんか？ おもしろいですね。一見するだけでは、どうなっているのか分からないものもあります。たとえば、上記の ignorance 「無知」ですが、これは語源的には i- という「否定のかつら」＋「gnor(ance) = know 」と考えるらしいです。だから、無知＝知らない、となるみたいです。なるほど、という感じですね。

最後に挙げた anarchy 「無政府状態」は、アナキーと読めば、なんだあれかあ、という感じの単語ですが、手元にある辞書によると、a- という「否定のかつら」＋「archy = 指導者」と説明してあります。ですので、monarchy とは「モノクロ (=単色)」や、このブログみたいな「モノブログ (=孤独ブログ)」の「モノ」、つまり、「1つ、1人」＋「指導者」で、「君主制、君主国」となるとのこと。なるほど。

アナキーという言葉を聞くと、懐かしい思いがしませんか？ 学生運動なんかが盛んだったころに、大学生たちとは別に、新宿あたりで.....あれ、まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？ (※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか?)、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今

では、ないかいのう？

「フーテン族」

かつて「フーテン族」と呼ばれたみなさん、現在は、どうしていらっしゃるでしょうか？ 新宿駅の周辺に、たむろしていた方々でした。自分は、当時はまだ小さくて、参加できなかったのですが、何をなさっていたのですか？ シンナーとか吸っている若い人たちの映像を、数年前にNHKアーカイブスかなんかで見ました。みなさん、髪が長かったですよね。

それに、こう申し上げては失礼かと存じますが、清潔とは言えない身なりをなさって

いらっしやいました。ギターをかかえて、反戦歌なのか労働歌なのかナンセンスソングなのかフォークソングなのかロシア民謡なのか、分かりませんが、けだるそうに歌っているさまが映し出されていました。ラップズボンというのですか、今でいうベルボトム。それに、ちょっと風変わりな形のサングラスがトレードマークみたいでしたね。

学生運動とは違った意味での反体制、アナキーという感じでした。フーテンというのは、寅さんとはまた違った意味なんですか？ それとも、ある程度、かぶる＝ダブルのですか？ 米国のヒッピーとの影響も、考慮すべきなのですか？ そんな理屈は関係なし、という乗りを感じましたが、それでよろしいでしょうか？

新宿のフーテン族さんたちの存在を、当時の自分が知った時には、何をなさっているのかは分かりませんでした。もう少し早く生まれていて家を自由に出ることがきるのなら、ぜひ、あの仲間に加わりたいな、などと思っていました。それほど、学校とか、規則とか、社会のしがらみとか、体制とかが、何か窮屈だなあ、という鬱屈した思いを抱いていたことは確かです。アナキー——懐かしい言葉ですね。センチメンタルな思い出に浸った後は、さきほどのお話に戻ります。

で、

(4) AとBは、「対義語」というよりも、むしろ「大儀語」であるらしい。AとBの間に、対立関係ないし反対関係を見出すことは容易に見えて、実は難しい。哲学、論理学、倫理学、数学、ひいては「言葉遊び＝レトリック」のテーマとして、しばしば論じられてきたが、結論は出なかったもよう。これから先も、結論は出ないと予想される。この種の議論は、七面倒くさく、骨がおれ、徒労に終わることが特徴。一部のマニアおよびオタク向け。脳科学に救いを求める向きもあるが、その有効性は未知＝絶望的。典型例は、存在と無、有と無、虚と実、戦争と平和、現実と非現実、現実と仮想現実、フィクションとノンフィクション、事実と虚構、嘘と真（まこと）、始まりと終わり、身体と精神、平面と局面、点と線、直線と曲線、罪と罰、天国と地獄、この世とあの世、オトコとオンナ、キミたち女の子とボクたち男の子（※ただし、ここではオスとメスという生物学的要素を除いた抽象語）、など。

(5) AとBは、「対義語」といよりも、むしろ「大疑語」であるらしい。大いに主観的な解釈が、さまざまな人たちによってなされている、極めていかがわしいペアである。と解釈できる点が、いかがわしさに輪をかけていると言えなくもない。(1)(2)(3)

(4)、および次の(6)と重複する。典型例は、幸と不幸、前進と後退、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、虚と実、現実と非現実、嘘と真(まこと)、など。

(6) AとBは、「異義語」というよりも、むしろ「異議語」であるらしい(※両者の漢字の違いをよく見てください)。反対関係にあるのではなく、複数の利害関係者＝ステークホルダー間の意見の相違や虚偽や策謀などが根底として存在する、「混乱＝闘い＝戦い＝喧嘩＝生存競争＝仁義なきたたかい」であると推測される。口語体＝悪態＝罵倒で、表現されるのが特徴。利害関係に基づくものであるために、しばしば同一ないし同様の表現として立ち現れる。例は以下の通り。「言った」と「言っていない」、「やったろー」と「やってねー」、「良かった」と「悪かった」、「関係ねー」と「責任とれ」、「おまえが悪い」と「おまえが悪い」、「失礼しちゃうわ」と「失礼しちゃうわ」、「とんでもないわ〜」と「とんでもないわ〜」、「おだまり」と「おだまり」、「馬鹿野郎」と「馬鹿野郎」、「今に見ている」と「今に見ている」、「某国の将軍様」と「某大都市の知事」、「真似すんな」と「真似すんな」など。

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。世界を「まだら」状にしか知覚および認識できないヒトが、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると「誤解＝事実誤認＝錯覚」されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、きれいと汚い、可能と不可能、シャチョーとペーパー、お偉いさんと市民、濃いと薄い、あそこここ、善と悪(※倫理的意味ではなく、この惑星に対してのヒトの影響度)、神と悪魔(※ただし、諸説あり)、ヒトと動物、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、「某国の将軍様」と「某大都市の知事」(※また出ちゃった)など。

(8) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「別物」であるらしい。しかし、存在である以上、根本においては、つながっているとも推測される。ベクトルが違うのに、歴史的経緯や、ゴタゴタ＝騒動や、錯誤や、陰謀によって、反対の関係があるとみなされているとおぼしきペア。典型例は、資本主義と共産主義、塩と砂糖、社会主義と共産主義、SとM、〇〇教と△△教、〇〇派と△△派、〇〇流と△△流、一時期のテレビと一時期のラジオ、シロとクロ、まなとかな、タロとジロ、など。

なお、以上の8つの定義のそれぞれの出だしの総括的センテンスの語尾が、すべて「ら

しい」となっているのは、それを一つひとつ検証するのが、実にしんどそうだからです。自分は、哲学と「心中する」(※比喻です、当ブログは自○サイトでは断じてありません、念のため) 気はあっても、反意語=反対語=対義語と「心中する」(※比喻です、当ブログは○殺サイトでは断じてありません、念のため) 気は毛頭ありません。

ちなみに、自分は、頭にも毛が「毛ほどもありません状態」になりつつあります。同志のみなさん、「けっ」束し、乏しき毛を一生懸命に束ね、育成しましょう。それはさておき、反意語=反対語=対義語については、これでいちおう片がついたことにし、保留しておきます。「おらっ、パリテキ、何を勝手なこと言ってるんだ、片がついただと？」ああ、きょうもまた幻聴。

ねえ、ゲンチョーさん、あなたはこっちがマジで何かをしようとする時に限って、お出ましになるんですね。「あたりめーよ。てめーみたいな、デタラメ野郎のやっていることを、こちとら、見ちゃいられねーんだ。わかったか、パリテキ？」その略した呼び方はやめてください。テキ屋さんじゃないんですから、自分は。ハンドルネームを、勝手にいじらないでください。「よく言うよ、おめーほど、言葉を勝手にいじっている野郎は、いねーじゃねーか？」これは、このブログのスタンスなんですよー。好きなようにさせてください。

「何がスタンスだ。オタンコナスめが。そんなことばかりやっていると、言霊に呪われるぞ」あれーっ、それだけは、勘弁してくださいーい。自分は、神仏は信じておりませんが、言霊だけは怖いのです。マジコワです。「だったよな。じゃあ、もう少し手加減しろ」そう言われても……。まあ、考えておきます。

――ああ、怖かった。言霊は、このブログでは一種の禁句なんです。誰にでも、怖いものってありますよね。自分の場合には、言霊なのです。これについても、いつか、書きたいと思っているのですが、よほど、心の状態と体調がいいときでなければ、とうてい無理です。ですので、きょうはおとなしく、きょう書こうと思っていることだけに集中します。

>ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である。

でしたよね。いったん、さきほどの話題に戻りますが、

*反意語とは、ヒトが本当は体で分かっている、あるいはかつて体で知っていたことを
忘れた結果として陥っている錯覚から生じる言葉のペアである

と、簡単にまとめさせてください。何しろ、

*ヒトは、「○△X」という言葉を作り、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩
む生物なのである

からなのです。

で、次のお話に移ります。きのうは、

>ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違うことへの
欲求を抱く習性がある

と、

>「制服＝ユニフォーム＝ uniform ＝画一的＝そっくり」を着ることの気楽さと一体感
も「いい＝快感である」し、「私服＝私だけは別＝他の人とは違うのよ」を着て自己主張
や自己顕示をするのも「いい＝快感である」

という2つの仮説から、本日の文章の冒頭で引用した

>ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。な
ぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であ
り、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻
(おり)に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となる
であろう。

という新たな仮説へと、話を強引に持って行ったのでした。その強引さ＝大雑把さ＝杜撰（ずさん）さの裏には、

＞正直なところ、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」を反対の感情、あるいは感覚としてとらえていいのかどうか、整理がつかないのです。みなさんは、どうお考えですか？ ややこしいですよ。たぶん、言葉が欠陥品であるということに加えて、ヒトが言葉という欠陥品に「慣れきっている＝依存しきっている＝疑いを持たなくなっている」ために、いわば「落とし穴＝陥穽＝罟」に、はまり込んでいるのではないか、と覚えてならないのです。

ときのう書いた迷いがあったからです。

で、さきほど反意語について、いちおうのケリをつけた結果、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」は、上述の

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。

に該当するのではないかと、とりあえずの結論を得ました。ですので、「表裏一体」について、もう少し説明を加えさせてください。「表裏一体」の関係にあるAとBとは、たがいにほぼ瞬間的にAからBへ、またBからAへと移行＝変化＝転換することができます。「AでありBでもある」という説明の仕方も可能だと思います。ただし、

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

とは、違います。(7)は、あくまでも「A＝B」であり、「表裏一体」よりは「一心同体」というイメージです。(1)と(7)は確かに、非常によく似ています。何が似ているかと申しますと、「そっくりだ」という点がそっくりなのです。おふざけに聞こえたら、ごめんなさい。

で、ようやく、きょうお話したいことにたどり着きました。きょうは、以前から気になっている、ある言葉について、考えてみたいのです。それは、

「差別化」

です。この言葉を初めて読むか目にした時には、どきりとしました。なにしろ「サベツ」に「化ける」です。インパクトがありますよね。

「差別化」とは、コモディティ化した商品や製品、つまり、ある個性＝特性＝特徴を売りにしていた商品が、「ありふれたもの」になってしまった場合に、対策として用いるマーケティングの一つの「手法＝戦略」である

ですよね。

自分は、経済とか経営関連の分野にはめっちゃくちゃ弱いので、事実誤認をしている可能性が高いです。ですので、その点をご理解とご配慮いただいたうえで、とりあえず、上記の定義というか前提で、話を進めさせてください。

で、

>そっくりなものが、ずらりと並んでいる。それだけではなく、ほかの場所にも、いっぱいあるかもしれない。

という状態にある商品が、「ありふれたもの」になってしまったとすれば、売れなくなってしまうことは当然だと思います。そうなった原因としては、自社の商品が大量に出回り、それが長期化し、しかも、競合他社によって類似品が大量に出回っているといった事態が、考えられます。

そこで、「そっくりなものがずらり」＋「ありふれてしまった」＋「似たものがずらり」の三重苦を打破するために、「違ったものにする」「作業＝操作＝戦略」、つまり「差別化」が登場するのだと理解しています。何しろ、上で述べたように、ヒトはすごく「飽きっぽい」生き物なのです。そこで、冒頭の引用を、再び引用します。

＞ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻（おり）に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

この舌足らずな文章に手を加え、自分の言いたいことが伝わるように、修正したいと思います。

*ヒトは、「みんなと同じでありたい」と同時に「自分だけが目立ちたい」という、相反する気持ちを持っている。また、ヒトは「飽きっぽい」と同時に「忘れっぽい」生き物でもある。そうした習性があるために、ヒトは、落ち着く暇がなく、「同じ＝そっくり」と「違う＝目立つ」の転換をえんえんと繰り返す。つまり、知覚の対象と、自分自身を差別化し、次にはそれらがコモディティ化するという半永久的な運動に、無意識のうちに巻き込まれている。この習性と運動を抑制された場合、ヒトは、極度の不安感からパニック状態に陥るに違いない。それほど、この習性と運動は、ヒトにとって根源的なものになっている。これは、ヒトが「トリトメのない記号」の発するまぼろしに導かれて生きていることと、深い関係がある。

この、「ヒトをとらえている半永久的な運動」と「トリトメのない記号」の関係について、できれば、あす、さらに言葉を紡いでいきたいと思っています。

読みにくく、しかも長い文章を、この行まで辛抱して付き合っていたいただいた方に、深くお礼を申し上げます。読んでくださっている方がいるからこそ、それが励みとなり、言葉が紡げるのです。また、あす、当ブログに遊びに来てください。待っています。

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

◆飽きっぽくて、忘れっぽい

2009-02-19 08:44:51 | Weblog

ブログを書き始めて、きょうで2カ月が経ちました。思いがけず、「皆勤賞状態」です。他のブログとは趣（おもむき）が異なるために、万人受けしないというか、好き嫌いがはっきり分かれると思われる、当ブログに遊びに来てくださっている方々に、深く感謝いたします。

このブログは、「モノブログ」です。つまり友達のいない、そしてスポンサーであるブログサイトの方々がお付けになったリンク以外に他のサイトにリンクを貼っていない孤独サイトです。当然、組織票も仲間票もありません。にもかかわらず、参加している2つのランキングへと投票してくださっている個人の方々がいっぱい。つまり、わざわざこのブログを訪れ、最後の行まで読み、ランキングへ投票してくださっている方々がいる。それだけでも、自分にとっては「奇跡」です。「夢のような話」です。すごく励みになっています。

記事の長さも、間借りしているブログサイトの10,000文字制限ぎりぎりまで書く癖が、いつの間にか付いてしまいました。10,000文字といっても、目いっぱい書いているわけではなく、絵文字を入れたり、改行や1行空けを多くしたりして、細かい文字の記事を、どれだけでも読みやすいようにと工夫した結果です。10,000文字を実際に書いたらすれば、400字詰め原稿用紙で25枚になります。

1日に1本ずつ、そんなにたくさん書いていたら、体を壊してしまうでしょう。「うつと共生する」という、このブログの趣旨に反するどころか、「うつと共にブログと心中」なんてことになるに決まっています。ですので、やりすぎないように注意しながら、気長に続けていこうと考えています。これからも、よろしく願い申し上げます。

*

>*ヒトは、「みんなと同じでありたい」と同時に「自分だけが目立ちたい」という、相反する気持ちを持っている。また、ヒトは「飽きっぽい」と同時に「忘れっぽい」生き物でもある。そうした習性があるために、ヒトは、落ち着く暇がなく、「同じ=そっくり」と「違う=目立つ」の転換をえんえんと繰り返す。つまり、知覚の対象と、自分自身を差別化し、次にはそれらがコモディティ化するという半永久的な運動に、無意識のうち

に巻きこまれている。この習性と運動を抑制された場合、ヒトは、極度の不安感からパニック状態に陥るに違いない。それほど、この習性と運動は、ヒトにとって根源的なものになっている。これは、ヒトが「トリトメのない記号」の発するまぼろしに導かれて生きていることと、深い関係がある。

以上が、きのうの記事の最後のほうで書いた文章です。

で、きょうテーマにしたいのが、

* 「ヒトをとらえている半永久的な運動」と「トリトメのない記号=まぼろし」の関係(※ 「トリトメのない記号」の発するまぼろしを、「トリトメのない記号=まぼろし」と変更します)

なのですが、ややこしいです。どう、言葉にしたらいいか、迷っています。でも、この記事を読んでいただいている方々に、分かってもらえるように努めます。

で、「トリトメのない記号=まぼろし」の「記号」ですが、「記号論」や「記号学」という既存の分野で研究されているさまざまな定義については、自分是不案内です。かと言って勉強しようという気力もありません。正直言って、お勉強が嫌いなのです。こうした傾向は、小学生のころからありました。「人の話を聞かない」「落ち着きがない」などと、通知表に何度書かれたことでしょう。

せっかちなんでしょうか。授業で、何か新しいことをするとしますね。すると、先生の説明を半分も聞かぬうちから、その作業をこっそり始めてしまうのです。肝心なところを聞かずに始めるのですから、当然失敗します。そして、やり直しをさせられる。そのたびに先生に叱られるのですが、また別の機会に同じようなことする。その繰り返しでした。

ですから、本を読むさいにも、じっくり読むのが苦手。斜め読みや、飛ばし読みをして、だいたいの見当をつける。「速読」と呼ばれているものとは、また違うのではないのでしょうか。たぶんですけど。速読にも、いろいろな流派があるみたいですね。自分は、その種の講座を受けたことも、ハウツー本を読んだこともないので、分かりません。

で、たぶん「人の話を聞かない」「落ち着きがない」の延長として、新聞の下にある本の広告で、興味深い言葉を並べたタイトルを目にすると、もう頭の中がトリップ状態になってしまいます。いろいろ妄想しちゃうんです。今はお金がないですから、当然のことながら、本を買うなどという贅沢はできないわけですし、本の広告を眺めながら、ぼけーっとすることが数少ない楽しみの一つになっています。

ところで、みなさん、

*ヒトは本を読めない

という説を、お聞きになったことがありますか？ どういうことかと申しますと、「文章＝テキスト（＝テキスト）＝text＝textile＝織物」を読むという行為は、実に不確実で不安定なものであり、誰一人として、「書かれたもの＝意味するもの」には到達できないし、解釈は各ヒトによって異なる、という当たり前と言えば当たり前の「屁理屈＝本当すぎる＝論破できない説＝当たり前すぎてうさん臭い話＝正論」なのです。

だからこそ、1冊の本についての読書感想文は、各ヒトによって異なるわけですし、学者の世界では、あるカリスマ的なギョーカイ人が何かを書くと、それをめぐっていろいろな意見を吐くヒトたちが現れ、「喧々諤々（けんけんがくがく）＝キリのない口喧嘩」をするわけです。それだけ意見が分かれるのならば、

ヒトは1冊の本さえちゃんと読めていないのだ

と断定しても、的外れな意見とは言えないでしょう。

テキストで思い出しましたが、文学なんかでは、作品を批評するさいに、「アンビギュイティ＝ambiguity＝両義性＝多義性＝あいまいさ」という考え方で、分析をすることがあります。昔、エンプソンという英国の人の書いた Seven Types of Ambiguity という本の存在を教えてくれたのは、「学魔」こと高山宏氏でした。

後に邦訳が出たそうですね。自分は怠け者なので、原書も邦訳も読んでいません。た

だ、タイトルを思い出しながら、何が書いてあったのだろうか？ なんて、今ごろになって空想＝妄想するだけです。Seven Types of Ambiguity = 「あいまいさに、7タイプがある」とは、どういうこっちゃ？ おもしろそうですね。いつか、自分勝手にじっくり考えてみたいです。

で、

読むという行為の不可能性

に過度にこだわったのが、たとえば、ステファヌ・マラルメ、ジャック・デリダ、モーリス・ブランショだったらしいのです。一方で、その

不可能性に快樂を見出す

というおもしろい曲芸を見せてくれたのが、たとえば、ロラン・バルトという人でした。フランス語で書いた人ばかり挙げて、ごめんなさい。ほかの言語圏にも、この手の人は、たくさんいるはずですよ。

さきほど触れたエンプソンさんも、その中に入りそうな気がしますけど、勘違いでしょうか？

ニュー・クリティシズム

と呼ばれた、英米の文芸批評運動の草分けの草分けでしたもんね。そうそう、ノースロップ・フライなんて、カナダ生まれの人もありました。あの人は、なかなか器用な職人さんでしたよね。フランスの

ヌーベル・クリティック

に負けないくらい、いい仕事をしていらっしゃるって聞きます。

ただ今述べた英米のギョーカイ情報は、すべて、かつて少壮気鋭の英文学者だったころの高山宏氏からの受け売りです。一方、この国では、たとえば、情報の鮮度の古い自分には、蓮実重彦=蓮實重彦氏くらいしか、思い浮かびません。ただ、ギョーカイで、

「表象」とか「表象文化論」とか「表象作用」

という言葉たちを頻繁にお使いになる中堅や若手の方でしたら、読むことの不可能性には、ある程度敏感なのではないでしょうか。学生さんが、この記事をお読みでしたら、先生選びの一つの目安にしてください。

*

ちょっと寄り道をして、マニアック=オタクっぽい話をしてしまいましたが、その道草中に、

> 「文章=テキスト (=テキスト) = text = textile = 織物」を読むという行為は、実に不確実で不安定なものであり、誰一人として、「書かれたもの=意味するもの」には到達できないし、解釈は各ヒトによって異なる

と書きました。これって、きょうテーマにしたい「トリトメのない記号=まぼろし」と大いに関係していることに気づきました。「記号」について考えるさいに、

★ 「意味するもの=たとえば言葉=シニフィアン=表現=見た目=外見=表面=皮=殻」

と、

★ 「意味されるもの=たとえば言葉の意味=シニフィエ=意味=内容=中身=殻の中の空白・空間」

とに分ける、作業＝手続き＝段取り＝演出＝プレゼンをする場合があります。前者を「能記」、後者を「所記」とする立場の人たちもいます。個人的には、「能記」→納期→農機→農期→のんき→「ははのんきだね」という連想、そして「所記」→書記→総書記→アホ→暑気→食器→ママレモン→「あんた正気かい？」という連想がなぜか働き、苦手です。要するに、好みの問題で、深い意味はありませんので、お気になさらないでください。

で、以上のように、記号を2つに分ける一方で、その分けられた両者の関係を、

★「意味作用＝記号作用＝シニフィカシオン＝記号表意作用＝さようでござるか」

と名づける作業もあります。個人的には、苦手です。自分のイメージしている「哲学」というよりも、「お勉強」を連想させるからだと思います。

ですので、「人の話を聞かない」、「落ち着きがない」、しかも、「ヒトは本を読むことなどできない」などと思っているうえに、お勉強嫌いで友達が少なく無職で、「自分の頭と体を使って、哲学がしたーい」なんて、ほざいている素人1匹である自分としては、上で★印をつけた言葉＝専門用語＝ギョーカイ語＝ジャーゴン＝ジュゴン＝職業語＝仲間言葉＝隠語＝インドりんご＝一種の方言を、このブログでは使わないと思います。たぶんです。場合によっては、拝借するかもしれませんが。

特に、シニフィアンとかシニフィエとかは、うつで難聴者の自分には「死に不安」とか「死にてー」と聞き間違えそうで、気味が悪く危なっかしくて、どうてい使えそうもありません。「意味するもの」「意味されるもの」くらいなら、分かりやすいし、偉そうにも聞こえないし、ギョーカイ語的な響きがないので、使えそうです。

ちなみに、自分の書いた言葉を口にした時や、自分の口にした言葉を、自分自身が聞き間違えるなどという冗談みたいなことが、自分にはよくあります。現に、きのう取り上げた「差別化」ですが、記事を書きながら、ふと「差別化は差別か？」とつぶやいたところ、「キャベツ化はキャベツか？」と聞き間違えました。

零細的なシニフィアンのとちくるい現象でしょう。ふと、不遜（ふそん）にも、マラル

メさんやデリダさんやラカンさんの、壮大な意図的シニフィアンのとちくるい運動＝実践＝キャンペーン＝業績を、思い出しました。いずれにせよ、シニフィエとかシニフィアンとかシニフィカションだけは、発音しにくい、つまり、言いにくくもあり、言えそうもありません……。言える、言えない、言えれば、ん？ 言えない？ と言えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

「いえねえ、いえねえ、もう、いえねえ」

みなさん、覚えていらっしゃるでしょうか？ きょとんとされている方のほうが、多いかもしれません。「せんだみつお」さんの、数あるギャグ作品のうちの1つです。あの人はうるさいし、うざいですが、自分にとっては憎めないタイプのタレントさんです。あの人のギャグで代表的なものは、「なはっ」とか、「せんだ、えらい」ですよね。

で、「いえねえ、いえねえ、もう、いえねえ」というのは、確か、日テレの「うわさのチャンネル」とかいう、お笑いバラエティー番組でやっていたワンパターンギャグの1つです。あの番組では、和田アキ子さんが「ゴッド姉ちゃん」と呼ばれていて、タモリさんとか、せんださんとか、なぜかプロレスラーのザ・デストロイヤーさんとか、なぜかガッツ石松さんとか、山城新伍さんとか、「木の葉のこ」さん+「マギー・ミネンコ」さんとかいう、最近全然テレビで見ない女性とか、とにかくたくさんのレギュラーがいました。わけの分からない番組でした。「木の葉のこ」さんなんて、個人的には好きなタイプだったので、その消息がとても気になります。

今、一生懸命にあの番組の内容を思い出そうとしているのですが、やたら多かったワンパターンのギャグの断片だけが、頭の中で乱舞しています。收拾がつきそうもありません。めちゃくちゃアナーキーでしたねー。好きでした。ああ、あのワンパターンを見たい。ただそれだけが目的で、毎週金曜日の10時を待っていた記憶があります。いったい、あの番組は、なんだったのでしょうか？

で、せんださんだけに的を絞ろうとしているのですが、これまた、的が絞れないのです。あの人がやっていたのは、なんだったのでしょうか？ と再び自問するしかないのです。いずれにせよ、せんださんのギャグは、意味がありそうで、ないところが、気に入っていました。いわゆる「ナンセンス＝ノンセンス＝無意味＝くだらない＝アホちゃうか？」です。何の意味もない、つまり

「意味されるもの」がなくて、「意味するもの」だけが、「とちくるっている＝踊りまくっている」

感じがして、好きでした。

あのわけの分からない番組のことを考えていたら、「判断停止＝思考停止＝エポケー＝えっ？ ぼけっ」状態になりかけたので、きょうのテーマをコピペしておきます。

>＊「ヒトをとらえている半永久的な運動」と「トリトメのない記号＝まぼろし」の関係

です。

あれっ？ ん？ 今、きょうのテーマに戻ろうとして、いきなり、デジャビュ＝既視感→筋弛緩＝でれーっとした感じを覚えました。自己分析してみます。このテーマと、何やら、そっくりの体験をしたと思ったさいに、ダブって＝カブって見えたのは、さっきの「死語復活キャンペーン」でした。ただ今、焦りつつ、自分の思考を整理しようとしております……。そっくりです。激似です。酷似です。そっくりな点がそっくりなのです。頭の中が少し整理できてきましたので、思っていることを書きます。

バラエティー番組のワンパターンたち、お笑いタレントのワンパターンたち、「死語復活キャンペーン」「あのヒトは今」「ゲンチョーさんの登場」といった当ブログのワンパターンたち、「死語復活キャンペーン」で取り上げている元・流行語および新語たち、「あのヒトは今」で取り上げている次々と社会に登場した現象や風俗に貼られたラベル＝レッテルたち、スーパーに並ぶ大量生産された商品の数々、電気製品の量販店に並ぶ大量生産された製品の数々、テレビに続々と登場しいつかは消えていくさまざまな肩書の人たち、この国の歴代の内閣総理大臣たちおよび国務大臣たち……。みんな、やっば

り、そっくりです。

そっくりな点がそっくり

なのです。

つまり、

*ヒトによる選別と排除を経た、そっくりなものがたくさん並んでいる、あるいは、ほかにたくさん「ある・いる」と考えられる「もの・ヒト・こと・さま」たちという「トリトメのない記号=まぼろし」たちの存在、

そして、

*自らが選別し排除した結果として、たくさん並んでいる、そっくりなものたちが個々に備えているはずの差異をあっさり忘れ、そっくりであることに飽き飽きし、そっくりなものたちを差別化あるいは入れ替えるという方法で、自らの飽くなき欲望を満たそうとするヒトの半永久的な運動、

さらに、

*自分自身さえも、そっくりなもののみなし、そっくりであることに満足する一方で、ほかのヒトたちと自分とが異なっていることまでも、同時に欲し、その両義的な欲望を満たすために、自らを差別化する、あるいはパーツを入れ替えるか改変するという方法で、自らの飽くなき欲望を満たそうとするヒトの半永久的な運動

といった、現象および事態が、

*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を、実現=出現=現出させている

あるいは、

*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を、「蜃気楼」=「まぼろしのパノラマ=スペクタクル」のように構築=仮設=捏造している

のではないかと自分は思うわけです。

なお、「大いなる存在の連鎖」とは、アーサー・ラヴジョイという人が書いた「The Great Chain of Being」のタイトルの邦訳です。この書物自体の邦訳では「存在の大いなる連鎖」となっています。原書の名を教えてくれたのも、上述の高山宏氏です。邦訳が出版される前のことでした。勉強嫌いの自分は、もちろん原書も邦訳も読んでおりません。たった今、上の文章を書いているさいに、確か便利な言葉があったはずだと思い、運よく、それらしき言葉が頭に浮かんだので、さっそく使ってみました。想像力を喚起し刺激してくれそうな、いいフレーズだと思います。

「大いなる存在の連鎖」

何でも強引につないでくれそうなイメージがあって、自分は大好きなフレーズです。高山宏氏も、きっと大好きなのではないかと、勝手に決めつけています。高山氏のご本は、どれも、すごいとしかいいようのないものなので、自分は敬遠してきました。高山先生、ごめんなさい。何度か、お昼をごちそうしていただきながら、「食い逃げ」状態で、先生の前から姿を消してしまったことを、心よりお詫び申し上げます。先生の相手をすることは、自分には荷が重過ぎました。あれっ、何だか、変な方向（ほうこう）にこの文章が彷徨（ほうこう）してまいりました。ぎゃおーっなどと咆哮（ほうこう）してしまいそうなので、急いで話を戻します。

要は、

*ありとあらゆるものが「トリトメのない記号=まぼろし」である

ということです。そのことに敏感で、しかも、そのことを「書くという行為」を通じて分析＝実践してみせたのが、ロラン・バルトという人でした。バルトが、「トリトメのない記号＝まぼろし」の例として分析の対象にしたものを挙げれば、文芸作品（※文芸批評家でしたから、当然です）、娯楽小説、ファッション＝衣服、広告写真、写真一般、映画、プロレス、UFO、シトロエン、エッフェル塔、演劇、俳優、JAPON という記号の国などです。実を申しますと、自分は大学の卒論にバルトを選びました。卒論のコピーが、家の押入れかどこかに保存してあるはずなので、いつか見つけたら、読み返してみたいです。

*

で、とりあえず、上に挙げた「トリトメのない記号＝まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」についてのメモみたいなものを、以下に書き連ねてみます。

*あらゆる情報が、「トリトメのない記号＝まぼろし」になり得る。

*「トリトメのない記号＝まぼろし」となったあらゆる情報は、そのコンテンツとは無関係に＝テキトーに、また、そのコンテンツを配布するさいの目的＝意図＝企みに沿う形で、あるいは逸脱する形で、あちこちに「並べられる＝陳列される＝展示される＝羅列される＝遍在する」か、「彷徨（ほうこう）する＝さまよう＝うろちょろする」

*ニュース（※政治・経済・社会・企業・スポーツ・おくやみ・国際・新製品・IT・出版など）、うわさ、ゴシップ、政府発表による公報、自治体による広報、口コミ、マーケット情報（※株式市場・為替市場・債券市場など）、花粉情報、井戸端会議（※もう死語ですか？）での話題、公園におけるママたちの立ち話、生活情報（※医療・健康・ファッション・食生活・住まい・子育て・教育・エコ・求人・マネー・流行など）、映像（※通信社やメディア提供＝配給のもの、YouTube、投稿写真、投稿映像など）、ネット（※PCのみならずケータイを含む）を通じての情報（※上記のものすべてに加えて、たとえば、スピリチュアル、超常現象、宗教、小説……ありすぎて記載不可能）などの、情報・データすべてが、「トリトメのない記号＝まぼろし」として、購入されたり、無料配布されたり、流出したり、漏洩（ろうえい）したりした後に、消費されたり、パスされたり、廃棄処分されたり、忘却されたり、保存されたり、想起されたりする。

*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を成立させている裏=根底には、ヒトに備わった飽きやすく忘れっぽい習性がある。

*ロラン・バルトは、非常に飽きっぽい人だった。次々と、「クルージング=とっかえひっかえ=ハッテンバ巡り」しまくっていた（※これ、意味深です）。その意味では、部分的に、ミシェル・フーコーとそっくり（※これ、スキャンダラス=ゴシップ雑誌的です）。故人のご両人に鞭打っては、失礼というもの。ただし、フーコーさんなら、無知ならぬ鞭ペンペンを喜んで、例のおサルさんのような笑い声を上げるかもしれない。キッキ、ヒッヒなんて。ところでフーコーさんとポールソンさんとそっくりじゃありません？ いずれにせよ、ごめんなさい、バルトさん、フーコーさん。なお、バルトさんが忘れっぽかったかどうかは、不明。

ありゃー。そろそろ、このブログサイトの文字数制限にひっかかりそうです。またもや冗長になった記事の、この行まで読んでくださった方、ありがとうございました。また、来てください。お待ちしております。

09.02.20 まぼろし

◆まぼろし

2009-02-20 09:11:00 | Weblog

>*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」。

>*ありとあらゆるものが「トリトメのない記号=まぼろし」である。

>*あらゆる情報・データが、「トリトメのない記号=まぼろし」になり得る。

>*「トリトメのない記号=まぼろし」の「大いなる存在の連鎖」を成立させている裏=根底には、ヒトに備わった飽きやすく忘れっぽい習性がある。

以上が、きのう書いたことの中で、自分にとって大切だと思われることです。

で、きょうは、その4つのフレーズのどれにも含まれている「まぼろし」という言葉について、考えてみたいです。このブログでは、以前には、

>すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している

と書いていました。それが、現在では

>「トリトメのない記号=まぼろし」

と書いています。言葉は「何とでも言うための便利な道具」と同時に、「何とでも言う結果として、その何とでもが、デタラメ=嘘になる欠陥品」でもあるという、表裏一体の性質を備えています。つまり、

便利=重宝=満足=こりゃいいわ

でもあり、

欠陥=不足=不満=駄目だこりゃ

でもある。

以上のように考えてみると、ヒトが知覚し言語化している森羅万象（※ヒトが作ったものたちや、ヒトが作ったものではないものたち）が、上述の両面性を備えていると言

えるわけで、そうした両面を、再度ヒトが「知覚する＝認識する＝実感する＝勝手に思考する」のは、多分にヒトの「勝手＝都合」に依存しているとも、言えます。すると、

*ヒトは、森羅万象を相手に独り相撲をとっている

という、トホホな言い方も当然のことながら、できるわけです。

ですので、ヒトはその「トホホ状況」を忘れるために、神や仏や超越者や宇宙の摂理や真理や進歩や希望……といった

自分たちの「上に立ってくれる＝メタな」存在を「空想＝想像＝妄想＝捏造（ねつぞう）」

して、

自分たちはその「代理人＝代行者＝偽者＝虎の威を借りる狐＝張子の虎＝この惑星の官僚・管理人・大将」

を務め、その

「見返り＝報酬＝良かったね＝ざまあ見ろ」

として

「メタメタ＝めっちゃめっちゃ状況」に陥っている

わけです。

ヒトは、世界をまだら状にしか知覚できず、また、1度に1台の「テレビ受像機＝意識＝認識」の画面しか見られないのが普通ですし、しかも極めて忘れっぽい＝アバウトでテキトーな生き物ですから、

(1)「メタメタ＝めっちゃめっちゃ状況」の都合のいい部分だけを見て、「幸せ＝平和＝自己満足＝虚栄心＝人間様にとって良ければそれでいいのだ」と、はしゃいでいるヒトたちが多数います。

その一方で、

(2) その「メタメタ＝めっちゃめっちゃ状況」の都合のいい部分だけでなく、都合の悪い部分にも目を向け、「危機だ＝大変だ＝罰（ばつ）だ＝罰（ばち）だ＝人は罪深い存在なのだ＝悔い改めよ」と考えこむヒトたちも多数います。

ところで、みなさん、あなたは、上述の(1)と(2)のうちなら、どちらですか？その時によって違いますよね、たいていは。○か⊕か、1か0か、SかMかなんて、簡単に選択なんてできませんよね。そうです、TPOという要素を考えに入れるべきです。一概に結論を出す必要など、全然ないのです。

ですので、このブログでは、短絡的に「みんな幸せになろうね。さあ、お布施、お布施」とか「悔い改めよ。さあ、お布施、お布施」などという、勧誘も恐喝も洗脳もいたしません。ただ、

「自分の体と頭を使って、哲学がしたーい」

だけを実践いたしております。人畜無害でございます。どうか、ご安心くださいませ。

で、まぼろし、です。以前にこのブログで書いたことを、以下にコピペします。

>*幻＝まぼろし＝間ぼろし＝間滅し＝魔ぼろし＝魔滅し

＞*テレビに映る「まぼろし」は、遠くにあるということ、つまり、「距離＝間」を滅ぼします。ほら、television = tele (遠く) + vision (見ること)、ですよ。距離をなくして見えるようにする、ということです。だから、「間滅し」なんです、自分に言わせるとですけど。で、テレビは、「人面管＝ブラウン管を使って、テレビ放送を受信する機械」から、「人面壁＝壁のように薄型化された画面で高精細度テレビ放送(＝ハイビジョン)を受信する機械」に進化しました。簡単に言うと、「人面管から人面壁へ」と出世したのです。その時に、「魔＝ゴースト＝醜さ＝見にくさ＝ノイズ」を徹底的に取り除いて、すごくリアルできれいな画面を実現したのです。だから、「魔滅し」なんです、個人的な意見ですけど。

以上の2つの文章は、このブログのバックナンバーである「人面管から人面壁へ」2009-02-10 から引用しました。万が一、興味を持たれた方は、ご一読願います。面倒だと感じていらっしゃる方は、お読みいただかなくても、いっこうに支障はありませんので、このままお読み続けてください。

で、「まぼろし」ですが.....。「おらっ、何が、まぼろしだ、この2千円詐欺野郎で、デタラメ野郎で、食い逃げ野郎めが」ああ、幻聴！ 肝心な説明に入ろうとすると、決まって邪魔するんですよ、幻聴が.....。あれっ？ 不思議だなあ。どうして「食い逃げ」のことをご存知なんですか、ゲンチョーさん？ ひょっとして、きのうの記事を書いているとき、守護霊さんのように、背後から見守ってくださったのですか？「守護霊なんて、おれにゃあ、似合わねー。呼ぶなら、おめえの部屋の自縛霊とでも、呼んでくれや」めっそうもない。嫌ですよ。気味が悪い。せいぜい、座敷童(ざしきわらし)になってください。とにかく、そういう類の話は、このブログでは扱っていないんです。おふざけなら、別ですけど。

それより、ゲンチョーさん。きのう、お見えに、じゃなくて、お聞こえにならなかったもので、ご挨拶できなかったのですが、おかげさまで、きのうで、ブログ開設2カ月目を迎えました。いつも、ありがとうございます。「そうだってなあ。おめーにしちゃ、よく、もってるな。で、きのうは開店感謝デーだったわけか？ 玉は、いつもより多く出しただろうな？」パチンコ屋さんじゃないんですから、そのような言い方はやめてくださいよ。でも、似たようなものですよ。とにかく、感謝しております。で、お願いがあるんですけど、そろそろ、さきほどのお話に戻りたいんです。「何だか、しんねーけど、開店感謝デーも無事に済んだみてーだし、熱中して書いているみてーだから、消えてやっか、じゃあ、あばよ！」

失礼いたしました。このブログの、レギュラーさんなんです。どうか、大目に見てやってください。「おらっ、影でこそこそ言うな！」ああ、またもや、幻聴！今の幻聴は聞かなかったことにして、話を進めます。無視、無視。見えないから、無聴、無聴。これ、ゲンチョーさんを追い払う、おまじないなんです。再度、お詫び申し上げます。

で、……。何でしたっけ？ そうそう、

まぼろし

です。久しぶりに、「記号」について考え始めたとき、「記号がまぼろしを発する」とイメージしていたのですが、そうすると記号のトリトメなさを演出できない気がしてきたために、

「トリトメのない記号＝まぼろし」

というふうに、「お色直し＝衣替え」をしてみました。そのほうが、自分としては、しっくりくるのです。みなさんは、どうお思いになりますか？ どうでもいい、ですか？ そうですね、失礼いたしました。

「まぼろし」と「トリトメのない記号」を等号で結んじゃたんですが、その根拠だったのが、

(A)「距離＝間」を減ぼす

(B)「魔＝ゴースト＝醜さ＝見にくさ＝ノイズ」を取り除いて減ぼす

という、テレビ受像機を「比喩＝たとえ」として使用したさいの、お古の「作業＝操作＝こじつけ」でした。比喩というのは、あるものごとを説明するのに別のものごとを用いるという、すり替え＝詐欺をすることです。

ですから、注意していないと、比喩を使うほうも、比喩を使うのを見聞きするほうも、話がすり替わっていることに気づかず、ころりとだまされてしまう、という事態にしばしば陥ります。よく考えれば、そうなるのは当たり前です。で、今はテレビではなく、「トリトメのない記号」をテーマにしているわけですから、「まぼろし」＝「トリトメのない記号」とするからには、「トリトメのない記号」という視点から、「まぼろし」を再度考えて検証してみたいのです。

変なことにこだわっている、とお思いでしょう。ごめんなさい。こういう性質（たち）なんですよー。どうにも、ならないんですよー。ですので、手短かにまとめてみたいと思います。

(1) ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして、他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち。たとえば、スーパーに陳列されている大量生産された商品たち。そこそこのお金さえあれば、これほど身近で入手しやすいものはない。つまり、「距離＝間」を減ぼす。また、キュウリやカボチャたちも商品である。よく見ると、それぞれが個性的な形をしている。しかし、店頭に並べられると、みな同列に扱われる。差異を無視する。つまり、「距離＝隔たり＝間」を減ぼす。したがって、「間減ぼろし＝まぼろし」と、とりあえず呼んでみる。

(2) 身近で、誰もが簡単に入手し、利用できるものは、その使い道や用途がなくなれば、用済みとなる。愛着や執着をそれほど覚えることなしに、廃棄＝処分できる。これを捨てたら、「化けて出るぞー」とか「罰が当たるぞー」とかいう、恐れや後ろめたさは、全然感じない。つまり、魔物めいたものが、いっさい感じられない。したがって、「魔減ぼろし＝まぼろし」と、とりあえず呼んでみる。

めっちゃめっちゃこじつけ、やってますよね。自分でも、そう思います。でも、好きなんですよー、こういうことが、とつても。「まぼろし＝幻＝マボロシ」。この言葉、大好きです。ひらがなでも漢字でも、字面がいいと思います。カタカナだと、イマイチかなって、感じ。何だかマーボー豆腐のロシア風という感じがしませんか？ そんなのがあったら、どんな味なんでしょう？ じっくり煮込むのでしょうか？ ボルシチみたいに、西洋赤蕪（＝ビート）やキャベツやトマトなんか入っていきそうですね。当然、お豆腐は、最後のほうでスープに放り込む。そして、サワークリームで仕上げる。うーむ。案外、いけるかも。ブログの神様、こうちゃんなんか、レシピを紹介してくれそうですね。話を

戻します。

「まぼろし=幻」。やっぱり、いいなあ、この言葉。以前、当ブログで、「うつせみ=空蟬=現人」と「あなた=彼方=貴方」という2つの言葉が大好きだと書いたことがあります。「うつせみ=空蟬=現人」を少し大きめの辞書で、引いてみてください。じーん、と胸にくる意味があります。

一方の「あなた=彼方=貴方」には、(1)「彼方」、つまり、「かなた=向こう側=遠く=遠い世界=遠い昔」という系列と、(2)「貴方=貴女」、つまり、「あちらの方(ほう)にいらっしゃるお方(かた)=目の前にいらっしゃる貴方または貴女=「ねえ、あなた」の「あなた」という系列の、2つがあります。「ねえ、あなた」……。「ねえ、あなた」と言えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞=感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

「山のあな、あな、あなた、あなた、もう寝ましょうよ」

みなさん、覚えていらっしゃいますか？ これも、古いですよ。当時、三遊亭歌奴（さんゆうていうたやっこ）、現・三遊亭圓歌（さんゆうていえんか）師匠の新作落語の一節でした。実は、この「山のあな、あな、あなた、あなた、もう寝ましょうよ」については、2つお断りしなければならないことがあります。

(A) もともとは、カール・ブッセというドイツの詩人の詩の一節であり、上田敏という人が「海潮音」という訳詩集の中で「山のあなたの空遠く、「幸（さいわ）い」住むと人のいふ」と訳した部分が出典です。

(B) 「あな、あな、あなた」と発声されているのは、現・三遊亭圓歌師匠が、吃音（きつおん）という発声障害を苦労して克服され、晴れて落語家になられた体験を、逆にとり、一種のギャグとされたという経緯があります。

で、B)の中で触れた「吃音」というのは、自分の場合ですと「難聴」と同じで障害です。好きでなったものではありません。また、生活したり生きていくうえで、不自由や差別も経験します。そんなわけで、三遊亭圓歌師匠は、あの落語の演目(=作品)を、現在では差し控えられているようなのです。その点では、立派だと思います。自分なんか、このブログで、自分自身の聞き間違いをネタに、おふざけをしておりますが、中には、そうしたことに不快な気持ちを抱かれている方々もいらっしゃるわけです。微妙な問題ですよ。

いずれにせよ、当時の思い出をお話ししますと、とにかく、おもしろかったです。自分は、小学生くらいでしたが、よく真似をしました。「あな、あな」というところや、「あなた寝ましょうよ」という部分に、ちょっとエッチな響きを感じて、やたら、にやにやしなながら、喜んで口にしていた記憶があります。ませていたんでしょうね。あるいは、思春期への助走という感じですか。コドモって、そういうことに、案外、敏感なんですよ。あなどれないです。子育てをされている方は、日々感じていらっしゃるのではないのでしょうか？

さて、

「トリトメのない記号=まぼろし」

の1つというより、代表選手の1つが、

言葉

です。このことに注目して先駆的な仕事をしたのが、フェルディナン・ド・ソシュールというスイスの言語学者でした。ご存知のように、スイスでは複数の言語が使用されていますが、どちらかというフランス語で仕事をなさっていた人です。

フランスの詩人、ステファヌ・マラルメは、ソシュールに大きな影響を受けて詩作=思索=試作した人です。たった今書いた、「詩作=思索=試作」(=しさく)は、「言葉の意味」に関係づけて、「言葉の字面」に注目した、半分おふざけ、半分マジな試みです。ですから、ソシュールやマラルメともつながるわけです。こういうことが、自分は大好

きなのです。だから、このブログの文章は読みにくくなるわけで、そういう意味では、ごめんなさい、と謝るしかないのです。

*

で、さきほど商品を例に挙げて説明しましたことから、「トリトメのない記号=まぼろし」という言葉がどうして出てきたのかを、ご理解いただけただけでしょうか？ あと説明を加えたいのは、

「トリトメのない」

という部分です。みなさんは、「トリトメのないもの」と聞いて、何を連想なさいますか？ このブログですか？ あれ、まあ、言えていますね。思わず納得しちゃいました。確かにそうですね。ほかには、どんなものを思い浮かべますか？

おしゃべり、話、日記、毎日の生活、日常、日々、会話、雑談、小説、論文、レポート、コラム、エッセイ、随筆、文章、記事、つぶやき、独り言、愚痴、ぼやき、考え、話題、テーマ、議題、会議、ミーティング、会合、議論、授業、講義、公演、ギャグ、妄想、夢、たわ言、感想、思い、追憶、出来事、ニュース、番組、痴話喧嘩、夫婦喧嘩、映画、ゲーム、試合、写真、絵、会議、サイト、ブログ、プロフ、世界、社会.....何でもあり状態になってきましたね。これって、やっぱり、

>ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして、他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち

つまり、「記号」ではないでしょうか？

どうりで、トリトメがないわけです。かわりばえのしない、だらだらとした、退屈で、刺激がなく、次々と同じものやことが続くような感じ。これが、「トリトメのなさ」のイメージではないでしょうか？

みなさん、どうして、ヒトは、「記号」に「トリトメのなさ」を感じるのでしょうか？

それは、やはり、

ヒトは、飽きっぽく、忘れっぽい生き物だ

からではないでしょうか。最初のうちは、目新しくて、うきうきどきどきしていたのに、そのうきうきどきどきに慣れると、うきうきどきどきという感情を忘れてしまう。飽きてしまう。そこで、もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒトという「記号」たちを対象にした「差別化＝変身＝転換＝トッピングの追加」に、ヒトは血道をあげるのです。以下に、「差別化」の具体例を、挙げてみます。

髪型を変える、髪の色を変える、美容院を変える、病院を変える、スカートの丈の長さを変える、お気に入りのブランドを変える、転職する、ジムに通ってからだを鍛える、付き合う人（＝仲間、恋人、配偶者）を変える、眼鏡のフレームを変える、生き方を変える、家出する、お酒を飲む、違った占い師に頼ってみる、こわいけどやばいことをやってみる、ペットを飼ってみる、別のシャンプーとリンスを試してみる、住まいをリフォームする、引越しをする、避妊をやめてみる、避妊をすることにする、一線を越えてみる、美容整形手術を受ける、違う宗教を試してみる、財布を変える、ヒゲを生やしてみる、かつらをつけてみる、植毛のために金をつぎ込む、よく行くパチンコ店を変える、イメージチェンする、化粧品を変える、違った香水をつけてみる.....

上に並べられた例を見ていて、何か気づいたことはありませんか？

別に意図して、書き連ねていたわけではありませんが、次のようなことに気づきました。箇条書きにしてみます。なお、「差別化」という言葉を使っていますが、その対象である「記号」は、もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒトなど、つまり、あくまで広い意味でとってください。

*男性より女性のほうが、差別化を実行しやすい

* 会社員より自営業のヒトのほうが、差別化を実行しやすい

* フリーランス的な立場のヒトのほうが、差別化を実行しやすい

* 生徒や学生より生徒や学生ではないヒトのほうが、差別化を実行しやすい

* 経済的に余裕のあるヒトのほうが、差別化を実行しやすい

* 子持ちのヒトより子どもいないヒトのほうが、差別化を実行しやすい

* 所帯持ちより独身者のほうが、差別化を実行しやすい

* 正社員よりフリーターのほうが、差別化を実行しやすい

以上は、個人的な感想です。でも、何となく、そういう傾向がみられるような気がしませんか？ もし、そうだとすれば、なぜでしょう？ たぶん、

* 差別化の敵は、しがらみ＝世間体＝社会の目＝自分のまわりの空気（※K Yの空気です）である

からではないでしょうか？ また、こうも言えないでしょうか？

* もっとも差別化を実行しにくいのは、「ちゃんとした」職について、「ちゃんとした」仕事を与えられていて、「ちゃんとした」家庭をもって、「ちゃんとした」行動をするようにまわりから求められている会社員や公務員である

と思えるのです。だから、たとえば、

*ビジネス書などで、「差別化」とか「特化」とか「自分のブランド化」とか「ブランド人」とか「自己変革」とか「自己啓発」とかがキーワードのハウツー本が氾濫し、多数の「ちゃんとした」および「ちゃんとしていない」会社員が、それらを多量に購入し、消費し、保存し、いつかは、廃棄する、という状況が恒常化している

と言えるわけで、すごく大雑把な言い方をすれば、

*サラリーマン（※ウーマンも増えつつあるが、マンのほうが依然として偉そうにしている）は、昇進とサラリーの増額を目指して「差別化」のノウハウを、必死になって次々と求めるとい、さまよえる＝おろおろうろしている「トリトメのない記号」の代表例となっている

と言えるだろうし、また、

*女性は、男性と比較して「トリトメのない記号」をまとい、消費する機会に恵まれていて、自分自身が、あらゆる意味での「差別化」を積極的に推進する、頼もしい「トリトメのない記号」として、社会において確固とした地位を築き上げている

ということは、要するに、

*「差別化」に関して言えば、女性に比べて、男性は圧倒的にトホホ状態にある

と言えるのではないかと？ そうだとすれば、まことにおめでたいことだとも言えなくもない。

またしても、長くなりすぎました。ここまで読んでいただいた方に、深く感謝します。また、来て、遊んでいってください。

09.02.21 トリトメのない話

◆トリトメのない話

2009-02-21 09:23:44 | Weblog

＞*サラリーマン（※ウーマンも増えつつあるが、マンのほうが依然として偉そうにしている）は、昇進とサラリーを増額を目指して「差別化」のノウハウを、必死になって次々と求めるといふ、さまよえる＝おろおろうろしている「トリトメのない記号」の代表例となっている

＞*女性は、男性と比較して「トリトメのない記号」をまとい、消費する機会に恵まれていて、自分自身が、あらゆる意味での「差別化」を積極的に推進する、頼もしい「トリトメのない記号」として、社会において確固とした地位を築き上げている

＞*「差別化」に関して言えば、女性に比べて、男性は圧倒的にトホホ状態にある

以上が、きのうの記事の結論めいた部分を引用したダイジェストです。ここで、お断りというか、確認しておきたいことがあります。再び、引用させてください。

＞なお、「差別化」という言葉を使っていますが、その対象である「記号」は、もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト、つまり、あくまで広い意味でとってください。

ということなのです。

で、きょうは、まず、「トリトメのない記号」に「自分自身」が含まれるという点に注目したいと思っています。あらゆるもの＝森羅万象が「トリトメのない記号」になり得ると考えた場合に、人間様を除外するのは不公平というものです。さらに、人間様のう

ちで、唯一自分自身でその存在を確認できる「自分自身」を除外するわけにはまいりません。

そうなんです。この記事を書いている自分も、あなたも、「トリトメのない記号」としての側面を持っているのです。えっ？ わたしが？ はい、残念ながらと申しますか、幸運にもと申しますか……。あっ！「えっ？ わたしが？」と言えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

「わたしってブスだったの？」

みなさん、これは覚えていらっしゃるのではありませんか？ 15年くらい前に、放映されていたテレビドラマのタイトルですよ。みなさん、そのころは、どうなさっていましたか？ 自分は、まだうつではありませんでした。でも、いつそうなっても、おかしくない過酷な条件下で、フリーランスの仕事をしていました。

で、「わたしってブスだったの？」ですが、当時お仕事で海外赴任、または、ご留学とかご遊学とか長期のご旅行で、この国を留守になさっていたなら別ですが、それがテレビドラマの題名だとは知らなくても、タイトルのフレーズだけは、聞いたことがあるのではないのでしょうか？ 実は、自分は、たった今ググって、「わたしってブスだったの？」というのが、松田聖子ちゃんの主演していたドラマ名だと知りました。お恥ずかしい限りです。

でも、思春期以後は、めったにテレビドラマを見なくなった自分が、そのフレーズを知っていることから推測すると、そのころには、ちょっとした流行語になっていたのではないですか？ ですので、流行語だった、ということにしておきましょう。えっ？ それって流行語だったの？ なんて、おっしゃっている方が、ネットの向こう側にいらっしゃるような気もしますが、見逃して、いや、聞き逃してください。なにしろ、これは、自分の見たことないドラマでもありますので、あっさりとお話を戻します。

「わたしって「記号」だったの？」

はい、そのようでございます。もっと正確に申しますと、「わたしって「トリトメのない記号」だったの？」となります。

「ばっかみたい！」バシッ！

あれ〜っ！

女性が相手の場合には、きっと、ほっぺをビンタされることでしょう。自分は、そういうことで快を覚える性質ではありませんので、きっとへこんで、後で一人ひっそりと涙を流すでしょう。Yes, you are a「トリトメのない記号」。だなんて、よく考えれば、失礼ですよ。まだ、YES, TAKAXX CLINIC. のほうが威勢がいいし、広告代理店さん作だけあって語呂もいいし、「自己差別化」の決定打になりそうで、まだだと思います。

奇しくも聖子ちゃんとひろみさんが、こんなところでかち合っちゃいましたね。「あら、おひさ」。「あーちっちっ」。なんちゃって。昔の話ですね。いろいろ噂があったのは……、何を言っているのでしょうか、自分は？

えっと……。そうでした。

*誰もが「トリトメのない記号」になり得る

というお話でしたね。これは、いくら強調してもしすぎることはない、大切なことだと思います。よく考えてみましょう。自分自身が「トリトメのない記号」になるとすれば、他の人たちと一緒にたにされて、「ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして、他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち」の1ケになるわけで、「スーパーに陳列されている大量生産された商品たち」や「農家で多量に栽培されたキュウリやカボチャたち」や「漁師さんが捕獲したサンマやイカたち」や「デパートで売られているブランドものの服や靴やバッグたち」と同じになるということです。

あなたの労働や時間やスキルや愛情などが、自分以外の誰かによって、お金や他の価値ある何かと交換される。あるいは、只で、そうなる場合もあるでしょう。そのうえで、

*あなたという「トリトメのない記号」は、時間を拘束されたり、身柄を拘束されたり、利用されたり、搾取されたり、するのです。つまり、消費される

のです。そして、ご用がなくなれば、

*いつかは、処分＝廃棄＝バイバイされる

のです。これって立派な売買（バイバイ）じゃないですか。消費じゃないですか。

それが、えんえんとお亡くなりになるまで、繰り返されるかもしれないし、1度だけで終わるかは分かりません。セ・ラ・ヴィ。人生って、そんなものなんじゃないですか？ もし、そうなら、楽しく消費されたいですね。同時に、楽しく、森羅万象（=いろいろな、もの・こと・さま・他のヒト）を消費したいですね。ケ・セラ・セラ。なるようにしかならない、なんて投げやりにならないで、CHANGE の精神で、ポジにいきましょうよ。

ただし、ポジにやりすぎて、ネガにならないように、くれぐれも気をつけてください。ネガとポジは反意語ではなく、表裏一体の関係にあるのです。一瞬にして天国、一瞬にしてどん底なんて、冗談ではなく、マジであり得るのです。ここに、ポジからネガへの墜落の生きた見本が1匹＝1ケいます。ほんまでっせー。信じておくなはれ。うつは、しんどいでっせー。自分自身が「トリトメのない記号」になる、というお話は、これくらいでええと思いますねん。

「おらっ、変なところで詛るじゃねー、パリテキ」ああ、幻聴！ ちょっと、おふざけしただけです。「何がおふざけだ、デタラメ野郎の、2千円詐欺野郎の、食い逃げ野郎めが」ずいぶん、罵倒が増えてきましたね。ようござんしたねー、ゲンチョーさん。「ったく、最近、反抗的というか、増長しやがって。それより、さっき、おんなの声がしなかったか？ わたしてキゴウだったの？ とかなんとか。おめー、誰か連れ込みやがったなー」

連れ込むなんて、めっそもない。

「おんなはどこだ？」あれって、ひとり言です。「ほんとか？」もしかして、ゲンチョーさん、焼きもちをやいていらっしゃるなんてこと、ないですよ？「なんで、おれが、焼きもちなんか、やかなきゃならねんだ」このブログのレギュラーの座を、失いたくないとか。「じょうだんは、顔だけにしろ、パリテキ」。だいじょうぶですよ、ゲンチョーさん。あなたには、レギュラーでいてほしいんです。「そうかい、ま、おんなが、いねーんだったら、ここには用はないから、きょうはこんなところで、おしめーにしとこ、あばよ」

失礼いたしました。

で、きょう、もう1つ考えてみたいことがあります。以前の「こんなマヨじゃ、いやだ！」2009-02-12 という記事で、少し触れたことなんです。いちおう、リンクは貼っておきましたが、ご面倒をおかけしても、なんですので、以下に、肝心な部分だけを引用します。なお、前後関係を説明しますと、マヨラーさんがマヨネーズにこだわるという話の途中で、書いたことです。冒頭の「そのもの」というのは、「トリトメのない記号」の一つである商品だにご理解願います。

> (2) そのものではなくて、そのものの「機能=用途=役目=使い道」を購入し、消費する

> ちなみに、商品の使い道うんぬんよりも、どちらかというと「もの自体」に愛着を覚える、というヒトもいますね。そういう現象は、「フェティシズム」とか「フェティッシュ」と呼ばれることがあります。何だか、風俗っぽい響きがありますよね。エロい予感がしませんか？ 実際、エロいんですけど、エライヒトも、楽しんでます。エライというのは、いわゆる「お上=政治家=官僚」みたいに威張っているのではなく、学問という業界でひな壇なんかを作って、威張っているほうの「エライ」なんです。つまり、哲学・文化人類学・社会学・宗教学だけでなく、経済学においてもテーマにされている「お話=学問分野=フィクション=作り話=紙芝居」なんです。おもしろい紙芝居なので、いつか書いてみたいと、かねがね思っています。

引用は以上です。

というわけで、「いつか書いてみたい」の「いつか」が、「きょう」みたいなんです。で、「フェティシズム」とか「フェティッシュ」について、書いてみたいと思います。簡単に言うと、

*ある「もの自体」の使い道より、その「もの自体」のとりこになってしまう

ことです。ちなみに、検索エンジンで「フェティシズム」とか「フェチ」なんてキーワードにすると、とんでもないエロサイトに紛れこんでしまい、とんでもない方向（ほうこう）に彷徨（ほうこう）し、未知（みち）の道（みち）に目覚めてしまい、その道に奉公（ほうこう）しちやって、「うふっ」とか「うひょーっ」とか咆哮（ほうこう）し、学生さんの場合には放校（ほうこう）される憂き目にあうことも、なきにしもあらずです。

ですので、検索する場合のコツを書きます。「フェティシズム」と「フェティッシュ」をダブルのキーワードでググるなり、ヤフるなりするのをお勧めします。くどいようですが、「フェティシズム」＋「フェティッシュ」ですよ。「フェティシズム」＋「フェチ」では、ありません。もっとも、未知の道に分け入りたい、あるいは目覚めたい方は、別ですけど。どうなっているんだろう。おお（or あら）、こんなの初めて、なんて具合に。

で、「フェティシズム」ですが、これは、上で簡単に説明した通りです。一方の、「フェティッシュ」は、「もの自体」、つまり、「フェティシズム」の対象を指します。ヒトは、いろいろな「トリトメのない記号」を「フェティシズム」の対象にするみたいです。その辺は、個人によって違いますね。誰でも、複数の「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」を対象に、一線を越えるくらいの愛着を示すことがあります。これは、

*ヒトとして、ごく自然な欲求だ

というのが、個人的な意見です。ですので、何も恥ずかしがらなくてもいいと思います。ちょっと後ろめたいとか、ちょっと他人には隠しておきたいとか、そういう感情が「快」を高める面も、確かにあります。ただし、他人に迷惑をかけるとか、犯罪行為につながるとなると、それはブレーキをかける必要があるでしょう。あまり、お説教めいたことは書きたくないので、みなさん、自分の両親（りょうしん）と良心（りょうしん）に恥じない程度で、お楽しみください。

「フェティシズム」というのは、誤解を招きやすい言葉ですね。オタク、マニア、趣味＝ホビー＝自分へのご褒美、道楽、コレクション、マイブーム、「ああ、これだなー」、十八番、おはこ、特技、暇つぶし、ひつまぶし、などと呼ばれているものも、れっきとした「フェティシズム」です。「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」であれば、何でもありなのです。

そのうち、対象が「自分というヒト」であれば、ナルシスト（＝ナルシシスト）でしょう。一方で、「他人」でしたら、好きで好きでしかたないヒトですが、ちょっと間違えばストーカー行為にまでエスカレートしますね。また、あるヒトになりきって、その格好から服装から趣味まで真似る場合もありますね。あれって、対象が「自分+他人」という感じでしょうか？ 多分にナルシスト的だし、多分に熱狂的ファンのだし、ややこしいケースですね。

以上のように考えれば、後ろめたさなんか、感じる必要が全然ないことが、わかっていただけるのではないのでしょうか？ ね、みなさん、楽しみましょうよ。

* 人生はおいしい

のです。おいしいものに満ちているのです。

* 「トリトメのない記号」も、おいしいものになり得る

のです。購入したり入手したりして、使い道＝用途を消費し、用済みになったら廃棄＝ポイ捨てる。それだけでは、もったいないではないですか。それ以外の楽しみ方が可能なものが、たくさんあるはずですよ。具体的には、申しません。人それぞれですもの。自分の想像力（そうぞうりよく）と創造力（そうぞうりよく）を発揮して、探しましょうよ。

こんなことを書いている自分にも、「フェティッシュ」があります。やっぱり、言葉です。言葉といっても、音声と文字の両方ですから、2度おいしいですよ。たった今、上で書いた言葉で、さかんにダジャレ＝言葉遊び＝オヤジギャグしていましたね。あれって、言葉を対象にした「フェティシズム」以外の何ものでもありません。そうとう、重症ですよ。ほんまもんでっせー。ほんまもん……と云えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※

何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！)、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン

の第2弾では、ないかいのう？

「あんたほんまもんやから、こわいわー」

みなさん、これってなんですか？ 自分は、関西出身ではないのですが、関西のお笑い芸人さんたちが大好きだったので、小さいころから、よく我流の関西弁を使って、まわりからあきれられたり、馬鹿にされていました。アホの坂田こと坂田利夫さんのギャグというか、よく口にしていたフレーズだということは、はっきりしているのです。

坂田さんは、前田五郎さんと「コメディ No. 1」という漫才コンビを組んでいますね。テレビでは、それぞれ単独で出ていることが、圧倒的に多くなりましたが、コンビを解消したわけではないみたいです。坂田さんのギャグといえば、「ありがとさ～ん」とか「イエス、アイドル」なんかが、代表的ですね。

で、今、取り上げている「あんたほんまもんやから、こわいわー」というのは、前田五郎さんと一緒にテレビに出ている時に、よく聞いたフレーズなんです。小さいころだったので、前後関係をよく覚えていないのですが、そのフレーズを坂田さんが口にする時、決まって客席から笑い声が聞こえるので、ギャグだと思うのです。

ナンセンスギャグなんのでしょうか？ 意味なんてないから、おかしいのでしょうか。坂田さんは、顔とか仕草を見ているだけで、おかしいですもの。とにかく、笑わせてもらいました。何だか、きょうの「死語復活キャンペーン」は、2発とも、中途半端というか説得力が乏しかったようです。きょうは、これ以上、出ないでほしいです。でも、こればかりは、いつ、出るのか分かんないんですよー。困ったものです。はい。

*

言葉の音声と文字の両面にたいする、個人的な「フェティシズム」のお話に戻します。きのう、自分の大好きな言葉2つ、「うつせみ＝空蟬＝現人」と「あなた＝彼方＝貴方」を紹介しました。そう思うと、今、やっていることって、あれの続きですね。きのうは、そのうちの「あなた＝彼方（＝あなた・かなた）＝貴方」について、説明しました。

で、「うつせみ＝空蟬＝現人」と「あなた＝彼方＝貴方」には、意味がいく通りかあって、それが微妙につながりあって、不思議な雰囲気漂わせているのです。何だか、とても、幻想的なんです。おや、「幻想的」という字にも「まぼろし＝幻」を見つけました。こういう多重的＝多層的な意味を持つ言葉を、「意味するもの＝文字や音声としての言葉」の「舞い＝ダンス」に見立てて、その字面や音がかもし出すイメージを味わうことが、自分の数少ない楽しみの一つなのです。

今、思い出しましたが、「うつせみ＝空蟬＝現人」については、当ブログのバンクナンバー、「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03の中で、少しだけ触れました。ご興味のある方だけ、ご参照ください。さて、おとといの記事で、

>ちなみに、自分の書いた言葉を口にした時や、自分の口にした言葉を聞き間違えるという冗談みたいなことが、自分にはよくあります。現に、きのう取り上げた「差別化」ですが、記事を書きながら、ふと「差別化は差別か？」とつぶやいたところ、「キャベツ化はキャベツか？」と聞き間違えました。零細的なシニフィアンのとちくるい現象でしょう。ふと、マラルメさんやデリダさんやラカンさんの、壮大な意図的シニフィアンのとちくるい運動＝実践＝キャンペーン＝業績を、思い出しました。

と書きました。その中の

* 「シニフィアンのとちくるい現象」

について、説明を加えさせてください。簡単に申しますと、

* 「言葉の意味」とは無関係に、または、関係づけて、「言葉の持つ字面の表情や、言葉の持つ音としての響き」に注目すること

です。もっと分かりやすく言えば、さきほども述べた通り、ダジャレ、言葉遊び、オヤジギャグです。こういえば、ピンとくるのではないのでしょうか？ 以前は、このブログは、ダジャレとオヤジギャグに満ち満ちていました。自分でも、こんなにやって大丈夫だろうか？ 果たして、正気なのだろうか？ と何度も、不安を抱きました。でも、やっちゃんですよ。どうにもとまらない状態に、なっちゃんですよ。今でも、やっていますが、これでも、だいぶ、おとなしくなったんです。

そう言えば、フランスの詩人だったステファヌ・マラルメさんには、以前、このブログに頻繁にご登場いただき、かつて占い師としてご活躍された泉アツノさんのご協力を得ながら、さいころを使った言葉遊びをいたしておりました。もちろん、妄想ですよ、念のため。今、振り返ると、いったい、あれは何だったのかと思うと同時に、あれはあれでマジでやっていたなあ、などと感心してしまいます。そうか、あれは

*言葉を対象とした「フェティシズム」だった

のか、とも言えそうです。ひとりで納得しちゃいました。いずれにせよ、尋常ではなかったことは確かだと、認めざるを得ません。でも、また、いつか、やってみたいです。自分が、

えいやーっ！

とか言って、さいころを投げる。すると、目が出る。その目というのは、「1～6の数」ではなくて、「言葉」なのですけど。そこで、すかさず、泉アツノさんが、

「こんなん出ましたけど」

と合いの手＝愛の手を入れてくださるのです。それをマラルメ師＝氏が、目を細めながら見守ってくださるのです。で、出てきた言葉をいじりながら、めちやくちやなこじつけで哲学をする。

こんなん、あやういですか？ やっぱり、そうお思いになりますか？ でも、楽しかつ

たんですよー。いちおう、哲学できたんですー、自分なりに。そう言いつつも、ちょっと恥ずかしくなってきたので、いつの記事とは申しませんが、お時間のある時に、このブログ記事のダイジェスト版である、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19、「こんなことを書きました（その2）」2009-02-02、「こんなことを書きました（その3）」2009-02-16 を斜め読みしながら、それらしき日記のタイトルを見つけ、中身を覗いてみてください。

くどいですが、けっこう、マジだったのですよ。本気でした。正気だったと言う自信はありませんが、本気でした。ちなみに、今も、本気です。正気とは申せませんが。

やはり、きょうも、トリトメなく終わってしまいました。この行まで読んでくださった方、どうもありがとうございました。

細かい字で申し訳ないです。いったい、このブログは何だったのだろうと、お思いになっただけなのではないかと心配しております。あまり、深く考えないでください。これに懲りずに、また遊びに来てください。待っています。

09.02.22 架空書評：奪還

◆架空書評：奪還

2009-02-22 11:04:08 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、出版社名、定価は、すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご注意願います。)

書名：『奪還』窪田博之著、中日本新聞社出版局刊、1,680 円（税込）

なぜか春になると、宗教関係の団体らしき人たちが、入れ替わり立ち替わり、うちに訪ねてくる。あの人たちには、独特の雰囲気がある。笑み、そして真剣で正直そうな顔つき。もちろん、内心は分からない。私は話を聞かずに、すぐにお引取り願っている。まあ、ご苦労だとは思いますが、気を許すと、長居をされるので、つつい追い返すような真似をしてしまう。

時に、親子で各家を回っている姿を目にする。たいていは、母親らしき女性と子どもだ。「母親らしき」と書いたのは、あの人たちに不信感があるからだ。現場で立ち動いているあの人たちが、別に悪い人だと言っているのではない。あの人たちの上、あるいは背後にいる人たちを、私は信用していないのである。権力は腐るといって、組織も腐る。

本書を読んで、私は組織というものが、いかに腐敗しやすいものであるかを実感させられた。また、善意からであれ、疑問を抱きながらであれ、組織の中で、奉仕活動をさせられている人たちのことを、憐れに思った。著者の窪田（くぼた）氏は、主にミステリーを書いている。謎解きよりも、社会派のサスペンスという趣（おもむき）の作品が多い作家だ。私は窪田氏のスタンスが気に入っているので、何冊か読んだことがある。この長編は、その中でも、出色の出来ばえであると思う。

主人公は14歳の少年、小田真人（おだまさと）。全編が、真人の視点から描写されている。主な舞台となるのは、真人の家族が所属するコミュニンと呼ばれる集団のある町と、東京である。なお、コミュニンは静岡県にある。真人の家族は、両親と弟の雄詞（ゆうじ）の4人である。あと父方の祖母が千葉県にいる。

コミュニンの人口は、約200人。親と子どもは別々に暮らす体制になっている。子どもたちは、農作業に従事する義務がある。最寄りの小・中学校へはコミュニンのバスで通い、授業が終わると、待機しているバスでただちにコミュニンに帰り、畑や鶏舎や作業場で働く。中学を卒業した年齢以上の住民は、全員が大人とみなされ、子どもたちとは別の場所で寝起きし生活している。大人は、農作業のほかに、コミュニンでとれた農産物やその加工品を、中型のトラックで近県に運び、直接販売する仕事に従事している。

真人は、中学2年生である。コミュニンの送迎用マイクロバスは、2台あり、小学校と中学校の各学年の下校時間に合わせて、こまめに村と学校を往復している。学校とコミュニンとの間で、緊密な連絡が取られている。学校の校長や教師たちが、コミュニンから金銭的な便宜を与えられ、時には圧力を受けているらしいことが、真人の見聞きす

る大人たちの会話や、他の子どもたちが密かに口にする話の断片から、浮かび上がる構成になっている。この辺りの処理が、作者はうまい。

ある日、バスが追突事故を起こし、真人たちは一時的に待ちぼうけを食わされる。そのとき、ある女性が、体育館の裏で待機している真人を含む18人の中学生に近づく。その女性については、子どもたち全員が知っている。中谷公子（なかたにきみこ）という女性である。カルト集団に入信した親と一緒に、一般社会と切り離されて生活している子どもたちを支援するNPOの「EX（イーエックス）」に所属している。

子どもたちは、中谷に対して複雑な感情を持っている。自分たちが自由を奪われた生活をしていることは、よく分かっている。しかし、親がコミュニンにいる以上、コミュニンを出るわけにはいかない。そんな自分たちの祖父母や親戚が、自分たちのことを心配して、手紙やコミュニンでは手に入らない食べ物や物資を、EXを通して届けてくれることに感謝している。一方で、EXのメンバーとの接触を警戒している。

接触が、知られた場合には、コミュニンの「子ども係」たちによって、制裁を受ける。狭い部屋に長時間閉じ込められたり、作業を多くされたり、食事を与えられなかったり、さらには体罰を受けることさえある。子どもたちの中に、「子ども係」に告げ口する者がいるのだ。バスが事故を起こした日、真人は父方の祖母からの手紙を、中谷から受け取る。内容は、いつもと同じだった。雄詞と一緒に、コミュニンから逃げていらっしやい。中谷に期日と場所を書いたメモを渡せば、車で迎えに来ます。欲しいものがあれば、中谷に伝えるように。真人は、手紙を読み終え、中谷に返す。

中谷は、菓子の入った袋を手渡すが、真人はいつものように、その中からチョコレートだけを取り出し、口に入れ、急いで咀嚼（そしゃく）して飲み込み、あとは返す。以前、袋が子ども係に見つかり、学校から帰ってから登校時間までの間、狭い部屋に閉じ込められるという日を1週間続けさせられて以来、もう懲りたのだ。コミュニンの子どもたちは、食事が制限されているうえに、重労働に従事しているために、常に空腹で、思考したり反抗する気力がない状態になっている。

中谷がみんなに手を振り、近くに止めてあった車に乗り込もうとしたとき、中学3年生の木村将太（きむらしょうた）が中谷に声をかける。「おれを連れて行ってくれよ。もう、我慢できないんだ、あそこでの生活」。将太は、母親とコミュニンに来て、1カ月も経っていない新入りだった。コミュニンでは、子どもの新入りにはかなり警戒している。年が上になるほど、警戒の目が厳しい。将太がコミュニンに来てからの半月間は、病気

だという理由で学校へ通わされることなく、毎日農作業ばかりをやらされていた。

真人は、最初に将太を見かけた時と、1カ月後の将太の容姿の違いに、今改めて驚く。げっそり痩せ、目がうつろになっているのだ。真人は、3年半ほど前に、コミュニケーションに初めて来たころの自分を思い出す。当時と比べて、現在は体重が10キロ減っている。めまいや立ちくらみをよく覚える。風邪を引きやすい。常に体がだるい。授業中は、たいてい机に突っ伏すようにして寝ている。物事を考えるのが面倒でならない。

真人は、さっき飲み込んだチョコレートのために、血糖値が高まり、高揚した気分になっているのを感じる。コミュニケーションでのうんざりするような単調で、気だるい生活が脳裏をかすめる。「中谷さん、僕も行く」。気がついた時には、そんな言葉が口から出ていた。真人と将太を乗せ、中谷は軽自動車を猛スピードで走らせる。

運転しながら、携帯電話でEXのメンバーらしき人間と連絡を取り合っている。真人と将太は、真人の祖母が差し入れてくれた菓子をむさぼるように食べる。元気が出てきた2人は、歌をうたいだす。ハイになり、解放された気分を満喫する。この場面を読みながら、私はかつて甘いものが今ほどふんだんに食べられなかった、幼いころを思い出した。確かに、甘いものを口にすると元気が出るし、勇気もわく。

以上が、前半のクライマックスである。ストーリーは、真人の視点にぴったりと添いながら進む。真人は、無事、父方の祖母が住む千葉県南部にある公団住宅にたどりつく。しかし、コミュニケーションから、即座に3人の男たちが派遣されてくる。あくまで真人の親権は、コミュニケーションにいる両親にある。従って、未成年者の真人は「誘拐された」と主張し、祖母と男たちの中で激しい争いが起こる。なかなか気丈な、おばあちゃんなのである。近所の人の通報により、警察官までがやってくる騒ぎになる。

いったん、男たちは引き下がるが、真人とその祖母の動きを、公団住宅内で見張っていることは確実だった。3人の男たちの恐ろしさは、これまで何度も見聞きしているうえに、そのうちの一人から自分自身も一度だけ暴行を受けたことがある。これ以上、ここにおいても、安全は保障されない。そう感じた真人は、一大決心をする。「逃げよう。おばあちゃんもEXも頼りにはならない。どうせ、いつかコミュニケーションに戻されて、半殺しの目にあうに決まっている」。その夜、祖母が電話でEXと相談しているすきに、真人はベランダに出て、3枚のシーツをつないで、ロープ代わりにし、巧みに移動しながら、地面に下り立つ。

真人の逃走劇が始まる。緊急連絡用に祖母から渡された携帯電話が、何度も鳴る。祖母とEXの番号が表示されるが、無視する。逃げるさいに、祖母の財布から抜き取った1万3千円と自分の小遣いを足した2万340円が「全財産」だった。真人は、ある青年に電話をする。EXを手伝っている、中川大地（なかがわだいち）だ。将太といっしょにコミュニケーションを出た翌日に、EXの東京支部で出会い、携帯電話の番号を覚えてもらっていた。EXの正式なメンバーではないらしい。20歳前後で、口数が少なく、ちょっと怖い感じのする青年だった。だが、真人は、初対面の大地に兄のような感情をいだく。

真人は、大地の住むアパートで一緒に暮らし始める。真人の願いを聞き入れ、大地は真人の居所を、EXにも祖母にも話さない約束してくれる。無口な大地だが、真人は徐々に大地がどのような経緯でEXの協力者となったか、そして、時折アルバイトとして工事現場でかなり危険な仕事をしていることなどを知る。真人は、大地に憧れ、大地の真似をする。

過去については、あまり語らないが、大地の部屋にある武器めいたものや、本や雑誌などから、何か危ない性格と強固な意志を秘めた人間であることを察する。真人は自分の理想とする強い人格を、大地に見出す。

あるとき、大地がこんなことを真人に言う。「おまえ、この国で一番強いボディガードをつけている奴が誰か、分かるか？」真人は、ある政治家の名を挙げる。「違う」。もう1人、ある公安関係の組織の職名を口にする。さらに、名前は知らないが、さきに挙げた公安関係の組織の対象となる組織のトップかと尋ねる。「違う。そんな奴らは、本気になれば、簡単にやれる」。「誰？」「知りたいか？」真人は、大地の冷静な表情の裏に、それとは正反対の抑えた殺気を感じながらも、大きくなずく。「じゃあ、来い」と大地がつぶやく。

大地は真人をバイクの後部座席に乗せて、都内のある場所に連れて行く。5、6階建ての雑居ビルが並ぶ一角で、バイクを止めた大地は、痲癩玉（※クラッカーボール）を真人に手渡す。そして、次のように言う。これから猛スピードで10分ばかりバイクを走らせる。しっかり、つかまっけていて、絶対に振り落とされないようにすること。おれが両ひじを何回か続けて曲げたら、これをばら撒け。2回合図するから、2つに分けて放り投げろ。

さらに大地が言う。「よく聞け。おまえが、バイクから振り落とされても、おれは助け

ない。おれは逃げる。それでも、いいか？」真人は迷う。しかし、うなずく。「もう1つ、言っておく。場合によっては、おれのバイクが転倒するか、奴らに追いつかれる可能性がある。その時には、おれとおまえは2人とも、無事であの部屋に戻ることは絶対はない。それでも、いいか？」真人の頭の中が、一瞬、空白になる。体が震えだす。真人は歯を食いしばり、恐怖に耐える。そして、大きくうなずく。

午後8時過ぎ、2人の乗ったバイクがスタートする。大地はその界限（かいわい）を知りつくしているかのように、路地を右に折れ、左に折れながら、進んでいく。あてずっぽうに、バイクを走らせているのではない。左右に折れながら、ある一点に向かって突き進んでいるのを、真人は感じる。いきなり、バイクのスピードが上がった。まわりに複数の人の足音がする。恫喝（どうかつ）するような声も聞こえるが、バイクのエンジンの音でよく聞こえない。自動車の急発進する音もする。バイクが左折する。

いきなり、広い道路に出た。交通量が多い。スピードが上がる。バイクは、次々と車を追い越していく。真人は身を低くして、必死で大地の腰にしがみついている。大地の両ひじが真人の両腕を乱打した。真人は指示された通りに、まず、右手の人さし指の爪を親指の腹に押しつけ、思いきり人さし指を弾いた。人さし指の先に紐（ひも）で束ねられた状態でくくりつけられていたクラッカーボールの塊（かたまり）が右後方へと飛び去っていく。

後ろでけたたましい破裂音が響く。気がつくのと、左側に屋敷の塀らしき白っぽい壁が続いている。2度目の合図に従い、左手の人さし指と親指をつかって、さっきと同じくクラッカーボールの塊を飛ばす。背後で、人の声、車の音、破裂音が一緒になった、大きなけたたましい音が、聞こえてくる。

その1時間後、真人と大地は、黙ったまま、明かりを落とした大地の部屋で、グレン・グールドの演奏するシェーンベルクのピアノ曲を聴いている。その部屋には、床に直に据えられたテレビの横にミニコンポが置かれているが、CDは7枚しかない。全部がグレン・グールドによるピアノ曲だ。真人は、ほかの曲を聴きたいと思うが、大地がそうした願いを聞き入れる性格ではないことは、短い付き合いの間に分かっている。

その晩は、いつも退屈だと感じている曲が不思議に心に染み入ってくる。真人には、さっき通り過ぎた大きな屋敷の主が誰であるか分からない。知りたいとも、思わない。あの喧騒と恐怖心を、これから先、2度と思い出したくない。静かな演奏を耳にしながらも、興奮はさめやらない。

真人は大地に、弟の雄詞をコミュニケーションから連れ戻したい気持ちを伝える。大地は、真人にバイクの運転を教える。それと並行して、さまざまな護身術と闘い方も指南する。痩せて筋肉もついていなかった真人の体は、数カ月間にたくましくなる。真人が大地の部屋でかくまわれていることは、EXにも、真人の祖母にも知らされていない。コミュニケーションの状況と雄詞についての情報は、大地がEXから聞き出してくれている。コミュニケーションが真人の捜索を打ち切ったらしいことを、大地が真人に知らせる。

真人と大地の関係は、兄弟のようでもあり、師匠と弟子のようでもあり、恋人同士のようにもある。真人が陽だとすれば、大地は陰である。真人は大地を慕い、大地に憧れの気持ちを抱いているが、大地はある一線からは決して、真人を受け入れようとはしない。

2人が共同生活を始めて半年が過ぎたある日の深夜、真人が大地の部屋で筋肉トレーニングをしていると、鍵がかかっているはずのドアが開く。入ってきたのはEXのメンバーだった。大地がバイクで、事故を起こしたという。曲がり角に位置しているコンクリートの壁に突き当たり、即死したと、メンバーは告げる。警察の話では、ブレーキをかけた形跡はないとのこと。未成年の大地は、EXの東京支部に一時的に保護される形になる。

本書は長編であるため、レビューが長くなりそうになってきた。それ以後の経過を飛ばし、最後のクライマックスに触れる。

真人がコミュニケーションのある町に戻る。身を隠しながら、コミュニケーションの動静をうかがう。EXは、真人の行動については知らない。脱走後、1年近く経った後の真人は、身長が伸び、体重も増え、コミュニケーションの人間さえ、町中ですれ違っても分からないほどに成長している。ニット帽を目深にかぶり、度が入っていない眼鏡をかけ、意識的に年上に見えるような格好にしている真人。

かつて真人に暴行を加えた「子ども係」できえ、真人を見ても気がつかない。真人は、ある日、小学校の休み時間に校庭の隅で固まって腰をおろしているコミュニケーションの児童たちに、フェンス越しに声を掛ける。「おまえたち、元気がないなあ。なんで、こんなところでぼけーっとしてるんだ」。わざと大きな声で、そう言う。そのとき、雄詞と目が合う。この瞬間の兄弟の意思の通じるシーンが美しい。

計画決行の日が来た。真人は、大地からバイクの運転の特訓を受けた身である。運転にも自信があり、構造にも詳しい。真人は、以前から目をつけていた家からバイクを盗み出す。コミュニンのバスが小学校へ、児童たちを迎えに行くのを見届け、先回りして、小学校の近くで待機する。バスが来る。児童たちが、指定の場所に集まり始める。

バイクに乗った真人は、雄詞の姿を認め、そばに近寄り、声を掛ける。雄詞の顔面が蒼白になる。邪魔なのは、バスの運転手だけだ。児童たちの半数が、バスに乗り込んだとき、真人はわざとバスの前面に軽くバイクを追突させる。運転手が降りてくる。真人はすかさず、運転手を空手の技で殴り倒す。頭部を打たれた運転手は転倒し、起き上がれない。

真人は、真っ青な顔をしてバスの座席に腰かけている雄詞に言う。「さあ、行こう」。下を向く雄詞。「何をぐずぐずしてるんだ。行こう。住む場所は用意してあるから大丈夫だ」。雄詞は意外なことを口にする。「ぼく、行かない。コミュニンのほうがいい」。真人は驚き、雄詞の頬を叩き、否応なしに連れ去ろうと考える。

そのとき、「ぼくを、連れてってよ」と叫んだ少年がいた。真人の知らない子だった。運転手が、身を起こし始める。真人は、弟とその少年の顔を見比べる。体つきからして、新入りらしい。コミュニンの子どもたちは、小柄で痩せている。目つきにも力が感じられない。しかし、その少年だけは、生きようとする力に満ちた目をしている。

起き上がった運転手を、再度殴りつけ、真人は、用意していたヘルメットを少年にかぶらせ、後部座席に座らせて、しっかり腰にしがみつくように言う。バイクのエンジンがかかる。真人は、もう一度、雄詞の顔を見たいと思ったが、そのまま発進する。バックミラーに、立ち上がった運転手が携帯電話を耳に当てている姿が映る。「絶対に、手を離すなよ。スピードを上げるからな」。真人は怒鳴るように、後ろにぴったり体を押し付けている少年に言う。「オーケー」。元気な声が返ってくる。

真人は自分の目が潤んでいるのを感じる。まばたきをして、涙を追い払い、真人は国道を進む。進みながら、大地の運転するバイクの後部座席に乗り、見知らぬ場所を縫うようにして走った、あの夜のことを思い出す。シートにいる自分と後部座席にいる少年が、あの晩の大地と自分とに重なる。

バイクで壁に追突したという大地は何を考えていたのだろうか。そんな思いが脳裏をかすめる。前を行く大型トラックを、巧みに追い抜きながら、真人は再び涙を払うために、一瞬目を思いきり閉じたのち、前方をにらんだ。

以上である。

このラストに、物足りなさを感じる読者もいるだろうが、私はこれでいいと思った。以上の、あらすじだけを読んでいると、少年漫画のような感想を抱く方が多いだろう。しかし、作者の主眼は、組織批判にある。真人や大地の言動を通すさいには具体的に、そして、EXのメンバーたちの口を通しては抽象的に、さまざまな組織の問題点が浮き彫りにされる構成になっている。

本編の半ばのクライマックスである、例のクラッカーボールを破裂させた限界であるが、あのシーンを読んでいて、思い出したことがある。

都内にある、大病院に入院している友人のお見舞いをしたあと、天気が良く、時間もあったので、来たのとは別の駅から電車に乗ろうと考え、病院を出た。遠回りになるが、散策のつもりでどンドン進んでいった。その間に、知らない人物から、2度、どこへ行くのかと尋ねられたのである。押し問答になった。私服の警察官でないことは確かだった。

そのことを、ある事情通の知り合いに話したところ、実に嫌な話を聞かされた。ここでは、触れたくない。とにかく、都内に妙な限界が存在するということである。かなり前の話だから、現在もああしたことがまかり通っているのかどうかは知らない。最後に、冒頭に書いた言葉を繰り返す。組織は腐る。

< 評者：孟宗竹真（もうそうだけまこと）・詩人 >

*

孟宗竹真氏からは、当初「不定期に」という条件で、書評をお送りいただいていたし

た。嬉しいことに、今回の原稿が添付されたメールの中で、毎週日曜に当ブログでブックレビューを掲載してもいい、というお言葉を頂戴しました。孟宗竹氏のご好意に、深く感謝いたします。

書評のバックナンバーは、第1回「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13、第2回「架空書評：何もかもが輝いて見える日」2009-01-18、第3回「架空書評：彼らのいる風景」2009-01-25、第4回「架空書評：ビッグ・ブラザー」2009-02-01、第5回「架空書評：PDS ジェネレーションズ」2009-02-08、第6回「架空書評：九つの命」2009-02-15 です。未読の方が、今回の記事と併せてお読みいただければ、幸いです。

孟宗竹さん、どうか来週もよろしくお願ひ申し上げます。(バ)

09.02.23 おいしくない社会

◆おいしくない社会

2009-02-23 09:16:14 | Weblog

ちょっと想像してみてください。あなたが、「差別化」も「フェティシズム」も実行できず、無報酬に近い形で「トリトメのない記号」として消費され、いつかは廃棄・処分される社会を。

何を言っているのだろう、このブログは？ 変なところに紛れ込んでしまった。とお思っている方、ちょっとお待ち願ひます。そうですね。いきなり、「差別化」だの「フェティシズム」だの「トリトメのない記号」だのは、ないですね。初めて、このブログを訪れた方もいらっしゃるかもしれないし、ごく最近遊びに来てくださるようになった方もいらっしゃるに違いありません。背景を、説明させてください。で、よろしければ、このまま、この記事を読んでいただければ幸いです。

(1)「トリトメのない記号」とは、森羅万象、つまり「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」のことです。どうして「記号」なのかと申しますと、「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」は、それとそっくりなものが、たくさん並んでいたり、あちこちに散らばる形でたくさん存在するからです。イメージとしては、スーパーに並んでいるカップラーメンを想像してください。ね、ヒトもそうですよね？個性とか顔かたちを気にするのは、せいぜい自分自身か家族か友達か仲間か親戚くらいじゃありませんか？あとはいっしょくたになって「他人＝よその人」として、存在している。そんな感じがしませんか？

で、なぜ、その「記号」に「トリトメのない」がつくのかと申しますと、たった今書いたことと関係するのですが、どれもが「そっくり」であるからです。つまり、没個性＝みんな同じみたい＝違いなんかどうでもいい、というイメージがあるからです。そっくりな点がそっくり、という感じなんです、分かっていただけでしょうか？

(2)「差別化」とは、上で述べた、「そっくり」＝「ありふれている」＝「コモディティ化している」という状況を打破するための戦略であり、生き方なのです。ビジネス書をよくお読みになっている方なら、商品や製品の「差別化」と、「コモディティ化」という言葉で、ピンとくると思います。

ヒトでいうなら、いわゆる「ブランド人」になることです。自分を他のヒトとは別の個性や価値を備えた存在として、演出＝誤魔化す＝化ける、あるいは、スキルを身に付けたり磨いたり、資格を取ったりして、キャリアアップに励むことです。

(3)「フェティシズム」とは、「そっくり」＝「ありふれている」＝「コモディティ化している」という状況を打破するという点では、(2)の「差別化」と似ていますが、ベクトルが違います。「そっくりで、ありふれている」「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」そのものに徹底して愛着を覚えたり、とことんこだわることに、「快」を見出すことです。

「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」そのものを「おいしいもの」としてとらえるという意味では、貪欲で利口でしたたかな生き方を選ぶことだとも言えます。なお、「フェティシズム」の対象を「フェティッシュ」と呼ぶ場合があります。

*

以上のようなことについて、先週、このブログでは、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある、という具合にトリトメもなく書きつづっていたのです。では、繰り返します。

＞ちょっと想像してみてください。あなたが「差別化」も「フェティシズム」も実行できず、無報酬に近い形で「トリトメのない記号」として消費され、いつかは廃棄・処分される社会を。

今度は、抵抗なく、想像していただけましたか？ 嫌ですよ、そんな社会なんて。ちっとも、楽しくないし、おいしくないし、働き甲斐も、遊び甲斐もないですよ。特に、

＞無報酬に近い形で「トリトメのない記号」として消費され、いつかは廃棄・処分される

というところを読むと、イヤな感じがしませんか？ 一言で言えば、

おいしくない社会

では、ありませんか？

そんな社会はご免です。冗談じゃないです。「馬鹿にすんな！＝馬鹿にしないでよ！」って、声を上げたくありませんか？ でも、そういう国や地域が、世界にはあるのです。または、過去にあったのです。ここで問題にしたいのは、

全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家

です。自分なんか、上の言葉の羅列を見ただけで、悪寒を覚えそうになります。同時に、次のような言葉を連想します。

＞ナチスドイツ、ゲシュタポ、治安維持法、特高、大粛清、強制収容所、ゲープーウー、公安、情報部、内務省、シュタージ、密告、拷問、盗聴、拉致、軟禁、監禁、投獄、監視

＞禁書、焚書、言論弾圧、宗教弾圧、魔女狩り、赤狩り、島流し、検閲、監視、国外追放、軟禁、監禁、幽閉、接見禁止、面会謝絶（?）、エシュロン、密告、拷問、盗聴、密告、拉致、身柄拘束、投獄、死刑

以上は、当ブログのバックナンバーである「なぜ、ケータイが」2009-01-22 から引用しました。ご興味のある方だけ、ご参照ください。面倒な方は、このままお読み続けてくださって、いっこうに構いません。上の2つの引用で一部ダブリがあるのは、腹が立つのと、ビビるのが重なって、動揺しながら日記を書いていたからです。

それほど、イヤで、おいしくない社会の話なのです。みなさんは、「全体主義」とか「ファシズム」と聞いて、どんな国あるいは社会を思い浮かべますか？ ○○主義や○○イズムって、よく見聞きしませんか？ ○○主義、と言えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン（※きよとんと、なさっている方に、申し上げます、これって、当ブログのワンパターンギャグなんです、どうぞよろしく）

では、ないかいのう？

「三無主義」

みなさん、覚えていらっしゃるでしょうか？ または、お聞きになったことがありますか？ 自分が中学生から高校生くらいのころに、やたら、オトナどもが、コドモたち（※当時は「現代っ子」とも呼ばれていました）に対して貼った、ラベル＝レッテル＝悪口＝悪態です。確か、「無気力、無関心、無責任」の3点セット＝トリプル攻撃でした。あのころのオトナたちは、今になって振り返れば、高度成長時代に人生で最も輝いていたとい

う自信に満ちていた人たちだったのです。ですから、シラケた後輩たちを見ていて、ずいぶん歯がゆかったのではないのでしょうか？

そういえば、「シラケ世代」なんて言葉で、ワカモノを罵倒していたオトナたちが掃いて捨てるほどいました。コドモやワカモノは、反抗する習性がありますから、罵倒されると、さらに「無気力、無関心、無責任」で「シラケた」風を装ったのでした。昔は、流行語や新語の賞味期限が、今よりずっと長かったのも、そうした罵倒を見聞きするかなり期間は長かった記憶があります。

ちなみに、現在の自分も「三無主義」です。職がないから無職、お金がないから無銭、頭髪に救いがないから無救という感じですか。トホホ。どなたか、出版関係の方、お仕事ください。書くことでしたら、一生懸命やります。なんて、ブログをハローワーク化してはいけませんね。反省。

で、〇〇主義や〇〇イズムに話を戻します。英語だと、「-ism」が「〇〇主義」に当たることは、なんとなく経験的に分かりますね。ほら、以前に漫画家の小林よしのりさんが、ファシズムと「わし」=自分をかけて「わしズム」なんて、辛口でおもしろい企画を、なさっていらっしやっただじゃありませんか（※個人的には、現在の小林さんに同調できない点が多いのですが）。

それで、思い出しましたが、やはり漫画家の高橋春男さんが、「いわゆるひとつのチョーさん主義」というおかしな連載をしていらっしやいましたね。あれって、野球の神様と言われた長嶋茂雄さんのあだ名の、「チョーさん」と「共産主義」をかけたのですか？ そうだとしたら、すごい発想ですね。それとも違うのかな？

いずれにせよ、ああいう言葉遊びが、自分は大好きです。言葉を「フェティッシュ=すごく愛する、またはこだわる対象」とする「フェティシズム」に陥っているのです。ですから、自分は「フェティシスト」=fetishistです。「-ist」が人を表す言葉だということも、なんとなく経験的に知っていますね。ファシズムを信奉する人なら、ファシストとなるわけです。

昔、ニヒリズムとかニヒリストとか、ニヒルな人なんて言い方も流行りましたよね。もう、死語ですか？ 今、ニヒルなんて言われても、「そうかい？ おれって、ニヒルかい？」なんて単純に喜ぶ人（※特に男性）はいないでしょうね。いたら、生きた化石扱いされ

ちやいますよー、きっと。ニヒリスト、「-ist」と言えば。まあ！ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今（※きょとんと、なさっている方に、申し上げます、これって、「死語復活キャンペーン」と並ぶ、当ブログのワンパターンギャグなんです、どうぞよろしく）

では、ないかいのう？

「サユリスト」

全国の元・「サユリスト」のみなさん、今はどうしていらっしゃるでしょうか？ きょうは、当ブログのワンパターンギャグのレンチャンになってしまいました。こんなん、珍しいんですよ。きょう、このブログをお読みになっている方、ラッキーかも。宝くじでもお買いになりますか？ それとも、さっそくパチンコ屋さんに直行しますか？ いずれをなさるにせよ、この記事を読んだ後だと、嬉しいです。

で、「サユリスト」ですが、みなさん、覚えていらっしゃるでしょうか？ または、お聞きになったことがありますか？「元・「サユリスト」なんて、言いやがって！おれは、永遠のサユリストだ」とお怒りになっている、吉永小百合さんの熱狂的なファンの方がいらっしゃるら、ごめんなさい。確かに、現在も、おきれいですもの。お気持ちは十分に分かります。

で、ふと、今、思いついたのですが、アイススケートの浅田真央さんのファンなら、「マオイスト」ということになるのでしょうか？ そうだとすれば、大変です。「マオイスト」は、既に予約済みというか、使用中というか、既存の言葉なのです。ご存知の方も、おおぜいいらっしゃると思いますが、「毛沢東思想の信奉者」＝「毛沢東主義の信奉者」、あるいは「ネパール共産党毛沢東主義派」という意味になってしまいます。後者は、新聞でもときどき見かける言葉ですね。なにしろ、毛沢東は、日本ではふつう「もうたくとう」と呼んでいます。

自分は、昔ちょっとかじった程度で、中国語はよく分からないのですが、アルファベットでは Mao Zedong とか Mao Ze-dong とか表記していて、「マオ・ツェトン」みたいに

発音するらしいです。英語だと、Mao Zedong とか Mao Tse-tung と表記しますね。で、何を言いたいのかと申しますと、真央ちゃんのファンが自分たちを「マオイスト」と名乗るのはちょっとまずいのではないか、ということです。えっつ？ 誰も、名乗っていない？ そうですか？ そりゃまた、失礼いたしました。

*

さて、

>ちょっと想像してみてください。あなたが「差別化」も「フェティシズム」も実行できず、無報酬に近い形で「トリトメのない記号」として消費され、いつかは廃棄・処分される社会を。

でしたね。話を進めます。とにかく、怖いんです。こんな社会は絶対に嫌です。でも、そういう社会や国家は現存するし、過去にも存在したし、これから先も実現する可能性も高いということなのです。

全然おしくない社会

ですよ。想像してみませんか？ とにかくにも、やたら何でも禁止されるのです。で、禁止されたり、使用を制限されそうなものを、以下に挙げます。

ケータイ、パソコン、プリンター、インターネット、電話、ファクス、コピー機、テレビ番組（※ニュースも、バラエティーも、歌番組も、アニメも、ドキュメンタリーも……何でもですよ）、スポーツ、学校での私語、家庭での会話、職場での会話、仲間や知人との会話、出版一般、宗教、イベント、集会＝人が集まること、結社＝人が群れを作って何かを企画・計画すること、買い物＝ショッピング、趣味、娯楽、密かなる愉しみ……

ここまで書いたところで、いいことを思いつきました。あれを引用すればいいのです。では、コピペします。そういえば、「コピペ」も禁止されますよ。

＞髪型を変える、髪の色を変える、美容院を変える、病院を変える、スカートの丈の長さを変える、お気に入りのブランドを変える、転職する、ジムに通ってからだを鍛える、付き合う人（※仲間、恋人、配偶者）を変える、眼鏡のフレームを変える、生き方を変える、家出する、お酒を飲む、違った占い師に頼ってみる、こわいけどやばいことをやってみる、ペットを飼ってみる、別のシャンプーとリンスを試してみる、住まいをリフォームする、引越しをする、避妊をやめてみる、避妊をすることにする、一線を越えてみる、美容整形手術を受ける、違う宗教を試してみる、財布を変える、ヒゲを生やしてみる、かつらをつけてみる、植毛のために金をつぎ込む、よく行くパチンコ店を変える、イメチェンする、化粧品を変える、違った香水をつけてみる.....

上に引用したのは、「差別化」の具体例です。ついでに、次にコピペする言葉たちもご覧ください。

＞おしゃべり、話、日記、毎日の生活、日常、日々、会話、雑談、小説、論文、レポート、コラム、エッセイ、随筆、文章、記事、つぶやき、独り言、愚痴、ぼやき、考え、話題、テーマ、議題、会議、ミーティング、会合、議論、授業、講義、公演、ギャグ、妄想、夢、たわ言、感想、思い、追憶、出来事、ニュース、番組、痴話喧嘩、夫婦喧嘩、映画、ゲーム、試合、写真、絵、会議、サイト、ブログ、プロフ、世界、社会.....

以上は、「トリトメのないもの」と聞いて連想するもの、つまり、この記事の冒頭で説明した「トリトメのない記号=まぼろし」の例なのです。以上の2グループは、先週の金曜日の記事「まぼろし」2009-02-20 からの引用です。こんなふうに、情報=データはリユース、リサイクルしてエコにしなくちゃだめですね。なんて、安易なコピペを正当化する、無精な自分を恥ずかしく思います。でも、やっちゃった以上、利用しましょうよ。

で、考えてみてください。きょう挙げたグループも含めて、上に並べた3グループのことやものが、禁止されたり、使用や利用を制限されるのですよ。そうなったら、人生なんて、まったく味気ない、全然おいしくないものになることは、目に見えています。少なくとも、自分たちが住んでいる、この国だけは、そうなってほしくない。そう思うのが、人情というものではありませんか？

*

さて、

*全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家

においては、

*ヒト同士の、コミュニケーションや、人間関係＝交友＝社交＝団体活動が禁止されたり、大幅に制限される

だけでなく、また

*「トリトメのない記号」を購入＝入手したり、消費したり、保存したり、廃棄・処分するということができなくなる

だけでなく、

*「トリトメのない記号」を「差別化」する、楽しさ＝喜び＝快を味わえなくなる

どころか、

*ヒトは本質的に「トリトメのない記号」でしか存在できないために、無報酬で、その時間と身柄を拘束されたうえで、そのスキルと労働力を消費され、保管＝保存＝縛り付けにされ続け、用済みになった時点で、廃棄・処分される

という、

*極めておいしくない社会で生き、日常生活を営むことを余儀なくされる

ということなのです。では、どうして、そうなるのでしょうか？ すごく単純に当たり前のことを言えば、

* 「お上」が禁止し、制限する

からです。

「お上」というとまだ、柔らかいイメージがありますが、「全体主義体制における支配階級とか特権階級」というと怖い感じがしませんか？ 実際、怖いですよ。へたに反抗すれば、犯行をおかした者として、司法当局のペーパーワークの対象になってペタペタと何種類もの書類にハンコを押された後に、投獄か死刑ですよ。ペーパーワークを省略されて、即、死刑または暗殺なんてことも大いにあり得るのですよ。

この点について詳しいことは、当ブログのバックナンバーである「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16 と「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 に書きました。ご興味のある方のみ、ご参照願います。面倒な方は、パスしましょう。

ところで、みなさん、「お上」って何でしょう？ ふつう、三権分立が建前となっている国においては、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚を指します。また、ふつう、主権在民＝国民主権を建前とする国では、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚は、国民の代理人＝代行者＝代理店＝エージェント＝公僕＝お使い＝使用人であるとされています。でも、「建前とする」という部分が示すように、「事実上は」＝「現実には」、そうなっていません。なぜでしょう？

いろいろな原因が考えられます。有力な説の1つは、

* ヒトが飽きっぽく、忘れっぽい生き物である

からです。また、

* 飽きっぽいということは、集中力に欠ける

ということです。そのために、

*お金儲けや娯楽には一生懸命になっても、政治家選びに集中力を向けることができない。または、政治家選びに熱心になれずにテキトーになってしまう

という事態に陥ります。一方、

*忘れっぽいということは、致命的な欠陥になる

とヒトは肝に銘じるべきです。どれだけ強調しても強調しすぎることがないほど大切なことです。ヒトが忘れっぽい証拠に、現在の

*「気づき」ブーム＝「気づき」騒動＝「気づき」商売の繁盛＝「ヒットして良かった、儲かっちゃった！」

が挙げられます。

言い換えると、

*「気づき」さえも、「トリトメのない記号＝まぼろし」として消費されていて、いつか用済みになり、廃棄＝処分＝忘却＝忘れられる＝「そんなのあったっけ？」＝「そういえば、そんなのあったねー」＝「忘れちゃった」＝「分かんない」となる可能性が極めて高い

ということです。だからこそ、

*ヒトは、政治家選びに失敗し、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚にだまされ、だまされたことすら、あきらめ＝飽きてしまう＝どうでもよくなる＝テキトーにな

る、だけでなく、忘れてしまい、忘れるを乗り越えて、気づかなくなる

ために、

*いったん確立した制度=体制=お上に、牛耳られる=どうにもならなくなる=罰が当たると=自業自得=再起不能状態に陥ってしまう、

要するに、

*三権分立と主権在民=国民主権の、事実上の崩壊が起きていることにすら、無気力=集中しない=飽きっぽい状態のまま、立ち向かうことなく、あるいは、忘れっぽい=忘れる=気づきもしない

という事態が恒常化するのです。それだけではなく、1つ間違うと、

*全体主義体制国家=ファシズム体制国家=管理・監視社会、および管理・監視国家の実現をゆるしてしまう可能性が高い

と警戒すべきなのです。脅すわけではありませんが（※いや、あるのかな？ あります）、

*既に、全体主義体制国家=ファシズム体制国家=管理・監視社会、および管理・監視国家が、部分的に徐々に実現しつつあるかもしれない

のです。

では、どうしたら、いいのでしょうか？ 飽きっぽく、忘れっぽいヒトの端くれである自分には、分かりません。ですので、できれば、あす、引き続き、この問題について考えてみたいのです。

もし、飽きることなく、忘れずにいればの話ですけど。

間借りしているブログサイトの10,000文字数制限が、非常に気になるので、この辺で失礼いたします。この行まで、お読みくださった方、どうもありがとうございました。どうか、また、できれば、あす、遊びにきてください。忘れちゃだめですよ。お待ちしております。

09.02.24 あきらめない

◆あきらめない

2009-02-24 08:54:47 | Weblog

思うんですけど、ヒトってファシズム=全体主義が好きなんじゃないでしょうか？以前から、それこそ、物心がつきはじめたことから、ぼんやりとそんな思いを抱いていたような気がするのです。もちろん、ファシズム=全体主義なんて言葉は知りませんでした。でも、体感的に、強制とか命令とか指示とか「みんなでいっしょになにかをする」とか「オトナや自分よりトシウエのヒトに従う」ということに、ものすごい嫌悪感と反感をいただいていたような記憶があるのです。

みなさん、次のような気持ちになることはありませんか？

*強いリーダーに、引っ張ってってもらいたい。

*できれば、自分は決断したくない。

*ややこしいことは、考えたくない。

*面倒なことは、全部他人にまかせたい。

*他人と摩擦や対立は、起こしたくない。

*長いものにまかれるほうが、楽みたい。

*たとえば、コンサートなんかで、ステージのアーティストにむかって、全員が一丸となってエールを送るのが、たまらなく心地よい。

*みんなと同じにしていると、すごく安心する部分がある。

*自分より上に立つ人から、頭ごなしに叱りつけられたり、理不尽な命令をされたとき、なぜか嬉しかったり元気が出るのがよくある。

*仲間はずれや無視（シカト）されるくらいなら、自分の心を偽っても、みんなと同調したほうがまだ。

10のケースがありましたが、どうでしたか？ そんな、気持ち、ありませんか？ こんなことを書いている自分にも、以上の感情が全くないとは言いきれませんが、おそらく、「他人と摩擦や対立は、起こしたくない」以外の感情については、かなり希薄なのではないかと思います。みなさんは、どうですか？

自分が赤ちゃんのころからの写真を集めた、アルバムを持っていらっしゃいますか？ すべての方が、YESとお答えになるとは限りませんよね。何かの事情で、自分の小さいころの写真をお持ちでない方がいます。自分の知り合いの例を挙げると、家が火事にあった方、家族で一種の「夜逃げ」を体験された方、幼い時にご両親が離婚なさった方がそうです。幸い、自分はアルバムを持っています。

以前、このブログにも書きましたが、自分の安上がりな趣味の一つに、虫眼鏡で写真を見ることがあります。おもしろいですよ。ふつうなら、見逃してしまうものを発見することが、それこそ、数えきれないほどあります。

「えっ、こんなところに、こんなものが映っている！」「あっ、この看板の文字、読めそうじゃん。ちょっと待ってー。えーっとねー」「何？ これって、〇〇じゃない？」「わーっ！ 知らなかった！ 大発見じゃん」「ねえ、お母さん、昔、△△に住んでいた家に、(E)Eなんていたっけ（or あったっけ）？」「ちょっと、これ、人の手に見えない？」

なんて感じです。中には、「心霊」や「人面」を見つけてしまう方もいるでしょうね。ぜひ、お試しください。

*

ちょっと話が逸れはじめましたので、戻しますね。自分の人生を集約的に表している1枚の写真を選べと言われたら、「これです」という具合に、他人に見せられるものがありますか？ 自分はパソコンに向かってこの文章を書きながら、今1枚の写真キーボードの横に置いています。久しぶりに見る写真です。これこそ自分の人生の縮図だ、と言っても言い過ぎではない写真です。白黒で、保育園児だったころの自分の全身が映っています。おぼろげながら、その時の状況を覚えています。

その日は、保育園の発表会でした。写真には、舞台の上に8人の園児が前後2列になって並んでいる様子が映っています。互い違い、つまり、上から見れば、ジグザグに整列しているために、観客席から見ると、8人の姿が重ならないように配置されています。自分は、前列の右から2番目にいます。子どもたちは、頭に紙製の帯を巻き、その帯の正面には花形だの、星形だの、丸形だの、大き目のこれまた紙で出来た模様をつけています。自分は白っぽく映っている丸形の模様をつけています。

もう一枚、同じアングルから撮られた写真があり、それでは両手を上げ両足を交互に上げ下げして、お遊戯をしている様子が映っているところから、同一人物が撮った写真でしょう。さて、さきほど触れた整列している写真ですが、7人の園児が気をつけの姿勢をしている中で、1人だけが足を開いているのです。それが、自分です。

舞台の上の他の子どもたちは、口をしっかりと閉じて、指をそろえて伸ばした両手をぴったり腿につけています。自分だけが、口を空けています。両手もわずかに曲がっています。正面から見て前列の右にいる、つまり園児だった自分から見て左隣の女の子が、足を広げた当時の自分のほうに、顔を横に向けて心配そうな目つきで見ているのが、おかしさをかもし出しています。そのとき、誰かが、たぶん先生だと思いますが、しきりに自分に注意していたような記憶も、かすかにあります。

そんなコドモだったのです。推して知るべし。いわゆる問題児でした。今は、変人でしょうか。たぶん、まわりからはそう思われているに違いありません。それは、日々ひしひしと感じております。問題児から変人への軌跡のうちで、小学生時代編みたいなエッ

セイを以前書きました。これまた、偏屈な性格の芽生えが表れている思い出話です。当ブログのバックナンバーである「冬のすずめ」2009-01-24 で書きました。「エッセイを書くのだ」という感じで書いてありますので、比較的読みやすいと思います。ご興味のある方がいらっしゃれば、ご一読願います。関心のない方は、パスしましょう。とにかく、問題児でした。

そんなわけで、自分はファシズムと全体主義が大嫌いなのです。というか、怖くて仕方ないのです。

と、話が飛躍します。自分の中では、飛躍どころか、しっかりつながっているのですけど。自分みたいなへそ曲がりな者は、全体主義体制の中では生きていけません。たぶん、ですが。もちろん、ヒトってイイカゲンな生き物ですから、豹変ということも十分に考えられます。自分みたいなのに限って、案外全体主義体制の「犬」になり得る素質を十二分に備えていないとは、言いきれませんもの。

1つ自慢をさせてください。自分は、腕力を使った喧嘩でも、唇と舌と声帯と脳味噌を使った口喧嘩でも、主に脳味噌と論理力と気の強さと厚かましさをういた議論でも、生まれてから現在にいたるまで1度も勝った経験がありません。これだけが、履歴書には書けませんが、唯一の自慢できることです。

それに加えて、へこみやすく、小心者で、うじうじしている性格ですから、ファシズムと全体主義の社会で生きていく自信は皆無です。温厚な性格の人が運転席に座ったとたん、凶暴な性格の人に一転するように、自分なんかは、とんでもない「裏切り者＝卑怯者」になる可能性が高いのではないかと。こればかりは、実際に、体制が変わってみたいことには分かりません。恥ずかしながら。信念がないんですね。口だけって、やつです。

きのうのうでは、「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」の恐ろしさの一端について、自分なりの妄想＝意見を述べました。横着をして、きのう書いたうちで、一番大切だと思うところを、以下にコピペします。

>*ヒト同士の、コミュニケーションや、人間関係＝交友＝社交＝団体活動が禁止されたり、大幅に制限される

＞*「トリトメのない記号」を購入＝入手したり、消費したり、保存したり、廃棄・処分
することができなくなる

＞*「トリトメのない記号」を「差別化」する、楽しさ＝喜び＝快を味わえなくなる

＞*ヒトは本質的に「トリトメのない記号」でしか存在できないために、無報酬で、その
時間と身柄を拘束されたうえで、そのスキルと労働力を消費され、保管＝保存＝縛り
付けにされ続け、用済みになった時点で、廃棄・処分される

＞*極めておいしくない社会で生き、日常生活を営むことを余儀なくされる

以上のような悪夢のような社会が、「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・
監視社会、および管理・監視国家」なのです。

困りますね、どころじゃ済みませんよね。自分みたいな、変人とか奇人の類には、た
まりません。変人？ 奇人？ と言えば。まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃありません
か？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか？）、で、これって、もし
かして、きょうの、

あのヒトは今

では、ないかいのう？

「変人・奇人」

全国の元・「変人・奇人コーナー」に出演されたみなさん、今はどうしていらっしゃる
ますか？ もうお亡くなりになった土居まさるさんが、日曜の1時過ぎに司会をしてい
らっしゃった「TVジョッキー日曜大行進」という、若者向けバラエティー番組で、「変

人・奇人コーナー」というのがあったのです。いろいろな変な中学生とか高校生とか20歳前後の一般の人たちが、景品の白いギターを目当てに、あるいは、単なる出たがりであるために、あるいは、自己顕示欲を満たすために、登場しました。

自分にとって、もっとも印象に残っている変人・奇人さんでは、おならを自由自在に出す人、そして、ゴキブリを食べた人です。ゴキブリは、確か、レア(=生)で食べた人も、油で揚げて食べた人もいたように記憶していますが、実際は、どうだったのでしょうか？ 前者が体調の不良を起こして、問題になったとか、ならなかったとかいう噂を、耳にしたような気がします。

また、「オカマちゃん大会」なんてコーナーも、ありましたね。土井まさるさんが、「かわいんだわー」なんて、思わず声を上げるような「美人」さんもいました。今なら、何でもないですけど、当時の世相を考えると、ずいぶん勇気ありましたね。

元・「オカマちゃん大会」出演者ならびに優勝者の方、お元気ですか？ あれから、人生、変わりましたか？ それとも、人生の汚点になりましたか？ 元・「変人・奇人コーナー」出演者の方々もそうですが、あれは、若気=ばかげのいたりだったということで、現在は、みなさんが達者で暮らしていらっしゃればいいのですが。

*

さて、戻ります。

で、きのうは、次のようなことも書きました。横着を決めこんで、またもや、コピペさせてください。

>*ヒトは飽きっぽく、忘れっぽい生き物である

>*ヒトは、政治家選びに失敗し、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚にだまされ、だまされたことすら、あきらめ=飽きてしまう=どうでもよくなる=テキトーになる、だけでなく、忘れてしまい、忘れるを通り越して、気づかなくなる

＞*いったん確立した制度＝体制＝お上に、牛耳られる＝どうにもならなくなる＝罰が当たる＝自業自得＝再起不能状態に陥ってしまう

＞*三権分立と主権在民＝国民主権の、事実上の崩壊が起きていることにすら、無気力＝集中しない＝飽きっぽい状態のままで立ち向かうことなく、あるいは、忘れっぽい＝忘れる＝気づきもしない

＞*全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家の実現をゆるしてしまう可能性が高い

＞*既に、全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家が、部分的に徐々に実現しつつあるかもしれない

コピペした甲斐がありました。これって、どれも大切なことじゃないですか。うかうかしてられませんよー、マジな話。総選挙も、近そうだし。政治家選びの本番じゃないですかー。こりゃ、きばらんと、あかんわ。ほんまでっせー。で、

＞思うんですけど、ヒトってファシズム＝全体主義が好きなんじゃないでしょうか？

という、冒頭フレーズに戻ります。自分が極端に、「みんなでわいわい」的なことが苦手なせいかもしれませんが、どうやら、ヒトという生き物は、集団行動やリーダー崇拜への強い傾向を持っているような気がしてなりません。そんな具合に、自分は他人と協調することが苦手なのです。

ところで、みなさん、他人の前で口にして恥ずかしいことってありますよね。個人的には、どんなことを告白すると、恥ずかしいですか？ 自分の場合には、うつのだん底を経験して以来、捨てるものがなくなってしまい、恥ずかしいと感じることまで、一緒になくしちゃったんですけど、以前は、これでも羞恥心というものを持っていました。たとえば、こんなことを恥ずかしいと密かに思っていました。

*お葬式に出たことがない。(※親が極端に交際の薄い人であるからかもしれませんが、それだけではないようです、自分が故意に避けているのです)

*結婚式に出たことがない。(※上述の※以下と後述の「友達がいらない」とも、関係してはいますが、どういうわけか縁がないんです)

*結婚したことがない。(※上の記述から導けば当然の帰結です、でも結婚式を挙げていないのに夫婦であるケースは珍しいことではありませんね)

*友達がいらない。(※知り合いはいますよ、念のため)

*親友がいらない。(※ちなみに、「親友がいて友達がいらない」ということって、あり得るんじゃないでしょうかね)

*公衆トイレで、他の人がそばにいと、おしっこが出ない。(※昔、TIMEという米国の雑誌で「恐怖症(= Fear)」という特集があり、その中に同じ悩みをかかえる人たちがいると知り、ずいぶん勇気づけられました)

*車の運転ができない。(※免許証はありますが中途難聴者であるために、聞こえにくさの悪化に伴い、現在は運転はできませんというか、正確に言えば差し控えています)

*手持ちのお金が312円しかない。(※本当です。今、確かめました。財布は親が握っています、自分は親の年金にたかっている「寄生虫」です)

*くまのプーさんの貯金箱には5円しか入っていない。(※これも、今確認しました)

*無職、正確に言うとお仕事がないので、この10年くらい所得税を払っていない。(※いちおう、フリーランスの〇〇業なので、青色申告だけは毎年ちゃんとしていますけど)

*キャビアを実際に見たことも食べたこともない。(※自分がグルメでないことに感謝しています)

*自治会に入っていない。(※人間関係が苦手なのと、経済的に逼迫(ひっばく)して町内会費が払えないからです)

*でも、あきらめない。(※詳しくは後述します)

ないない尽くしのトホホで、切りがないので、このへんで止めます。

*

読み返してみて、自分が何もかも捨ててしまっていることを、改めて「実感」しました。「痛感」していないところが、「だめだこりゃ」状態であると「再認識」しました。

うーん。ここまでくると、他人の目とか親の手前とか世間体とか年齢とか、「恥ずかしい」の前提というか土台というか、必要条件か十分条件か絶対条件か、何だか知りませんが、とにかく、そういうややこしいものが、きれいさっぱりなくなっちゃった感じがします。こんな自分って、「生きている」んでしょうか？「存在している」んでしょうか？みなさん、どうお思いになりますか？

「おらっ、何をないない言ってるんだ、さっきから」ああ、幻聴！ よいところに来てくださいました、ゲンチョーさん。自分が存在しているのか、分からなくなりかけていたんですよー。でも、ゲンチョーさんの声が聞こえるということは、存在しているということですね。＜我幻聴が聞こえる、ゆえに我あり＞ですよ。安心しました。「おい、てめー、何をひとりで納得してるんだ、このデタラメ野郎の、2千円詐欺野郎の、食い逃げ野郎の、寄生虫野郎の、ないない野郎めが」

うーむ。

「おい、パリテキ、大丈夫か」大丈夫ですよ。幻聴が聞こえるっていうことを、かみしめていただけです。「気持ち悪いやつだなー」それにしても、罵倒の数が増えましたね。ようござんすね。「ったく、おめーは、しぶといよ。存在しているかどうかなんて、心配する柄じゃねー。おれが、保証してやる」ああ、よかった。ゲンチョーさんのお墨付きをもらったら、元気が出ましたよ。では、悪いですけど、そろそろ。「現金なやつだな、おめーは。まあ、元気が出たみてーだから、消えてやっか。あばよ」

失礼しました。

それですねー、みなさん、さきほど書きつらねましたように、変人と見なされているらしい、ないないづくしの自分ですけど、こんな者が、「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」で生きていけるでしょうか？ 存在し続けていけるのでしょうか？ 答えは、NOに限りなく近いのではないのでしょうか？ 「体制の犬」に豹変する以外、生きる道＝存在し続ける道は、ないのではないか。そんな思いに傾きつつあります。でも、そんなのは、やっぱり嫌ですよ。

「おいしい社会」のままでいてほしい。

と声を大にして訴えたいです。こんな自分でも、そう思うのですから、みなさんも、そう思いになるのではありませんか？ ぞんぶん、「差別化」と「フェティシズム」を楽しみたいですよね。

「おいしい社会」を維持する＝守るためには、どうすればいいか？

これをマジに考えませんか？ 「ヒトは、飽きっぽくて忘れっぽい生き物である」。これが、「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」の実現を許してしまうのです。自分は、本気でそう考えています。そこで、上述のフレーズを提案したいのです。

では、以下にコピペします。

*ヒトは、飽きっぽくて諦めやすく忘れっぽい生き物である。

コピペしたセンテンスに、「諦めやすく」を付け足しました。大きな辞書で調べると、

*「あきらめる=諦める」

というのは、

*「明らめる」

だということです。どういうことかというと、

*「明らむ」

という、ちゃんとした日本語が昔あって、

*「物理的に明るい状態にする」

と、

*「ものごとの状態をはっきりさせる」

という2つの意味があったらしいのです。で、

*「明らめる=あきらめる」とは、もう事情=状態がはっきりしたから、「どうでもいい」=「このままでいい」=「逆らうのはやめた」という意思表示、つまり、白旗（しら

はた) をかかげる=降参する=負けを認める=ギブアップすることである

というのです。それを知って、

*あきらめてはだめだ

と思いました。なぜなら、

*「あきらめ=諦め=明らめ」たら最後、全然明るくない状態、つまり暗黒時代が実現してしまう

からです。だから、

*あきらめない。

*

具体的には、どうすればいいのか？ みんなで考えませんか？ ないない尽くしの自分でさえ、暗黒時代は嫌です。ありあり尽くしだったり、ないあり状態だったり、ありなし状態だったりするヒトなら、「おいしい社会」に大いに未練があるはずですよ。失うものも、ないない尽くしの者より、ずっと多いはずだと思います。

さっき、どうして、わざわざあんなふうには、自分の「ないない」話をしたのかと申しますと、こんな自分でも、「変人」として「自己差別化」をしながら、それなりに人生を楽しんでいて（※いわゆる自己満足ですね）、大好きな言葉を使って「フェティシズム」を満喫している（※上述の虫眼鏡で写真を見ることと同様、ささやかで、すごく安上がりな趣味ですね）からなんです。

ですので、みなさんにも、それぞれのお立場や置かれた状況に応じて、これから先も「おいしい社会」を存分楽しんでいただきたいのです。突然ですが、「おいしい社会」の

敵は、自分自身の中にあるのではないのでしょうか？ きょうの記事の冒頭近くで、

>みなさん、次のような気持ちになることはありませんか？

と書きました。あの10のケースを、もう一度読み直していただきませんか？ 自分も読み直してみますので、一種のチェックリストだと思って、今の自分の気持ちが、次のうちのどれに当てはまるか、チェックしてみませんか？

YES——どちらかというとYES——どちらともいえない——どちらかというとNO——NO

さあ、試してみましよう。

どうでしたか？ YESが多い方は、「おいしい社会」をあきらめる覚悟ができていらっしゃるでしょうか？ NOのほうが多い方は、自分自身が偏屈だとか変人だとか、まわりから思われていると感じていらっしゃるのではないのでしょうか？ 実際問題としては、YESのほうが多くても、NOのほうが多くても、どちらでも構わない。そう思います。どうしてかと申しますと、それより、もっと大切なことがあるからです。そのことについては、まだ、考えが整理できていません。ですので、できれば、あす、書いてみたいと思っています。

長い文をここまで、辛抱してお読みくださった方に、感謝いたします。また、あす、遊びに来てくださいね。待っています。最後に1つお願いがあります。さきほど紹介した「冬のすずめ」2009-01-24、ぜひ、読んでください。個人的には、すごく愛着を感じている記事なんですよー。

09.02.25 最後のとりでを守る

◆最後のとりでを守る

2009-02-25 08:42:19 | Weblog

今週は、どういうわけか、「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」について考えるはめになってしまいました。はっきり言って、「心ならずも＝不本意ながら」なのです。じゃあ、やめればいいのに、と言われそうですが、やめられなくなっちゃたんです。困りました。考えるのをやめたい、でも、やっぱり考えなくっちゃ。板ばさみ＝ディレンマ＝アンビバレンスというやつですか？ で、きのうの記事で書きましたが、

あきらめない→ あきらめてはだめだ

なのです。

うん。そうなのです。「差別化」と「フェティシズム」を楽しめる「おいしい社会」を意地でも維持するためには、決してあきらめてはならないのです。きな臭い話、生臭い話はなるべく避ける、というのが、このブログのスタンスなのですが、きょうは例外にしちゃいます。

みなさんは、ファシズムとか全体主義という言葉を見聞きして、どのような「イメージ＝映像＝記憶＝言葉」を思い浮かべますか？ 個人的なイメージを以下に、順不同で断片的に書きつらねてみます。

*

(A) マスゲーム：「トリトメのないそっくりな記号」と化したおびただしい数のヒトたちが、一糸乱れぬ動きで、遠くから見ると美しい模様を形作ったり、ダンスをします。美しいけど、怖い。誰のためにやっているのでしょうか？ 何のためにやっているのでしょうか？ 失敗したら、どうなるのでしょうか？ あのヒトたちは、思考をしているのでしょうか？

もし、思考したら、失敗するのではないのでしょうか？ 少なくとも、マスゲームの最中だけでも、判断停止＝エポケー状態じゃなきゃ、あんな機械みみたいな動きはできません。

そう、お思いになりませんか？

*

(B) かつてのナチスの党大会：テレビでその映像を見たことがありますが、正直言って、めちゃくちゃ「カッコいい」のです。しかも、美しいのです。感動しちゃいました。でも、あれって「トリトメのないそっくりな記号」と化したヒトたちが、時間と身柄を拘束された結果なのですね。「差別化」と「フェティシズム」を享受しているのは、ひな壇の上で偉そうにしている、ごく一部のヒトたちだけなのですね。あの偉そうにしている一部のヒトたちの享受している「差別化」と「フェティシズム」こそ、「退廃」と呼ぶべきではないでしょうか？

いずれにせよ、ああいう大会を組織し、「壮大で華麗なる記号＝まぼろし」を演出したヒトたちは、プロパガンダや広い意味での「演劇術＝ドラマツルギー」の「天才」です。完璧とっていいほどの「記号＝まぼろし」だと思いませんか？たとえばスーパーに並ぶソーセージや、たとえば電気店にならぶ冷蔵庫といった「トリトメのない記号＝まぼろし」を、マーケティングしている広告代理店の方々など、足元にも及びません。そうお思いになりませんか？

*

(C) 「オリンピア」＝「民族の祭典」＋「美の祭典」：1938年に開催されたベルリンオリンピックの記録映画の名前です。監督したのは、レニ・リーフェンシュタールという女性でした。これがまた、おしっこを漏らしそうになるほど（※失礼！でも、ほんとうにそんな感じなんですよー）「カッコいい」のです。

この映画には、全体主義の匂いがする映像もありますが、それ以外の要素があります。身体の動きを撮らせたら、このヒト以外に、カッコよく、しかも美しいイメージを作りだせる監督はいないのではないかと。そんなふうになってしまうほど、すごいのです。非常にアンビバレントな感情を呼び起こす作品です。こういうのは、感情＝「まあ、きれい！」だけではなく、理性＝思考力＝判断力＝「(眉をひそめながら)物事の表面に惑わされてはいけません、というのは.....」や、情報＝データ＝知＝「(眉をひそめながら)これはですねー、実際には.....」で、自分を常に戒めながら鑑賞すべき作品なのではないでしょうか？

*

まだまだ続きますが、とりあえず、いったん、ここで中断します。以上の（A）（B）（C）の3例は、いわゆる、「祭典＝お祭り＝儀式＝儀礼＝広義での演劇」ですよね。自分が労働や作業に参加するのではなく、見る側、それもフィルムやテレビの映像として間接的に、それこそ映画館でポップコーンをほお張りながら、あるいは家でポテチをばりばり食べながら見ているからこそ、かっこいいし、美しいのではないのでしょうか？

心と頭を空にして汗をかきながら体を動かしているヒトたちを、特別席にふんぞり返って眺める。あるいは、池の鯉を呼ぶように時折パチパチと拍手をしながら、上から見下ろす。そうした偉そうなヒトたちと同じような気持ちになってしまう。だから、美しいし、かっこよく見える。そんな気がしませんか？

または、自分自身が、心と頭を空にして汗をかきながら体を動かしているヒトたちと同じような気になってしまう。つまり、こき使われているヒトたちの映像を見て、勝手にマゾヒスティックな気持ちを抱き、そのイメージに同化してしまう。それだからこそ、うっとりとして見とれてしまう。麻薬みたいに、理性を麻痺させ、物事を疑う視点を失わせてしまう。

*

上ではナチスドイツの例が2つありましたが、マスゲームなんか、今でも、盛んにやっている国がありますよね。どこかは申しません。みなさん、ご存知のはずです。

よく考えてみてください。この国でも、やっていませんか？ 明らかなマスゲームもあり、マスゲームもどきもありますね。マスゲームを行っている組織・団体・集団については、あえて名指しはいたしません。みなさん、ご存知のはずです。

マスゲームもどきで、自分がイメージしているのは、学校の体育祭や運動会、応援団、チアガール、保育園・幼稚園のお遊戯、「起立！ 礼！ 着席！」、斉唱、三唱、ラジオ体操、スポーツ観戦をするヒトたちが観客席で協力し合ってバアッと波打つような仕草をする

こと、公会堂などで音楽のアーティストたちと一緒に観客がシンクロナイズされた仕草をしたり、ペンライトみたいなものを左右にリズムカルに振ること、そして一斉に行う拍手喝采や、スタンディングオベーションです。

え〜っ、それってちょっと違うんじゃない？

と疑問を抱かれてたり、

けしからんやつだ

などと、お怒りになっている方々がいらっしゃるだろう、ということは承知しております。

でも、グループ行動が極端に苦手な自分には、根っこは同じに思えてならないのです。たった1人でも、嫌々ながらも、あるいは疑問に感じながらも、みんながやっているから仕方なくやっているヒトがいれば、それはファシズムだと自分は定義しています。不快に思われた方、ごめんなさい。ばかたれの妄想や妄言だということで、勘弁してください。

*

きのうの記事でも書きましたように、自分は、「他人と摩擦や対立は、起こしたくない」、「腕力を使った喧嘩でも、唇と舌と声帯と脳味噌を使った口喧嘩でも、主に脳味噌と論理力と気の強さと厚かましさをういた議論でも、生まれてから現在に至るまで1度も勝った経験」のない、「へこみやすく、小心者で、うじうじしている性格」の「ないない尽くし」の「変人＝偏屈者＝へそ曲がり」なのです。

どうか、お手柔らかに願います。ただ、思っていることを正直に書いただけなのです。時には噛みつくと言われているのは、ネズミでしたっけ？ 羊でしたっけ？ ブログとはいえ、非難されることを覚悟で、ぶるぶる震えながら必死でこんなことを書いているのです。大目に見ていただければ幸いです。

*

以前にも書きましたが、この国でブログを書いている、良かったとつくづく思います。たとえば、アメリカ合州国（※本多勝一氏が主張なさっているように「合衆国」はやはり変です）には、宗教的意味でのファンダメンタリズムが、どうしようもないほど根深くはびこっている地域や、その影響下にあるメディアがあります。

あれって、多分に全体主義的な行動を取っています。あの国における政治・経済・社会的影響力も絶大です。ファンダメンタリストは進化論を強く否定していますから、当ブログでよくやっている「狂える尻尾のないおサルさん」のお話なんて、タブーとされる恐れがあります。人工妊娠中絶への反対運動にも、莫大な資金援助をしているそうです。中には、ピルすら認めない人たちも、たくさんいます。ピル、たとえば。まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今（※きよとんと、なさっている方に、申し上げます、これって、「死語復活キャンペーン」と並ぶ、当ブログのワンパターンギャグなんです、どうぞ、よろしく）

では、ないかいのう？

「中ピ連」

元・「中ピ連」のメンバーだったみなさん、今はどうしていらっしゃいますか？ ググって、知ったのですが、正確には「中絶法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合」の略称だったのですね。榎美沙子（えのきみさこ）さんが、代表を務めていらして、ピンク色のヘルメットがトレードマークでした。ウーマンリブという言葉が盛んに、メディアに登場していた時期の寵児というか、犠牲者というか、最終的には世の中の嫉妬深いオトコたちからさんざんいじめられて、消えてしまったという印象が強く残っています。あまりにも、きな臭くて生臭い話なので、この辺でやめておきます。ご興味のある方は、ググるなり、ヤフるなりしていただきませんか？

榎美沙子さんで、今、思い出しましたが、「榎」つながりで、榎本美恵子さんの「ハチ

のひと刺し」なんて言葉も、流行語になった時期がありましたよね。美恵子さんは、ロッキード事件で有罪となった榎本敏夫さんの当時の前夫人で、法廷で敏男さんに不利な証言をした方です。あの方も、世の中の嫉妬深いオトコたちからいろいろ悪態をつかれた挙句、お消えになってしまいましたね。ああ、オトコの嫉妬は恐ろしい。そう思いませんか？ 今でも、恐ろしいですが、昔は、もっと恐ろしかったのです。知っとくとよろしいかと存じます。Shit! 大変失礼いたしました。

*

女性の方々、頑張ってください。時代は、あなたたちに有利な方法に、着実に逆戻りしつつあります。「逆戻り」と申しましたのは、歴史に詳しくない自分ですが、この国の歴史を見ていると、明治以前のこの国では、目立たない形ではありますが、現在よりも、女性の「実質的な力」が強かったような気がするの、自分の認識不足でしょうか？「実質的な力」を「」でくくったのは、選挙権・被選挙権・男女機会均等法・男女共同参画社会基本法などの、官僚によるペーパーワークとは別の次元の話だからです。

そうした法制化は、それなりに評価したうえで、家庭、夫婦・恋人同士といった次元での、男女の力関係が、質的に変化しているような気がするのです。明治維新になり、この国が資本主義や市場経済を導入したあたりから、男女関係に変質が生じたのではないかと。それは、ヒトの「記号化」と関係があるのではないかと。あるいは母系社会やマトリックスなんかとも、関係がありはしないかと？

あくまでも個人的な仮説＝出まかせ＝勘＝妄想ですが、現在、他の複数の新興国でも、同様の現象＝変質が起きつつあるような気がしてなりません。いつか、マジに考えてみたいです。女性とは縁のない、独り者の妄想ですから、全然説得力もないし、当てにならないですけど、そう思っております。

いずれにせよ、自分は、女性に大いに期待しています。男性の方々、不快にお思いになられましたら、ごめんなさい。女性と一緒に、仲よく頑張りましょうよ。共通の敵は、「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」なのです。仲間割れしている場合じゃありません。生意気言って、ごめんなさい。悪気は、全然ないのです。

*

ファシズムや全体主義に対する、個人的なイメージに話を戻します。

*

■スポーツ：スポーツ、特に勝敗のはっきりしているものは、ヒト同士の「戦い＝闘い＝喧嘩＝戦争」の「代理＝緩衝＝ガス抜き」だという説があります。言えてませんか？ その説に沿って短絡すると、オリンピックは4年に1度の世界大戦だという極論に到達しかねません。ありゃっ、これは、言いすぎですね。失言どころか、暴言＝妄言です。大臣なら、辞職・更迭ものですね。ごめんなさい。反省します。ただし、心配なのは、代理のせいで、ご本尊の戦争が起こりかねない、あるいは、戦争の種を芽生えさせかねない、という点です。過去の例を見ると、なきにしも、あらずではありませんか？ 杞憂ならいいのですけど。

*

■群れる：群れるとは、仲間同士でつるむ・たむろする・結託する・悪事をたくらむ、という悪い意味の表現に言い換えることもできます。その一方で、仲間同士で何かの目標に向かって努力する・団結する・結束する・連帯する、という良い意味の表現に言い換えることもできます。両者は、表裏一体の関係にあるとも言えそうです。つまり、敵か味方かという視点を持ち込むと、良し悪しのどちらの意味にもなり得るし、どちらのようにも見えるということです。

英語に party という、「群れ」を意味する便利な単語がありますね。どんちゃん騒ぎのパーティー、パー券のパーティー、登山のパーティーと言えば、何となくイメージが分かりますよね。辞書によれば、パーティー、集会、宴会、飲み会、一行、連中、一団、仲間、味方、～側、相手、共犯者、政党、派閥、当事者、(利害)関係者、交戦、(軍隊の)部隊……。中心となるイメージ(＝コアイメージ)は、やはり「群れ」で落ち着きそうです。

ヒトは、1人ではファシズムも全体主義も実行できません。言い方を変えると、ヒトは、ばらばらになればファシズムも全体主義も実行できません。これって、よく考えてみると、意味深ですよー。みなさん、ばらばらになりましょう、なんて短絡できそうで

す。そんなことを叫べば、アナーキスト、アナーキズム、アナーキなんていうレッテル＝ラベルを貼られちゃいます。レッテル貼りは怖いですよ。あなどれません。あな恐ろし。ラベルを貼られたために消えていった人が、それこそ星の数のほどいました。これから、いるでしょう。今も、そうなりつつある人たちがいるに違いありません。

*

■敵意：良い言い方をすれば、「競争心＝ライバル意識＝わたしも頑張るからあなたも頑張る＝正々堂々と戦いましょう」です。でも、実際問題として、ヒトって、それほど割り切れた感情で、相手と戦うことができるのでしょうか？ 疑問ですよ。 「正々堂々」「スポーツマンシップ」「あなたとわたしは良きライバルよね」なんて、口にしながら、内心では「こんちくしょう」「こてんぱんに負かしてやる」「少しくらいのズルならしてもかまわん」なんて、思っていたりするのではないのでしょうか？

ヒトには他の生き物の生存競争を他人事みたいに、あるいは評論家みたいに「弱肉強食」だの「残虐・狂暴・獰猛」とか言って論じる習性がありますが、ちょっと「そりゃないぜ、セニョール (or セニョリータ)」って感じじゃないでしょうか？ ちなみに、「そりゃないぜ、セニョール (or セニョリータ)」って、ケーシー高峰さんのギャグでしたよね、確か？ この辺で「死語復活キャンペーン」なんかして、馬鹿やりたくてうずうずしているのですが、字面とレイアウトが悪くなるので、やめて我慢しておきます。グラッチェ。

ところで、どことは名指しませんが、全体主義体制を敷いていたり、管理・監視社会を実現している近隣諸国を、誰とは名指しませんが仮想敵国にして扇動しているヒトたちが、どことは名指しませんが、ある国にもいますね。で、そういうヒトたちの言動を見聞きしていて、感じるがあります。そのヒトたちが、そのヒトたちの敵の支配者たちと、そっくりだということです。激似＝酷似＝「あんた、誰のこと、言ってんの？」という感じです。

思うんですけど、きっと、あれは「近親憎悪」っていうやつです。自分がやりたいことを敵が実現しているから、焼きもちを焼いているのです。要するに、自分が絶対的な権力を持った大将になって、自分と家族と手下以外のヒトたち全員を「トリトメのない記号」にして、半ば只で＝無償で＝無報酬で「滅私奉公」させたいのでは、ないのでしょうか？

あんなヒトたちにひよこみたいにひよこひよこことついていけば、敵国と戦え、なんて命令されて、鉄砲を持たされませー。で、あのヒトたちは、見てるだけー。みなさんの想像力に期待して、お尋ねします。あなたの知っている範囲内で、今書いたようなヒトたちがいませんか？ ひょっとして、そのヒトたちに、あなたの清き一票を投じたことありませんか？ そうして選ばれた首長が、ぶら下がりの記者などから詰問されたさいに、「知らねーよ」とか「君、勉強不足だ、そんな質問して」なんて偉そうに振舞っていませんか？

*

■選挙（その1）：政治家選びです。これが、きょう一番書きたかったテーマです。上の「敵意」の項の最後のほうで書いていたことの、続きになってしまいますが、よろしいでしょうか？ あなたが、選んだヒトたち、選挙中のしおらしさなど、まったく消えてしまって、いばりくさっていませんか？ 燃費のいいエコな軽自動車なんかじゃなくて、黒塗りの公用車に乗っていたり、場合によっては、その黒い車は、前後をパトカーなんかで挟まれて、すいすいとほかの車を追越していたりしませんか？ あれって、税金が化けたものなんですよ。車も、パトカーも、SPも、拳銃も、その他、ぞろぞろ付きまわっている族＝手下＝部下たちの給料も。

*

■選挙（その2）：総選挙がいつになるか、微妙な情勢になっていますね。ですから、最近、あった選挙の話をして、心の準備をしておきませんか？ ちょっと視点をずらしましょう。「ならずもの国家を成敗してやる」と息巻いているアメリカ合州国も、自分から見るとかなり全体主義的な国です。Wブッシュ（※父子の特に子のほうです）政権が誕生した時には、もう、あきれかえってしまい、物が言えない状態＝アンビリバボー状態になり、それまで抱いていた、あの国に対するポジティブな感情が限りなくゼロに近づきました。

現在の自分にとって、身分不相応な習慣に米誌TIMEの定期購読があります。これは中学3年の時から続いていて、飽きっぽい自分でもアンビリバボーなくらい長い習慣なのです。ところが、第1次Wブッシュ政権が発足して以来、読む気力がガクンと落ちこんでしまい、9.11事件以降はさらに、落ちこみました。もっとも、自分は英語力がないうですから、もともと斜め読みしかしていないんですけど……。とにかく、あの雑誌で

あの国のニュース記事を読んでいると、イヤな気分がするようになったのです。うつが悪化しそうになるほどです。

現在も、まだその傾向が続いています。ちなみに、あの国の大統領選って、実質的にはかなり長期戦ですよ。支持する候補に熱狂しているヒトたちの様子を見てみると、あの国ってもしかするとすごく全体主義的かも？なんて、思えてくるのは、自分だけでしょうか？ オバマさん、マケインさん、関係なくです。あの国が多種多様な背景（※人種・民族・出身国や地域・信条・宗教など）を持つヒトたちから成り立っている。だから、「ものすごく強力な接着剤＝カリスマ性と優れた指導力を持つリーダー」が必要なことは、百も承知しております。

ただ、1つ強調しておきたいのは、日本にそうしたリーダーは必要がないという点です。国情が全然違います。オバマさんにケチをつけているのではありません。この国には、あのようなリーダーやセレモニーは、ふさわしくない、そぐわない、たとえば、お分かりいただけるでしょうか？

というわけで、オバマさんの就任式を見ても、その時のスピーチを聞いても、心が全然ときめかないのです。CHANGEとか Yes We Can とかに、単純に乗ることができないのです。むしろ、恐怖心を覚えて、鳥肌が立つのです。ああいうリーダーやセレモニーは、強烈すぎるのです。そう感じるのは自分が変人で偏屈だからで片付けることもできますけど、今、述べた恐怖心に近い気持ちを抱かれた方が、万一いらっしやれば、心強いです。きわめて個人的な意見を述べました。失礼いたしました。

*

■選挙（その3）：きのうの記事の最後のほうで、次のように書きました。

>（中略）実際問題として、YESのほうが多くても、NOのほうが多くても、どちらでもかまわない。そう思います。どうしてかという、それより、もっと大切なことがあるからです。そのことについては、まだ、考えが整理できていません。ですので、できれば、あす、書いてみたいと思っています。

というわけなので、「あす」である、きょうに、「それより、もっと大切なこと」＝「そ

のこと」について書いてみます。結論から、申します。「最後のとりで」だけは守ろう＝死守しよう、ということです。

*

「最後のとりで」には、2重の意味を込めました。

(A) 投票所の仕切りの中では自分自身の信念を通そう、

(B) 悪夢のような社会の中でも自分自身の信念を通そう、

の2つの意味というか、祈りというか、覚悟を込めました。

(A) の場合は、みなさんが属する、あるいは信奉する会社・組合・集団・団体・組織におけるレベルの話です。誰もが、しがらみ＝人間関係＝利害関係＝守らなければならない掟を、かかえて生きています。〇〇さんの名前を投票用紙に書くように上から言われたけど、よく考えると、それは自分の頭で考えた決断ではないし、何か違うような気がする。で、もし、そう思うのでしたら、自分の頭と体で考えてみませんか？ 体と書きましたが、何となくあのヒトはうさんくさいとか、自分の属している組織のやっていることに何となく最近疑問を覚える、という体感のことです。それを信じてみませんか？ 体って、お馬鹿さんじゃありませんよ。

(B) は、この国が全体主義的体制にかなり近づいてきたとか、もうそうなっているという悪夢が実現している場合です。その場合に、最後のとりでとなるのは、自分の頭の中だけです。不本意に無報酬に近い形で、あるいは強制的に、1ケ（＝その他大勢の1ケ＝one of them）の「トリトメのない記号」として、権力＝支配体制＝特権階級によって消費され、いつかは廃棄・処分される身となった場合に、自分の頭の中だけは、売り渡さない覚悟をしておきませんか？ 一人ひとりがそうした覚悟をすることで、全体主義の実現に歯止めがかかるかもしれないのです。

*

何だか、すごく被害妄想的なことを書いてしまった。そんな気がします。でも、よく考えた結果なのです。正直申しまして、きょうは書くのがしんどかったです。お読みになった方も、ひょっとして、しんどかったのではないかと心配しております。そうでしたら、ごめんなさい。

とにかく、マジに本気で書きました。できれば、あすは、この国が現実にかなり深刻な事態になりつつあるのではないかと、という点について、ぜひ書いてみたいです。この「おいしい社会」を守りたいからです。これからも、みんなと一緒に「差別化」や「フェティシズム」を楽しみたいからです。

また、あす、このサイトに訪ねてきてくださいね。待っています。

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

◆やっぱり CHANGE なのだ

2009-02-26 08:39:11 | Weblog

どうして、こんなきな臭くて生臭いテーマについて考えることになってしまったのでしょうか？ こうした分野が大の苦手なのです。で、数日前からの記憶をたどっていて、はっと気づきました。あれだ！ って感じです。日本国憲法なのです。そもそもは、青色申告の準備をしていたのです。仕事がないですから、開業届けはしてあるものの、もちろん収入はゼロです。でも、申告書は提出する義務があります。

で、ふと、そろそろ「社会復帰＝リハビリをしなくちゃなあ」＝「一種の売文業を再開しなくちゃなあ」と思い、小型の六法全書を開いたのです。なぜ、六法全書なのかというと、「一種の売文業」とほんの少しだけ、関係あるからで、そのあたりのテクニカル

タームに慣れておこう、と何となく思ったわけです。で、読もうとしていた部分とは、全然関係のない日本国憲法に目を通しちゃったのです。その時です。

わあっ！

と、自分でもびっくりするほど、大げさなりアクションをしてしまいました。なにしろ、

大変だ！ ぜんぜん違ったことになっている。

これって、どこの国の憲法なの？

ひょっとして、この国？ それにしても、ぜんぜん違うじゃんかー。

もしかして、この国、経済だけではなく、政治がとんでもない方向にむかっているのでは、ないかいのう？

と思ったのは、つい3、4日前のことなのです。

で、このところ「トリトメのない記号」「差別化」「フェティシズム」について、このブログで書きつづりながら、つつい話が、「きな臭くて生臭いテーマ」へと近づいていったのです。今、こうして経緯を書き、頭の中の整理ができて、いくぶん気が楽になりました。本来は、このブログでは書く予定のなかった、「きな臭くて生臭いテーマ」を取り上げている謎が解けたからです。

*

やっぱり、ヒトって、飽きっぽくて、あきらめやすく、忘れっぽい生き物なのだなあ、と痛感しました。で、上述の「この国、経済だけではなく、政治がとんでもない方向にむかっているのでは」を具体的に説明しますと、次のようになります。

＞*ヒトは、飽きっぽくて諦めやすく忘れっぽい生き物である

＞*ヒトは、政治家選びに失敗し、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚にだまされ、だまされたことすら、あきらめ=飽きてしまう=どうでもよくなる=テキトーになる、だけでなく、忘れてしまい、忘れるを乗り越えて、気づかなくなる

＞*いったん確立した制度=体制=お上に、牛耳られる=どうにもならなくなる=罰が当たる=自業自得=再起不能状態に陥ってしまう

＞*三権分立と主権在民=国民主権の、事実上の崩壊が起きていることにすら、無気力=集中しない=飽きっぽい状態のままで立ち向かうことなく、あるいは、忘れっぽい=忘れる=気づきもしない

＞*全体主義体制国家=ファシズム体制国家=管理・監視社会、および管理・監視国家の実現をゆるしてしまう可能性が高い

＞*既に、全体主義体制国家=ファシズム体制国家=管理・監視社会、および管理・監視国家が、部分的に徐々に実現しつつあるかもしれない

以上は、月曜日（2009-02-23）の記事からの引用です。火曜日（2009-02-24）の記事でも引用し、きょうもまたコピペするという、きわめて横着で無精なことをやっているのです。ただし、1行目だけは、「*ヒトは飽きっぽく、忘れっぽい生き物である」という月曜のフレーズを、考えるところがあって、火曜に少し長くしたものです。横着を正当化することになりますが、今、読み返してみても、やっぱり、大切なことばかりです。

「飽きっぽくて諦めやすく忘れっぽい」自分なんかは、上記のフレーズたちを何度コピペしても、しすぎることはないくらい大事なことだと考えています。そんなわけで、ちょっと横着しすぎているなど反省する一方で、またもやコピペをする自分を許してしまうのです。当ブログは、友達のいない「モノブログ」といって、ほかの方からの

「輸血（※引用の比喩です）」は苦手ですが、「自己輸血」だけにはぜんぜん抵抗感がない
というか、どんどんやっているというか、ある意味では非常に節操のないブログなので
す。お許してください。

*

>ところで、みなさん、「お上」って何でしょう？ ふつう、三権分立が建前となっている
国においては、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚を指します。また、ふつ
う、主権在民＝国民主権を建前とする国では、司法・行政・立法をつかさどる政治家や
官僚は、国民の代理人＝代行者＝代理店＝エージェント＝公僕＝お使い＝使用人である
とされています。でも、「建前とする」という部分が示すように、「事実上は」＝「現実
には」、そうなっていません。なぜでしょう？ いろいろな原因が考えられます。有力な説
の1つは――

以上は、さきほど引用した月曜日（2009-02-23）の記事の一部の前にあった個所なので
す。少しだけ削った部分がありますが、よく見ると、いちおう、話はずなながつながっているは
ずです。で、横着はこれくらいにとどめて、これから先は大げさですが、いわゆる「書
き下ろし」にします。

事態の重大さを、ご理解いただけたでしょうか？ とにかく、経済はさておき、政治的
に見て、この国はかなりヤバい状態に陥っているのです。というわけで、自分を含め、み
んなで出来そうな具体策を考えてみませんか？ で、思ったのですが、

<「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」
に対する「抑止力＝良くし力」をつけよう運動>、

とネーミングしませんか？ 語呂が悪い？ 長すぎる？ くだらない？ 付き合いきれない？
勝手にやれ？ ですか。わかりました。どうも、失礼しました。では、やってみますね。

*

■選挙に行こう（その1）：選挙権の行使は、「いろは」の「い」ですよね。こればかりは、実際に行使しないことには、何にも始まらない。一昨日は「ないないづくし」の告白をしてしまいました。実は、1つ白状しなかったことが、あるのです。もはや捨てるものがないほど、何もかも捨ててしまった状態のこの自分でも、恥ずかしいことがあるのです。でも、このさいですから、清水の舞台から、バンジージャンプするような気持ちで、白状いたします。

30歳の後半まで、選挙権を行使したことがなかったのです。それなのに、今週、こんな偉そうなことを書いているのですから、自分自身あきれて果てております。この数年は、正直申しまして2回に1回くらいの頻度で投票しています。いずれにせよ、お恥ずかしい限りです。そのくせ、いろいろ生意気なことを書いて、ごめんなさい。これからは、選挙があるごとに必ず選挙権を行使します。

で、思い出したのですが、20代のころでしょうか、自分のこうした状況を知っている、ある知り合いがいて、何度かお説教されたり、脅されたりしました。脅されたというのは、選挙をしていないと、警察にマークされるというということです。警察といっても、もちろん、ハム（※この「ハム」がお分かりにならない方は、社会派ミステリーのお好きな方にお尋ねください、おまわりさんに聞いてはだめですよ、念のため）です。

幼いころから変人＝偏屈道一直線を貫いてきた身ですので、何とも感じませんでした。今、こんなブログ記事を書いているのですから、ハム自体は、怖いとは思いません。親が亡くなれば、天涯孤独。あげくは野垂れ死にで、無縁仏。捨てるものが、ほとんどないからです。こんな自分ですけど、選挙権だけは行使するつもりです、死ぬまで。

*

■選挙に行こう（その2）：選挙については、きのうの記事で、他人の指示＝命令に従うのではなく、「投票所の仕切りの中では自分自身の信念を通そう」と書きました。「二重人格作戦」なんていうネーミングも、分かりやすくいいですね。この国には、どことは名指しませんが、選挙活動にかなり熱心で、さまざまなノウハウに精通したエキスパート集団がいますね。各投票所での、得票数まできちんとチェックして「裏切り者」＝「ちゃんと自分で考えて自分の良心を基準にして投票する人」たちが出ないようにしているそうです。怖いですね。

ですので、そういう「良心的裏切り者」さんたちを守るためにも、投票率を高めましょ

うよ。いわゆる「組織票」に対して「抑止力＝良くし力」をつけるためには、みんなで投票率を高める以外に方法はありません。きのう書いた、「最後のとりで」を守るためには、選挙権を行使する以外に、穏健な「下克上＝革命＝世直し＝改革」への道はありません。マジで。

*

■身近なところからオール与党体制をなくしましょう：地方自治体、つまり、都道府県と市町村の首長選挙で、〇〇党以外の全政党や会派などが同一候補を推薦したり支持することは、ファシズム以外の何ものでもありません。なぜなら、これって、行政と立法が結婚、いや、野合することです。「チェック・アンド・バランス＝checks and balances＝違った機能を持つ部門がそれぞれの行き過ぎをチェックして均衡を保つこと」もあったもんじゃ、ありません。なれ合い主義が横行＝常態化します。つまり、権力が腐ります。

言い方を変えると、すごく身近なところで、全体主義体制が確立＝実現＝機能しつつ、あるいは、してしまっているのですよ。だから、裏金づくりなんて役人が平気でやるし、それを首長や議員が見て見ぬ振りをするのです。見て見ぬ振りをしておくことで、あとで見返りがあるからです。脅しの切り札にも使えますし。とにかく、オール与党体制を怖いと思わなくなったら、なし崩しに、国政レベルにまで「みんな仲良し状態」＝「みんなで一緒に悪さをしよう状態」＝「みんなでやれば怖いものなし状態」＝「民主主義の形骸化」＝「ファシズムへの助走」が連鎖していきます。マジこわ。

*

この辺で、ひと休みしませんか？ きょうは、バレバレにヤラセをします。いきなり、いつもの恒例ギャグをやっちゃっていいですか？ いきなりも、なんですから、ちょっと、助走 or 女装 or オネエ言葉使用しますよ。ねえ、みなさん、ずっと前の話だけど、全国民を相手にして、喧嘩を売ったおじさんがいたのよー、覚えているかしら。あたしなんか、小さいころだったから、「おだまり、じょうだんじゃないわ」なんて、反撃できなかったんだけど、聞いたことないかしら？ ヒントは「一億」なんだけど、お分かりになって？ 一億、と言え。あー！ まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃない？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセじゃないかしら？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今（※「死語復活キャンペーン」でもいけそうだけど、とりあえず、こっちでやっちゃう）

では、ないかしら？

「一億総白○化」

元・「一億総○痴化」と罵倒されたみなさん、今はどうしていらっしゃるでしょうか？ 自分もその一人なのですが、現在、うつで難聴で無職です。ちなみに、○を使用したのは、差別語ととられかねない言葉が用いられているためです。とはいえ、上での2ケの○の使い方や、ドストエフスキーとか坂口安吾の小説では、そのものずばりのタイトルで堂々と売られています。当ブログは、開設者自身が差別の対象になりやすい状況にあるため、上のようなバレバレの措置を取りました。

当の昔に鬼籍に入られた命名者の大宅壮一（おおやそういち）さん、せめて、「一億総お馬鹿さん化」とか、「一億総あほう化」（※生粋の江戸っ子のみなさん、は行をさ行で発音しないでくださいね、「あ○う」なんて、話がややこしくなりますので）とか、ののしってくだされば、こんな面倒なことをしなくて済んだんですけど……。で、ののしられた、みなさん、お元気ですか？ 大宅さんと同様に鬼籍に入られて、大宅さんを逆に罵倒している方も大勢いらっしゃるのではないのでしょうか？ なにしろ、100,000,000対1ですよ。それとも、大宅さん、あなたご自身も、100,000,000に含めての発言だったのですか？

大宅さん、あれって、テレビの登場によって、この国の人たちの想像力や思考力が低下するという警鐘のおつもりだったとのことですけど、見事、大外れ＝大チョンボでしたね。テレビなど、関係なく、ヒトは飽きっぽくて、諦めやすく、忘れっぽい、生き物だったんですよ。昔から現在も、そしてこれから先も、ずっと、です。万一再度脳内でズレが突然生じない限り、つまり、ヒトとして存在している限り、そうあり続けるみたいですよ。ヒトは、しぶといですから、テレビやインターネットやケータイくらいのレベルの代物（しろもの）では、どうてい修復＝変化＝進化＝退化＝「総白○化」は不可能みたいですよ。もとがズレちゃってるんですもん。

*

話が、ズレましたので、もとに戻しますね。

■「政経分離」でいきましょう：「政教分離」の入力ミスではありません、念のため。現在のグローバルな規模での大不況は、とてもこの国の政治家の手には負えないというか、この国に限らず1国レベルの問題では全然なく、極論を言うと、経済という見えない巨大で抽象的なシステムの不具合であり、その修復＝回復＝好転＝「何でもいいけど、とにかく変化」が起こるのをひたすら待つしかない、みたいです。

各国の政治家や官僚のやっていることは、すべて「ポーズ」＝「いわゆるパフォーマンス」＝「努力してまっせー」＝「かわいそうなくらい頑張ってまっせー」である。という、きわめてトホホな状態にあると、要約できそうな論調を、内外の少なからぬ経済の専門家たちが述べています。要約したのは、経済オンチの自分ですので、全然説得力も信憑性もないのですが、そんな感じらしいって、みなさん、お聞きになって、あるいは、お読みになっていませんか？

「ちゃん！＝パパ！」なんて言いながら、大五郎のように、ひたすら待つしかないとするなら、政治屋さんたちは、経済政策で釣ろうとする作戦はパスしたほうが正解かも？政党のマニフェストかマニキュアかブタペストか知りませんが、いずれにせよ、一般市民としては、政党の宣伝文句にある経済関連の個所はあんまり信じないほうがいいみたいです。書いている人たちも、よく分かっていないらしいし、ひょっとすると、経済の専門家ではなく、レトリックと口当たりのいい言葉による作文の専門家＝広告代理店さんあたりが書いたキャッチコピーであっても、全然おかしくない文面ですもの。

だから、「政経」分離でいきましょう。つまり、経済面の約束（＝不渡り手形）は全部パスして、政治面での公約（こうやく）＝口約（こうやく）（＝口だけ）＝膏葉（こうやく）（＝何にでも効くという香具師（やし）さんたち提供のべとべとしたお薬）だけを、眉につばをつけて、鼻くそをほじりながら読みましょう。ひょっとして、これまた、大手の広告代理店に勤務する作文屋さんが、鼻くそをほじりながら書いたものかもしれませんから。

でも、あまり期待できそうもありませんね。今の顔触れでは。とはいっても、棄権（きけん）はだめですよ。危険（きけん）です。権利を棄てることで、恐ろしい事態を招きかねません。選挙権は行使（こうし）しましょうね。政治屋や官僚の公私（こうし）混同に対抗するには、それしか道はありません。権利を放棄（ほうき）しておいて全体主義の

実現を促し、人民が武装蜂起（ほうき）しても手遅れです。勝ち目はありません。

だめもとでも、とにかく投票所に行きましょうよ。あとは、あなたの両親（りょうしん）（※両親のそろわない方には、お詫び申し上げます。ごめんなさい）と良心（りょうしん）に恥じない選択（せんたく）をしてください。命や心の洗濯（せんたく）にもなりますよ。ご託宣（たくせん）を並べる人なんか信じちゃだめですよ。嘘っぱちは、もうたくさん。そんな人たちには、命や望みは託（たく）せん。

ちなみに、「政教分離」については、既に上述しましたよね。お気づきにならなかったですか？ えっつ？ あっ、そうか、ですか？ そうです、それです。例の、この国で最強の集票マシン集団です。その種の話は大の苦手なんで、これ以上書きません。

*

■握りっ屁ポーズにだまされないようにしよう：お下品な表現を使用しましたことを、お詫び申し上げます。でも、本気でそう思っているのです。選挙用のポスターを始め、立候補予定者の写真って、なんであんなに握りこぶしポーズが多いのでしょうか？ 不思議に思いませんか？ 自分にとっては、謎です。かっこいい？ 誠実そう？ 元気そう？ 頼もしそう？ やってくれそう？ そうですね。「何かやってくれそう」＝「何もやってくれなさそう」という点では、理解できます。この「」付きのペアのフレーズは、反義語ではなく同義語ですもの。これだけ、何度もだまされれば、両者が同義語だって分かりますよね？ すべて官僚や役人任せの代理人たち――。

ところで、みなさん、あの握りこぶしの中には何が入っているのか知っていますか？ ○ですか（※はひふ○ほ）？ ガス＝gas＝気体＝期待＝奇態＝けったい、ですか？ 毒ガス？ そう、お答えになった方、なかなかお上手だと思います、マジで。で、個人的な意見を申しますと、あのこぶしの中は「空（＝から）」＝「無（※「存在と無」の「無」です）」＝「すっからかん」＝「うつろ」だと、にらんでおります。ですので、あんなポーズにだまされないようにしましょうよ。

万が一、立候補予定者の方が、この記事をお読みになっていたら、お願いですから、あのみっともない、体を張ったワンパターンギャグというかワンパターンポーズはやめてください。笑点の仲間受けギャグより、見苦しいですよ。一介の素人による、選挙対策のアドバイスですが、案外言えてるかも？ ご一考願えれば、幸いです。

*

■日本国憲法を読みましょう：冒頭でも書きましたが、自分はちょっとしたアクシデント＝偶然から、日本国憲法をざっとですけど、つまり斜め読みですけど、目を通しました。退屈なところもあることは確かです。でも、きらりと光る文章や、あれっ！と思う発見や、これが法律なら今の現実は何なの？という疑問や、うそー知らなかった！！というショックや、これはおいしそう、という嬉しいフレーズに満ち満ちていますよ。「日本国憲法」をキーワードに、ググるなり、ヤフるなりすれば、必ず全文にたどりつけます。検索エンジンそのものにキーワードを入れて、「お気に入り」に登録しておくことをお勧めします。

だまされたと思って、斜め読みでもいいですから、たまに目を通してみませんか？私見を述べさせていただくならば、日本国憲法は、最高のスピリチュアル書であり、癒やしの書であり、自己啓発書であり、オーラを発している書であり、読んで元気と勇気を与えてくれる書だと思います。お布施も、寄付も、差し出す必要はありません。よく考えてみましょう。憲法って、他人事が書いてあるわけでは、全然ありません。

自分たちの生活・人生、そして、これから21世紀を生きるお子さんたちやお孫さんたちの将来、つまり、自分自身と自分の愛する人たちの生活と人生と未来に直結した、すごく大切なことが書いてある書なのです。飽きっぽくて、諦めやすく、忘れっぽい、わたしたちは、あの書に書かれていることに飽きたり、あの書に書かれていることを諦めたり、忘れてりするからこそ、「差別化」も「フェティシズム」も楽しめなくなり、その結果として「おいしい社会」を奪われて、暗黒社会の実現を知らない間に許しつつあるのです。そんなの、自分は嫌です。みなさん、ご一緒に、そうならないように力を合わせませんか？

*

■政治家の世襲を許さないようにしましょう：全体主義やファシズムで得をするのは、ごく一部の特権階級＝支配階級だということを思い出しましょう。歴史的に見て、そういう階級はたいてい、同属集団なんです。一族なんです。自分の選挙区に2世や3世がいたら、誰であろうと、絶対に投票しないと、自分は心に決めています。どんなに優秀な人であろうとです。とても優秀な人なら、別の分野で活躍してもらいましょうよ。

2世や3世なら、お金もコネもありそうですから、さしずめ、慈善事業やNPO・NGO関係にその優秀さを発揮できる職が、それこそ星の数ほどありそうです。優秀で尊敬に値する人ならば、ですよ。誤解のないように、お願いします。そうじゃない人は、どこでも、そうじゃないですから。そうじゃない人に政治を任せたら、政治家選びに失敗しちゃった、どころじゃ済みませんもの。ことは重大ですよ。

いったん、権力を握るとそれを手放させるのは至難の業。これ、みんなが日々体験していることです。だから、今、みんながみじめな思いをしているんです。同じ間違いは繰り返さないようにしましょう。

*

■やっぱり CHANGE なのだ：いきなり、バカポンのパパの口調になりました。上で、引用した月曜の記事の一部で、一番大切な個所を、抜き出します。あっ、「書き下ろし」じゃなくなっちゃった。ま、いっか。

>ふつう、主権在民＝国民主権を建前とする国では、司法・行政・立法をつかさどる政治家や官僚は、国民の代理人＝代行者＝代理店＝エージェント＝公僕＝お使い＝使用人であるとされています。でも、「建前とする」という部分が示すように、「事実上は」＝「現実には」、そうなっていません。

どう考えてみても、これこそが、もっとも恐ろしい現実です。うかうかしてられない理由です。忘れてはならない事実です。これは、同じ人たちが、つまり、同じグループ＝族＝一味＝仲良し集団の人たちが、長い間選ばれ続けてきた結果だと思いませんか？ 選挙という手段だけが、政治権力を握る機会であるはずの国で、それ以外に権力の暴走をくい止める方法があるのでしょうか？

そう考えると、上記の国民と代理人との間に起きてしまっている、本末転倒を是正するためには、CHANGE しかないということになりませんか？ 責任は、わたしたち、みんなにあるのです。「国民の代理人」を務める人たちを大幅に、できれば全員、変える必要があることだけは、確かなようです。司法・行政・立法のうちでは、立法という領域にいる人たちを変えるのが、最も手っ取り早い方法みたいです。司法と行政という領域

にいる人たちを変えることについては、勉強不足で、どうしたらいいのか、全然分かりません。ですので、「やっぱり、選挙で CHANGE なのだ」と言う以外にないのです。

*

慣れない分野のお話になり、てんてこ舞いしました。ああ、しんど。きょうの結論は、

「CHANGE のためには、選挙に行き、これまでとは違ったヒト=新しいヒトに投票するのだ」

です。いろいろ書きましたが、そういう単純な結果になっちゃいました。ですので、とりあえず、今度の選挙では、そうするつもりです。

きょうは、長い段落が多くて、読みにくかったと思います。目が疲れたのではありませんか？ ここまで、お付き合いくださった方、どうもありがとうございました。あすは、きな臭く生臭い話は、できるだけ避けたいと思っています。自分には、似合いません。ふだんの自分のスタンスに戻す予定です。あす、また、来てくださいね。お待ちしております。

09.02.27 イエス・アイ・キャン

◆イエス・アイ・キャン

2009-02-27 08:51:19 | Weblog

最近、すごい早起きが身についてしまいました。このブログ記事の投稿時刻をご覧になれば、他の記事に比べて、「ずいぶん早いなあ、こいつ」とお思いになることと存じま

す。親が高齢なために、それに合わせて午後九時には床についていますから、もともと早いのですが、それよりも、このところもっと早く目が覚めてしまうんです。

で、前日の昼間にぼけーとしながら考えたことを書きつけたメモを頼りに、朝っばらから、ばあーっと一気にブログ記事を書くのです。途中で、朝ごはんを食べて、また、ばあーっと書いて、いったん新規投稿し、それからモニターを見ながら、「あれっ、このセンテンスは変だ」とか、「変換ミスをしてるわい」とか、「よく分からないけど、どこか変だから、とにかく直しておこう」といった感じで、文章をいじる＝修正する＝「やっても全然変わらない作業をする」のです。

で、きょうは、すごく横着して、きのうしたためた走り書きメモの束を、なるべくそのまま書き写して、ボケ丸出しのメモに、ちょっとコメントを加えるというか、ツッコミを入れるというか、そんな感じで記事を書いていこうと思っています。というのは、この数日間、政治という、自分にとって最も苦手なテーマについて書いているために、しんどくなっちゃたんです。よせばいいのに、妙に奮起してしまい、やめられなくなってしまったのです。

うつが悪化しそうな気配を感じてきたので、さきほど申し上げた方法で、きょうは政治の話にけりをつけてしまいたいと考えております。「断片集」などと言えば、格好をつけすぎですので、「つぶやき集」くらいの感じで、書いていきます。とにかく、うつの悪化が心配なので、元祖「あの人は今!？」のレギュラーを自称なさっている「つぶやきシロー」さんくらいの、脱力系スタンスでいきます。

テーマは、いかにして「全体主義体制国家＝ファシズム体制国家＝管理・監視社会、および管理・監視国家」の実現を阻止するかです。

*

*情報公開を請求する（※威勢はいいけど、集団行動が苦手な自分には無理。）

*デモ＝示威行進をする（※「democracy：デモして暮らすデモクラシー」という、単語の覚え方を教えてくれた、高校時代の英語教師の顔を思い出しました。）

*○衛官や○察官の人たちが二枚舌＝二重人格＝良心的裏切り者になるように、そののかす（※名案だけど、○を使わずに書けば、マジでハムにマークされそう。官舎でポストイング、即、逮捕。）

*日本版 CHANGE = 穏やかな下克上＝穏やかな革命＝ピースフル・レボリューション（※日本虚胡散党みたい。）

*役人・官僚に内部告発をそののかす＝内部告発のコモディティ化＝内部告発のありふれ化（※大事業＝大手術でっせー。「モノブログ」をやっている自分には、無理＝役不足もいいところ＝完璧な誇大妄想。トホホ。）

*国民みんなでばらばらになる＝一億総自己差別化＝みんなで自己差別化にはげめば怖くない（※名案かも。みんなが、そっくりな「トリトメのない記号」から、1個1個が「きらきら輝く記号」になろう、ですね。でも、違った意味での全体主義の恐れあり。要注意ですね。案外、権力の思う壺かも。）

*「国民みんなでばらばらになる」への想定される反論：「そうなれば、他国に負ける」（その1）（※難問ですね。返す言葉が思いつきません。やはり、議論に連敗＝全敗の人生を背負い込んでいる身には、無理。「負けるが勝ち」くらいじゃ、だめっすよね。）

*「国民みんなでばらばらになる」への想定される反論：「そうなれば、他国に負ける」（その2）（※「何に負けるのでしょうか？ 戦争？ スポーツの試合？ あなたは、戦争やスポーツの試合に負けるのと、全体主義体制＝暗黒社会とでは、どちらに耐えられますか？」なんて言っても、駄目でしょうか？ やっぱ、説得力、ないっすよね。）

*みんなで自己差別化やフェティシズムに走る。つまり、みんなで「おいしい社会」を失いたくない気持ちを助長する＝強化する（※これこそ権力の思う壺かも。それこそ、一億総○痴化しちゃう恐れあり。現権力＝現支配体制をあなどってはならない。うん。）

*みんなでへそ曲がり＝天邪鬼＝変人・奇人になる（※「おめー、いっぴきで、じゅうぶんだぜ」by ゲンチョー。ああ、幻聴。ゲンチョーさん、ご助言に感謝します。）

*みんなで「KYなんていう罵倒」(=これってファシズムの芽です)をなくす(※KYなんて、もう、死語。死後うんカ月。残念でした。Time flies.)

*みんなで二枚舌=二重人格==良心的裏切り者になる(※これって、一昨日のメモではないか? 机の整理をしろ。)

*オンブズマンを支援する(※名案かも。でも、いいようにこきつかわれる恐れあり。おんぶにだっこ。ずるずる引きづられてしまうかも。)

*「選挙では常に野党に投票します」(※これって、二大政党が実現している、どこかの国の人が、言っていたことの引用です。長期政権のもとでは司法・立法・行政が一体化して腐敗するという事実への処方せんには違いないけど、国情が違いすぎはしないでしょうか? 困った、困った。)

*三権分立が形骸化し、「三頭政治化=トロイカ体制化」が実現しつつあることを、みんなに訴える(※「OK, but how? = で、どないするねん? ひよっとして、あんた、あたま、とろいか?」「まだ、エロイカのほうがましです」「それ、ナポレオンちゃうか? それこそ、独裁やんかー。あほちゃうか?」「あっそう(ASO)」「それいうなら、アホの坂田はんの『アッホ!』をポーズつきで、やりなはれ」「……………」)

*政界への女性進出をうながす(※言えています。この国、ほかの国々に比べても、かなり遅れています。恥ずかしいです。イエス・ウィー・キャンなんて、「オトコたち=オオカミ=お上の発想のヒトたち」みたいに群れる=蒸れるんじゃないくて、単数形にして、イエス・アイ・キャンって感じで、独立独行=わが道を行く的なスタンスの女性に自分の1票を投じたいです。マジで。)

女性? イエス・アイ・キャン? 独立独行とはちょっと違うみたいだけど、この既視感=デジャビュはなんだろう? アイ・キャン=わたしにできる、と言え。じゃあーん。むむっ! あっ! (※何とわざとらしい感嘆詞=感動詞であろう!）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン（※きょとんと、なさっている方に、申し上げます、これって、当ブログ記事のワンパターンギャグなんです、どうぞ、よろしく）

では、ないかいのう？

「わたしにも写せます」

みなさん、覚えていらっしゃるでしょうか？ または、お聞きになったことがありますか？ いやあ、懐かしいですね。あのCMがテレビで放映され、「わたしにも写せます」が流行語になったのは、いつのことだったのでしょうか？「扇千影（おおぎちかげ）」さん、そうです、参議院議長を務められたあの方が、現役の女優時代に、8ミリカメラ（※もちろんビデオではなくフィルムですよ）を手にし、ゆっくりと上体を回しつつ被写体を追いかけるポーズをしたあと、「わたしにも写せます」とこっちを向いてニコリとほほ笑みになった、と記憶しているCMです。

忘れっぽい自分の記憶ですから、詳細が違っているかもしれませんが、とにかくそんな感じのCMでした。ウィキペディアで、ご経歴を拝見したのですが、波乱万丈という言葉がピッタリの女性ですね。女優歴だけでなく政治歴もすごい。イエス・ウィー・キャンだけでなく、イエス・アイ・キャン的行動らしきものも目につきます。

右寄りの方だったからこそ、あれだけのご活躍ができたと言えるでしょう。その反対側で、この国の婦人参政権運動を主導した市川房江さんや、マドンナ旋風を起こした土井たかこさんたちのご活躍と努力も、忘れてはなりませんね。残念ながら、婦人運動の草分け的存在である平塚らいてう（＝らいちょう）さんや、与謝野晶子さんまでは、きょうはさかのぼりませんけど。

「わたしにも写せます」というフレーズを見ていると、言葉の「フェティシズム」が生甲斐の自分には、つつい、次のような言い換えの連鎖が、頭に浮かんでしまいます。

（1）「わたしにも写せます」→（2）「わたしにも映せます」→（3）「わたしにも移せます」→（4）「わたしにも伝染せます」

上記の(1)と(2)は女優時代のご活躍で、(3)と(4)は政治家として腕をおふるいになった時期です。(3)は、いろいろな人物を移した=動かした、という意味でしょうか？(4)は、意味深というか、ちょっと怖い話でして、当ブログ記事のバックナンバーである「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 をご覧いただき、斜め読みして「伝染」と「伝染るんです」を見つけると、意味がお分かりになるはずですよ。面倒な方は、パスしていただいて構いませんけど、お時間のある時に、ご一読くだされば幸いです。とても大切なことなのです。

*

では、さきほどの続きをいたします。

*右であれ左であれ、あっちであれこっちであれ、ファシズム=全体主義は大嫌いだ(※なるほど、心の叫びというやつですね。でも、大切な1フレーズが、抜けていますよ。「下であれ上であれ」です。「上であれ下であれ」ではなく。きのうの記事に書いたじゃありませんか、自治体レベルでは「オール与党体制」=「行政と立法の野合」という形で、既に全体主義体制が実現してしまっているのです。順序としては、下から崩さなきゃ。そちらのほうが、まだやりやすいですから。上がそうなっちゃったら、もうおしまいですよ。いや、そろそろ、上もヤバいかも。)

*自分の属する組織の腐敗度をチェックしよう(※ああ、あれですね。(1)上の者たち=指導部が、威張り腐って贅沢をしていないか？(2)上の者たち=指導部の間で、世襲体制が確立していないか？(3)上の者たち=指導部の言っていること(=建前=外部への発言=外面)とやっていること(=実際の行動=内部での言動=内面)が違っていないか？(4)個人崇拜をしていないか？(5)組織の施設に莫大な費用をかけていないか？(5)やたら、寄付を指示=強制していないか？(6)メンバー同士を監視し合うようなシステムが、確立していないか？(7)組織が選挙でズルをやっていないか？(8)自分は組織を恐れていないか？(9)組織から脱会できない物理的・心理的状况に置かれていないか？(10)組織から脱会した人たちに対し、組織は嫌がらせや不当な圧力をかけていないか？以上の10項目のうち、1つでも該当するなら、その組織は腐っている、つまり、ファシズム集団ですよ。なぜなら、10項目は独立してなくて、つながり合っているからです。根っこは同じ。)

*自分の体感と想像力を信じよう(※洗脳されちゃったら無理ですが、自分の頭と体で

考えることって、確かに忘れられかけていますよね。危ない。熱い。やばい。間違いない。あれっ?)

*同一政党による長期政権、同一人物による長期在職をなくす立法措置を実現しよう(※難問ですね。残念ながら、そうした領域でのノウハウに無知な、このブログが扱う問題ではありませんね。この記事をお読みなっている方で、その方面に詳しい方、あとをよろしくお願い申し上げます。国民のために。)

*全体主義はケータイの使用を許さない(※でしょうね。お手紙だって、コピー機だって、ファクスだって、インターネットだって許さないのですから、当然です。とにかく、内緒話をさせたくないんです。ソ連が、お手紙と、コピー機とファクスとインターネットで事実上崩壊したのだという珍説があるくらいです。あれっ? これ、以前に、記事にしたことじゃないですか! 机の整理をしてくださいよ。)

*全体主義ではニュースも口パクになる(※どことは名指しませんが、ある近隣の国では、そうらしいと、その国のウォッチャーがテレビで言っていました。何でも、ニュースはライブではないとか。前もって、アナウンサーがカメラのそばに流れる原稿を見ながら読む。それを、あとで再度、口パクで収録する。なんで、そんな面倒なことをするのでしょうか? 指導層が謀反を恐れているからです。ライブだと、指導部に言わせれば「とちくるった」アナが、とんでもない呼びかけを、国民にするかもしれないなんて、被害妄想に陥っているからだとのことです。ファシズムを押し付けられるほうも命がけ、ファシズムを維持するほうも命がけ。ヒトって、やっぱり、ズレちゃってますね。)

*八方美人はやめよう(※偏屈者=変人=ないないづくしの奇人=しがらみのない何もかも捨てたへそ曲がりだから、言えることですね。それができない人のほうが、世の中には圧倒的に多いのです。上述の、「みんなで二枚舌=二重人格==良心的裏切り者になる」のほうが、説得力があり、有効みたいです。)

*みんなで偏屈者になる(※「おらっ、パリテキ! 屁理屈野郎の、デタラメ野郎の、2千円詐欺野郎の、食い逃げ野郎の、寄生虫野郎めが。さっきも、おんなじようなこと、わめーていなかったか? おめー、もしかして、ヘンクツ教の教祖になりたいんじゃ、ねーだろうな。それも、りっぱなファシズムだぜー」by ゲンチョー。ああ、幻聴。ゲンチョーさん、滅相ありません。いずれにせよ、ご助言に感謝します。メモがダブったみたいです。すみませんでした。「信者」を集めて=合わせて「儲」けるなんて言葉の遊びだけでしか、自分は考えたことはありません。「それって、〇〇教が事件を起こしたとき、さ

んざんメディアでやっていた、ギャグじゃんか、この盗作野郎めが」by ゲンチョー。ああ、またもや幻聴。そうでしたっけ？ 使用済みですか？ あれって、著作権で保護されているのでしたっけ？「すっとぼけるな」ごめんなさい。反省します。）

*みんなが熱狂していることを疑おう（※レジ袋追放＝マイバッグ使用、メタボ解消、勝間本、きみまろブーム、気づき、きつけ、かんの虫、〇〇占い、オバマハン、オクリビトなどなど。いつまで続くやら？ ヒトは飽きっぽく諦めやすく忘れっぽい。それに、豹変＝一転しやすい。あすの日も分からない。この10年間を振り返っても、言えること。イラク成敗、時代の寵児だった頃のホリエモン、石原再選（※これ、すごく嫌なんです）、サブプライムローン、デリバティブ、貯蓄から投資へ、小泉人気、レーシック――は、今はどうなっちゃったの？ 毎年、新語・流行語大賞が決まった時には、その言葉は既に「死に体」か「死語＝死後」。きのうの善人＝英雄が、きょうは悪人＝憎まれっ子。すべてのことには、良いところも悪いところもある。ヒトは、1度にその1面しか見ない。そのほうが、楽だから。だから、一方へと、みんなが傾きそうになったら、もう一方に身をそらす。そして、斜めから眺めてみる。そんな生き方も、あっていいのではないのでしょうか？)

*世の中の振り子に振り回されずに、自分が揺れよう（※上の言い換えですね。あなたの人生そのものじゃないですか。もっとも、あなたの場合は千鳥足。）

*大勢のヒトが右（or 左）を向いたら、左（or 右）を向いて確かめてみよう（※これ、上の項目の焼き直し。でも、これが「おいしい社会」を意地でも維持するコツ＝秘訣かも。あくまでも、かもよ。）

*カリスマ性のあるリーダーはこの国にはふさわしくない（※きのうと記事と同じ趣旨じゃんかー。デスクの整理が徹底していない証拠。）

*長いものに巻かれるな（※信用金庫からもらった日めくりの一番下に記してあるフレーズを、いじりましたね。）

*断れる人間になろう（※どこかでおなじような言葉を読んだ気がする。でも、難しいですよ、実際問題としては。結局は、勇気と世間体の対立という問題か？ 二枚舌＝二重人格作戦のほうが、やっぱり実用的かも。）

*ヒトには、強いリーダーやファシズムに幻惑される習性があるのではないか（※これもまた、使用済みのメモじゃないですか。まだ、机の整理ができていないもよう。でも、何度考えてもいい問題かも。）

*犬型人間よりも猫型人間になろう（※またまた上のフレーズの言い換えですか？ 確かにオオカミを祖先に持つらしいワンちゃんたちは、飼い主にはめっちゃ従順ですもんね。バカイヌを除いては。その点、ニャンちゃんたちは、気ままで、むら気で、扱いにくい。バカネコを除いては。両者の習性の比較は、ヒトにとって意外といいお勉強になるかも。ワンニャン比較学にゃんちゃって。）

*差別はあっても差別化が許されない社会、なんてまっぴらご免だ（※ふーん、そうだったのですか？ こんな警句＝アフォリズム＝アホリズムめいた走り書きをもとにして、毎日せっせとブログを書いているんですか？ そんな社会は、確かに嫌ですね。全体主義の社会においては、いちおう民主主義社会と呼ばれている社会よりも、熾烈（しれつ）な差別が、上でも下でも行われていることは容易に想像できますね。ああ、想像するだけで、びびってしまい、おしっこが漏れそう。失礼。）

*ファシズムにはファシズムを——と考えているヒトたちがいる（※いるいる。名指しはしませんが、いますね。仮想敵国と同じような行動を、みんなに強いるのですよね。「起立＝ちんちん（※ワンちゃん語ですよ、念のため）！ 礼＝伏せ（※何のために？ 何に向かって？）！ 斉唱＝吠えろ（※何を？ 心がこもっていなくても、とにかく歌え、ですか、テキトーですね）！ 着席＝おすわり（※儀式が無事に済んで喜ぶのは責任者だけ、極めてテキトーで、事務的＝官僚的＝不謹慎＝不真面目＝冗談は顔だけしてけろ）！」なんて。とつても、官僚的。でも、怖い。マジコワ。ねー、テレシコワさん。あなたは、旧ソ連では英雄で特権階級だったから、全体主義は怖くはなかったですか？ で、今は？ また別のが出てきて、マジコワですか？）

*ファシズムにあこがれる根底には、マゾヒズムがあるのではないか？（※「哲学したい」がもろに出ているフレーズですね。いつか、考えてみましょうよ。反意語ではなく、ベクトルの違うサディズムを視野に入れることを忘れないようにしましょうね。蓮実＝蓮實氏が訳された本くらい、面倒がらずに読んでみたらどうですか？）

*ファシズムにおける、マゾヒズムの前提となる条件は、あくまでも同族から命令を受けるといふことである（※当たり前のこと、言っていないせん？ 他者＝他民族＝他国人＝

多国籍軍などからの命令の下＝支配下にある国家は、ファシズム体制にある国家ではなく、敗戦国＝属国＝従属国です。だから靴なんかを投げるんです。そういう区別が甘いから、学生時代から「おまえは論理的じゃない」とか、「直感的だ」とか、「詰めが甘い」とか「アホ」とか、ずっと非難されて続けてきたのではありませんか。脇が甘いんですよ。それとも、そういう性分とどういうか、情報処理能力が極めて低い＝おばかさんというか.....、まあ、これ以上は言いませんけど。へこみやすい人だから。うつが悪化の責任転嫁なんかしないでくださいよー。）

*ファシズム＝全体主義には、社会学的アプローチだけでなく、生物学、特に動物行動学＝エソロジー的アプローチが不可欠である（※またまた、当たり前のことを言っている。だから、素人は素人として、自分自身というヒトと、身の回りにいるヒトたちを観察し、自分の頭と体を使って考え、あるいは、体感し、それを言葉として紡ぐしかないので。これで、ようやく、このブログらしくなりましたね。良かった、良かった。めでたし、めでたし。安心しましたか？ 気が済みましたか？ きょうは、これからお薬を飲まなくても、よさそうですか？）

*なぜ、政治の話はこんなにしんどいのか？（※「いいところに気がついたね、ワトソン君」＝ザッツ・ア・グッド・クエスチョン → イッツ・ノット・ユア・ピース・オブ・ケイク ＝ あんたには、似合わない → 悪いことはいわへん、このへんで、きりをつけて、おきなはれ、ええな？ まあ、ここまで書いたんやから、ハムやS会にはせいぜい気をつけなはれ、選挙が近くて、上のもんが、その上のもんからがみがみ言われて、かりかりしてるさかい。ほんまでっせー。どっちにせよ、あっちは巨大組織やさかい、あなどったら、あかんでー。いざとなったら、あそこに駆け込みなはれ。あ・そ・こ。分かった？ 独りでは、無理やさかい、ええな？）

*

というわけで、きょうは、これで政治関連の「きな臭くて生臭い」メモを机の上から一掃することができました。すっきりしました。一種の「お祓い」＝「厄払い」＝「豆まき」が済んだ、という気分です。

「トリトメのない記号＝まぼろし」について、考えていること、考えてみたいことが、まだまだいろいろありますので、引き続き、また書きつづってみたいと思っております。自分の個人的な「お祓い」の儀式に付き合っ、ここまで読んでくださった優しいあなたに、心よりお礼申し上げます。

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

2008-12-19 以来、「皆勤賞」状態で書いていたブログが、2009-02-28 には、書かれていません。直接にはブログに書きませんでした。その日までの数日間、かなりの抑うつ状態にあり、薬づけでもありました。「消えてしまいたい指数」が異常に高かったからです。

そういうわけで、「ネガティブに生きる」という名のブログを削除・閉鎖しました（※記事のバックアップはとってありました）。実際に、「消えてしまいたい」を行動に移そうとしたとき、ある偶然から命拾いをしました。奇跡のような出来事でした。いつか、心の整理がついた段階で、その時の体験について、書いてみたいと思っております。現時点では、書けません。

*

「ネガティブに生きる」は、日記として始まりました。うつ病でつらい日々を送っているために憂さ晴らしをしよう、という気持ちがあったからです。そのような乗りで「ネガティブに生きる」というタイトルで、goo のウェブサイトを間借りして、生まれて初めてブログというものを書くことになりました。当時は、「パリス・テキサス」というハンドルネームを使っておりました。

ブログのテーマは「憂さ晴らし」と書くわけにもいかず、「うつとの共存あるいは闘い」という具合で出発しました。2008 年 12 月 19 日から 2009 年 2 月 27 日まで、律儀に毎日書いていました。そういう律儀さこそが、うつになりやすい兆候なのです。「頑張らない」をモットーにしても、ついつい「頑張る」してしまうのです。困ったものです。みなさまも、お気をつけください。

文章も最初のころは短かったのですが、だんだん長くなっていき、ブログにしては比較的長めの文章を平気で毎日投稿するという具合に、はまっていきました。ある読者の方から「ネトゲ廃人」をもじって「ブログ廃人」というあだ名を頂戴するはめに陥りました。

*

さて、ブログを削除・閉鎖して1日置いたあと、ちゃんと新しいブログを開設しました。その日の「消えてしまいたい指数」が、異常に低かったからなのです。いい気なものだと思いの方がたくさんいらしゃると思います。自分もそのひとりです。

うつを含む気分障害をわずらっている者には、自分の気分が先にどうなるかの予測がつかないのです。少なくとも、私の場合にはそうです。気分障害には、人によってさまざまな症状があるようです。起床時に「きょうは気分様のご気分はどうか」という感じで、その日を迎える。これが私のパターンです。

ブログを再開するに当たって、「ネガティブに生きる」ではなく「うつせみのあなた」としました。ハンドルネームは、パリス・テキサスのままです。

*

以上のような経緯で、「うつせみのあなたに」は「ネガティブに生きる」の続編として、2009年3月1日にスタートしました。内容（ないよう）は無（な）いようなもので、

エッセイ＋回想録＋言語論＋哲学的論考＋文芸批評＋文明論＋風刺＋ヒトへの悪態＋私小説＋心境小説＋身辺雑記＋駄洒落・オヤジギャグの連発＋与太話＝駄文 or たわごと

といったような代物（しろもの）だとお考えください。要するに、「何でもありー」でもあり、「何でもなーい」という感じなのです。全体に通底するのは、表象文化へのこだわりだと、自分では思っております。

お読みになり、「やや、あやうい」あるいは「かなり、あやうい」または「とちくるっている」とお感じになる方もいらっしゃると思いますので、この場を借りて申し添えておきますが、これでも本気なのです。正気だと言う勇気も根拠もありませんが、本気で書いております。だからこそ、「あやうい」のかもしれませんが.....。

*

ここで、「うつせみのあなたに」というタイトルについて説明させてください。

「ネガティブに生きる」で、「うつせみ＝空蟬＝現人」と「あなた＝彼方＝貴方」という2つの言葉が大好きだ、と書いたことがあります。以下にコピペします。

＞「うつせみ＝空蟬＝現人」を少し大きめの辞書で、引いてみてください。それぞれにいくつかの語義があります。じーん、と胸にくる意味があります。一方の「あなた＝彼方＝貴方」には、(1)「彼方」、つまり、「かなた＝向こう側＝遠く＝遠い世界＝遠い昔」という系列と、(2)「貴方＝貴女」、つまり、「あちらの方(ほう)にいらっしゃるお方(かた)＝目の前にいらっしゃる貴方または貴女＝「ねえ、あなた」の「あなた」という系列の、2つがあります。

そうしたことを頭に入れて、ひらがなで書かれた「うつせみのあなたに」の意味を考えると、何通りかの解釈ができます。うつ病の「うつ」という「ノイズ」もイメージを膨らませてくれます。そういう具合に、いろいろな意味に取れる言葉や言い回しがとても好きなのです。駄洒落や言葉遊びも大好物です。言葉を対象とするフェティシストでありたいと願っております。

ちなみに、“うつせみのあなたに” “うつせみのくら” “うつせみのうつお” (※ “○○” という具合に " でくくってください) をキーワードにして、グーグルやヤフーなどで検索なされば、「とちくるい」の痕跡がまだ残っていると思います。

以上、誰が望んだのでもない弁解をいたしました。ご理解いただければ幸いです。
(2010/06/26 記)

09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？

◆なぜ、お父さんがいないの？

2009-03-01

まず、ある疑問から書きます。

*なぜ、「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝複製＝コピー」たちには、「お父さん」
がいないのか？

です。「産み出す＝生み出す」「装置＝機械 or 有機体」＝「お母さん」、つまり「マトリックス」はいるのです。でも、「お父さん」が、なぜかいない。不思議でなりません。当然のことながら、ヒトも森羅万象の1ケですから、「トリトメのない記号」にほかなりません。ということは、この記事を書いている自分も「トリトメのない記号」のはしくれということなのです。したがって、こうなります。ねえ、お母さん、ぼくには、

なぜ、お父さんがいないの？

です。

で、いきなり話を飛ばします。自分は母子家庭で育ちました。物心がついた時には、父親はいませんでした。みなさん、「母子寮」って、ご存知ですか？ 自分の場合、母子寮で、物心がついたというか、最も遠い記憶が、そうした施設での生活だったのです。

母子寮というのは、入寮者（※寮生と呼ばれていました）全員が、別居・離婚、あるいは死別という形で父親が不在の家族が住む公立の、あるいは私立の施設です。当時は生活保護を受けている家庭がほとんどでした。一時的・短期間の入寮家庭もあれば、数年

から10年以上、つまり高校を卒業するころまで、親やきょうだいと一緒に住んでいる未成年もいたようです。

自分の場合には、5歳ころまでいました。ただ、幼い時期に「なぜ、お父さんがいないの？」と母に尋ねた記憶はありません。成長するにつれて、そういう質問をしてはいけない、ということが分かってきたからでしょう。今、思い出しましたが、自分の苗字が変わったとき、「ものすごい発見」をしたのです。

苗字が変わったのは、母と父の間で、協議離婚が成立したからです。キョーギリコンという音だけを母から教わりました。「どうして苗字が変わったかと、他人（ひと）に聞かれたら、お母さんがキョーギリコンしたからだって答えなさい」と言われたのです。戸籍謄本を見れば、正確な日付がわかるはずなのですが、手元がないのでうろ覚えなのですが、確か苗字が変わったのは、小学校に上がる直前だと思います。

母としては、息子の就学前に正式に夫婦関係の片を付けておきたかったのではないかと推測しています。今懸命に記憶をたどっているのですが、やっぱり協議離婚の成立は、そのころだったと思います。さきほど述べた「ものすごい発見」をした時には、もう母子寮に住んではいませんでした。

*

その日。

自分の氏名をひらがなで書けるようにと、母が特訓してくれていました。何度も文字を書かされたことを、ぼんやりと覚えています。傍らで母が小学校の入学式に着ていく服の胸につけるためのハンカチを折った「名札」に、毛筆で新しい苗字と生まれて以来呼ばれている名前を、真剣な顔つきで書いていたさまも、おぼろげに頭の中に残っています。で、墨が乾いたところで、自分はその名札を胸につけてもらい、鏡の前に立ったのです。その時です。

ぎゃあー！ お母さん、名前が違っている！

と叫んでいたのです。苗字が変わったことに驚いたわけではありません。ひらがなの文字が、鏡に左右逆に映っているのを見て、びっくりしたのです。その時の驚きと衝撃をどう説明したらいいのでしょうか？

それこそトラウマになるくらい、仰天したことは確かです。毛筆で書かれたひらがなというのは、ちょっと虫に似ていませんか？それが左右逆になると、虫に似ているどころか、得体の知れない「もの」に見えるというか、全く別の「もの」に変化して見えるというか、とにかく「違っている」としか言いようのない「もの」に化けてしまった。そうとしか考えられない事態に遭遇してしまったのです。

今だからこそ笑い話になりますが、まだその時のショックが、生々しく心の奥底に残っています。これって、やはり一種のトラウマでしょうか？そんな体験をした自分が、成長して言葉（※文字・音声としての）に興味を持ち、そのあげく言葉の「フェティシズム」にふけるようになったのです。そのルーツは、案外こんなところにあったのかもしれない。などと、ふと今考えてしまいました。

いつの間にか想定外の話になってしまいました。自分の場合、裏面が白い折り込み広告をカッターで切ったメモ用紙を、常にポケットに入れて持ち歩いています。で、家事や雑務をしながら考えたことを、その紙切れに走り書きしておきます。そして翌日、書き溜めたメモをパソコンの脇に置いて、即興で文章を書きますので、時々こんなふうに自分でも思ってもみなかった話が飛び出します。

*

話を戻します。

>*なぜ、「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝複製＝コピー」たちには、お父さんがいないのか？

でしたね。この疑問をいただいたのは、「そっくり」2009-02-13 という文章を書いた時が、最初ようです。以下に、その記事から、該当する箇所を引用します。

>*「お母さんがいる」:「そっくりなもの」=複製=コピーを「生み出す=産み出す」装置および機械、または有機体。今後の、ナノテクノロジー、遺伝子工学、バイオテクノロジーの発達と洗練化によって、大きな進歩と変化が期待されている。なお、「お母さん」は「マトリックス」とも呼ばれ、「マトリックス」という言葉の持つ多義性=多層性が、多種多様な分野に影響とインスピレーションを与えている。なお、「お父さん」ついでにの消息はなし。

以上は、ほぼ2週間前に「記号」というものについて、考え始めた週の末日にあたる金曜に、頭の整理を目的として、「記号」に備わっている特徴を挙げていたさいに書いた一節です。ちなみに、一昨日の「お祓い」(※「イエス・アイ・キャン」2009-02-27が済んだあと、ずっと「トリトメのない記号」における「お父さん」の「不在」について、考えていました。

で、思いつきました。その思いつきというのは、学問と称する分野で、頻繁にやる「方法=トリック=芸=行き当たりばったりな措置=テキトーな対策」です。どういうことかと申しますと、

問題の設定自体が間違っているのではないか? と疑ってみる

のです。今そう書いてみると、やっぱりそもそも問題の設定が怪しかったと思えてきました。それどころか、確信に近いものになってきました。きっと、この問題自体が「疑問=変=的を外れ=ちょんぼ」なのではないか?と思われてきたので、さっそく

>なぜ、お父さんがいないの?

という疑問そのものを検討してみることにします。方向転換=発想の転換をしてみます。

言葉の「フェティシスト」を自任している者としましては、言葉という視点から、アプローチしてみます。で、

*「言葉を使う」という行為は、「比喩=たとえを用いること」である

という原点から、出発してみたいと思います。これは非常に大切な確認事項です。比喻とは、すり替え作業です。AからBに話がすり替わっているのに、依然としてBではなくAの話をしていると錯覚し続け、つまり忘れてしまい、いつの間にか自分で混乱に輪をかけ、收拾がつかなくなっている。それなのに気がつかないでいる。ということが頻繁に起きます。

しかも、それが長期化して、数日どころか、数年、数十年、数百年続いている。ひょっとするとヒトが「ただの尻尾のないおサルさん」から、脳内にズレが生じた結果として、「尻尾のないおサルさん+ α 」＝「狂える尻尾のないおサルさん」に進化＝退化＝とにかく変化して以来、ずっと続いているとおぼしき錯覚、あるいは忘却しているという事態もあるに違いない。そう自分にはらんでおります。

*

でも、残念なことに、こればかりは、「狂える尻尾のないおサルさん」自身には、確認および検証できないらしいときているので、困った話なのです。話が大きくなりすぎました。で、話をさきほどの

* 「なぜ、お父さんがいないの？」という「トリトメのない記号」の発する疑問

だけに絞ります。これって、もしかして、「お父さんがいるに違いない」という前提に立っているから、收拾がつかなくなっちゃったのではないのでしょうか？ 言い換えると、「そもそも、お父さんなどいない」という状況を想定すべきなのではないのでしょうか？ その根拠として、「トリトメのない記号」の話をしているのに、いつの間にか、「トリトメのない記号」の1ヶである「ヒト」に話がすり替わってしまっていることが挙げられます。

どうやら、話を整理する必要がありそうです。今週は「記号」について考えているうちに、事情があって「道草＝寄り道＝とちくるい」が生じてしまうというアクシデント＝災難がありました（※自分で招いてしまったことなので、災難というのも変ですけど）。ですので、記号を論じるにあたって、最低限必要な知識を以下に引用します。長いですが、コピペをするという横着をお許し願います。

＞*「トリトメのない記号」とは、森羅万象、つまり「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」のことです。どうして「記号」なのかと申しますと、「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」は、それとそっくりなものがたくさん並んでいたり、あちこちに散らばる形でたくさん存在するからです。イメージとしては、スーパーに並んでいるカップラーメンを想像してください。ヒトもそうですよね？個性とか顔かたちを気にするのは、せいぜい自分自身か家族か友達か仲間か親戚くらいじゃありませんか？あとはいっしょくたになって「他」として、存在している。そんな感じがしませんか？で、なぜ、その「記号」に「トリトメのない」がつくのかと申しますと、たった今書いたことと関係するのですが、どれもが「そっくり」であるからです。つまり、没個性＝みんな同じみたい＝違いなんかどうでもいい感じ。というイメージがあるからです。そっくりな点がそっくり、という感じなんです、分かっていただけたでしょうか？

＞*「差別化」とは、上で述べた、「そっくり」＝ありふれている＝「コモディティ化している」という状況を打破するための戦略であり、生き方です。ビジネス書をよくお読みになっている方なら、商品や製品の「差別化」と「コモディティ化」という言葉で、ピンとくると思います。ヒトでいうなら、いわゆる「ブランド人」になることです。自分を他のヒトとは別の個性や価値を備えたヒトとして、演出＝誤魔化す＝化ける、あるいは、スキルを身につけたり磨いたり、資格を取ったりして、キャリアアップに励むことです。

＞*「フェティシズム」とは、「そっくり」＝ありふれている＝「コモディティ化している」という状況を打破するという点では、「差別化」と似ていますが、ベクトルが違います。「そっくりで、ありふれている」「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」そのものに徹底して愛着したり、とことんこだわることに「快」を見出すことです。「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」そのものを「おいしいもの」としてとらえるという意味では、貪欲＝利口＝したたかな生き方を選ぶことだとも言えます。なお、「フェティシズム」の対象を「フェティッシュ」と呼ぶ場合があります。

以上は、「おいしくない社会」2009-02-23 からコピーペーストしました。

*

もう1つ重要な点を付け加えます。

* 「トリトメのない記号=まぼろし」

という視点を忘れてはならないのです。このことを説明するために、まともや、コピーすることを許してください。

> (1) ずらりと並んでいる、そっくりなものたち、そして他にもあちこちに存在すると考えられる、そっくりなものたち。たとえば、スーパーに陳列されている大量生産された商品たち。そこそこのお金さえあれば、これほど身近で入手しやすいものはない。つまり、「距離=間」を減ぼす。また、キュウリやカボチャたちも商品。よく見ると、それぞれが個性的な形をしている。しかし店頭に並べられると、みな同列に扱われる。差異を無視する。つまり、「距離=隔たり=間」を減ぼす。したがって、「間減ぼろし=まぼろし」と、とりあえず呼んでみる。

> (2) 身近で、誰もが簡単に入手し利用できるものは、その使い道や用途がなくなれば用済みとなる。愛着や執着をそれほど覚えることなしに、廃棄・処分できる。これを捨てたら、「化けて出るぞー」とか「罰が当たるぞー」とかいう、恐れや後ろめたさは全然感じない。つまり、魔物めいたものが、いっさい感じられない。したがって、「魔減ぼろし=まぼろし」と、とりあえず呼んでみる。

以上は、「まぼろし」2009-02-20 からコピーペーストしました。

*

これで、さきほどから宙吊り状態になっている、お話に戻ることができます。つまり、「トリトメのない記号」の話をしているのに、いつの間にか、「トリトメのない記号」の1ヶである「ヒト」に話がすり替わってしまっているということです。「トリトメのない記号」とは、あくまでも「まぼろし」なのです。「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」が発する「イメージ」と言い換えてもいいと思います。

このように考えると、「イメージ=まぼろし」に、

*なぜ、ヒトみたいに、お父さんがいなければならないと想定しなければならないのでしょうか？

そんな理由は、全然ないのです。では、どうして、そんな愚かな=杜撰(ずさん)な=テキトーな想定に陥ってしまったのでしょうか？ それは、「マトリックス」という多義的=多層的な言葉の中心的イメージ(※コアイメージ)が「お母さん」だからです。「お母さん」と聞けば、あるいは見れば「お父さん」を連想してしまう。これは、言葉を用いて思考したり、議論したり、書いたりするさいに、ヒトが陥りがちな錯覚=誤謬=うかつさです。つい、やっちゃうんです。言葉に振り回され、踊らされてしまうのです。そんな自分が馬鹿=アホでした。反省。

*

今テーマにしていることで、言葉に振り回された状態が続けていますと、有性生殖とか無性生殖とか言い始め、またもや

*別の比喩に話がすり替わり、さらに收拾がつかなくなり、辻褄合わせに嘘を重ねるといふ、比喩の暴走

が始まります。こうした例は、枚挙にいとまがありません。不毛な議論だけがえんえんと続く事態は、みなさん、毎日あちこちで、見聞きされていると思います。その原因の大半は、言葉を使用しているための錯覚=誤謬にありそうです。

ただし、ここでお断りしておきたいのは、ヒトは言葉なしに思考したり、議論したり、書いたり、読んだりできないという現実です。となると、注意する以外にないという、極めて単純な結論に達します。でも、そうなのです。

*言葉は、便利でありながら、同時に欠陥品でもある、思考の道具

なのです。というか、それ以外に思考の道具はなかなか見つからないのです。言葉のほかに、思考の道具が全くないわけではありません。ヒトには、知覚＝認識＝感覚という、体感的にとらえることを可能にする道具があります。第六感なんて呼ばれているものもありますね。また、勘とか、直感とか、呼ばれているものもあります。

知覚のうち、視覚的イメージで思考するという方法を重視するヒトたちも多いです。アインシュタインが、その達人だったとか聞いた記憶がありますが、どうでしたっけ？ 記憶違いでしょうか？ いずれにせよ、言葉以外にも、思考の道具があるなんて、「ポジティブ＝前向き＝楽観的＝希望的観測的＝テキトー」でいいですね。ただし、ポジティブと表裏一体の関係にある「ネガティブ＝後ろ向き＝悲観的＝懐疑的＝優柔不断＝自暴自棄＝どうせだめさ」な側面を常に意識していないと、言葉と同様の新たな錯覚＝誤謬に陥る可能性は高いです。やはり、

*思考の道具を使用するさいには、その道具の「属性＝特性＝癖」に注意してしてすぎることはない

という、きわめて単純で当たり前な結論に達します。職人さんを例にとって（※比喩ですよー、注意！ 注意！）みましょう。優秀な職人さんは、道具の取扱いや、手入れにもものすごく神経を使うみたいです。また、道具の特性に精通しているそうです。たとえば（※比喩ですよー、注意！ 注意！）、達人と呼ばれるような木彫りをする職人さんであれば、たくさんの種類の鑿（のみ）を持っていて、1本1本の用途と、使用するにあたっての限界や、その癖を熟知＝精通していると聞いたことがあります。だからこそ、いわゆる名作や絶品を製作することができるのです。見習いましょう。

これで、

>*なぜ、「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝複製＝コピー」たちには、お父さんがいないのか？

という疑問については、ほぼその謎が解けたような気がします。「気がします」と頼りない表現になってしまったのは、まだ心（しん）から納得できていない部分があるからです。「お父さん」対「お母さん」という比喩＝図式化に、まだ未練があるからです。こだわっているのです。往生際が悪いですね。今後の課題にします。

*

さて、言葉という道具の使用に十分に気を配りつつ、ぜひ考えてみたいことが、もう1つあります。それは、上述の「お父さん」対「お母さん」という比喻=図式化にも関係します。

*「そっくりなもの=トリトメのない記号=複製=コピー」としての「性・性差」

について、考えてみたくてしかたないのです。かつて、大学の卒論にロラン・バルトを選びました。「お父さん」対「お母さん」について考えている最中に、バルト（※ちなみにバルトもサルトルと同様に母子家庭で育ちました。関係ないか？）が文学作品に現れる登場人物の「性・性差」を、腕のいい職人を思わせるエレガントな手さばきで扱ってみせてくれたことを思い出したからです。

今、思いついたことなので、これから、ゆっくり、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある、といった具合に、自分の頭と体（※特に、体）を使って考えてみるつもりです。またもや、混乱に陥らないように、「道具」の使い方には十分に注意しようと思っています。

次回のキーワードというかテーマは、「記号としての「性・性差」」の予定です。

*

追記

以上の記事では、マトリックス=matrix=そっくりなもの「お母さん」=「印刷用語では母型（ぼけい）、つまり活字を作る際の型」を前提として、話を進めていました。ところが、最近、パトリックス=patrix=そっくりなもの「お母さん」の「配偶者」としての「お父さん」がいることを知ったのです。印刷用語です。以下に、大きめの英和辞典からの説明を引用させていただきます。

* (活字母型を作るための) 父型 (ふけい)、パトリックス (※リーダーズ英和辞典から引用)

* パトリックス、父型；ドライオフセット用の母型鑄造 (ぼけいちゅうぞう) に使うライノタイプの活字の型 (※ランダムハウス英和大辞典から引用)

要するに、「お父さん」はいたのです。したがって、上述の「なお、「お父さん」ついで
の消息はなし。」を訂正いたします。

* 「父帰る。」 or 「お父さんが見つかった。」

とします。

教訓：比喩 (= 言葉のすり替え) には、十分に気をつけよう。言葉は欠陥品。特に、自
分のような「おっちょこちょい=浅はかなヒト」は、注意しよう。

以上、無知からの不手際がありましたことを、お詫び申し上げます。

とはいうものの、「お母さん」も「お父さん」も比喩=言葉の綾=レトリックですから、
事態には何の変化もないのですが.....。(2010.06.26 記)

09.03.02 女か男か？

◆女か男か？

2009-03-02

言葉を使って男と女を論じる場合に、忘れてはならないことがあります。

*「男」「女」と書いた文字、あるいは「otoko」「onna」と発せられた音声は、言葉という形で表された＝現れた「記号」である。

という、きわめて当たり前のことです。どうして、こんな分かりきったことを、わざわざ書いたのかと申しますと、

*ヒトは驚くほど忘れっぽい生き物である

からにほかなりません。

文学作品を例にとると、分かりやすいと思います。いわゆる小説では、男性（or 女性）名を与えられ、男性（or 女性）として描かれている登場人物が出てきますね。すると、読むヒトは、この登場人物は男性（or 女性）であると、当然のことながら思い込むわけです。作品を書いたヒトも、これまた当然そういう想定でストーリーを展開し、細部を描写するわけです。たいていは。

何の不思議もない。暗黙の了解とか約束事とかいう言葉を、持ち出す理由すらない。それなのに、わざわざこんなことを書いている。こいつは、いったい何を言いたいのだろう。相当頭がおかしいやつに違いない。そう思われてもおかしくないほど、当たり前すぎることです。

でも、自分なんかは、その「当たり前すぎるくらいのこと」に対し、「本当だろうか？」と疑問を抱いてしまうのです。そんな疑問を抱く最大の理由は、

*小説が言葉という記号で書かれた記号である。

からなのです。言葉に男女の差異つまり、「性・性差」があるのでしょうか？ 言い換えれば、記号に「性・性差」があるのでしょうか？ 記号において、

女か男か？

という問いに意味があるのでしょうか？ この反語的な疑問文は、

*記号において、女か男かを問う意味はない

と言いたいわけです。さらに踏みこんで言い換えるなら、

*言葉も記号も、「匿名的」で「非人称的」で「中性的」なものである

となります。今、上で書いた「センテンス＝フレーズ＝命題＝判断」を否定する、あるいは否定できるヒトもいる気がします。世の中には、実に器用な言葉の使い手がたくさんいるからです。哲学や論理学と呼ばれているギョーカイに、そうした手品師＝ペテン師が多いようです。広告代理店にも、うようよいそうです。大臣の答弁を代書する官僚の中には確実にいます。

*

「(E)E」という小説で出てくる「○子」は女性、「△夫」は男性、文句あつか？ ということを、実に「明快な＝胡散(うさん) くさい＝いかがわしい＝杜撰(ずさん) な」「論理＝筋道＝言葉の使い方＝口のうまさ」で証明するのです。

そうした光景は、これまで何度も見聞きしてきました。もちろん、証明するさいに使われる道具は、だいたい言葉です。中には、一種の「式」を使う「器用な＝奇特な」ヒトもいます。論理学や一部の哲学という「村々」にいます。自分には、さっぱり分からないので「式」と呼んだのですが、あれって何なのでしょう？ 得体の知れないものなので、もっとその実体＝実態をよく拝見させていただいた後に、いつか考えて書いてみた

いものです。

話を戻します。

*

＞*言葉も記号も、「匿名的」で「非人称的」で「中性的な」ものである。

上記の「センテンス＝フレーズ＝命題＝判断＝説」を否定する、「センテンス＝フレーズ＝命題＝判断＝証明」を、浅学寡聞（せんがくかぶん）の身である自分は、まだ見たことがなく、勝手に妄想＝想定しているだけです。確信も確証もありませんが、そういう証明ができるヒトがいても全然おかしくないという漠然とした思いがあります。というのも、言葉を用いれば、何とでも言えるし書いてしまうからです。

まだら状にしか、森羅万象を知覚＝認識＝感覚できないらしいヒトは、欠陥品としての言葉を日々利用しているのですが、何しろ月まで仲間を送りこんだという自信を持っています。原子爆弾を発明したという自負もあります。もしも言葉が欠陥品だったら、今述べた2つのいわゆる「偉業」は成し遂げることができなかつただろう。という具合に、その類のいわゆる「事実」の数々を挙げるという方法によって、ずいぶん「牽強附会（けんきょうふかい）＝デタラメ＝非論理的＝お門違いな」「論法を展開し＝論陣を張り」、

*言葉は欠陥品である

という説を否定しそうな、別に哲学や論理学と呼ばれているギョーカイに生息して「いない」ヒトなんかも、吐いて捨てるほどいそうですね。そういうヒトたちに、「言葉は欠陥品などではない」と言われた場合には、自分は返す言葉がありません。というか、思いつきませんし、反論する気力もありません。議論の類が、苦手でない性分なのです。相手の勢いに飲まれてしまい、何も言えなくなるために、その「議論には負けた」と判定されてしまう。これまで何度そうした経験をしてきたことでしょう。

やっぱり、いつもの癖で、いつの間にか話がそれましたね。「言葉や記号が匿名的で非人称的で中性的なものだ」という話から、「言葉は欠陥品である」という話のほうへと、

方向転換してしまいました。そして、それにまつわる愚痴までこぼしてしまいました。とはいうものの、よく考えてみると、

＞*言葉も記号も、「匿名的」で「非人称的」で「中性的」なものである。

＞*言葉は欠陥品である。

という2つの説は、密接にかかわっていきそうな気もしてきました。当然ですね。言葉の限界性という点では、しっかりつながっていますもんね。並行して考えてよさそうです。

*言葉は言葉でしかない

と、

*言葉はそれが指し示す「もの・こと・さま」を忠実に指し示している

という相反するペアのどちらが本当みたい（※「本当」ではありません、あくまでも「本当みたい」というワンクッション置いた言い方をしています、なぜなら言い切れない＝断定などできないからです）でしょうか。今は、そういう話をしています。念のために書き添えました。

*

話を飛ばします。小説の中で、男女が入れ替わるという設定のものがあります。また、あるストーリーが展開した後に、最後になって、それは夢だったという結末にすることも可能ですね。後者の場合に、主人公である男性（or 女性）が実際には自分が女性（or 男性）であった夢をみていたという設定にすることも、当然できます。前者や後者の場合に、作品における「性・性差」をどう考えればいいのでしょうか？非常に興味深いテーマではないかと思います。

*

また、話を飛ばします。

(1) 女性 (or 男性) が書いた、主人公が男性 (or 女性) である一人称の視点から語られる小説

と、

(2) 女性 (or 男性) が書いた、主人公が男性 (or 女性) である三人称の一視点から語られる小説

とにおいて、「性・性差」をどう考えればいいのでしょうか？

次のように考えることもできます。女性 (or 男性) 作家が描く登場人物としての男性たち (or 女性たち) を、どう考えればいいのか？ こんなことを考えると、話はどんどん大きくなります。

オトナ (or コドモ) の作家が描く登場人物としてのコドモたち (or オトナたち) 。

この国のヒト (or この国以外のヒト) である作家が描く登場人物としてのこの国以外のヒトたち (or この国のヒトたち) 。

ヒトが描くキャラクターとしての他の生き物たち。ヒトが描くキャラクターとしてのモノたち。

ヒトが描くキャラクターとしての他の惑星の「生き物=エイリアン」たち、などなど。

このように「何でもあり」状態になってきます。当然です。

なぜなら、

＞*「トリトメのない記号」とは、森羅万象、つまり「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」のことです。どうして「記号」なのかと申しますと、「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」は、それとそっくりなものが、たくさん並んでいたり、あちこちに散らばる形でたくさん存在するからです。イメージとしては、スーパーに並んでいるカップラーメンを想像してください。ヒトもそうですよね？個性とか顔かたちを気にするのは、せいぜい自分自身か家族か友達か仲間か親戚くらいじゃありませんか？あとはいっしょくたになって「他人」として、存在している。そんな感じがしませんか？で、なぜ、その「記号」に「トリトメのない」がつくのかと申しますと、たった今書いたことと関係するのですが、どれもが「そっくり」であるからです。つまり、「没個性＝みんな同じみたい＝違いなんかどうでもいい」感じ。というイメージがあるからです。そっくりな点がそっくり、という感じなんです、分かっていただけたでしょうか？

だからです。

ちなみに、以上は、きのうの文章に「おいしくない社会」2009-02-23 からコピーペーストした一節を、ここでさらにコピペしたものです。

一般論として、コピペしたものが、

＞*「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝複製＝コピー」

であることは言うまでもありません。お分かりいただけたでしょうか？「記号」とは、そうしたもののなのです。ね、「トリトメがない」でしょ？これが「そっくりである」と感じられるようになるまでには、もう一歩です。まだまだ、各記号の個性や、複数の記号間の「差異＝違い＝隔たり＝間＝魔」にこだわっていると、記号たちが「そっくりである」ことがなかなか体感できません。

「そっくりなわけがない。1ケ1ケ違うじゃないか？ 何と言っても、違うものは違うの！」

と、おっしゃる方の気持ちは、とてもよく分かります。それが、「普通の感情＝普通の反応＝通念」だと思います。

でも、自分には、そうは思えないのです。というか、感じられないのです。ただ、それを言葉にして、ほかのヒトたちにある程度、あるいは、そうですねー、5人のうちの2人くらいのヒトたちに納得してもらえるくらいの説得力のある説明ができるかということ、今は全然自信がありません。また、自分の「勘違い＝錯覚＝事実誤認＝デタラメ＝アホの妄想」である可能性も大いにあります。もう少し考えてみます。

*

文学作品において「作者はいない」という意味のことを書いたのは、ミシェル・フーコーでしたっけ？ もし、自分の記憶が正しければ、フーコーは大した人でしたね。あれだけ理屈っぽい人たちが住んでいるフランスという国で、説得力を持って、あんな挑発的なフレーズを書いたのですから。

ところで、どうして自分はいきなり「作者はいない」なんて文句を思い出したのでしょうか？ ひょっとして、今この文章で書いていることと、関係があるからかもしれません。このフレーズも含めて、これから先いろいろ考えてみたいです。おもしろそうじゃありませんか？

では、また。

えっつ？ 終わりにしては、あっさりしすぎている、ですか？ では、官僚的＝事務的な「まとめ」をします。

性・性差の違い、オトナとコドモの違い、現実の出来事と夢の中で見た出来事の違い、国籍の違い、ヒトか他の生き物かの違い、ヒトか他の惑星の生き物かの違い――こうし

た違いが言葉として「語（かた）られた＝騙（かた）られた」場合には、

＞*言葉も記号も、「匿名的」で「非人称的」で「中性的」なものである。

＞*言葉は欠陥品である。

という前提に立てば、「違い」ではなくなる。それが、今回の「結論」です。なぜなら、物でも事でも現象でも出来事でもない「言葉という記号」においては、上述の数々の「違い」は実証も検証もできないからです。ややこしいですか？

じゃあ、こんなのはどうですか？

桃太郎の出てる昔話がありますね。それは言葉で語られたり、紙芝居になったり、アニメになったりします。

桃太郎が「男の子 or ヒト or 日本人 or コドモ」であることを、どうすれば証明することができるのでしょうか。

桃太郎とは、イメージであり、言葉であり、映像であり、絵である以外の何ものでもないのです。

オリンピックで女性に対してのみ行われるセックス・チェックを桃太郎にもするとか、身長や体重を測るとか、何歳かを医学的方法で測定するなんて、できますか？ 桃太郎から、検査用に採血することができますか？

今例に挙げた「桃太郎」を、あなたの大好きな小説やアニメの主人公や登場人物に置き換えてみると、記号というもののトリトメのなさを体感できると思います。たとえば、小説の登場人物であるハリー・ポッターでも、映画化された作品に出てくるダニエル・ラドクリフ君が演じるパリー・ポッターでも、事態は変わりません。

ちなみにラドクリフ君ではないですよ。彼が演じるパリー・ポッターという役柄、および彼の映像を問題にしているのです。そこを混同なさないようにお願いします。

ハリー・ポッターを主人公にした本は、印刷という形で、そっくりなもの＝記号として、全世界に散らばって存在していると考えられます。ラドクリフ君の映像も、フィルムやDVDや写真という形で複製されて＝記号化されて、世界中に遍在しているはずで、それが「トリトメのない記号」です。お間違えのないようにお願いします。

以上のような「トリトメのない話＝よく考えれば当たり前の話」を、きょうは致しました。

今回は、「トリトメのない話＝よく考えれば当たり前の話」を別の視点から考えてみようと思います。

09.03.03 ヒトは本を読めない

◆ヒトは本を読めない

2009-03-03

自分は本を読むことが苦手です。簡単に言うと、面倒なのです。現在は、事情があって本を買う余裕がありません。でも、以前は盛んに買って積ん読するという癖があり、その名残で本は少しありますが、全然読んでいません。時間はあるのに、読む気力がない。ただ、ぼけーっとしながら考えたり、考えたことを紙切れに走り書きしたり、作文をするのは好きです。それくらいしか、楽しみがないというべきでしょう。

本のタイトルを眺めながら、その内容を妄想するのも大好きです。自分が積ん読している本の背表紙を見ているのも楽しいし、新聞に掲載される広告や書評でタイトルを知っ

たり、その内容についてのちょっとした説明文やキャッチフレーズや書評・レビューがあれば、それでもう十分です。というか、それ以上は、もうたくさんといった感じです。

こうした自分の性癖については、小学生だったころに通知表に決まって書かれていた「人の話を聞かない」「落ち着きがない」という評価の延長ではないか、と思っております。今書いていることは、「飽きっぽくて、忘れっぽい」2009-02-19 という作文で述べた内容の繰り返しだと気づきました。

で、その文章をパソコン内に保存されている文書から探し出し、読み返してみたのですが、やはりほとんど同じ趣旨のことが記してあります。あっ、その文書の中に、いいものを見つけました。きょう書きたいと思っていたことです。さっそく使ってみます。リユース＝リサイクル＝エコ＝無精＝横着＝コピペです。

*

>ところで、みなさん。

>*ヒトは本を読めない

>という説を、お聞きになったことがありますか？ どういうことかと申しますと、「文章＝テキスト＝テクスト＝text＝textile＝織物」を読むという行為は、実に不確実で不安定なものであり、誰一人として、書かれたもの＝意味するものには到達できないし、解釈はヒトによって異なる、という当たり前と言えば当たり前の「屁理屈＝本当のこと＝正論」なのです。だからこそ、1冊の本についての読書感想文は、ヒトによって異なるわけですし、学者の世界では、あるカリスマ的なギョーカイ人が何かを書くと、それをめぐっていろいろな意見を吐くヒトたちが現れ、「喧々譁々（けんけんがくがく）＝キリのない口喧嘩」をするわけです。それだけ意見が分かれるのならば、ヒトは1冊の本さえちゃんと読めないのだ、と言っても、的外れな意見とは言えないでしょう。

(中略)

>で、読むという行為の不可能性に過度にこだわったのが、たとえば、ステファヌ・マラルメ、ジャック・デリダ、モーリス・ブランショだったのです。一方で、その不可能性に快樂を見出すというおもしろい曲芸を見せてくれたのが、たとえば、ロラン・バルトというヒトでした。

*

以上の文章を引用できただけでも、助かりました。「引用＝コピー＝複製」万歳！ という感じです。または、いやー、コピペって、本当にいいですね、という感じです。

*

で、そうなのです。上記のように、

>*ヒトは本を読めない。

ということについて、きょうは書きたかったのです。

ヒトは本を読めない、ということを別の面から考えてみましょう。「話のすり替え＝比喩＝たとえ＝こじつけ」を使いますので、自分も極力気をつけますが、みなさんも注意して読んでくだされば幸いです。こればかりは、つつい自分が「嘘＝話のすり替え」をやっているのを忘れてしまうんです。

*

で（※「で、」が多くて申し訳ありません。これ、癖なのです。景気づけみたいなものです）、きょうは、「本を読むというという行為」を、「ガラスを通して向こう側を見るという行為」にたとえてみます。

まず、ガラスを「意味するもの＝意味するまぼろし＝言葉（※この場合は文字）」にたとえます。

次にガラス越しに見える景色を「意味されるもの＝意味されるまぼろし＝見るヒトおよびそのヒトのその時の意識によって左右され変化する一定しないもの＝わけの分からないもの」にたとえます。

ちなみに、ガラスはかなり汚れていると考えてください。

よろしいでしょうか？

で、ガラスの汚れに注意を払うと、向こうの景色は意識に入りにくくなりますね。でも、見慣れた風景なら、ガラスの汚れに目をやり焦点を合わせ、

「きたねーガラスだなあー、これは誰の手の跡だ？ 指紋もついているじゃないか。この部屋はおれ（or わたし）の部屋だから、自分の指紋か？ おっと、これは、この間横着をして飛ばした、鼻くそじゃねーか！ あれっ、ずいぶん外側も汚れているなあー。そうか、外からガラス拭きなんか、この何年もやっていないもんねー。雨風が自動的に掃除してくれてるって思っているから、これからも掃除する気はないし。げえっ、これは鳥のふんだな」

というふうに思いつつも、そのガラス越しの景色は、ばっちり見えていると思ひこむのではないのでしょうか？ これって、自分が内容を知っていると思ひこんでいる文章を読むのに似ていませんか？ 比喩ですから、「同じですね」ではなく、「似ていませんか？」とお尋ねしました。

上の比喩の具体例を、さらに挙げるとすれば、きのうのテレビのニュースで大まかな情報が頭に入っている新聞記事を読み流すことです。または、「軽い＝どうでもいいような」内容の文章をざっと読むことや、自分が書いた報告書を読み返す作業や、自分が概要を知っていたり予備知識のある文章をキーワードを拾い読みしながらどんどん読み進むとかいうある種のやらせの「速読」です。あるいは、エンターテインメント性の強い小説の読書などが、該当するのではないのでしょうか？

要するに、文字を追うというより、内容を想像する＝見当をつける＝軽く確認するという作業に重点が置かれている場合です。どれもが、精読＝熟読とは、かなり隔たりのある読み方だと言えますね。

*

次に、上とは対照的な読み方を想像してみましょう。いわゆる精読＝熟読です。これも、話のすり替え＝比喻で説明してみます。

すごく汚れたガラスを掃除しているさまを想像してください。

家であれば、ものすごく口やかましくて怖い奥さん（or 夫 or 親 or 子）とか、頭の中で自分を生徒時代に逆戻りさせて、暴力的な学年主任に、何かの罰としてやるように命じられた作業だと考えてみましょう。

「こりゃあ、手抜きはできない。真剣にやらなきゃ。やり直しなんかしたくないし。ちょっとでも汚れやくもりが見つかったら、さらに何か別の作業を押しつけられそう」

そんな気持ちになりませんか？ そういう場合だったら、ガラス越しに見える景色を眺めるところではありませんよー。

もう必死になって、ガラスそのものに集中します。正面から、右から左から、中には、上から下から、ガラスの反射具合を気にしながら、一生懸命でぞうきんや布と専用のクリーナーを使い、時には「はあー」なんて、息を吹きかけながら手を動かすのではないのでしょうか？

そんな様子を想像すると、何だかおかしくて笑っちゃいそうになりませんか？ 他人事（ひとごと）だと思となおさら、滑稽ですね。でも、これが自分の身にふりかかった災難であれば、笑い事では済まされませんね。

こうした比喩に相当する読書って何でしょう？

字面というか、一字一句というか、書かれている内容も含め、おろそかにできない読みを要求する場合って、具体的には何でしょう？

極端な例を挙げれば、校正や、編集者が自分の担当する書籍の刷り上り原稿を読む作業が頭に浮かびます。

ものすごく神経を使うでしょうね。あるいは、

普段なら全然読まない保険の約款を、病気や事故や火災に遭ったさいに、どうしてもじっくり読まなければならなくなった場合なんて、考えられますね。

どれだけでも、自分に有利な条項や条件が書かれていないか、必死になって読むでしょうね。お金がからむと、たいていヒトは真剣になります。大金であれば、なおさらです。

保険の約款とか、契約書一般、そして法律の文章というのは、読み方というのがあって、それを知らないと、とんだ誤解や勝手な解釈をしてしまいがちです。みなさん、「以上」と「超える」、「以下」と「未満」の区別のほかに、「又は」と「若（も）しくは」、「及び」と「並びに」、「以前」と「前」、「以後」と「後」、「以内」と「内」の違いをご存知ですか？ 法学部などで法律の文章を読む手ほどきを受けたヒトであれば、いろはの「い」として区別できるはずです。

でも、素人には、ちょっと無理ですよ。たとえば「AからBまで」だけでも、「A」と「B」を含むかどうか、きちんと前もって決めておかないと後でもめます。または、条項に「注」を付けるという工夫をして、お互いに誤解のないようにしておかないと、議論が分かれてしまいます。それで、千万、あるいは億という損害をこうむる可能性だって、大有りなんですもの。自分のような小心者は、考えただけで、気が遠くなりそうです。

*

「ガラス越しに見る」と「ガラスそのものを見る」という、以上2つの極端な例を挙げたところで、文学作品、たとえば村上春樹さんでも、宮部みゆきさんでも、誰でもいいですから、作家の書いた小説を読む作業に、話を戻して考えてみましょう。

「作品の世界にずっと入っていける」とか、「読みやすい」とか、「容易に主人公になりきれ」とか、よく言いますね。思い出しましたが、「さくさく読める」なんて言い方も、最近はしますね？ それとも、もう死語ですか？ そういう流行語的な表現にうといので、分かりませんが、まあ、それはどうでもいいです。

一方で、「何を言いたいのかさっぱり分からない」（※この駄文みたいに）とか、「言葉遣いや用いられている漢字が難しい」とか、「登場人物に感情移入しにくい」とか、「途中で読むのをやめたくなる（※別のサイトに飛んじゃいやですよ、どうか続けてお読みください）」と言う場合があります。

要するに、「読みやすい」か「読みにくい」かですね。その理由や事情や背景は、ここでは詳しくは問題にしません。また、読むひとたちの読解力や理解度も、問題にしません。話がややこしくなるだけですし、きょうのテーマでは、そこまで議論する必要がまったくないからです。とにかく、「読みやすい」か「読みにくい」かの2つの場合がある、に的を絞って、小説を読むことの「可能性＝不可能性」について、大雑把に話を進めていきましょう。

*

さて、ここで再び、

(A) ガラス越しに向こうの景色を眺める、

(B) ガラス拭きをする、

という比喻を持って来ます。

1編の小説が全部（A）型、あるいは全部（B）型で読めるわけではありません。これも、比喩ですが、1冊の本が「まだら模様＝まばら状」だというのが実態に近いのではないのでしょうか？ 読みやすいところもあれば、読みにくいところもある、ということです。また、（A）型と（B）型との間は、はっきりと2つに分かれることができると考えるのは極めて杜撰（ずさん）で単純な発想だと思います。「段階的＝濃いから薄いまであり＝グラデーション」であると考えるのが妥当でしょう。

ということは、1冊の本を読むさいには、時にはガラス越しに向こうの景色を眺めるように読んだり、また時にはガラスそのものの汚れに気をとられるようにして読むというのが、割と正確な言い方なのではないのでしょうか？

だから、

＞*ヒトは本を読めない。

のです。これって飛躍ですか？ せっかちなので、いきなり飛びましたが納得していただけますか？ 納得していただけない方は、その納得できない部分を、想像力で補っていただけますか？ そうですねー、ちょっと説明を加えましょうか？ 10人のヒトがいて、まったく同じ小説を読んだとします。でも、その読み方は、上の比喩で見てきたように、それぞれが違うわけです。

*ヒトは誰もが、「文章＝文字」を「まだら模様＝まばら状」に知覚しながら読んでいる。

つまり、

*トリトメのない＝頼りない＝心もとない＝情けない＝テキトーな＝トホホな読み方し
かできない。

ということになりませんか？

あるいは、これもたとえですが、

*ヒトはかなり酔っ払った状態で読んでいる。

とも言えます。もちろん個人差もありますよ。いずれにせよ、ヒトは誰もが酔っています。千鳥足状態で、危なっかしいことは確かです。これは、一押しすれば、

>*ヒトは本を読めない。

と言えるのではないのでしょうか？ もう、このさい、そうだと言っちゃいましょうよ。思い切りが肝心です。なんて、めちゃくちゃ感情に訴える言い方をしてしまいましたが、そうお思いになりませんか？

何だか、きょうの記事は、最後のほうが、強引すぎた気もするので、いちおう、もう少し考えてみます。みなさんも、お時間があれば、考えてみてください。

09.03.04 作者はいない

◆作者はいない

2009-03-04

大学に進学して外国文学科に籍を置いたころには、新しい批評が流行していました。英米の「ニュー・クリティシズム」、フランスの「ヌーベル・クリティック」が盛んにこの国にも紹介されていました。「パイディア」、「エピステーメ」、「ユリイカ」、「現代思想」、「海」といった雑誌や複数の出版社が、そうした新批評の紹介の場として一翼ならぬ幾翼かを担っていました。雑誌には、外国語で書かれた書籍の一部や論文を訳したも

のが掲載されていたわけですが、わくわくしながら読んだものです。

自分の場合には、「パイディア」が休刊か廃刊し、「エピステーメー」が創刊された時期に、大学生になりました。ミシェル・フーコー、ロラン・バルト、ジル・ドゥルーズ、ピエール＝フェリックス・ガタリ、モーリス・ブランショ、ジャック・デリダなどの訳書も、ぞくぞくと出版されていました。どれもが難解でした。訳が悪いのか？ そもそも翻訳が不可能なのか？ こっちの頭が悪いだけか？ 判断に苦しんだことを覚えています。

そうした新しいタイプの批評や哲学書を翻訳するだけにとどまらず、日本語で海外の批評家や哲学者の「仕事＝作品」を論じたり、海外の作家の文芸作品を新手法で批評したり、あるいは日本の作家の作品を新手法で批評する試みをする人たちも出てきました。日本版「新批評」の登場という感じですね。その中でも刺激的な仕事をしていたのが、蓮實重彦氏でした。自分は、同氏の影響をかなり長い間受け続けていました。今、考えると、洗脳されちゃった、に近い状態でした。

ただし、同氏の映画批評と中上健次に対する評価だけからは影響されませんでした。前者は、そもそも自分が1本（or 編）の映画を見るだけの忍耐力と持久力がないという単純な理由、後者は、中上健次の作品のどこかいいのか全然話分からないという好みの問題だったのでしょうか。両者についての状況は、今も変わりません。ところで、中上健次って、どこかいいのですか？

納得できる批評なり説明を、寡聞ながら見聞きしたことがありません。存命中は、みんながその「腕力」を恐れていただけ。そんなイメージがあります。死後も、「中上はすごい」と言っている人たちは、生前の「腕力」が刷り込まれてしまったのか、「洗脳」が解けていないのか？ 自分には、謎です。いずれにせよ、すごい「虚勢＝去勢＝巨星」力の持ち主だったみたいですね。とは言うものの、例外があります。中上健次の『岬』という小説の文体が好きです。自分が小説を書くさいに、何度か参考にしました。

*

話を戻します。

「女か男か？」2009-03-02 という記事の最後のほうで、

＞文学作品において「作者はいない」という意味のことを書いたのは、ミシェル・フーコーでしたっけ？ もし、自分の記憶が正しければ、フーコーは大した人でしたね。あれだけ、理屈っぽい人たちが住んでいるフランスという国で、説得力をもって、あんな挑発的なフレーズを書いたのですから。

と書きました。「ニュー・クリティシズム」(英米)、「ヌーベル・クリティック」(仏)、「新批評」(日)で用いられていた新しい手法＝芸＝演出に共通するのは、

*文学作品を、その作者の評伝や思想に「還元＝こじつける＝事務的にかつ安易に結びつける＝復元する」のではなく、作品自体をあくまでも言語から成る構築物とみなして、その言葉の「様態＝様相＝表情＝身ぶり＝運動＝記号性」に徹底してこだわる。

という、姿勢＝覚悟＝構え＝ポーズ＝パフォーマンス＝演技＝プレゼン法でした。そうしたスタンスを、挑発的に短くずばりと言うとすれば、

＞*「作者はいない」

あたりが、カッコいいフレーズでしょう。今は、何だか、こういうのが流行りませんね。ヒトは、忘れっぽいし飽きっぽいし諦めやすいですから。次々に、新しいキャッチフレーズ＝流行語＝新語＝標語＝「口にすれば、他のヒトたちから、おーっ！ とか言われるような、新しくてしゃれた言い方はないかなあ」＝「こけおどしの文句」を求めるのが、ヒトの習性ですから仕方ないです。新ネタを探し求めつづける、きみまるさんの気持ち＝「もう、いい加減に、この仕事やめてーなー」＝焦りがよく分かりますね。

きのうの記事では、

＞*ヒトは本を読めない。

というヒトの習性について書きました。で、書いた後も未練がましく、いろいろ考えていて、ああ、そう言えば「ヒトは本を読めない」と「作者はいない」とはつながるわい、

などと思いついたのです。というわけで、きょうはもう少し言い方を変えて、

*ヒトは、自分が書いた文章さえも読めない。

という説について書いてみようと思っているのです。とはいうものの、よく考えると、これって、すごく当たり前のことで、わざわざ*マークなんか付けたり、前後を1行空けにしたりして、目立つレイアウトにするのも気恥ずかしいことなのではないか？ と、今ふと思っています。だって、

*自分が書こうと、ほかのヒトが書こうと、言葉は「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝複製＝コピー」でしかあり得ない

からです。

*

ですから、「この言葉（or 語句 or フレーズ or センテンス or 一節 or 文章 or 論文 or 本）は、わたしだけのもの」「誰にもあげない」「著作権はわたしにある」「これは、わたしのオリジナリティの産物以外の何ものでもない」などと考えているヒトが圧倒的に多い、現在のこの惑星では、「作者はいない」などと言えば、

「あほちゃうか？」

「著作権様を何だと思っているのか、けしからんやつだ」

「危険ですねー、こういう考え方は、著作権や知的財産権の乱用や無視を助長しますよ」

「この種の発言をする者には、即、罰則を適用する仕組みを考えだすべきだ」

なんて被害妄想的な反論を、自分はぞくぞくと思い浮かべてしまうのです。

著作権や知的財産権は極めて経済的な視点に立った考え方ですから、資本主義や市場経済の下では、めちゃくちゃ優勢なわけです。だから、小心者なうえに、ほかのヒトたちとの摩擦＝対立＝喧嘩＝議論＝「このやろー」の応酬が大の苦手で、さらに面倒くさがり屋である自分は、

「そ、そうですね。やっぱ、そうですよー。仰る通りです。失礼しました」

と言って、逃げちゃうわけです。ですので、著作権の話は、ここではこれ以上致しません。

*

以上のような文章を書いているながら、自分も「ヒトの子＝人間様のはしくれ」であり、二枚舌でもあり、いかにテキトーでデタラメなやつかということは、やたら、>を使って自分の記事から引用やコピペをしたり、「うつせみのあなたに」の倉庫などと称して、「うつせみのうつお」というタイトルのブログを開設しているさまから、よくお分かりになるでしょう。【注：「うつせみのうつお」とは、かつてブログで書いた文章を「倉庫」のように保存していたサイトです。今はありません。】

やはり、「自分が書いた」とされる「自分の作文」を「自分に無断で」、ほかのヒトに使われることを恐れてもいるし、もしそんなことがあれば、

「ふざけんなよー」

とか、

「こんちくしょー、訴えるぞ」

とか、

「いつか、これをネタに本でも出そうかと思ってんだから、パクっちゃだめ」

なんて、心の内では思っているのです。

このさいですから、あっさり認め白状しておきます。ヒトは、「殺生はいけないぞよ」なんて言って、動物も植物も含む、ありとあらゆる生き物を撰取したり、殺戮せずに生きていけないのと同じです。ちなみに、たった今書いたセンテンスでは、「比喩＝話のすり替え」と「誇張法 (hyperbole)」という、「レトリック＝修辞法＝言葉を用いたまやかし・ごまかし・ペテンの一種」を、いけしゃあしゃあと使いました。

ヒトなんて、こんなものですよー、なんて自己正当化しちゃって、自分でもほとんどあきれます。

*

で、

>*ヒトは、自分が書いた文章さえも読めない。

ですが、これ、仕方がないんです。言葉を書いてしまった瞬間から、話はきのうの作文で書いた、

*

>さて、ここで再び、

(A) ガラス越しに向こうの景色をながめる、

(B) ガラス拭きをする、

という比喩を持ってきます。

1編の小説が全部(A)型、あるいは(B)型で読めるわけではありません。これも比喩ですが、1冊の本が「まだら模様＝まばら状」だというのが実態に近いのではないのでしょうか？読みやすいところもあれば、読みにくいところもある、ということですね。

また、(A)型と(B)型の間は、はっきりと2つに分かれることができると考えるのはきわめて杜撰(ずさん)で単純な発想であって、「段階的＝濃いから薄いまであり＝グラデーション」であると考えるのが妥当でしょう。ということは、1冊の本を読むさいには、時にはガラス越しに向こうの景色を眺めるように読んだり、また時にはガラスそのものの汚れに気をとられるようにして読むというのが、割と正確な言い方なのではないのでしょうか？

>だから、

>>*ヒトは本を読めない。

>のです。

*

という具合に繰り返すしかないのです。

さらに横着をして、きのうの記事から「自己輸血＝自分の書いた記事からの引用」(※やっぱり著作権を気にしていますね)をすると、

>*ヒトは、誰もが、「文章=文字」を「まだら模様=まばら状」に知覚しながら読んでいる。

>つまり、

>*トリトメのない=頼りない=心もとない=情けない=テキトー=トホホな読み方しかできない。

という事態の再確認をするしかないのです。

きょう、書こうと思っていたことの大半が、きのうの作文のコピペ=リユース=エコ=エゴ=リサイクル=複製=横着=「ああ、楽ちん」で済んでしまうわけです。節操がないですよ。どうか、お笑ください。思いっきり、軽蔑してください。でも、そうなっちゃうんですよ。少しでも、ご理解くだされば、そんな嬉しいことはないんですけど。とにかく、

>*「作者はいない」

のですから、この記事も書いたとたんに自分から離れてしまい、このブログを読んでくださっている、たぶん複数の方々によって、さまざまな受け取り方をされもし、受け取り拒否にもあうだろうし、

「ああ、ばっかみたい」

というお言葉と共に、他のサイトへと

ピューっ

なんて飛んでしまう方々がいらっしゃるわけです。

実は、この「作者はいない」については、きょうはこれくらいにして、あさってあたりに続きを書こうかなど、今そわそわしているのです。というのは、さきほどトイレに行くために、パソコンの前から中座したさいに、居間の新聞にふと目が行き、それに載っていたあるフレーズを目にしてしまったのです。そのフレーズを見た瞬間、いろいろな考えが、ばあーっという感じで頭の中に浮かんできまして、今はそっちのほうに気をとられている状態に陥っちゃったんです。

「作者はいない」は後回しでいい。そのフレーズについて考えてみたい。こっちのほうが、とりあえず、今はおもしろそう。あすはこのことをテーマにして記事にしたいな、という感じになり、もうちゃっかりとメモ用紙を取り出しています。実に飽きっぽいですね。困ったものです。

とはいえ、あまりにも無責任だという気もしていますので、とりあえず、きょうの記事の結論めいたことを書いておきます。

*

たとえば、夏目漱石作とされている『ころ』の作者は誰でしょう？

夏目漱石というヒトではなく、

「夏目漱石」

という

「固有名詞（※ヒトではありません、名前です、念のため）」＝「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝複製＝コピー」

が

「作者名」

という形で、

「作品名（※作品そのものではありません、作品の名前です、念のため）」

と慣習としてくっ付いているのです。

つまり、

セットになっている

のです。それだけの話なのです。それ以上でもそれ以下でもありません。

駄目押しの言い添えるなら、

『こころ』という作品（※言葉です、念のため）

は、

夏目漱石という「ヒト」（※「ヒト」と呼ばれている言葉です、念のため）

の

「伝記的事実＝人生観＝思想（※たいてい言葉として存在します）」

なんかに置き換えることなど、とうてい不可能な

* 「匿名的で＝非人称的で＝中性的な」「言葉たちの集積」

なのです。

で、

その言葉たちは、

* かつて実在した夏目漱石というヒトも、読んだことのない、というか、読めなかった「トリトメのない記号」だ

とも言えるでしょう。

夏目漱石くらいの大勉強家であり、大思索家であれば、そうしたことは分かっていたと思われる節もあります。それほど読まれていませんが、漱石の『文学論』に、おやつと思われるような記述があった記憶があります。これは「文学作品＝記号」という意味じゃないの？「ニュー・クリティシズム」(英米)、「ヌーベル・クリティック」(仏)、「新批評」(日)の先取りじゃないの、とその時に勝手に思いこんだ覚えがあるのです。いつかその部分を探してみます。記憶違いかもしれませんので。

さて、この辺で自分も、さっきの

「ああ、ばっかみたい」

とおっしゃった妄想の中の声の主と同様に、ピューっなんて消えてしまおうかと思っております。では、また。

ピューっ！

09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって

◆おくりびと vs. 千の風になって

2009-03-05

きのうの記事で「作者はいない」というフレーズをもとに、いろいろヘリクツをこねていた途中で、トイレに行くために中座し居間のテーブルに広げてあった新聞の記事をふと目にしました。そこに「おくりびと」という映画について書かれていたのです。そういえば、米国のハリウッドでアカデミー賞 (the Academy Awards = the Oscars、複数であることに注意しましょう) のワン・オブ・ゼム = one of them = さしみのつま的作品賞 = 「腐ってもアカデミー賞には違いない」部門賞をとったのだなー、と思い出しました。

で、またしても悪い癖が出ました。1冊の本や1本 (or 編) の映画を見るだけの忍耐もないのに、そして実際には読んでも見てもいないのに、タイトルやちょっとした世評を見聞きしただけで、勝手にその作品についてあれこれ考えて勝手に結論づける。そうした無視 (= 見てもいない = 読んでもいない = 内容をないがしろにする) の虫が騒ぎ始めたのです。

ですので、きょうは、その「おくりびと」ブームにちゃちゃを入れるというか、難癖 = ケチをつけたいのです。1匹のへそ曲がりとしては、絶好のチャンス到来という感じでございます。ブームの鮮度が落ちないうちに片付けておきたいなー、などと考えているのです。嫌な性格のオヤジだなーと思われた方、正解です。実際、世間一般からすれば、偏屈で嫌なオヤジなのです。でも根は心優しいいいヒトですよー、なんて勝手に自己弁護しておきます。

たとえば、外を歩いていて、困ったようすの人を見れば、ついつい、「どうか、なさいましたか？」などと問題点を尋ね、自分でできる限りの、その場での対処をしてしまう、お節介野郎でもあるのです。放っておけない性質（たち）なんです。「いいえ、けっこうです」とか「大丈夫です」とか「かんげーねーだろー」とか言われても、めげません。「親切泥棒」と思われるのか、妙に気味悪がられたり、不審がられたり、ひどい場合には、いきなりにらまれて逃げられたりすると、へこみますけど.....。

ただし、暴力沙汰だけは絶対に介入しませんというか、できません。腕力が限りなくゼロに近いのです。せいぜい、そっとその場を離れて最寄りの交番にたれこむか、ケータイで110番して、やはりたれこむくらいです。難聴者なのでケータイは苦手ですが、現在いる所在地と、起きていることを説明し、名前を言って切ります。放っておくことは、まずありません。へそ曲がりにも、それなりの「仁義＝作法」があるのです。念のため、書き添えておきます。

*

いちおう、そうした断りをしたうえで、悪態をつかせていただきます。で、またもや、このところ癖になってしまったコピペ＝横着をします。

>*みんなで偏屈者になる（※「おらっ、パリテキ！ 屁理屈野郎の、デタラメ野郎の、2千円詐欺野郎の、食い逃げ野郎の、寄生虫野郎めが。さっきも、おんなじようなこと、わめーていなかったか？ おめー、もしかして、ヘンクツ教の教祖になりたいんじゃ、ねーだろうな。それも、りっぱな、ファシズムだぜー」by ゲンチョー。ああ、幻聴。ゲンチョーさん、滅相ありません。いずれにせよ、ご助言に感謝します。メモがダブったみたいです。すみませんでした。「信者」を集めて＝合わせて「儲」けるなんて、自分は言葉の遊びだけでしか、考えたことはありません。「それって、〇〇教が事件を起こしたとき、さんざんメディアでやっていたギャグじゃんか、この盗作野郎めが」by ゲンチョー。ああ、またもや幻聴。そうでしたっけ？ 使用済みですか？ あれって、著作権で保護されているんでしたっけ？「すっとぼけるな」。ごめんなさい。反省します。）

>*みんなが熱狂していることを疑おう（※レジ袋追放＝マイバッグ使用、メタボ解消、勝間本、きみまるブーム、気づき、〇〇占い、オバマハン、オクリビトなどなど。いつまで続くやら？ ヒトは飽きっぽく諦めやすく忘れっぽい。それに、豹変＝一転しやす

い。あすの日も分からない。この10年間を振り返っても、言えること。イラク成敗、時代の寵児だった頃のホリエモン、石原再選（※これ、すごく嫌なんです）、サブプライムローン、デリバティブ、貯蓄から投資へ、小泉人気、レーシック——は、今はどうなっちゃったの？ 毎年、新語・流行語大賞が決まった時には、その言葉は既に「死に体」か「死語＝死後」。きのうの善人＝英雄が、きょうは悪人＝憎まれっ子。すべてのことには、良いところも悪いところもある。ヒトは、1度にその1面しか見ない。そのほうが、楽だから。だから、一方に、みんなが傾きそうになったら、もう一方に身をそらす。そして、斜めから眺めてみる。そんな生き方も、あっていいのではないのでしょうか？)

＞*世の中の振り子に振り回されずに、自分が揺れよう（※上の言い換えですね。あなたの人生そのものじゃないですか。もっとも、あなたの場合は千鳥足。）

以上は、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27 から引用しました。なお、この日の記事では、「*——」部分が「漫才のボケ＝お能のシテ」で、「(※——)」部分が「ツッコミ＝ワキ(＝ツレ)」という形式になっています。で、今、気がついたのですが「おくりびと」が、ちゃんと出てきていますね。

さて、「おくりびと」が流行り始めたころ、へそ曲がりの自分の頭に浮かんだのは「千の風になって」でした。ほらほら世の中の死生観の振り子が揺れてきたぞって感じがありました。で、連想したのは、かつて粗食ブームからグルメブームだか健康食ブームだかバカ食い芸人ブームだかへと、振り子が揺れたことでした。正確には覚えていませんけど。

やっぱり、

＞*ヒトは、飽きっぽく、あきらめやすく、忘れっぽい生き物である。

なのです。で、次のように思いました。

「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝まぼろし＝複製＝コピー」は、市場経済を基盤とする社会では、せつせと生産(or複製)され、購入(or入手)され、消費(or流通or保管)され、やがては廃棄・処分されますね。こうした「記号のライフサイクル＝チェー

ン＝連鎖＝一生」を記号ごとに独立したものとしてとらえるだけでは、説明不足ではないか？ここに、

*記号は、「振り子運動＝静と動の反復＝右往左往＝波＝山と谷＝バランス＝均衡＝ぎったんぱっこん＝ブレまくり」を経る。

という視点＝見方＝要素を加えるべきである。そうすれば、記号のトリトメのなさ＝千鳥足ぶりを目の当たりにしたさいに、ある程度の「見込み＝見通し＝「次はこうなるんじゃないの？」＝「この次は、これのバッシングかな？」＝予測」が立つのではないのでしょうか？

これまた、すごく安易＝安直な説明であり、誰もが薄々感じていること、つまり「言うまでもない＝当たり前のこと」ですよね。でも、さまざまな記号たちを、単に静的にとらえるのではなく、動的＝ダイナミックな運動として観察する視点を与えてくれるという意味では、ぜひ考慮すべき考え方だと思うのです。

*

話を、

「おくりびと」 vs. 「千の風になって」

に戻します。葬儀に関して、最近よく見聞きする言葉に「直送 or 直葬」があります。詳しいことは「葬儀」と「直送 (or 直葬) とは」をダブルのキーワードに、ググるなりヤフるなりしてください。簡単に言えば、亡くなった方を極めて簡素な方法で「おくりする」ことです。

うちは自分が死んだ場合も、親が死んだ場合も、通夜や葬儀なしで直送すると決めています。骨も拾いませんから、お墓も要りません。仮に骨を拾ったとしても、小鉢なんかに入れてすってパウダー状にして、好きだった山にまくか川に流す。それでおしまいにする予定になっています。

その意味では、「千の風になって」型です。ちなみに、香典も献花もいただきません。うちは交際が薄い家庭なので、いただくこともあまりないだろうと想像しています。万が一、お持ちくださった方には、

「お気持ちだけ、いただいております。誠にご面倒だと存じますが、お金は恵まれない方の寄付に回していただければ、故人もきっと喜ぶでしょう」

などというセリフのリハーサルも、たまに独りで行っております。

ですので、「おくりびと」なんていう発想が、まったくないのです。「おくりびと」が数あるアカデミー賞のうちのある部門の候補になる前に話題になったとき、これって「千の風になって」への、反動＝つらあて＝当てこすりか、全国の葬儀関連業者の組合か団体提供による、広告代理店を利用したマーケティング＝メディア戦略の一環ではないか、と真っ先に妄想したくらいです。もちろん、実際はどうかは知りません。感想を述べているだけです。念のため。

*

映画「おくりびと」も歌・歌詞「千の風になって」も、それぞれが「そっくりなもの＝トリトメのない記号＝まぼろし＝複製＝コピー」であることは言うまでもありません。生産（or 複製）され、購入（or 入手）され、消費（or 流通 or 保管）され、やがては廃棄・処分されるのは、上で述べた通りです。具体的に、両者はどう違うのでしょうか？

おおげさに、もったいぶって言えば、

死生観が異なります。

気どらずに、あっさりと現実に即して言うならば、

* 「おくりびと」は、葬儀関連業者にとってありがたい記号である。

* 「千の風になって」は、葬儀関連業者にとって商売の邪魔になる記号である。

となります。

こっちのほうが、すっきりして分かりやすいですね。個人的な印象を申し上げますと、両者の「記号=まぼろし」は、経済的な見地から説明可能な機能の側面がきわだっているという気がします。ただし、お断りしておきたいのは、今述べたのは、あくまでも個人的な印象=感想=イメージであり、この2つの「記号=まぼろし」についてのイメージは、たとえば、この記事をお読みになっていらっしゃる方々によって、当然異なっています。

100人いれば100通りのイメージがある。そのように簡単に言うことも可能です。あるいは、ヒトの思いは刻々と変化しますから、100人いれば「100E 無限大」通りのイメージがある、というほうが正確かもしれません。このように

「トリトメのないそっくりな記号=複製された数々の記号=たとえば複製された数々の「おくりびと」という映画 or 「千の風になって」という歌」

は、

おびただしい数のイメージ

を

「喚起する=生み出す」

のです。

みなさん、上述の2つの「記号=まぼろし」が発する=喚起するイメージを、自由に受けとめてみましょう。あなたは、どんなイメージ=印象を抱いていらっしゃいますか？興味津々です。ちなみに、ここではイメージの「分析」なんて、野暮でややこしいことはしません。「解釈」なんていうデタラメもしません。自分のデタラメぶりを100%認めたいですよ、念のため。

*

いずれにせよ、間違っても、ご自分が抱いたイメージが

「記号に込められたメッセージ=作者の意図=製作者たちの思惑=伝えたいこと」

とイコールである、あるいは同じである、とは考えないでください。イメージとメッセージは混同しやすいものですが、まったくの別物です。あなたの抱くイメージのほうを信じてください。

* 「記号の作用=働き」においては、メッセージは、嘘=虚構=抽象=「そんなものはない」=「そんなものは伝わらない」である。

と言えます。

メッセージがある

とすれば、とりあえず

「作者」とか「製作者=制作者」と便宜的に呼ばれているヒト

が、

「製作＝制作＝生産」

の過程で、

頭の中で一時的に抱くであろうイメージ

です。

それも、

グラグラで揺れ揺れでブレブレ

です。

作り手（or 作る側のヒトたち）の抱くイメージ

は、

受け取り手である、たとえば、あなたの抱くイメージ

に比べれば、

ずっと「嘘くさく＝非現実的で＝的外れで＝いかがわしい」もの

であり、

何の「機能＝働きかけ＝役割＝運動＝消費＝流通」もまだ生み出していない空疎なもの

なのです。

なぜなら、

未配信であり、未発送であり、未配達だから

です。すごく当たり前のこと言っていますね。お恥ずかしい限りです。でも、つい忘れてしまいます。いずれにせよ、

「トリトメのない記号=まぼろし」の発信と受信とは、本来がそうした「危なっかしい=テキトーな」仕組みのうえで、かろうじて成立している

のです。

*発したもの（=送ったもの）と受け取ったものとは、まったく同じなどということはありません

のです。せいぜい部分的に似たものか、全然似てもいないものとして受け取られると簡単に言うこともできるでしょう。いずれにせよ、ここで忘れてはいけないことがあります。それは、

*発したものの「作者=制作者=製作者=発信者」（※単数の場合と複数の場合があります）でさえ、自分が発したものを受け取りそこなっているし、受け取りそこなうのが、普通である。

ということです。さらに言うなら、

* 「記号の作用＝働き＝ライフサイクル」

においては、

「消費者＝受け取り手＝受けとめる側」の抱く「イメージ」

のほうが、

「作者＝製作者＝制作者＝作り手＝生産者」の抱く「メッセージ」

よりも、

圧倒的に重要な役割＝機能を果たす。

のです。確かに、

「イメージ」と「メッセージ」はともに、「フィクション＝虚構＝作り物＝実体がない＝まぼろし」

という意味での、

「嘘＝抽象的なもの＝見ることも手で触れることもできないもの」

です。ただし、「メッセージ」は、「イメージ」と比較して、「何か」を喚起する機能と役割がきわめて希薄であるという点において、圧倒的に劣勢にあり、その重要度は極度に低いと言ってもいいでしょう。つまり、無視しても一向に構わないという意味です。言い換えれば、

*メッセージの送り手は、作者・製作者・生産者・オーサー (= author) として、権威 = オーソリティー (= authority) を持つものとされているが、受信者 = 購買者 = 消費者 = 顧客の抱くイメージに、その仕事の成否が左右される。つまり、「お客様は神様だ」ということである。

となります。その点、ロラン・バルトは炯眼 (けいがん) を備えた人でした。メッセージなどは、無視するか、たとえ取り上げても「嘲笑 = 揶揄 (やゆ)」の対象とするだけで、ひたすら記号の喚起するイメージにこだわっていましたね。さすがです。

*

さて、話をさきほどの話題に移します。

> * 記号は「振り子運動 = 静と動の反復 = 右往左往 = 波 = 山と谷 = バランス = 均衡 = ぎったんばっこん = ブレまくり」を経る。

という、「ダイナミックな = 動きを考慮した」視点に立つと、ある流行 = ブーム (or 流行語・新語) や、ホット = クールな話題や、話題のヒト (or 寵児・一時的有名人) が登場するたびに、

>> * 一方に、みんなが傾きそうになったら、もう一方に身をそらす。そして、斜めから眺めてみる。

ことで、次に登場しそうなものや、次に起こりそうなバッシング = 反動が、ある程度の精度で予測できるのではないのでしょうか？ 少なくとも、偏屈者 = ヘそ曲がり人生を歩んできた自分には、そうした予測は数えきれないくらい当たりました。やり方は、実に簡単なんです。今流行っていることと、反対のことを考えるだけでいいんですもの。難しくも、ややこしくもありません。みなさん、ぜひ試してみてください。

今度は、オバマさんバッシングかな？ きみまるさんスキャンダル (※そういえば、一時盗作問題がありましたね、うまく乗り切りましたね、あのときの危機管理はバッチリでした、あっぱれです、不祥事を起こした数々の会社の社長は、きみまるさんのリスク

管理を見習うべきです) かな? きのうか、おととい、これまでのメタボに関する基準値への疑問が小さなニュースになっていましたね。あれをきっかけに、メタボリックシンドローム予防の見直しが起きてても、不思議ではありません。

医学といっても、流行があります。学問様の各派様にも、浮き沈みがあります。メタボリックシンドロームの中身は変わらなくても、その言葉が流行らなくなるとか、そのシンドロームに対する予防法が、違った言葉で語られるようになるという意味です。実態や実情に変化はなく、レッテルがつけ変わっただけです。誤解なさないでください。念のため。

ただし、健康法ブームは違いますよ。あれは、すごく振れの激しい振り子です。今、尿療法を実践している方、いらっしゃいますか? 紅茶キノコの愛飲者の方、まわりにいらっしゃいますか?

*

「おくりびと」については、いろいろ妄想していますが、親も自分も本木雅弘さんのファンなので、差し控えます。あの人、ちょっと変ですよ。演技力じゃなくて、インタビューを受けた時の挙動というか、私生活的にですけど、それと演技の落差が好きです。

でも、おもしろいというか興味深いのは、この大不況の時に、「千の風になって」ではなく、「おくりびと」が流行っているという現実です。起きていることはすべて正しいのだ。とかいう、「やけっぱちな厚顔さと投げやりさがにじみ出ている威勢のいい=とってもテキトーな」立場から考えると、「正しい」のでしょうね。

実際には、単に

「戦略=企画=たくらみ」

が、

「時期的にずれて、ありやりや=遅れちゃって、すみません=タイムラグしちゃって、ごめんなさい=たまたま経済の波とは逆現象が起こっただけ」

だったりして.....。いやはや、自分の妄想ぶりには、あきれはてます。1つ言えるですれば、今やるなら、あえて「千の風になって」型の発想に立ったお葬式をする、でしょうね。実際問題として。もう少し経てば、先見の明がある人だ、なんて尊敬されるかも。

繰り返しますが、とにかくヒトは飽きやすい。清貧ブームの後は、貯蓄から投資って感じでしたっけ？ ある次期には、お金儲け関係の本がよく売れましたよね。それが大不況下の今では、誰もが弱気になって及び腰。

過去のことは、もういいでしょう。このさい、未来に向けて、もう少し、妄想してみましようよ。脳ブームなんて、この先どうなるのでしょうか？ 脳ブームの次は体=身体ブームなんていう、あまりにも安易な類推は、全然有効ではないことは確かです、脳ブームはしぶといですよー。自分は、そうにらんでいます。「狂える尻尾のないおサルさん=ヒト=人間様」にとって、脳は究極の問題です。脳内モルヒネ批判や、クオリア（※それともコリアンダーでしたっけ？）「剽窃（ひょうせつ）=パクリ」疑惑へのいちやもんや、右脳左脳で右往左往したくらいでは、ビクともしませんでしたもんね。健在です。

馬鹿売れた例の本は、バカの壁、でしたっけ？ アホのヤベー、でしたっけ？ あれも、脳ブームの変種でしたよね。勉強法、発想法、幸福、生き方、癒し、エコ、自分を変える.....などなどといった「トリトメのない記号」と「相乗り=抱き合わせ」をすれば、脳味噌の合わせ味噌がまだまだ続きそうですね。ですので、脳ブームについては、せいぜい、ある特定の本の著者叩きくらいの小規模で短期的な「振り子運動=静と動の反復=右往左往=波=山と谷=バランス=均衡=ぎったんぱっこん=ブレまくり」を繰り返しながら、えんえんと続くだろうと考えています。

*

ところで、資本主義はどうでしょうか？ これからも、生き延びるのでしょうか？ 自分は、この分野がめっちゃ苦手なのですが、資本主義に対するバッシングが、ギョーカイのエコノミストやアナリスト、経済学者、経済学学者、経済評論家、投資関係の職人さんたちの中からも、ちよくちよく出てきていますね？ とはいうものの、時間の問題でしょ

うね、たぶん。時間だけが解決してくれる、きっと。

結局は、喉もと過ぎれば熱さを忘れる、ですよ、間違いなく。いつになるかわかりませんが、じっと待てば、そのうち、景気が底をうって山に登りはじめ、資本主義批判や市場経済批判なんて、批判した本人が「あれはワシ（or アタイ）の汚点だった。忘れてちょー」なんて言って、恥ずかしい思いをするのではないのでしょうか？ いや、そんなことはないかな？ ないです。前言撤回します。

経済関係のヒトって、たくましくて、厚顔＝鉄面皮ですもの。

「わたしの予測した通りでしたよ、はっはっはー。でしょ？ えっ、あの本ですか？ あれは、ジャストジョーク。出版社に頼まれただけです。ほら、当時は、ああいう内容じゃないと売れなかったんです。あのころは、ふところが寂しかったですよね。大きな声では言えないんですけど、実は、あれを書いたのはゴーストなんですよー。内緒ですよ」とか、「わたし、バッシングが糧です」

などなど。

以上、見てきましたように、この大不況のさなかを、半分ヤケッパチになりながらも構いませんので、世相を観察しつつ、一步後退するか、斜めによけて、

>>*世の中の振り子に振り回されずに、自分が揺れよう

の精神で、ちょっと遊んでみませんか？ 気が重い経済状況のもとで、少しは気晴らしになるのではないのでしょうか？ これから先が、たまたま正確に読めちゃうなんて、おいしいおまけもあるかもしれませんよ。

09.03.06 毎度ありがとうございます

◆毎度ありがとうございます

2009-03-06

おとといは「作者はいない」について考えていて中絶し、きのうは「おくりびと」にケチをつけることでひとまず気が済んで、きょうは「作者はいない」の続きをやろうと考えています。で、きのうの作文を読みかえして、あれっ、「作者はいない」をやっているじゃないか、と気づきました。

よく考えると、このところ一貫して「トリトメのない記号＝まぼろし」をテーマにあれこれ書いているわけですから、記事を書くたびに、その記事たちが「金太郎飴状態＝ワンパターン＝紋切り型」になってくるのは避けられません。以前、「表象」と「表象の働き」、つまり「Aの代わりに「Aでないもの」を用いる」をテーマにして、記事を書き続けていた時に経験したのと、同じ事態に陥っているわけです。当然と言えば、当然ですね。致し方ない＝仕様がなない＝出口なし、というやつです。

「おくりびと」を罵倒していた、きのうの記事のどの部分が、「作者はいない」と金太郎飴状態につながっているのかと申しますと、

＞*「記号の作用＝働き」においては、メッセージは、嘘＝虚構＝抽象＝「そんなものはない」である。

＞と言えます。メッセージがあるとすれば、とりあえず「作者」とか「製作者＝制作者」と便宜的に呼ばれているヒトが、製作＝制作＝生産の過程で頭の中で一時的に抱いたイメージです。それも、グラグラで揺れ揺れでブレブレです。そのイメージは、受け取り手である、たとえば、あなたの抱いているイメージに比べれば、ずっと「嘘くさく＝非現実的＝的を外れ＝いかがわしい」ものであり、何の「機能＝働きかけ＝役割＝運動＝消費＝流通」もまだ生み出していない空疎なものなのです。なぜなら、未発送であり未

配達だからです。この辺は、すごく当たり前のこと言っていますね。お恥ずかしい限りです。いずれにせよ、「トリトメのない記号=まぼろし」の発信と受信とは、本来が、そうした危なっかしい=テキトーな仕組みのうえで、かろうじて成立しているのです。

という個所です。またもや横着をして、長い「自己輸血」=自己引用をしてしまいました。この安易な癖=方法の使用については、自分でも半分あきらめております。「治らない=直らない=重度の依存症=無精のきわみ」って感じです。どうか、ご容赦くださいませ。

*

「トリトメのない記号=まぼろし」の発信と受信という視点から見ると、「作者=書き手」が「書くという行為(=発信)」をし、「読者=読み手」が「読むという行為(=受信)」をする、という、述べるのも恥ずかしいほど安直な図式化ができます。とりあえず、この図式にそって話を進めましょう。

記号の発信者は、作者=製作者=制作者=著作権保有者という身分を与えられているわけですから、その権威=立場=権限は圧倒的に大きいし有利だと思われがちです。作者は偉い。作者はすごい。作者は「オリジナリティ=独創性」の「実践者=化身=権化」である。というわけです。一方の「読者=受信者=消費者」はどうでしょう？

* 「読者=受信者=消費者」は作者の奴隷だ。

とか、

* 「読者=受信者=消費者」は作者の思うままの存在である。

とか、

* 「読者=受信者=消費者」は作者の意図に「遠慮=配慮」しつつ、作品を拝読すべきだ。

という窮屈な印象をおもちの方がいらっしゃいませんか？

*オーサー・ビジット

なんていう、儀式＝企画＝演出＝お芝居＝「偉いヒト vs. 普通のヒトごっこ」がありますね。たった今「ごっこ」と書いたのは、あれが、「鬼ごっこ」や「お医者さんごっこ」と同じで、「本来はそうした役割ではないものを演じる行為＝大嘘遊び」だからです。作家とか芸術家とか有名人と呼ばれているヒト＝オーソリティ＝権威・権威者が、学校なんか「訪ねていき＝招かれていき＝お金と引き換えに出演し」、自作を解説したり、制作の苦労話＝自慢話＝「どうだい、すごいだろ、きみたちも、見習いなさい」をするのです。あんなものにだまされてはいけません。実は、

* 作者は偉いなんて大嘘

なんです。

* 読者＝受信者＝消費者のほうが、圧倒的に偉い

んです。なぜなら、

* (1) 作者は、ほかのヒトたちと同様に、自分が著作権を持つ作品を読めない。

* (2) 作者は、ほかのヒトたちと同様に、自分が著作権を持つ作品を「まだら模様として＝まばら状的に＝かろうじて＝テキトーに」ならば読める。

* (3) 作者は、作品を書き上げたとたんに、ほかのヒトたちと同様に、自分が著作権を持つ作品の1読者＝1受信者＝1消費者にしかすぎない存在となる。

* (4) 作者は、ほかのヒトたちから、お金をいただいて作品を提供する側にいる。

* (5) 作者は、ほかのたくさんのヒトたち＝お客様たちによって養われている。

* (6) お客様は神様である。

* (7) 作者は、ほかのヒトたち＝お客様たちに頭を下げて、「毎度ありがとうございます」と言う立場にある。

からです。

*

ということは、

* オーサー・ビジットは、本来なら作者が無報酬でやるべきもの

なのです。でも、あれって、エージェントが企画し、中間搾取（さくしゅ）＝人の禪（ふんどし）で相撲を取る＝おこぼれに預かるものですから、一方的に作者を責めるわけにはいきません。講演会やトークショーも同じです。すべてが、中間業者が企画・営業・運営している

「出し物＝催し＝興行」

です。資本主義経済、および市場経済と、そのはしくれであるマーケティングは、強いし、たくましいし、しぶとい！ というわけです。

*何でも、「商品＝マーケットに並ぶモノ＝販売され流通し消費され、いつかは廃棄・処分されるモノ＝取り換え可能なモノ＝使い捨て可能なモノ」になってしまう。

のです。ヒトである作者もその例外ではありません。

つまり、とんでもない間違い＝勘違い＝錯覚＝「よく考えると変だけと、みんなやっているだけのもの」が起こっているのです。

あるいは、実にけしかん「陰謀＝策略＝ペテン＝「作家は偉いのよー、疑っちゃだめよー、そうじゃないなんて考えるヒトは頭が悪いだけよー」が行われているのです。

または、長年のギョーカイの悪癖＝「〇〇先生のおかげで、うちの会社やギョーカイは儲けさせてもらっているんだから、とにかくヨイショしておくの、そんだけー」が続いているのです。それが読者にまで伝染るんです。

もしくは、度忘れ＝忘却＝「パブロフの犬」状態＝思考停止＝エポケー＝えっつ、〇け？＝「△△大先生、次も、ぜひ、うちからご本を出してくださいますよう、お願い申し上げます、読者たちめも皆、大先生の次の作品を待ち望んでいますので、はい」が起きているのです。

どうしてでしょう？

*

作家＝著者＝作者を、英語でオーサー（＝author）とも言いますが、辞書によると、創造者＝神なんて意味まであります。語源的には、「生み出すヒト」が原義みたいです。しかも、オーソリティ（＝authority）、つまり、権威、権力、権限、権能、権威者、大家、当局、官憲、その筋、なんていう意味の単語とも親戚ですから、おだやかではありません。

何か、裏にありそうです。きな臭いですねー、生臭いですねー。自分が最も苦手なも

のの臭いが、プンプンします。変なものに触れて、またお祓いとか、厄払いとか、豆まき、なんてしたくないのです。もう、こりごりですよー、ああいうのは。この間、ファシズム=全体主義という問題と取り組み、あれがトラウマになりましたよー、正直言って。分かる方にしか、分からないことをぼやいて、申し訳ありません。

万が一、詳細をお知りになりたい方は、このエッセイ集のパンクナンバーである、「おいしくない社会」2009-02-23、「あきらめない」2009-0-24、「最後のとりでを守る」2009-02-25、「やっぱり CHANGE なのだ」2009-02-26、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27の5編をちらりとご覧願います。もう、泣きそうになって書いたものです。うつも悪化してしまいました。はい。で、あまり、深入りしたくはないのです。ちなみに、以前からの読者様が、本日もお越しいただいているのでしたら、

どうも毎度ありがとうございます。謹（つつし）んでお礼申し上げます。

*

で、作者が権威とされて崇め奉られるという、倒錯＝「それって話が逆じゃないの?」ですが、どうやら次のことと関係がありそうです。

>思うんですけど、ヒトってファシズム=全体主義が好きなんじゃないでしょうか?

以上は、「あきらめない」2009-02-24からの引用です。また、

>*ヒトには、強いリーダーやファシズムに幻惑される習性があるのではないか（※これもまた、使用済みのメモじゃないですか。まだ、机の整理ができていないもよう。でも、何度考えてもいい問題かも。）

>*ファシズム=全体主義は、社会学的アプローチだけでなく、生物学、特に動物行動学=エソロジー的アプローチが不可欠である（※またまた当たり前のことを言っている。だから、素人は素人らしくして、自分自身というヒトと、身の回りにいるヒトたちを観察し、自分の頭と体を使って考え、あるいは体感し、それを言葉として紡ぐしかないのです。これで、ようやく、このブログらしくなりましたね。良かった、良かった。めでた

し、めでたし。安心しましたか？ 気が済みましたか？ きょうは、これからお薬を飲まなくても、よさそうですか？)

以上の2つは、ボケとツッコミのやりとりで作文した、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27からの引用です。

*

作家でも、音楽のアーティストでも、政治家でも、言えることなのですが、どうやら、

*一般論として、あるいは概して、ヒトという生き物は、個人崇拜を好む。

*動物行動学的に言って、ヒトにとっては、ボス＝リーダーに導かれた集団行動が基本的行動様式である。

*行動科学のおよび政治学的ならびに社会学的に言って、ヒトには自分自身が奉仕される側であることを、意識的にあるいは無意識のうちに忘れ、奉仕する側のヒト＝権力を委譲した代理人を、崇め奉る根強い倒錯的な習性、あるいは熱烈な倒錯的願望がある。

らしい。

というか、そうだとしか考えられません。だからこそ、上述の、とんでもない本末転倒＝倒錯＝ヘンタイ的行動がまかり通っている。また、それに疑問を抱く者は、偏屈者とか、へそ曲がりとか、屁理屈野郎などとみなされる、というわけです。もし、そうであれば、それなりに自分は納得します。やっぱし、ヒトはそんなもんかー、とか、ま、いっか、などという具合に。だって、致し方ありませんもの。で、次に進みましょう。

*

またまた、きのうの記事から、コピペするという横着をいたします。ただし、きょうは、「おくりびと」ではなく、「作者はいない」をテーマにしておりますので、そこんところをよろしく、なんて、言い訳をしちゃいますけど、思いきり軽蔑してやってくださいませ。このアホを。さて、そのコピペです。

＞ ＊記号の「作用＝働き＝ライフサイクル」においては、「消費者＝受け取り手＝受けとめ手」の受ける「イメージ」のほうが、「作者＝製作者＝制作者＝作り手＝生産者」の「メッセージ」よりも、圧倒的に重要な役割＝機能を果たす。

＞のです。確かに、「イメージ」と「メッセージ」はともに、「フィクション＝虚構＝作り物＝実体がないという意味での嘘＝抽象的なもの＝見ることも手で触れることもできないもの」です。ただし、「メッセージ」は、「イメージ」と比較して、その機能と役割がきわめて希薄であるという点において、圧倒的に劣勢にあり、その重要度は極度に低いと言ってもいいでしょう。つまり、無視しても、一向に構わないという意味です。その点、ロラン・バルトは炯眼（けいがん）を備えた人でした。メッセージなどは、無視するか、たとえ取り上げても「嘲笑＝揶揄（やゆ）」の対象とするだけで、ひたすら、記号の喚起するイメージにこだわっていましたね。さすがです。

以上で、引用箇所は終わりです。

で、

そうなのです。バルトは、記号の仕組みについて、よく分かっていた人なのです。作者（※この場合は比喻です）＝発信者のメッセージなどという、まやかしのイメージなんて、毛ほども気にせず、あくまでも、読者（※この場合は比喻です）＝受信者の抱くイメージにこだわったのです。いい仕事をなさった職人さんでした。持ち前の飽きっぽさを、批評活動の原動力にして、実に多様ないい芸を「次々と＝取っ換え引っ喚え」見せてくれた人です。

記号学者や記号論学者によくある、

「不感症的で（※これってセクハラ語ですか？ そう受けとめられた方がいらっしやいましたら、お詫び申し上げます、ごめんなさい）＝実は熱いくせに血も涙もないような冷徹さを装った＝不毛で無味乾燥な＝記号を科学できると信じこんでいる」

アホな、学問のギョーカイ人とは、全然違いました。あくまでも

「読むこと（※比喻です）の快樂」＝「テキストの快樂」＝「快樂のテキスト」

という具体的な言語体験を、常に体感していた人でした。

*

発信者のメッセージなどというペテンを相手にすると、

「トリトメのない記号＝まぼろし」という「仕組み＝運動＝装置＝作用」の、ダイナミックな力学

を、あっさりとは無視し、気づかなくなってしまう、忘れてしまいます。そして、

「意味するもの」という、一見具体的で実体的なもの（※実はそうではないもの）

が、

ヒトにとっては言葉でしかありえない

という当たり前のことを、これまた無視し忘れ去り、まるで実体であるかのように扱う、あるいは、みなすという愚をおかします。いや、愚にはまるというべきでしょうか？

念のために言い添えますと、愚にはまると、ヒトは「解釈」とか「解明」などという「迷妄＝超デタラメ」を口にし始めます。「解釈」だの「解明」って何でしょうか？何か「正解」でもあるとでも言うのでしょうか？「世界」や「宇宙」に「正解」ってありますか？百歩譲ってあったとして、それってヒトと何か関係がありますか？SF小説の中なら、あるでしょうね。学説＝論文としてならあるでしょうね。でも、SF小説も「学説＝論文」も、

「言語の構築物＝言葉のかたまり」

ですよ。

「実体」

なんかじゃ、全然ありません。「知で武装したヒト」（※知で武装しないなら話は別ですが、そんなややこしい話は、きょうはしません）が向き合えるのは

「トリトメのない記号」

だけなのです。当たり前のことですが、お忘れになっていらっしゃいませんか？と言いたいです。

*

ややこしい話になってきました。ごめんなさい。この記事を読んでいる方の中にもおかしくない妄想＝予想される、ややこしい話をする人に向けて話そう＝書こう＝説明しようとする、当然のことですが、話がややこしくなるのです。

ですので、たった今、上のほうで

「念のために、言い添えますと」で始めた部分

をややこしいと感じられた方に申し上げます。それでいいのです。あのようなややこしいことなど、普通は考える必要はまったくないのです。

たまに、そういうややこしいことを考える方がいらっしゃるの、念を押すために、ちょっと書き添えただけです。混乱させてしまって、ごめんなさい。上の

「解釈」とか「解明」とかいう個所

を、ややこしいとお感じになった方に申し上げます。あの部分は、たとえば、

「誤配された年賀状に書かれた挨拶の文句＝社交辞令＝大した意味なし」

です。いずれにせよ誤配ですので、無視していただいて、一向に構いません。

なお、ややこしくなんかないぞー、自分への罵倒＝当てこすりだ、とお感じになった方に申し上げます。腹を立てるなり、せせら笑うなり、ご自由にどうぞ。ただし、自分は「議論＝討論＝罵り合い」のたぐいは苦手ですので、最初から白旗を掲げます。あなたの勝ちです。これでお気が済むようでしたら、何度でも、申し上げます。あなたの勝ちです。

*

誤配と罵倒と白旗で終わっては、せっかく、ここまでお読みいただいた、みなさんに失礼ですので、実に官僚的＝事務的ですが、きょうのまとめに入ります。

> * 作者はいない

というか、

* 作者は作品を書いたとたんに、消えてしまう。

のです。

なぜなら、

* 作品を出版し流通させた、生身の作者は、作品のタイトルに添えられた固有名詞に、作者の座を譲り渡す。

からです。

* 生身の作者は、著作権保有者としてのみ、作品との関係を期限付きで維持する。それは経済的＝金銭的な関係でしかない。

という意味です。

これに加えて、おまけとして申し上げますと、

* 「生身の作者」は、「作品という記号」と「抱き合わせ＝セット」の「記号である作者名」と「同姓同名のヒト」として「尊敬や憧れの対象」になる。これは、とほうもないヒトの錯覚＝避けられない習性に起因する珍現象の1つにほかならない。しかし、その余禄は大きい。大いに活用し、名声を享受し、豊かな生活を実現して維持すべきだという考えも成り立つ。

が、それ以外に、

* 「生身の作者」は、「自分が書いたとされ、自分の名前が添えられている作品」の「1読者」になる。その意味では、ほかの読者たちと変わりはない。

となります。

言い換えると、

* 「生身の作者」といっても、「ほかの読者」と同様に、「自分の名前が添えられている作品」を、読むことはできないが、せいぜい「まだら模様として＝まばら状に」知覚することで、かろうじて読むことならできる。

ということを忘れてはなりません。

で、別の面から、きょう書いたことを、振り返ると次のようになります。

* 作者は、お金で作品とつながっているだけである。

と言えます。ですので、本来なら、

* お金を出す読者たちに、お礼を言うべき

なのです。それなのに、作者がいばっているのは、読者たちが好き好んで、あるいは、ヒトという生き物の惰性＝習性から、そうした本末転倒な状況＝倒錯を許しているからなのです。

自分は、そうしたファシズム＝全体主義を連想させる、あるいは、ファシズム＝全体主義の萌芽とも見なし得る状況に違和感を覚えますが、みなさんはどうお思いになりますか？ いつか、万が一、たとえば村上春樹さんにどこかでばったり出会ったら、「ねえ、村上さん、毎度ありがとうございます、くらい言ってよ」と、一言注意してやりたくありませんでしたか？

自分は、みなさんから、お金はいただいておりませんが、みなさんの貴重なお時間と引き換えに、この記事を読んでいただいております。ですので、

謹んで申し上げます。毎度ありがとうございます。

【注：以上の記事は、現在は有料の電子書籍の一部として販売されています。したがって、みなさんのお金と引き換えに、この記事を読んでいただいております。ですので、謹んで申し上げます。毎度ありがとうございます。】

【追記：以上の記事は、現在は無料で公開しています。いずれにせよ、毎度ありがとうございます。

(2011-11-17 記)】

09.03.07 ゆうれいをはらう

◆ゆうれいをはらう

2009-03-07

みなさんは、ゆうれいの存在を信じていらっしゃいますか？ 自分は、幸か不幸か、まだ見たことがありません。見てみたいという気持ちはあります。一方で、このまま見ないでおきたいという気持ちもあります。ただ、1つ確実に言えることは、ゆうれいも「トリトメのない記号＝まぼろし」だということです。

となると、購入＝入手し、消費＝用立てし、いつかは廃棄＝処分されるということになっちゃいますね。どうやって、やるんでしょうか？ 難しく考える必要はありません。ゆうれいという記号は、さまざまな形で、多種多様な記号と抱き合わせになって存在している。そう考えると分かりやすいというか、実際、そうなっています。

例を挙げましょう。まず、身近なところでは、「怪談」という「お話」の中に登場しますね。夏の風物の1つです。暑い時の清涼剤として、古くから使用されてきたものです。その意味では、うちわや、すだれや、打ち水と同じ機能＝役割を持っています。森羅万象(=いろいろなもの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト)が、記号になり得るといふことですね。

で、怪談は、本来、ヒトからヒトへと口で語られて伝えられてきたものです。口承とか、口承文学とか呼ぶ人たちもいます。都市伝説なんていうのも、広義の口承でしょう。で、昔々に口承、つまり口伝えで語られていた、ゆうれいのお話は、さぞかし怖かったと想像します。

現在みたいに、ゆうれいが、テレビを始め、映画、テレビと映画が合体したDVD、あるいはパソコンやケータイのモニター画面で文字や画像として伝えられている状況になじんでしまった、自分を含む人たちには、想像できないくらい、リアルで、ぞーっとする体感的なイメージを、昔の人たちは体験していたに違いありません。それと同じく、昔は、うちわ、すだれ、打ち水といったものが、きっと、ものすごく有り難いものだったのではないかと。そう、お思いになりませんか？

*

自分の幼かったころには、扇風機がようやく普及し始めた時期でした。ですから、うちわの有難さが遠い記憶としてあります。今でも、うちわが好きです。特に、窓を開けた部屋や、縁側や、あるいは外の木陰なんかで、火照った体をうちわで煽ると、実に気持ちがいいです。すだれも、同様に風情を感じさせてくれて好きです。そういえば、この数年間、夏になると打ち水運動みたいなことをやっている映像をテレビで見かけますね。

きょうは、ゆうれいについて、書いてみたいと思っています。季節はずれですか？確かに、そうですね。ところで、お気づきになりましたでしょうか？きょうの記事の冒頭から、何回か「ゆうれい」とつづってきました。ひらがなで4文字ですね。漢字で2文字でもなければ、かたかなで4文字でもありません。ちょっと、いたづらをしてみたのです。では、出しますよー。出ますよー。

幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽霊、幽

ユウレイ

ですが、どう違うのでしょうか？あるいは、

ゆーれー

や

ユーレー

というように、表記の違いを比較することは、きわめて重要な視点だと考えています。ここで、このブログ恒例の横着＝コピペをさせていただきます。

*

> 「記号」について考えるさいに、

>★「意味するもの＝たとえば言葉＝シニフィアン＝表現＝見た目＝外見＝殻」

>と、

>★「意味されるもの＝たとえば言葉の意味＝シニフィエ＝意味＝内容＝中身＝殻の中の空白・空間」

>とに分ける、「作業＝手続き＝段取り＝演出＝プレゼン」をする場合があります。前者の★を「能記」、後者の★を「所記」とする立場の人たちもいます。(中略)で、以上のように、記号を2つに分ける一方で、その分けられた両者の関係を、

>★「意味作用＝記号作用＝シニフィカシオン＝記号表意作用」

>と名づける作業もあります。

以上は、「飽きっぽくて、忘れっぽい」2009-02-19 から引用しました。

*

さて、上で並べた5種類の「yurei」はどれもが、さきほど紹介した、★の付いた「記号」を構成する要素のうちでは、「意味するもの」ということになります。実は、「トリトメのない記号」のトリトメのなさを特徴づける役割を担っているという点では、「意味されるもの」よりも、圧倒的に重要な構成要素なのです。

ごく常識的に考えると、

「意味されるもの」がご本尊であり、「意味するもの」なんて刺身のつまだ

という気がしませんか？ たとえば、目の前に石鯿が1個あったとします。

「石鯿」という本体＝実体＝現物＝意味されるものが、本尊であり、

「石鯿＝せっけん＝セッケン＝sekken」という文字や音声やその「外見＝見かけ」、なんて、刺身のつまだ。

どう考えても、そうだと、お思いになりませんか？ 確かに、そう思えます。でも、こう考えてみてください。

あなたは、石鯿を買う場合、ほんとうにご本尊を重視して買っていらっしゃいますか？ これだけものが豊富にある社会に生きてると、ある特定の石鯿本体にすごくこだ

わりがある人以外は、「この石鹸は、モデルの〇〇が、TVのCMで全身に泡なんかつけちゃって、はしゃいでいる、あれだ」とか、「△△社ので、1ダース(66円なら、まあ、安心して使えるかな」とか、「名前が好きなのよー」とか、「新製品ね、わたしチャレンジ派でコンサバじゃないから、さっそく試してみよう」とか、「パッケージがなんか口ハスでいいわ」とか、「この形、かわいい!」とか、そんな感じで買っちゃいませんか? この場合には、

石鹸にまつわるイメージ＝「意味するもの」

が重視されています。

一方で、「この泡立ちに勝る石鹸は、ほかになし」とか、「うちの娘がアレルギー症で、これしか使えないの」とか、「おれ、この匂いにフェチかも」とかいう理由で、まさにフェティシズムを実行なさっている方もいるはずです。つまり、

石鹸そのもの＝「意味されるもの」

を尊重する立場です。

実際問題として、この市場経済において、石鹸1個の価格に関して、「石鹸にまつわるイメージ」＝「意味するもの」と、「石鹸そのもの」＝「意味されるもの」のどちらに、企業がどれほどの重点を置いて「生産＝製造」をし、マーケティングを行っているかといえば、間違いなく前者、つまり「石鹸にまつわるイメージ＝刺身のつま」のほうなのです。だから、たとえばテレビのCM＝イメージ作戦に膨大な費用を投じるわけです。

*

以前にも、書きましたが、自分は経済や経済学には、めちゃくちゃ弱いです。でも、フリーランスで、ある種の売文業をやっていたころには、必要に迫られて、経済学・経営学・金融のお勉強をせざるを得ない時期があり、その一環として、マーケティングや企業戦略みたいな分野の本をかなり読まされました。

その時に、知ったというか、得たデータと情報からすると、どうやら「製品を売る」という企業活動の実態は、上で述べたような「石鹼そのものの良さを訴える作戦」よりも、「曖昧模糊（あいまいもこ）としたイメージ作戦」みたいなものらしいのです。現在、新聞の経済面などを読んでいても、事態は同じみたいです。

*

さて、「yurei」です。

順番に、具体的に観察していきましょう。というか、自分がその表記から勝手に受けとったイメージ（※メッセージではありませんよ）をコメントとして、付け加えます。みなさんも、ご自身の受けとめられたイメージをメモするなり、つぶやくなりしてみてください。

*「ゆうれい」：ちっとも怖くない。このひらがなだけを見た限りでは、漢字では、どう書くのかなあ？ 自分がまだ知らない新語かなあ？ などとってしまうくらい。文章中に出てくると、前後の言葉とくっついてしまって、誤読するかもしれない。

*「幽霊」：怖い。不気味。マジこわ。「幽」って漢字をじっと見ていると、何だか、気が変になりそう。さすが表意文字。「霊」って漢字は、それだけでも、気味が悪いし、いろんなほかの言葉（たとえば、心霊、霊視、亡霊、自縛霊、霊気、ご霊前、霊能者……）を連想させてキモい。一字だけ、じっと見ていると、その形と作りからして、何だかお墓とか位牌みたいな感じ＝漢字。「霊」と「墓」って、左右対称だし、なんとなく「座り」が似ていませんか？「言霊」の力を信じたくなる。あーれーっ、「ことだま」の「だま」って「霊」なんだ。

*「ユウレイ」：何だか、お菓子の名前にありそう。ちっとも怖くない。お菓子だったら、焼き菓子というより、ゼリーとか、羊羹みたいに柔らかそう。こんな名前の雑誌、あったけどなんだっけ？ ユリカモメじゃくて、ユリイカとか、そんな感じ。あれって、何の雑誌？ マ、イッカ。あっ、今、思ったんだけど、ヨーデルかもしんない。ユウレイティーとか、ユウレイホーとか、なかったっけ？ ま、いっか。

*「ゆーれー」：何これ？ 楳図かずお先生の「まことちゃん」に出てきそう。とにかく意味不明。得体がしれない。でも、怖くはない。笑っちゃいそー。そう思ったら、ほんとーに、笑っちゃった。どうしよう、笑いがとまらなくなっちゃったよー。こういうときって、背中を叩いてもらおうととまるんだっけ？ あれって、しゃっくり用？ やーだ、しゃっくりまで出てきた。

*「ユーレー」：ちょっとキモい。オタク語っぽい。何か、ある一部の人が使っている言葉っぽい。何だろうって気もするけど。あんまり、かかわりたくないな。かかると、ウザそうなことになりそうな気配。ドーデモイー。ユーレイフー？ 思わず、声が裏返っちゃった。ひょっとして、これもヨーデルってやつかな？ よう出るなあ（※どこの訛りじゃ？）。

以上のような、個人的感想＝イメージをいただきました。で、今、自分で勝手に書いた5種類のイメージを読んだ結果、次のようなことが言えるのではないかと勝手に思いました。

*「ゆうれい」「幽霊」「ユウレイ」「ゆーれー」「ユーレー」という「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」を誰（＝生身のヒト）が、どんなメッセージ（＝意図＝思わく＝言いたいこと＝思想）を込めたかは、ぜんぜん問題にならない。考慮に値しない。考えても無駄＝徒労。そんなこと考える人はアホ。ちなみに、「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」と書いたことから分かるように、「記号」を構成する要素である「意味するもの」すら「記号」になる。何でも「記号」になるという好例。

*「ゆうれい」「幽霊」「ユウレイ」「ゆーれー」「ユーレー」という「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」は、それを受けとめる側の人に対し、さまざまなイメージを喚起する＝発する＝放出する。そのイメージは、受け手である人によって異なるし、同一の人においても、そのTPOによって変化する。

*「ゆうれい」「幽霊」「ユウレイ」「ゆーれー」「ユーレー」という「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」は、動的＝ダイナミックな「意味作用＝記号作用＝イメージのとちくるい的運動」を生じさせる。その「とちくるい的運動」において決定的な役割を果たすのは、上で述べた通り、「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」が発し、

「受信者が自由に＝勝手に受けとめるイメージ」であって、「身元不明＝未確認＝作者はいない＝不在＝未配達＝未発信」であるにすぎない「発信者のメッセージ」などという、虚構＝神話＝大嘘ではない。要するに「メッセージ」なんて滅逝痔＝意味なし＝どうでもいい。

*

ところで、「いないのにいる」と知覚することを、「幽霊を見る」とか、「幽霊の声を聞く」とか、「幽霊の気配を感じる」とか、「幽霊に触られる」とか言いますね。また、「ないのにある」と知覚することを、「幻覚を見る」とか、「幻聴が聞こえる」とか、「何かの気配を感じる」とか、「何かに触れる」とか言いますね。

ここで、お断りしておきますが、神秘体験、超常現象、スピリチュアル、オーラといった類のものは、このブログでは扱っておりません。ただ今書いているテーマが、そういったものを連想させる内容なので、誤解を招いているのではないかという危惧を覚えました。もし、そうお思いの方がいらっしゃいましたら、それは違います、とここではっきり申し上げておきます。

このブログでは、あくまでも言葉＝言語と、それがもたらす錯覚を問題にしておりません。ご理解とご了承をお願いいたします。また、「こういう視点が抜けている」とか、「この部分が私の考えとは違う」といった、無いものねだりも、ご遠慮くださいませ。

*

いきなりですが、村上春樹さんのお話をします。実は、自分は、村上春樹さんの小説が分からないのです。良さが分からない。何が書いてあるのかも分からない。そんな感じでした。人は本を「まだら模様として＝まばら状に」しか読めない、という状況以前の話です。「波長が合わない」「苦手だ」「嫌いだ」「読めない」とか、よく言いますね。それです。

村上つながりで言えば、村上龍さんの小説は、良い悪いという感想は別にして、どれも読めます。初期の作品で『コインロッカー・ベイビーズ』、中期の『イビサ』なんかは、大好きな小説の中に入ります。龍さんの話は、脱線です。きょうのテーマとは関係あり

ませんので。

で、なぜ、ここで村上春樹さんとその作品名を取り上げるのかというと、現在、国内においても、海外においても、村上春樹さんほどの知名度のある作家がいないからです。理由はそれだけです。要するに、話にしやすいのです。

村上春樹さんを2つに分けてみましょう。

(1) 生身の村上春樹さん。

(2) 作品名と併記されたり、作品名と同時に話題にされる固有名詞としての「村上春樹 = Haruki Murakami = Murakami Haruki」

(1) の村上春樹さんは、血も涙もあるヒトです。とうぜん、ご飯を食べ、排泄もなさるでしょう。実際に会って握手をしたり、サインをしてくれることもあるでしょう。また、作品の著作権保有者でもあります。

(2) の「村上春樹 = Haruki Murakami = Murakami Haruki」は、固有名詞ですから、言葉 = 文字 = 音声として、ヒトに知覚されます。このところ、このブログで何度か書いている「作者はいない」というフレーズの「作者」は、(2) です。ここを誤解なさらないように、お願いいたします。それほど、「作者はいない」というフレーズは、ミスリーディング = 誤解を招きやすいのです。

次に、確認したいのは、

(3) 『海辺のカフカ』という「作品」

の存在です。村上春樹さんの数多くの作品の1つです。無作為に選びました。言うまでもなく、『海辺のカフカ』は言葉 = 書き言葉 = 文字を用いて書かれた言語の構築物 = 言葉

のかたまりです。日本語版、英語版以外にも、その他の言語に訳されているみたいですね。詳しくは知りません。

さて、きょう、どうしても、この記事で書きたかったことがあります。それを書く準備が、どうやら、ようやく整いました。では、書きます。

* 作品名と併記されたり、作品名と同時に話題にされる固有名詞としての「村上春樹 = Haruki Murakami = Murakami Haruki」は、「文字 = 意味するもの = トリトメのない記号」としての「幽霊」(※比喩です)である。

ただし、固有名詞としての「村上春樹」は、当然のことながら、生身の村上春樹さんとは違います。そのことを確認したうえで、あえて申しますが、

* 生身の村上春樹は、自作とされている『海辺のカフカ』という「作品」を、ほかのヒトたちと同様に、「まだら模様として = まばら状に」しか読めない。

仮に、

* 生身の村上春樹に、『海辺のカフカ』を参照することなく、再度、一字一句同一の作品を書いてくれと頼んでも、書くことはできない。

と考えられます。でも、

* 生身の村上春樹に、『海辺のカフカ』を参照しながら、パソコンのワープロソフトを使って、あるいは自筆で、再度、一字一句同一の作品 = コピー = 複製を書き写してくれと頼めば、ほかのヒトたちと同様に、書くことができる。

と考えられます。また、

* 生身の村上春樹に、『海辺のカフカ』のあらゆる個所について、どういうメッセージと

意味を込めて書いたのか、詳細な注釈を書いてくれと頼んでも、村上春樹にとっては、『海辺のカフカ』のあらゆる個所のメッセージも意味も不明＝不在であり、書くことはできない。

なぜなら、

* 生身の村上春樹にとって、『海辺のカフカ』という作品は、せいぜい「他者」としか名づけ得ない「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」となっているからである。

言い換えるなら、

* 『海辺のカフカ』を書き終えた、生身の村上春樹は、『海辺のカフカ』を書き終えていない、読者たちと同じ立場に置かれているのである。

したがって、

* 『海辺のカフカ』という「作品」も、『海辺のカフカ』という「作品」とセットになった＝併記されている、固有名詞としての「村上春樹＝Haruki Murakami＝Murakami Haruki」も、共に「文字＝意味するもの＝トリトメのない記号」としての「幽霊」である。

だめ押しに言うと、

* 「記号」は、ワープロやペンを使って「記号」を書けない。

つまり、これこそが、

* 作者はいない。

という紛らわしいフレーズをできる限り、分かりやすくするために、具体的な例を挙げ

て、言い換えたフレーズなのです。

以上です。(1)の生身の村上春樹さんには、まことに失礼なことを書きましたが、作家という職業のヒトは、批評家という職業のヒトたちから、いろいろなことを書かれる運命にあります。批評家にも、大学や研究所に身を置く学者型のヒトたちもいれば、主に雑誌に寄稿したり、書籍化された批評を商品として売って生計を立てている、文芸評論家と呼ばれるヒトたちもいます。

村上春樹さんは、国際的な作家ですから、その作品および生身の村上さんについて、プロ・アマを含め、それこそ、数えきれないほど多くのヒトたちによって、数えきれないほど多くの言葉が書かれているでしょう。ですから、素人の自分の書くことなど、村上春樹さんが意に介されることは、全然ないと推測されるわけです。

ですので、村上さんのファンの方、ご立腹なさらないでくださいね。不快な思いを抱かれた方には、心よりお詫び申し上げます。で、現在の自分の心境を申しますと、ほっとしています。なぜなら、

ゆうれいをはらう = 幽霊を追い払う = 幽霊を祓う = お祓いをする

という儀礼を済ませることができたからです。ここでいう「幽霊」とは、生身の「作者」ではなく、「トリトメのない記号」である「作品」と「セットになった=併記されている」「トリトメのない記号」である「固有名詞」にほかなりません。そのお祓いをするために、どれだけの言葉たちを用いたことでしょう。

*

>*「トリトメのない記号」とは、森羅万象、つまり「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」のことです。どうして「記号」なのかと申しますと、「もの・こと・さま・自分というヒト・他のヒト」は、それとそっくりなものが、たくさん並んでいたり、あちこちに散らばる形でたくさん存在するからです。イメージとしては、スーパーに並んでいるカップラーメンを想像してください。

以上は、「おいしくない社会」2009-02-23 から、「なぜ、お父さんがいないの？」2009-03-01 に、コピーペースト＝複製＝コピー＝引用したフレーズを、さらにコピペしたものです。

たとえば、本というものは、印刷された製品＝商品ですよね。印刷とは、コピー＝複写＝複製する行為です。音楽のアーティストの演奏を録音し、「原盤というコピー製造装置＝マトリックス＝お母さん」を作り、それをさらにCDという形で、おびただしい複製を作るのと、基本的に同じ行為です。スーパーに並ぶカップラーメンの製造と販売も同じ行為です。

上で書き連ねた「幽霊」という漢字の羅列を、もう1度ご覧になってください。そっくりなものはずらりと並んでいますね。みなさん、これまでの説明を読んできて、いくぶん気味の悪さが薄れましたか？ あれって、上で述べたように「作者」と同様の「トリトメのない記号＝文字」だったのですよ。

*

「そうは言われても、やっぱり不気味だよ」、「そうは言われても、やっぱり作者はいるよ」、「作者はいるの！ いるって言ったら、いるの！」

vs.

「ただの言葉だと思えば、何となく不気味じゃないような気がしてきた」、「納得したよ。作者っていないんだね」、「そうだ、作者なんていない！ いないって言ったら、いないの！」

*

幽霊のお祓いに成功した方は、いらっしゃいますか？ できたとおっしゃる方に、お駄賃というか、スペシャル・プレゼントがあります。実は、あるいたずらというか、おふざけをしたのです。白状します。

さっきの、「幽霊」の羅列ですけど、切りのいいところで、42個並べました。縁起の悪いとされる数です。自分なんかは本を読んでいる時に中断して、しおりを挟むさいには、縦組みだと右ページに、横組みだと左ページに「42」というページを示す数字があると、無理をして急いで読み進めます。で、「44」も「死死」で気味が悪いので読み飛ばし、「46」まで来たところで、しおりを挟むか、逆戻りして「40」は「死霊」で縁起が悪いので読み飛ばし、「38」があるページにしおりを挟みます。

で、さきほどの「幽霊」の行列ですけど、どうですか？

42個だと聞いても、お祓いは揺るぎませんか？ おふざけをした本人である自分は、それを思い出したら、気持ちが揺らいできました。というのは、冗談です。うそ、うそ。ごめんなさい。

*それほど、作者という幽霊＝亡霊はしぶとい

と言いたかっただけです。ただ、42個という数字は本当ですよ。嘘だと思えば、数えてみてください。あれっ、何だか、今、ぞくぞくっときました。風邪でも引いたのでしょうか。それとも、何かの気配を感じたのでしょうか。きょうは、この辺で失礼します。

ハックション！ ゴホゴホ……。

09.03.08 こんなことを書きました（その4）

◆こんなことを書きました（その4）

2009-03-08

前回「こんなことを書きました（その3）2009-02-16 に引き続き、今回は 2009-02-17 から 2009-02-27 までの 11 日分、および、2009-03-01 から 2009-03-07 までの 7 日分、計 18 日分の記事を、自分の頭の整理のためにダイジェストしました。各記事についての、短い解説とキーワードが書いてあります。

*「ああでもあり、こうでもある」2009-02-17：資本主義経済が、あらゆるものを商品＝製品という「トリトメのない記号」、つまり購入され、消費され、保存され、いつかは廃棄される対象にしている状況——それがテーマです。記号化される「あらゆるもの」にヒトも含まれることに注意を喚起し、記号と化したヒトが、個性や人格を無視され、取り替え可能＝使い捨て可能なものとして消費されるさまを、タレントや政治家を例に挙げて説明しています。他人とは違っていたい、と同時に他人と同じでありたい、というヒトのアンビバレントな心理についても触れています。キーワードは、「アンビバレンス」「スプーン曲げ」「超常現象」「ユリ・ゲラー」「海老一染之助・染太郎」「ユニフォーム＝画一的」『マゾッホとサド』「ジル・ドゥルーズ」「蓮実重彦＝蓮實重彦」「ハレ＝晴れ＝非日常」「ケ＝褻＝日常」「反意語＝反対語＝対義語」です。

*「差別化」2009-02-18：「ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である」をテーマに論じている途中で、「反意語＝反対語＝対義語＝異義語」と呼ばれるさまざまなペアの言葉が、果たして本当に反対の関係にあるのかという考察に入ります。反意語は、言葉を用いざるを得ないヒトの忘れっぽさから起因する錯覚ではないか、という説にいたります。さらに、ヒトの飽きっぽさに注目し、市場経済においてコモディティ化されがちなヒトが、自分自身を差別化しようと努めるという、半永久的な運動にとらわれているのではないかと指摘しています。キーワードは、「表裏一体」「範囲語」「相對語」「大儀語」「大疑語」「異議語」「同意語＝同義語」「別物」「フーテン族」「快不快」です。

*「飽きっぽくて、忘れっぽい」2009-02-19：「記号」をテーマにするにあたり、勉強嫌いで読書嫌いの自分は、既存の記号論や記号学とは関係なく自分勝手に論を進めていくと宣言しています。とりあえず、最低限必要な用語を自分なりに定義しています。今後は「トリトメのない記号＝まぼろし」という言葉を頻繁に使用すると断っています。キーワードは、「テキスト＝テクスト＝織物」「エンブソン」「あいまいさ」「高山宏」「ニュー・クリティシズム」「ノースロップ・フライ」「シニフィエ」「シニフィアン」「シニフィカシオン」『大いなる存在の連鎖』「アーサー・ラヴジョイ」「ロラン・バルト」「卒業論文」「ミシェル・フーコー」「飽きっぽさ」です。

*「まぼろし」2009-02-20：「トリトメのない記号」を「まぼろし」という言葉で説明し

ています。(1) 差異を無視する。つまり、「距離＝隔たり＝間」を滅ぼす。したがって、「間滅ぼろし＝まぼろし」、(2) 魔物めいたものが、いっさい感じられない。したがって、「魔滅ぼろし＝まぼろし」。以上の2点が最重要事項です。次に、「トリトメのなさ」について分析し、ヒトが自分自身を「差別化」する行為をめぐる考察で終わっています。キーワードは、「男性」「女性」「会社員」「自営業」「フリーランス」「学生・生徒」「学生・生徒ではないヒト」「子持ちのヒト」「子持ちでないヒト」「所持持ち」「独身者」「正社員」「非正社員」「フリーター」「世間体＝しがらみ」です。

* 「トリトメのない話」2009-02-21：引き続き、自己を差別化することが容易であるヒトと、容易でないヒトとの比較をしています。ヒトをコモディティ化する社会において、「自己差別化」と「フェティシズム」が、「おいしい社会」を実現する方法＝戦略であると訴えています。誤解を招きやすい「フェティシズム」について、詳細な説明を行っています。自分が言葉のフェティシズムを実行していることを例にとり、その快樂を語っています。キーワードは「うつせみ＝空蟬＝現人」「あなた＝彼方＝貴方」「言葉の多義性＝多層性」「マラルメ」「泉アツノ」「さいころ」「哲学」です。

* 「架空書評：奪還」2009-02-22：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビューの第7回目。長編社会派サスペンス。農業を基盤とするカルト組織「コミュニケーション」で生活している14歳の少年、小田真人の視点から語られている構成。カルト集団に所属する未成年者を支援するNPOの助けで、コミュニケーションを脱出した真人が、NPOの協力者である中川大地と、東京で共同生活をする。大地からさまざまなことを学んだ真人は、約1年後に、弟をコミュニケーションから奪還する計画を立て、実行に移す。しかし、弟の反応は、真人の期待を裏切るものだった。組織の腐敗を描いた大作。

* 「おいしくない社会」2009-02-23：自己差別化とフェティシズムによって、自己のコモディティ化に抵抗し、「おいしい社会」を維持しようと読者に呼びかけています。「おいしい社会」の敵であるファシズム＝全体主義について考察しています。当ブログでは、なるべく避けたいと考えていた、きな臭く生臭い政治というテーマを扱わなければならなくなったことに、戸惑っています。躊躇（ちゅうちょ）している様子もうかがわれます。キーワードは、「主義」「主義者」「管理」「監視」「司法・行政・立法」「三権分立」「主権在民＝国民主権」「政治家」「官僚」「公僕」です。

* 「あきらめない」2009-02-24：「ヒトってファシズム＝全体主義が好きなんじゃないでしょうか？」という疑問から出発し、ファシズムへの親和性を自己診断するための10項目を挙げています。ファシズムに対する生来の嫌悪感について、過去の回想をまじえて語っています。そんな自分が社会において変人として、現在生きていることについても

語っています。ヒトのあきらめやすい習性を自覚し、あきらめない生き方を実践しようと、読者に呼びかけています。キーワードは、「リーダー」「コンサート」「シカト」「命令」「問題児」「偏屈」「変人・奇人」「暗黒社会」です。

*「最後のとりでを守る」2009-02-25：連日、きな臭く生臭い政治の話題を扱う状況に、自分を追いこんだことを後悔しています。疲れもみえます。ファシズム＝全体主義という言葉で連想するものを例に挙げ、コメントを加えています。そうとう精神的に参っています。この国における全体主義の進行に絶望感をいだきつつ、最後のとりでは、自分の心と頭だと、泣きそうになって訴えています。キーワードは、「マスゲーム」「ナチスドイツの党大会の映像」「オリンピア」「民族の祭典」「美の祭典」「レニ・リーフェンシュタール」「中ピ連」「ハチのひと刺し」「スポーツ」「群れる」「party」「敵意」「選挙」です。

*「やっぱり CHANGE なのだ」2009-02-26：きな臭く生臭い政治をテーマにするきっかけになったのは、数日前に偶然に手にとった六法全書に収録されていた日本国憲法だったことを思い出しています。憲法に書かれていることと現実に行き違えていること、および実現しているさまざまな事態との落差に非常に驚いたこと、そしてその落差をなくすことが絶望的な試みであることを予感し、かなり悲観的になっています。孤独な自分の無力さを嘆いてもいます。そうした気持ちのなかで、具体的にどのような行動をとるべきかを提案していますが、そうとう疲れがみえます。被害妄想的な記述も目立ちます。キーワードは、「モノブログ」「選挙権の行使」「組織票」「自治体レベルにおけるオール与党体制」「公安警察」「民主主義の形骸化」「一億総白痴化」「大宅壮一」「政経分離」「マニフェスト」「公約」「政教分離」「選挙ポスター」「政治家の世襲」「CHANGE」です。

*「イエス・アイ・キャン」2009-02-27：きな臭く生臭い政治について書くことにけりをつける決心をしています。いつものように、前日に走り書きしたメモを見ながら、即興で作文をすることをあきらめ、メモをそのまま書き出し、それにコメントをつける形式で書いています。ポケとツッコミの応酬を思わせる、被虐的で自暴自棄な作文になっています。本音と泣き言を、これほど直接的に書きつづった記事は、このブログでは珍しいです。今読み返すと、限界に達しつつあるのを感じます。最後は、「お祓い」をしたつもりでいますが、……。キーワードは、「情報公開」「良心的裏切り者」「穏やかな革命」「内部告発」「へそ曲がり」「オンブズマン」「野党」「女性」「扇千影」「市川房江」「土井たかこ」「平塚らいてう」「与謝野晶子」「伝染るんです」「ハンコ」「右と左」「組織の腐敗」「選挙での不正」「個人崇拜」「洗脳」「長期政権」「長期在職」「振り子」「犬型人間と猫型人間」「動物行動学＝エソロジー」です。

※「うつせみのあなたに」09-02-28=10-06-26：2008-12-19 以来「皆勤賞」状態で書いて

いたブログが、2009-02-28には、書かれていません。直接にはブログに書きませんでした。その日までの数日間、かなりの抑うつ状態にあり、薬づけでもありました。「消えてしまいたい指数」が異常に高かったからです。そういうわけで、「ネガティブに生きる」という名のブログを削除・閉鎖しました（※記事のバックアップはとってありました）。実際に「消えてしまいたい」を行動に移そうとしたとき、ある偶然から命拾いをしました。奇跡のような出来事でした。いつか、心の整理がついた段階で、その時の体験について、書いてみたいと思っております。現時点では、書けません。

* 「なぜ、お父さんがいないの？」2009-03-01：「うつせみのあなたに」という、新しいタイトルのブログで再出発した、最初の作文です。ブログタイトルには、自分の好きな言葉を組み合わせた多義的な意味がこめられています。ただし、タイトルも記号であり、その記号が放つイメージは、読者によって異なることは言うまでもありません。つまり、メッセージなんて、こめられるわけではないのです。この日の作文は、いつもよりはかなり短くなりました。まだ、薬づけの状態です。「トリトメのない記号」に「マトリックス=お母さん」がいるのに、なぜ、お父さんがいないのか、という疑問から書いています。疑問はいつか解けません。その疑問が、言葉という「欠陥品」を用いてつづられたレトリックの産物であり、比喩という「すり替え」を行っているからだと、書いている途中で気づきます。自分の愚かさや失敗を、反面教師として、読者に学んでほしいという気持ちから、あえてそのまま駄文を投稿しました。冒頭で、自分の生い立ちに触れているのは、前日からの感傷的な気分が残っているからでしょう。明るく振舞おうとしていますが、今、読み返すと、やはり無理をしています。疲れも手伝ってか、やたら、自己輸血=かつての自分の作文からの引用=コピーペストを、行っています。キーワードは、「母子家庭」「母子寮」「生活保護」「協議離婚」「就学」「氏名」「改姓」「鏡像」「文字」「ロラン・バルト」「卒業論文」「性・性差」「道具」です。

* 「女か男か？」2009-03-02：かつて卒論のテーマでもあったことを、思い出しながら、書いています。まだ、卒論のコピーは見つかっていません。家のどこかにしまいこんであることは、確かです。欠陥品である言葉を用いて、「性・性差」について書くことの難しさと陥りやすい罠がテーマの作文です。この記事は以前に比べれば短いですが、今、読み返すと、まだ、書き足りていないという感を強く抱きます。近いうちに、再挑戦します。キーワードは、「女」「男」「文学作品における性・性差」「言語の匿名性」「言語の中性的側面」「哲学」「論理学」「命題」「議論」「錯覚」「事実誤認」「誤謬」「作者はいない」「ミシェル・フーコー」です。

* 「ヒトは本を読めない」2009-03-03：自分が記号というトリトメのないものに引かれるのは、自分のだらしなさがあると告白しているに等しい作文です。書物という「言語による構築物」を、「読む」ということがいかに不可能に近い行為であるかを、ガラス越し

に外の風景を見ることを比喩として語っています。自分なりに、その比喩という道具の使い方に注意を払っているが、その注意を実際に行動に移すのはなかなか難しいことだと訴えています。知らない間に、話がすり替わってしまうからです。キーワードは、「コピーペースト」「テキスト＝テクスト＝織物」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「モーリス・ブランショ」「引用＝コピー＝複製」です。

* 「作者はいない」2009-03-04：自分が大学に進学した当時の文芸批評の新しい波について回想しています。ミシェル・フーコーが「作者はいない」と書いていたような気がするという、きわめてテキトーな記憶から記事を書いています。このスタンスは、これからも維持するつもりです。学術論文を書いているわけではないからです。あくまでも、また実際にも、無精者である素人の作文です。作者をテーマにするさいに避けることのできない著作権についても、少しだけ触れています。キーワードは、「ニュー・クリティシズム」「ヌーベル・クリティック」「新批評」「蓮實重彦」「中上健次」「パイディア」「エピステーメー」「ユリイカ」「ミシェル・フーコー」「ロラン・バルト」「ジル・ドゥルーズ」「ピエール＝フェリックス・ガタリ」「モーリス・ブランショ」「ジャック・デリダ」「オリジナリティ」「引用＝複製」「夏目漱石』『こころ』『文学論』です。

* 「おくりびと vs. 千の風になって」2009-03-05：映画「おくりびと」ブームに対する違和感を、歌・歌詞「千の風になって」と比較しながら、両者が記号であることを指摘し、その記号作用にからめて自由な感想を述べています。また、何かがブームになる現象を、振り子が揺れることにたとえて、振り子に振り回されるのではなく自分が揺れるという、偏屈者としての生き方について述べています。記号作用においては、発信者のメッセージというものが、うさんくさくて不在とっていいほどの希薄なものであることを訴える一方で、受信者の抱くイメージが圧倒的な重要度を持ち、実際に社会を動かしていることを指摘しています。記号の振り子運動＝ダイナミズムという考え方を、提案しています。記事の中で直接には触れてはいませんが、ロラン・バルトが実践してみせた、神話作用＝記号作用分析を意識しています。バルトのパステイシュと言ってもいいかもしれません。キーワードは、「アカデミー賞」「へそ曲がり」「流行」「マーケティング」「葬儀関連業者」「脳ブーム」「健康法ブーム」「資本主義」「不況」です。

* 「毎度ありがとうございます」2009-03-06：中断していた「作者はいない」について、考えています。「トリトメのない記号＝まぼろし」の発信と受信という視点を、前日の記事から発展させています。記号の作者＝生産者が、記号の消費者から崇め奉られるという倒錯について違和感を述べ、そうした事態が当たり前となっている仕組みについて仮説を立てています。その仮説は、ヒトがファシズムを求める習性があるらしい、という以前に立てた仮説を前提としています。またもや、きな臭く生臭いテーマになりそうなので、自重している様子がかがわれます。あくまでも、言語にこだわるというスタン

スを表明し、テーマが政治に傾くのを回避しようと努めています。また、発信側のメッセージを解釈＝解明しようとする、根強い俗説を批判しています。作者と読者の関係について分析し、作者は読者に礼を言うべきだという意見を述べて、作文を終えています。キーワードは、「オリジナリティ」「著作権」「著作権保有者としての作者」「オーサー・ビジット」「講演会」「トークショー」「出版業界」「author」「authority」「個人崇拜」「集団行動」「ロラン・バルト」「テキストの快樂」「快樂のテキスト」です。

*「ゆうれいをはらう」2009-03-07：前日に「作者はいない」について、いちおうのケリをつけたつもりでしたが、作者という幽霊＝亡霊がなかなかしぶとい相手であることを再認識し、とどめを刺すつもりで、幽霊を追い払う作業＝お祓いを行っています。作品という記号とセットにされる固有名詞という「記号としての作者」と、「生身の作者」、そして「記号としての作品」を明確に規定したうえで、読者に分かってもらえるように、固有名詞としての村上春樹、と、生身の村上春樹と、そして『海辺のカフカ』という作品を例にとり、3者の関係をくどいほど具体的に説明しています。その前提として、幽霊という言葉＝記号を使って、記号という考え方を読者になじんでもらうための準備運動も提供する、という周到ぶりをみせています。久しぶりに、間借りしているブログサイトの10,000文字制限にひっかかり、作文を削る作業に追われました。

以上です。

第2部 09.03.09.~09.04.18

09.03.09 要するに、まなかな、なのだ

◆要するに、まなかな、なのだ

2009-03-09

ちょっと想像してみてください、みなさん。

自治体の首長クラスの職にあり、小説家でもある 77 歳のオジイサンの映像が YouTube を通じて全世界に広まりました。映っていたのは、その 77 歳のオジイサンが、こっそりと 20 代くらいのオンナのヒトがしていそうな服装とメイクとヘアスタイルをして、20 代くらいのオンナのヒトがしそうな言葉遣いをし、20 代くらいのオンナのヒトがしそうな仕草をしている映像です。もし、こんな映像が世界中に流れたとしたら、スキャンダラスですね。ショッキングですね。オゲーっ、ですか？ でも、本人は、真剣でやっているですよー。マジで楽しんでいるのです。自己の差別化に努め、ひそかに生きる喜びを味わっているのです。見逃してやりましょうよ。

きのう、以上のような妄想というか、連想をしちゃったのです。頭が疲れて=憑（つ）かれていたのかもしれませんが。ずっと、言葉と性差について考えていたのです。その最中に、上のオジイサンの映像が頭に浮かんだのです。先週「女か男か？」2009-03-02 という記事の中で、言葉を使って男と女を論じるという行為がどのようなことなのかを考えました。重要な個所だけを、以下にコピーペーストします。

>*「男」「女」と書いた文字、あるいは「otoko」「onna」と発せられた音声は、言葉という形で表された「記号」である。

>*小説は、言葉という記号で書かれた記号である。

＞*記号において、女か男かを問う意味はない。

＞*言葉も記号も、「匿名的で」「非人称的で」「中性的な」ものである。

これでけりがついたような気がした一方で、まだ何かピンとこないなあ、という思いが残りました。で、きょうは、再度、言葉と性差というテーマで記事を書きたいと思っております。

をとこもすなる日記といふものををむなもしてみんとてするなり

『土佐日記』という紀行文について、中学生か高校生の時に習ったのを思い出しました。冒頭に、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」、つまり「男が盛んに書いている日記をいうものを、女である自分もやってみよう」と書いてあるのです。作者は、紀貫之（きのつらゆき）という、60歳のオジサンどころか、当時の平均寿命を考慮するとオジイサンだったらしいのです。

学校の授業で、その話を聞いたさいには、何とも思わなかったような記憶があります。でも、冒頭の一節について、今あらためて考えると、すごいことをやったんだ、と感心してしまいました。で、いろいろ調べてみました。そして、『土佐日記』には、4つの注目すべき点があると思いました。

(1) そもそも日記はオトコが書いていたらしい。

(2) 一応オトコであるオジイサンが、オンナを装って日記を書いたらしい。

(3) 『土佐日記』は、全体が仮名（※かな）＝ひらがなだけで書かれているらしい。

(4) 日記＝記録＝ノンフィクションを装っているが、どうやら、虚構＝フィクション＝文学作品と分類すべきらしい。

屈折しています＝ややこしいです、ね。この屈折＝ややこしさは、『土佐日記』が書かれた時代においては、めちゃくちゃ「衝撃的＝ショッキング＝劇的＝革命的＝画期的」だっただろうと想像されます。でも、現在という時点から見ると、「なんということもない＝みんなやっている＝ふつう」のこと、なんですよ。そんな当時と現在の落差にも、自分なんかは感動してしまいます。みなさんは、どうお感じになりますか？

で、自分は、冒頭に紹介したような、YouTube の映像を妄想してしまったのです。当時の出来事を、そんなふうに想像＝妄想すれば、現在でも、十分にめちゃくちゃ衝撃的＝ショッキング＝劇的＝革命的＝画期的な珍事件として、世の中をあっと言わせるのではないのでしょうか？ それとも、そんなんじゃ、もう、誰もあっと言わないのでしょうか？ 自分は、YouTube を 2、3 回しか見たことがないので分かりません。もっと、あっと言うような映像が、それこそ数えきれないくらい、ネット上を飛びかっているのでしょうか。

いずれにせよ、『土佐日記』は、文学史的には、スキャンダラスなだけでなく、衝撃的な出来事＝事件だったらしいのです。なにしろ、因果関係があるのかどうかは知りませんが、現象として、その珍事件をきっかけに女性たちが、ぞくぞくと日記の類を書くようになった。つまり、女流文学＝女性文学のさきがけになった「らしい」のです。「らしい」、つまり、そういうお話＝神話＝伝説＝紙芝居の筋書きがあるのです。言い換えると、

* 女装が、女性運動に火をつけちゃった。＝女装が女性運動のさきがけとなった。

ということになります。やっぱり、ややこしい＝屈折している＝ねじれていますよね。だって、

* なぜ、文学史では、女性が日記を書いたという出来事＝事件が、最初に来ないのだろうか？

と思いませんか？

* どうして、「女性が女性する」ではなく、「男性が女装する」が先に来るのか？

と不思議に感じます。

ちなみに、初めて女性が「仮名＝ひらがな」で書いた日記文学は、藤原道綱母（ふじわらのみちつなのはは）の『蜻蛉（かげろう）日記』だとされています。以下、メジャーな作品名が続きます。『和泉式部（いずみしきぶ）日記』『紫式部（むらさきしきぶ）日記』『更級（さらしな）日記』などなど。

とにかく、『土佐日記』という言葉で書かれた「トリトメのない記号」が、かつては生身のヒトであった紀貫之さんのメッセージ（※発信者のメッセージなんて嘘くさくて、あったとしても泡みたいに、はかないものですが）なんかと無関係に、「かなを使った文学」と「女性文学」を開花させる一助（※あくまでも一助＝一要因ですよ）となったらしいのです。で、学校で習ったうろ覚えの知識を総動員して、前半のまとめをしちゃいましょう。結論から申しますと、

要するに、まなかな、なのだ。

です。

よくは覚えていないのですが、

(1) まなぶみ＝真名文＝漢字の文＝漢文＝中国語＝オトコの文字＝公用文書・記録に用いられた文字＝支配者階級の文字＝インテリの文字

と

(2) かなぶみ＝仮名文＝かなで書かれた文や手紙＝大和言葉＝オンナの文字＝私的文書に用いられた文字＝伝説・説話・和歌・物語・フィクションを書くのに使われる文字

という2つの系統の文字体系＝言語体系があったらしいのです。

で、まなぶみからかなぶみへの「移行＝主流派の転換＝下剋上」に、オジイサンの女装＝助走＝序奏が、結果的に寄与したらしい、ということなのです。この辺は、とても大雑把でテキトーです。正確なことは、どうかお勉強なさってください。個人的には、

「まな＝真名」に「真」、

「かな＝仮名」に「仮」

という文字が当てられていることに、ただならぬものを感じます。どうということかと申しますと、これは、きっと

「差別だ！」

と感じてしまうのです。いずれにせよ、自分は古文が苦手なので、これくらいで古典の話はやめておきます。で、後半に入りましょう。

*

みなさん、

オネエ言葉

って、ご存知ですよ？「オトコがオンナの言葉遣いを真似るさいに発せられる言葉＝

一種の方言」と言ってもよろしいかと思います。テレビでオネエさんたちがオネエ言葉を話しているのを聞いて、自分もこっそり真似てみたことがあります。で、その感想なんです、とても気持ちいいのです。正直申しまして、快感を覚えるのです。

幼いころから、自分は物まねが大好きでした。テレビに出てくる、いろいろな人の声や仕草を真似ていました。特に好きだったのが、関西のお笑い芸人さんの物まねです。周りから、すごく馬鹿にされました。でも、懲りずにやっていました。これって、なかなか直り＝治りませんよ。今でも、やっていますもん。以前のブログでも、よくやっていました。それは、それでいいとして、女装や、オネエさんすることや、オネエ言葉を使うことの根底にあるのは、

「装う」という、行為＝行動

ですね。

>>*言葉も記号も、「匿名的で」「非人称的で」「中性的な」ものである。

と、さきほど引用したフレーズの意味を考えると、「装う」という行動がよく理解できるような気がします。

匿名的＝中性的＝ニュートラルだということは、のっぺらぼう＝白紙状態＝何にでもなり得る、

というか、

「何でもあり状態となる可能性を秘めている」

というか、

実にわくわくするような状態

なのです。

クレヨン一式を与えられたコドモが、何も描かれていない画用紙を前に、よーし、なんて張り切っちゃっている様子に近いのではないのでしょうか？あるいは、お金を持った時のわくわく感です。今、誰かから5万円を手渡され、「これで何を買ってもいいよ」なんて言われたと妄想してください。わくわくどきどきそわそわしませんか？

お金って、匿名的＝中性的＝ニュートラルで、のっぺらぼう＝白紙状態＝何にでもなり得るもの

です。その金額以内ならば、何にでも化けることができるんですよ。

*

「装う」に話を戻します。これと、「なる＝成る＝生る」を比較してみたいのです。

(A) 装う＝よそおう：(1) よそを追う＝自分とは本来関係のないものを追い求める。【※念のためお断りしておきますが、これは学問的根拠に基づいた説ではありません。駄洒落です。えっつ？この記事を読むのは、もう「よそう」ですか？そんなことは、予想(よそう)外です。】(2) よそよそしい＝自分とは本来関係がなく、親しみがない。だからこそ、自分とは本来全然関係のないものを「装う＝化ける」なら、その落差から迫力のある「装い＝よそ追い」となる。

(B) なる＝成る＝生る＝生成＝変化：要するに、なるシズム、なるシスト、なりきる、なりきり。：(1) 無から、生じる、あらわれる。誕生。(2) 別のものから、かわる。変身。(3) あるものが、べつのもを演じる、装う。変態。【※ここでの「変態」は生物学上の意味を比喩として用いているだけです、念のため。】

めちゃくちゃ、こじつけ＝デタラメ＝ダジャレ＝オヤジギャグをやっていると、お思いでしょう。でも、ステファヌ・マラルメ、ジャック・デリダ、ジャック・ラカンと基本的には同じで、「言葉の賭け＝書け」をやっているつもりなんです。で、上記の（A）と（B）の両者が、「装う」という点で、ダブっていることにお気づきになりましたか？

きょうは、（A）と（B）の相違点は脇に置いて、共通点である

「装う」

に的を絞って考えてみます。さきほど触れましたように、「装う」というのは、ヒトに「快感」をもたらす行為＝行動なのです。「〇〇ごっこ」が楽しいのと同じです。お父さんとお母さんと子どもを「演じる＝装う」ままごとも、「〇〇ごっこ」の一種ですね。もっと例を挙げてみましょう。

お医者さんと患者さんと看護師さんを「演じる＝装う」。お人形さんやキャラクターのおもちゃなんかを使って、いろいろな役を「演じる＝装う」。自分を機関車や飛行機に見立てて装う。お姉ちゃんやお母さんのお化粧道具をこっそり使って化けてみる。

以上のようなコドモたちの遊びの根底に、共通して「装う」という行為があります。装うという行動は、コドモだけのものではありませんね。オトナも、コドモとオトナの間にいるヒトも、

* 「装う」という「気持ちのいい行動」にとりつかれている

と言っても過言ではありません。ヒトという種（しゅ）の習性なのです。

*

さて、本題に入ります。

「言葉と性差」

です。

冒頭で挙げた、77歳のオジイサンの女装という妄想話、紀貫之という60歳のオジサンが「女装」して書いた『土佐日記』、オネエさん方が用いるオネエ言葉。これに、実際の女装、つまりお化粧や女性の衣服をまとう行為を付け加えてもいいのですが、どんどん話が広がっていく恐れがあるので、きょうは特に、

*「装う」というテーマを「言葉のレベル」に限定して話を進める

つもりです。つまり、かつらやお化粧や衣装はなしです。結果から申しますと、さきほど触れた「女か男か？」2009-03-02 から引用した、

>>*記号において、女か男かを問う意味はない。

という結論と、ほぼ同じになります。ただし、もっと正確にしたいのです。という趣旨で、以下に、できるだけ正確に、このややこしい問題を「トリトメのない記号である言葉」を用いて、記述する試みをしてみようと思います。で、

*言葉というトリトメのない記号において、性差はなく、あるとすれば、それは、オンナあるいはオトコを「装う＝演じる」という「役割＝機能＝働き＝効果＝作用」でしかあり得ない。

したがって、

*言葉で表現されるオンナと、オンナの「属性＝特徴＝性質」は、ヒトという生き物のメスとオスの「属性＝特徴＝性質」を「模倣する＝装う」という形でしか、存在しない。

たとえば、

* 「生物学的意味でのメス」と「言葉という記号として立ち現れるオンナ」との間、そして「生物学的意味でのオス」と「言葉という記号として立ち現れるオトコ」との間には、直接的なつながりはない。両者のつながりは、「比喩=たとえ」としてのみヒトに知覚される。この状況は、言葉を書くあるいは話す側の発信者にとっても、言葉を読むあるいは聞く側の受信者にとっても、同じである。

ゆえに、

* 性差が最も厳密に定義され、また性差の厳密な指示性が要求される、たとえば医学や生物学の学術論文においても、その学問的領域でのあいまいさが存在する限り、「生物学的意味でのメス (or オス)」と「言葉という記号として立ち現れるオンナ (or オトコ)」もまた、同等のあいまいさを模倣=反映する。

つまり、

* 「生物学的意味でのメスとオス」の差異と共通性 (or 同一性) の「同定=特定=認識=定義上のあいまいさ」は、即、「言葉という記号として立ち現れるオンナとオトコ」に模倣=反映される。

以上のことから、言葉でオンナとオトコを論じるさいには、その前提となるメスとオスという区別=分類=差別にけりをつけておかない限り、

>>* 記号において、女か男かを問う意味はない。

ということになります。

ところで、みなさん、ヒトのメスとオスってどう違うのでしょうか？ これは、生物学や医学が対象とする領域であると同時に、社会学、文化人類学、女性学、女性問題、女性史、フェミニズムなどが対象とする領域でもあるわけです。

さらに言うなら、すべてのヒトにとっての問題でもあり、他人事（ひとごと）で済まされない事柄です。遺伝子や染色体といったレベルに還元して真理に到達し、それでおしまいといった単純＝杜撰＝テキトーな話では、決してないのです。当然のことながら、性同一性障害（GID、MtF、FtM）、同性愛、異性装、性別違和感、性自認、半陰陽、オネエさん、おネエ MANS など、きわめて多様な「視点＝立場＝アイデンティティ」からのアプローチが不可欠です。

ということは、

*「言葉でオンナとオトコを論じる」という行為は、いわば「発展途上」＝「議論が尽くされていない」＝「中途半端」な状況で、「とりあえず」＝「見切り発車的に」行わざるを得ない

ことになります。

以上が、きょうの結論です。

*

えっ？「発展途上」「中途半端」「とりあえず」「見切り発車が結論」？ そんだけー？

ですよね？

実際、そんだけー、には違いないのですが、そんだけー、で、この記事を終えたくはありませんので、視点をがらりと変えます。テーマは変わりません。あくまでも「装う」です。で、突然ですが、自分は、みなさんに次のように訴えたいと思っております。

みなさん、装い＝演じましょう！ 自分が装って＝演じているという現実を意識しつつ、装う＝演じることを楽しみましょう！ 紀貫之さんを見習いましょう！

「装う＝演じる」を、広い意味でとってください。自分自身＝「自分って何？」＝自分探し＝アイデンティティの追及、なんてわけの分からないものにこだわるのは、やめましょう。自分が好ましいと思っている「イメージ」を、自分が「まとう」、つまり「装う」、そして「演じる」のだと、自覚して意識的になり、装っている＝演じている自分を楽しみましょう。そのためには、2つのスタンスが可能だと思います。

(1) 実行型：さまざまな可能性に自分を開き、チャレンジしてみる。自分のコモディティ化を拒否する自己差別化も、これに入りますね。たとえば、女性だったら、男性が独占しているものやことを奪い取る、なんていいですね。男性だったら、女性化してみる、なんていいですね。コドモだったら、オトナのやっていることをこっそり盗んじゃう、なんていいですね。オトナだったら、恥ずかしがらずに、コドモの領域に足を踏み入れる、なんていいですね。

(2) 空想型：さまざまな役割＝他者（※ヒト、生き物、物、架空の存在）＝森羅万象、に感情移入したり、それになった自分を空想する。想像力と創造性が必要です。ゲームをしたり、ハンドルネームやアバターを使ってネット上に存在するいろいろな「社会」や「グループ」に参加することで、既にそうした「複数の自己」を楽しんでいるヒトたちがたくさんいるのではないのでしょうか？

断っておきますが、(1)も(2)も、犯罪になるような行為は駄目ですよ。他人に迷惑をかけては、絶対にいけません。それだけは、マジで気をつけましょう。あくまでも、この「おいしい社会」を享受する、つまり楽しむのが目的です。それこそが「豊かな生き方」というものではないのでしょうか？

09.03.10 女心を男が歌う

◆女心を男が歌う

2009-03-10【この日に投稿する予定でしたが掲載を取りやめた記事です。】

きのうの記事を書いている途中で、ふと思い出したことがあります。ある米国人が語っていたのですが、日本の演歌は変だというのです。「どうして、女性の気持ちを述べた女性の歌を、男性が歌うのか？」って質問するのです。「米国では、そういうことはないのか？」と尋ねると、「絶対にない」ってその人は断定しました。さらに、「男が女心を歌うなんていう気持ちが分からない」とまで言うのです。本当ですか？

自分が、この会話をしたのは、大学生時代です。昔の話です。現在は、この種の話をする知り合いがいません。みなさん、知り合いの米国人や他の国の人たちに尋ねてみてください。で、もし、女性の気持ちを歌った歌を男性が歌うことが、日本だけの話だしたら、大問題じゃないですか？日本って、そんなに特殊な国なんですか？

自分の場合、演歌を歌うことはありませんが、女性の気持ちをつづったエッセイ、手記、ブログ、短編小説（※長編は、このところ読む気力がなくなりました）を読むのは好きです。持っている小説も、女性が書いたもののほうが多いです。実は男性恐怖症なんです。母子家庭で育ち、周りに「おねえちゃん」や「おばちゃん」はたくさんいましたが、「おにいちゃん」や「おじちゃん」は、あまりいませんでした。というか、避けていたのかもしれない。

特に「おじちゃん」、つまりオトナのオトコが怖いと幼いころから感じていました。現在も、正直言って怖いです。ちなみに、自分が苦手なものに、シェービングクリームと男性整髪料の匂い（＝臭い）があります。

自分自身は、整髪料を使っていません。かつては無香性のジェルを前髪の生え際に少しつけて、前髪を立てていたことがありますが、現在は、その必要がなくなってきました。これは、まことに残念で寂しいことです。そんなわけで、いつの間にか、シェービングクリームと男性整髪料の匂い（＝臭い）に満ちた理容店＝床屋さんに行かなくなり、ずっと美容室を利用しています。ただ、その頻度＝必要性が少なくなってきたのが、まことに残念です。

きのうから、「性・性差」について考えています。ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある。そんなふうには、思いをめぐらしています。で、きょうは「性・性差」をテーマにしたいのですが、その前提となる道具を整理する必要を感じています。道具というのは、言葉です。「性・性差」を論じる前に、まず次のように言葉の整理をして

おきます。

*

*「性・性差」：「」でくくられているのは、きのうの記事でも書きましたように、この種的话题を論じるさいの環境が整っていないからです。つまり、「発展途上」「中途半端」「とりあえず」「見切り発車」状態にあるのです。現に、「性」「セクシュアリティ」「性役割」「性自認」「ジェンダー」「セックス」「性別」「雌雄（しゆう）」などといった多様な言葉が使用されています。また、人によっても、今挙げた言葉から受けるイメージや、その定義やニュアンスが異なります。ですので、とりあえず、「性・性差」という言葉を使います。

*女／男：呼び捨てっぽくて、あまり使いたくないペアです。「女は」とか、「男は」みたいに、単独では、言いたくも聞きたくも、書きたくも読みたくもない、という意味です。「男女（※「だんじょ」であり「おとこおんな」ではありません）」と、くっつけて書く場合には、抵抗感は薄れます。ただ、「女男（※「じょだん」であり、「おんなおとこ」ではありません）」という順序の言葉がないのが、不公平な気がします。

*オンナ／オトコ：この表記は気に入っています。このブログでは、なるべくこのペアを使用します。

*雌／雄：嫌いです。パスします。使いません。たぶん。

*メス／オス：気に入っています。特に、染色体や遺伝子レベルでの性差を区別したい時に使おうと思っています。ただ、ほかの人の中には、このペアに抵抗を感じる方もいらっしゃるだろうな、と予想しています。前後関係で誤解は避けられそうですが、使用のさいには、配慮を心がけます。

*女性／男性：当たりさわりのない表現だと思います。ある特定の人や、読者の方を指す場合に使う予定です。「オンナ／オトコ」の敬語バージョンという感じ＝漢字でしょうか。

*牝／牡：こんなのもありましたね。とっさに出されると、区別がつきません。

*♀／♂：未だに、両者の区別ができません。覚える気持ちもありません。もちろん、使ったことも、ありません。今、キーボードを操作して使用したのが、生まれて初めてだと思います。

*

次に、挙げる言葉たちも、自分の場合には、性差を論じるさいには、欠くことのできないものです。

*コドモ／コドモとオトナの間のヒト／オトナ：これまで何度か、当ブログで使用してきた表記です。

*子ども／大人：「子ども」は使います。自分のイメージでは、「コドモ」の敬語バージョンです。「大人」は、おそらく使わないでしょう。字面が気に入りません。昔、銭湯で、番台の脇に「小人〇〇円・大人㊦㊦円」というふうに書いてあったのを思い出します。

*女／男／女性／男性：この4つ（2つのペア）が対比して使われることがありますね。感想を、以前の記事から以下に引用します。

＞要するに、言葉は文字通りでは用いられない、言葉は人を裏切る、ということが、実用文の最大の特徴だということです。（中略）

＞客観的でなければならない報道記事が、簡潔さを要請されるために、いかに粗雑でミスリーディングな記述とならざるをえないか。また、たとえば、容疑者は「女、あるいは男」、被害者は「女性、あるいは男性」などという、ギャグとも思える滑稽な紋切り型の言葉を用いなければならない（「※男は男性の右腕をバールのようなもので打った形跡があり……」といった調子）。

以上は、「信じてはいけない言葉」2008-12-27 で書いたことですが、今でもそう思っています。要するに、馬鹿みたい、という感じです。

*

いろいろ書きましたが、自分はお勉強も学問も学術用語も嫌いなので、厳密に言葉を定義して、自分をがんじがらめにする気は全然ありません。これから先、大雑把な言葉の使い方をするに決まっています。ですので、上で定義めいた作業をしましたが、あくまでも、おおまかな目安だと理解してください。さて、道具の整理が、一応済みましたので、きょうのテーマである「性・性差」に入ります。

「性・性差」について論じるのに、「言葉」と「言葉としての記号」と「記号としての言葉」に限定して話を進めていくというスタンスは、これまでと同じです。生物学者や医学者でもなく、社会科学系の学問の専門家でもなく、「性・性差」に関する領域を特に深く研究している身でもない、自分としては、あくまでも1匹の「狂える尻尾のないおサルさん＝ヒト」として、あるいは、1人の素人として、自分の思うところを書きつづるだけです。

「性・性差」は、きわめて大きな問題です。広い分野にまたがり、多種多様な視点と立場を射程に入れなければなりません。そこで、まず自分は、とりあえず、

「役割＝機能＝側面」を「装う＝演じる」

または

「役割＝機能＝側面」に「なる＝なりきる」

というフレーズを用いながら、「性・性差」という言葉のまわりをうろちよろするという方法＝戦略をとろうと考えています。そのために役に立ちそうな部分を、きのうの記事からコピペします。

> (A) 装う=よそおう : (1) よそを追う=自分とは本来関係のないものを追い求める。
【※念のためお断りしておきますが、これは学問的根拠に基づいた説ではありません。駄洒落です。えっつ？ この記事を読むのは、もう「よそう」ですか？ そんなことは、予想(よそう)外です。】(2) よそよそしい=自分とは本来関係がなく、親しみがない。だからこそ、自分とは本来全然関係のないものを「装う=化ける」なら、その落差から迫力のある「装い=よそ追い」となる。

> (B) なる=成る=生る=生成=変化 : 要するに、なるシズム、なるシスト、なりきる、なりきり。:(1) 無から、生じる、あらわれる。誕生。(2) 別のものから、かわる。変身。(3) あるものが、べつのもを演じる、装う。変態。【※ここでの「変態」は生物学上の意味を比喩として用いているだけです、念のため。】

きのうは、以上のうち「装う」をキーワードにしました。きょうは、特に

「演じる」

に注目してみたいと思います。「演じる」と一番相性がいい、つまり日本語の「コロケーション=定着した表現」として語呂がいいのは、

「役割」

でしょう。

「役割を演じる」

とか

「役目を演じる」

なんて、よく言いますよね。

「性・性差」を「役割＝役目」としてとらえる考え方

があります。興味深いだけでなく、世の中にはびこる、因習＝慣習＝悪癖に対する有効な戦略となる可能を備えた視点だと思います。

*

役割を演じる

という場合には、「性・性差」だけに話を限定すると、かなり窮屈になります。大雑把な視点から、徐々に話を絞っていくほうが面白そうです。というわけで、まず、広い意味で「役割を演じる」という行為を考えてみましょう。そのほうが、楽しいし、自由な発想でいろいろなアイデアが浮かんできそうです。

ヒトをメスとオス、オンナとオトコ、コドモとオトナと2つに分けるのは、窮屈

です。実際には、

ヒトはもっと多面的な存在として、日々の生活をいとなみ、人生を送っている

はずです。ぶしつけな質問ですが、

あなたは何ですか？

とか、

あなたは誰ですか？

と尋ねられたとき、あなたは、どのようにお答えになりますか？

「ほっといてよー」、「かんけーねーだろー」、「おまえこそ、何だよ、誰なんだよ」、「ばーか」、「あほちゃうか」、「そう言われても……」、「何か、ご用ですか？」、「先生から、知らない人と話しちゃいけないって、言われてるから、だめ」、「誰だと思う？ 当ててみて」、「さあ、なんでしょう？」

などという言葉返す方も、いらっしゃるに違いありません。仮に、馬鹿正直にどうか、まともに答えたとすれば、どんな返事が可能でしょうか？ 自分なりに妄想してみます。以下は、順不同です。

「にんげんです」、「にんげん、やってます」、「一児の母（or 父）です」、「〇〇の妹（or 姉 or 弟 or 兄）です」、「△△の母（or 父 or 祖母 or 祖父）です」、「☆☆の息子（or 娘）です」、「▽▽の妻（or 夫）です」、「内閣総理大臣だ」、「文部科学大臣です。でも、きょうは私人として参りました」、「〇藤△夫と申します」、「〇川△子ですけど」、「会社員です」、「□㊦株式会社に勤めております」、「フリーターです」、「〇〇から派遣されてきた☆☆です」、「いちおう、公務員ということになっておりますが」、「大工です」、「医師をしております」、「△△師（or 士）です」

「〇〇小学校に通っています」、「△年□組の生徒です」、「通りがかりの者です」、「ちょっと、㊦㊦さんに用事があって来ました」、「名乗るような者ではありませんよ」、「おれを、知らないんだ、あんたは？」、「わたしを、ご存じない？」、「見れば、わかるでしょ、△△だよ」、「あなたの息子（or 娘 or 孫 or お母さん or お父さん）ですよ（or だよ）」、「おばあちゃん（or おじいちゃん）、あたし、□□じゃない。分かんないの？」、「これです（※黒い手帳を取り出して、あるページを見せる）」、「こういうものです（※名刺・パンフレット・写真IDカードを取り出して見せる）」、「いいえ、わたしは〇〇の㊦㊦～」、「そうよ、わたしは㊦㊦の〇〇～」

「占いをやっております」、「スピリチュアルのほうを少々、やっている者です」、「㊦㊦教団から参りました、☆☆と申します」、「あたし（or おれ or 僕）、＜※ハンドルネーム＞」、「ぼく、妖精」、「わたし、ミニーちゃんのいもうと」、「おら、しんのすけ」、「ぼく、

ハリー・ポッター」、「わたし、うさぎ」、「ぼく、機関車」、「おれ、火星人」、「わたしは、☆星から来ました」、「わたしは、天草四郎の生まれ変わり」、「おれ、前世はブタ」、「いちおう、おんななんだけど、おとこって感じもするしー」、「おとこ、ときどき、おんな」、「ハードゲイだぜ」、「ハードボイルドだど」、「自分を探しているところなんだ」、「ここはどこ？ わたしはだれ？」

*

さて、以上の答えのうちで、「性・性差」が限定されるものはどれだけあるでしょう？たとえば、「……の父親」だと言っていれば、いちおう、オトコでなければなりませんよね。あくまでも、「いちおう」です。そうではないケースも、考えられます。たとえば、

- (1) 嘘をついている、
- (2) 男装をしている女性である、
- (3) 性転換している女性である、
- (4) 自分を男性だと思いこんでいる女性である、
- (5) 社会における「父親」役を演じている、父親ではない男性あるいは女性である、
- (6) ままごとをしているコドモ、あるいはオトナ、あるいはコドモとオトナの間のヒト

などを思い浮かべましたが、セクシュアリティ（性のあり方、あるいは性の認識）などを考慮すれば、ほかのケースもあるに違いありません。

このように、

わたしはAです。

と言った場合、そのAが「性・性差」によって限定される、単純に言い換えれば、「Aが、オンナかオトコのいずれか、でなければならない」ケースはそれほど多くはないのではないのでしょうか？

とりわけ、

* 「わたしはAです」のAが「役割＝役目」である場合には、「性・性差」が決定的な要素であることは少ない。

と言っていいのではないのでしょうか？ もちろん、これは、この国の現時点を基準にしての話です。この国で、「性・性差」を限定するものとしては、法律・世間体・通念といった要素が考えられます。割と緩やかなほうでしょう。何しろ、オジサンやオジイサンが、カラオケなんかで女心をどうどうと歌える国なのです。

*

とはいえ、忘れてならないのは、「性・性差」が、きわめて重視されている国々が、世界にはたくさんあることです。「性・性差」に対し、大きな拘束力を持つものとしては、宗教・政治体制・慣習・文化・風俗・歴史的経緯など、さまざまな要因＝要素が考えられます。したがって、

* 性差は、「発展途上」「中途半端」「とりあえず」「見切り発車」状態にある。

ということ、グローバルな視点に立って、さらに正確に表現するならば、

* 性差は、時や、場所や、宗教・政治体制・慣習・文化・風俗・歴史的経緯などによって、多様な「発展途上」「中途半端」「とりあえず」「見切り発車」状態にある。

と言うべきでしょう。

話がどんどん大きくなっていきますね。当然のことだと思います。それくらい、

「性・性差」を、言葉およびイメージという「欠陥品 or トリトメのない記号」を用いて論じるのは、しんどい

のです。

まだまだ、考えなければならないことが、いっぱいありそうです。

実に、興味深いテーマですね。みなさんも、一緒に考えみませんか。あっ、そうでした。最後にもう一度、みなさんをお願いします。外国人のお知り合いがいらっしゃる方、冒頭に書いた演歌のことを、尋ねてみてください。そして、その結果を教えていただければ嬉しいです。

09.03.10~12 でまかせしゅぎじっこうちゅう

【注：以下の記事は、抑うつ状態が悪化したために、いつもの長めの記事が書けなくなり、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」という名のブログを開設して、「憂さ晴らし」に駄洒落とオヤジギャグを連発しながら短文をつづったものです。

良く言えば、時事問題に関する風刺、正確に言えば悪態・罵倒です。今回、再投稿するにあたり、掲載しようかどうか迷いましたが、自分が書いた文章はかわいいものです。闇に葬るわけにはいきません。恥を忍んで載せます。

各記事の日付を見ながら、その当時の時事を思い出してください。】



◆ 2009年3月10日をギャグる

2009-03-10 14:05:02 | でまかせ

■ ニュース編

* 自民：二階だけじゃなくて、三階、四階……最上階——地下一階、地下二階……全部だろ。

* 総書記賛成 100%：「どっかの国の公党みたい。」「そうか、がっかり。」

* 小沢潰し：筋書きは、ケ○サツとケ○サツ。スポンサーは、カンテ○とガ○カイかな？

* WBC：熱いイチローがウザい。

* バンキシャ：キシヤクラブ：ナカヨシクラブ：オフレコクラブ：キシヤキシヤ、ポッポシュッポ、ケータイさんとチビ録（＝録音機）持って……

* ラサール＋大学受験：カブリすぎ

* 男もメイク：女はメイワク

* 新三平：三瓶はどうなる？

* 「述べた記憶ない」：さすが「嘘つきはドロボーのはじまり」対策のエキスパート集団出身者。

* 「述べた記憶ない」：「のび太、記憶ない。」「だろうな。」

* 「謝りたくない」 by 理事長：漢字、誤りたくない、やつらが多いから、こうなったって感じ。

* 「謝りたくない」 by 理事長：「官憲、捜査波及しない」 by 副長○

* トム・クル：トム来る：トム帰る

* けいこサボってガルコレ：けいこちゃんサボってボイコレ：どっちが悪い？

* 新語：「西松する」例文：～を総選挙前西松する、～を総選挙前西松しろ、～を総選挙前西松しよう、～を総選挙前西松しなきゃ、～を総選挙前西松します具体例：「小○を総選挙前西松します」 by ○○サツ

■世相編

* マイバッグ&レジ袋不使用：ノーカードを忘れるための全国民的すっとぼけ運動：「よしよし、きょうも地球にいいことした」と言いながら、クルマを走らせるのである。



◆続・2009年3月10日をギャグる

■ニュース編

* 「とうに迷惑かけた」 by Ozaxx : 「とうに諦めています」 by H & K & M etc. : 「とうに諦めています」 by Kokumins

* 「迷惑かけた」 by Ozaxx : 「お世話になります」 by O & N etc. (来週のニュース?)

* 「負けが団結強めた」 by Hara : 「勝ちが団結弱めた」 by H (来週のニュース?)

* クイズ : 次の2グループをつなぎなさい。A : (人間、ネズミ、ウズラ) B : (を駆除する、を処分する、を殺戮する)

* 地方のニュースより : 男は男性の右足をバールのようなもので殴りつけ、女に命じて女性の右腕を鈍器のようなもので殴打させたもよう。

* レーシック : 目ーシック (注 : sick) : アカンベーシック : 「さあさあ、あかんべーしてみせて、患者さん。」 「シクシク。」

* オバマ氏、プロンプター使いすぎ : オバマ市、プロモーター用経費使いすぎ

* 首相、5回の外遊で6億5800万円 : やっぱし、よさのそうり、あそうがいしょう、だ。

* NYで落書き : KYで恥かき

* 「腹が立ちます」 by Ichiro : 「原がたちます」 by Hara (注 : 原辰徳) : 「腹を固めます」 by M 党 : 「腹を切ります」 by 副長〇&〇階 : 「(これから、ずっと) 腹を肥やします」

by politicians

* 「ええ？ やったのかい、おざわにかい？」 in 取調室

* 海賊対策新法了承：会族対策は、どうなってんの？（注：…会、…族）

■世相編

* 定額給付金：某出版社より『定額給付金とマネーローンダリングの研究』今夏緊急出版決定？

* 「おくりびと」ブーム：カントクさん、藤原シンヤはないんじゃない？ コンセプトが違いすぎ。あんた、例の写真の「犬」状態じゃんか。ん？ そうか、そういう意味だったのかあ。納得。



◆ 09年3月11日をギャグる
2009-03-11 09:23:02 | でまかせ

■ニュース編

* 自も民も、党の顔に困った：「自・民合わせて、50人くらいの集合写真でけっこう、ハイ、チーズ」 by Kokumins

* 西松に加え4社が迂回献金の可能性、小沢氏側へ：西松に啜え4社が鵜飼献金の可能性、悪業師側へ

* 文部科学省、漢検協会に改善要求：「エーケンは、どうなんてんだ？」「あれは、そも

そも米さんがらみで、ややこしいし、今まで、付け届けは定期的に十分もらってるし、あそこついたら、いろいろとまずいんや、ほっとけ」「それにしても、協会出版の純正参考書・問題集は値段が高すぎるし、種類が多いなあ、あそこも、もうけすぎ、ちゃうか?」「だから、いいんだってば」「結局、漢検はけちったから、だめやったちゅうことか?」「そやそや、なんでも、そや」

*アホネンが復帰へ：「ワテのニュースや！」 by Toshio Sakata：「あんた、ほんまもんやから、こわいわ」 by みんな

*滞納で卒業証書渡さず：(名古屋弁では)「てーのーで卒業証書渡さず」(注：「低能(脳)」)

*紙パックの梅酒続々：「体にいい梅」の酒か? 「体にいい」「梅の酒」か? なんで、これが「健康意識の高まり」なんだ? おらのねえちゃん、梅酒から入門して、いま、アルちゅう。

*比家族離散：官僚得意の各方面配慮の玉虫色決着：「3でよかったな。」「2だと、どっちにしてももめるもんな。」「はい、次のお題は?」

*にしまつ 300 万円振り込み、にかい氏「承知していない」：国会、まだ、にかい氏、参考人「招致していない」：「いつ、するんだ?」「立件できない。」「なに?」「だから一、立件できない、つーの。」「もう一度言ってみろ。」「記憶にない。」

*「これが私のナックル」 by 吉田えり：「これが私のタックル」 by 吉田さおり：「これがおれのマッスル」 by 吉田ひでひこ：「これがおれのハッスル」 by 吉田ひでひこ again：「これが私のガックル」 by 吉田戦車：「これが私のガックリ」 by 吉田しげる (注：孫のこと)：「ヒック！ これが私のシャックリ」 by どっかの吉田さん：「これが私のパックリ」 by 別のどっかの吉田さん：「これが私のパクリ」 by 吉田〇〇 (注：音楽関係のアーティストたち)：「これがぼくのパクン」 by 吉田眞 (芸名：マクン)：「これがぼくのマクン」 by パクン：「これがあたい (or おれの) マツケン」 by ?

*「これが私のハッスル」 by ヤスハ：「おい、無視しようぜ。」「……………」「ぎゃあーっつ！」

■世相編

* 「おくりびと」は葬儀関係業界への「おくりもの」：葬儀簡素化＝売上減、断固阻止！

* 総選挙近し？：ポスターの握りっ屁ポーズだけはやめてよ：あの握りこぶしの中身わ「ッ毒ガスだ」：おばさん候補の毒まんじゅう頭もやめてよ、せめて、いっこー（注：古谷一行にあらず）に習ってよ。



◆続・09年3月11日をギャグる

2009-03-11 12:32:38 | でまかせ

■ニュース編

* おざわ氏、進退問題は選挙影響で判断：おざわ氏、身体問題は選挙影響で判断：「ごほっごほっ。おい、入院だ！げほっげほっ。」：「わざとらしいなー、オオカミおやじ。」
by みんな

* 民主の西川衆院議員を参考人聴取へ：「民からもう1人くらい総選挙前西松しますか？」「いや、これくらいにしとこうか、国○捜査なんて言われたくないしな。」「バレバレですもんね。」「しっ、声が大きい！」（注：新語「西松する」：「2009年3月10日をギャグる」を参照。）

* 「日本もう勝てない」by ノムさん：「日本もうかってない」by みんな

* 自分嫌い対策に、○教委が「自尊教育」：「ますます仮想敵国に似てくるなー」「大将が、向こうの大將を嫉妬してるんだから、仕方ねーよ、近親憎悪ってやつ」by 左側の庶民：

「知らねーよ、おれは。自主的にやってんだろー。きみ、勉強不足だよ、そんな質問して」
by ○側の大将

*逮捕寸前、手錠掛けた男が逃走：逮捕寸前、手錠掛けた男性らが追跡中

*にかい氏、20日のパーティー中止か？：パー券がパーになるってことか。：「捜査も立件も、パーにならねーかな。」 by 言わずと知れた人

*岩手県知事土下座賛否分かれる：宮崎県知事おけさ賛否分かれる

*ダライ・ラマ声明 独立は求めない：石井みつぞう氏声明事務所からの独立許さない。
(注：ラマさんと石井さんて顔が似てません?)

*イタリアで全員同姓のサッカーチーム：イタリアで全員同性のサッカーチーム

*カーネル人形、下半身も発見される：「まだ現役だー。」：「かつ、半身」⇒「勝つ、阪神」：こりゃ、縁起がいい。

*イチロー、自宅通勤可：やっつとで、クールなイチローにもどるかな。「熱いイチローはイチローにあらず。」 by ファン

■世相編

*勝魔本ブーム：『起きていることはすべて只らしい』：『怒っている人はすべて正しい』：『断らない力』：次は『権力への意志』か？：ウズラ（＝ウんよく、ズーザーしく、ラっかんてきに）でなくて、「ちゃぼ」にしておいたところが強運を示している。20パーなんてケチらず、80パーにしたらどうか。もう十分でしょ、パフォーマンスでなく本気ならね。大不況をいちばんよく知っている、数字にめちゃくちゃ強い人だもんね。ちなみに、総選挙に自\ [か\] ら出ないでね。



◆ 09年3月12日をギャグる

2009-03-12 08:52:26 | でまかせ

■ニュース編

* 11府県の公務員「割高」給与：たかすぎるー。そういえば、たかすぎ～、たかすぎ～っていうTVのCM、最近聞かないなー。やっぱ、民間企業は不景気だからか？

* 鳩山総務相 vs. 日本郵政、どっちの言い分が正しい？：郵政の優勢勝ちか？ 鳩山のハットトリックか？ はたまた、西川にしかわからんか？ はたまた、竹中乱入で、「へっ、意想外な展開」となるか？ 小泉、そもそも、あんたが大泉だったから、やんかー。ちゃうか？

* 逮捕の日、「ありのまま話せ」、小○氏、秘書に：暗号を解く：「アリのまま（の状態）話せ」か？（注：虫のアリ、どういうこっちゃ？ 解けない）：「アリ（注：飲み屋の名前か？）のママ＼[に＼]話せ」か？：「アリ（注：飲み屋の名前か？）のママ＼[を＼]離せ（注：手を引け）」か？：「(何でも)ありのまま＼[に＼]話せ=テキトーに話せ」か？：紛らわしい、実に紛らわしい、おまけに「国民におわび」とは、支離滅裂じゃないか？ こっちが支離滅裂なだけか？ それなら、納得。いつものこと。

* 「国策捜査」あり得ない、法相反論 & 検事総長の証人喚問」に応じない、与党一致：だんだん日本らしくなくなってきた、この国。どことは言わないが、先進国とは呼ばれていない、よその国々とそっくりなことをやってる、じゃんか。：是と見るべきか、非と見るべきか？ やべーなあ。こういうときにつくづく思うけど、あるのは軍隊じゃなくて、自衛隊くらいでよかった。さもないと、ややこしくなるどころか、マジでこわいでっせー。くっ、出た、なんて。ああ、きな臭い。ねじれ国会なんて、かわいいもの。

* 金元工作員：金賢姫元北朝鮮工作員：金賢姫（=キム・ヒョンヒ）元北朝鮮工作員：金元死刑囚：金賢姫元死刑囚：金賢姫（=キムヒョンヒ）元死刑囚：金賢姫（=キム・ヒョンヒ）元死刑囚：北朝鮮の元工作員で大韓航空機爆破事件実行犯の金賢姫元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯の金賢姫（=キム・ヒョンヒ）元死刑囚：大韓航空機爆破事件

実行犯、金賢姫（＝キム・ヒョンヒ）元死刑囚：大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫（＝キム・ヒョンヒ）元北朝鮮工作員：87年の大韓航空機爆破事件実行犯、金賢姫元北朝鮮工作員：普通なら、〇〇さん、とか、〇〇氏で済むのにね。マスコミも大変ね。

*ヨットで太平洋横断に成功、間寛平さん：マラソンの次はヨットで復帰計画ですか？あれだけ若手がぞくぞく出てきて消えていくし、うへはうへで詰まっているし、潰しがきかないんですかね、あのギョーカイも、あれクラスになると：要するに、うへのギャラが馬鹿高すぎる、したのギャラが馬鹿低すぎる、中間搾取がはなはだしいってことですか？あれレベルは、名ばかり管理職と似ているのかも。寛平ちゃんが商売に手を出して失敗して、焦っているなら別だけど。たかるやつらが多いからな、芸ノ一人に。：それにしても、例の往年のタイヘーヨー、ひとりぼっちは、運がよかった。早いもん勝ちの好例。本と講演料と、たまにパフォーマンスでがっぼりだもんな。変な商売に手を出さずにいけば、安泰。あとは褒章待ち。

*美肌アラフォー1位、真矢みき：だからー、アラフォーは、もう死語だっっちゃうの。

*トムクル、公園デビュー：トムちゃん、まだ、いたの？ジェリーは捜してもいないわよー。ジェロならいるけど、不足かしら？日本にフキョー、持ち込まないでねー。アメリカと同じで満員なの（注：経済の話）。日本の芸能界でも、別の意味のフキョーはしないでねー（注：サイエントロジー）。この国の芸能界はSで満員なの（注：言わずと知れたこと）。逆に、シャク〇〇されちゃうわよー。エッチな意味のシャク〇〇じゃなくて、イヤな意味のシャク〇〇なのよー。誤解しないでねー。

*ラモス超えてカズ、世界最年長に：カズくん、そんなにおうちにいるのが嫌なの？もう、年長さん組も卒園したのに、まだ園内にいたいなの？前園くんだって、卒園したのよー。やっぱり、ママがこわいのかな？それとも、ひょっとして人間国宝目指していたりして。もう、好機は逃したんだから、このさいシーラカンスでいきましょうよ。そんなカズくん、大好き。みんなで応援するからね。

*優勝候補、ドミニカ敗退：優勝候補、ドミニカは痛い：ちなみに、われは、歯、痛い。

*ナックル姫えりちゃん、寝坊：そんなことぐらいで、泣くなよー、悲鳴あげるなよー、えりちゃん。：あんまり、まわりになつくなよー、えりちゃん。：そのうち、夏が来る

ぞー、えりちゃん。：とにかく、がっかりさせるなよー、えりちゃん。応援するからな。
男のこわーい嫉妬に負けちゃだめだよ。言いたいのは、そんだけ。

■世相編

*定額給付金のシンゾー：ニュース解説（１）そもそもは、ただの思いつきで、「低額寄付金」のつもりだった、（２）まわりが騒ぎ出したのに、事の重大さになかなか気づかなかった、（３）まだ「低額寄付金」だと思っていて、「さもない」発言、（４）新・KY（＝漢字読めない）発覚以降、案じた官僚から「給付金」との指摘を受けて、本人も気づいたものの、「給付」という言葉が、自分とは無関係だという心理を助長、（５）官僚と党幹部らに説得されてようやく方向転換、ただしセリフの意味はよく分からず、相変わらずルビ付き原稿をポーっ読み状態が続いており、（６）ただいま、国内は大混乱、並行して某シンジケートによるマネーローダリングの準備着々進行中、（７）なお、外遊経費については本人は「私用高額給付金」だと認識しているもようで、外務省もご満足のようす、（８）あとは推して知るべし。：シンゾーの総括：（１）日本の不幸、（２）こんな日本に誰がした？（３）ジャパニーズ・チェンジの必要性大って、ところですか。ちなみに、福田に感想を聞いたら、「あの人とは違うんです」って言うかな？ 仮に、今、安倍だったとしても、こんなことはシンゾー。たぶん。



◆続・09年3月12日をギャグる

2009-03-12 14:33:29 | でまかせ

■ニュース編

*千葉知事選挙、5新人が届け出：「はまこーもか？」「あれは旧人っス。」

*「気力・体力ともに充実しています」とメルマガで麻生首相：「メルマガですか？ はい、首相のは知りませんが、うちでも政治家さんのはたくさん手がけております。で、こういうときには、逆のメッセージを読むんですよ」by 某大手広告代理店幹部\ [オフレコ\]

*腹筋、背筋、腕立て伏せなど 50 回前後と、首相：「数字を出すのが効果的なんですよ。『ウェストが 2.5 センチ』細くなったとあるでしょ？ これもそうです」 by 同上

*首相、身体良好をアピール：「頭で負けてんだから、体で負けたら、完全にアウトだぜ。」「いや、顔で勝負って手もまだあるぜ。」「きみまろのギャグみたいなこと言ってるな。お笑い路線かい？」「そうそう、ジョーダンも顔だけにしてくれーってやつ。」「そんなん、出てきたときから、とっくにやってんじゃんか。」「じゃあ、やっぱ、ふところ具合で勝負か？」「ばーか、この景気悪いときに、そんなことできるか。反感買うだけだぜ。」「やっぱし、体力と気力しかないか。」「じゃあ、鈍感力はどう？」

*給付金、ずれ込み続々：「なぬをやっとる、急げ！」「ははあーっ、でも、遅れだけは、いたし方ないかと……。」「ばかたれ！ いつかは出るんだから、もう前納にしまえ！」「ははあーっ。」 at シンジケート緊急対策会議

*総選挙にらみ、自民、日教組に矛先：総選挙にらみ、民、教祖に矛先？ 最近、視力が落ちたなあ。

*米ビックスリー、史上最大の危機に：ビククリっす。

*朝青龍、師匠無視出げいこ？ : やくさん、あんたくらいしか、頼りになる人いないんすから、何とかしてくださいよー。やくさんも、なめられてんじゃないですか？ 役満(注：マージャン)？ やく(=約=アバウト)がよくないんじゃないですか？ 改名しましょうよ。ちょう(=超)みつるとか、きょう(=強)みつるとか、いじょう(=以上)みつるとか、どうっすか？ やっぱし、チョーくだらんっすか？ 納得。ごっつあんでっす。

*フィナンシャル・タイムズ「世界の 50 人」に、日本人たった 1 人：なんや日銀の白川総裁か。さては、眉の形で選んだな？ さすが、サーカスティックな英国の新聞やなあ(注：sarcastic)。谷垣さんでも、よかったってことか。ちなみに、もう 1 人のほうの総裁を選んでいたら、サーカスティックどころか、ブラックジョークやがな。

*小沢氏関連献金、ゼネコン数社聴取：もう銭来んか、ふうーっ。：けいさつを手下に控えたけんさつ、まんさつを抱えたけんせつに名前激似で近親憎悪か？

*「たばこどンドン吸って早く死んで」と医師、講演で：どンドン吸って吐かずに窒息しろという意味か？

*実物大機動戦士ガンダム、お台場に立つ：オタク、お台場に居座る

*加護写真集、1週間で完売、なぜ？：やっぱ、お守り代わりでしょ、常識的に考えて。スキャンダルや災難にめっちゃ強いもん。元気、出るんでしょよね、あれ持っていると。いいことあるよー。「名前で得したね、加護ちゃん。」「は、あい。」

*「ゆずグレン」結成、期間限定コラボ：「ゆず+キマグレンなら、語呂が悪いから『グ』取れよ」「それは、ゆずグレンらしい」

*さむらいジャパン、練習試合に逆転勝ちを収める：スポ紙ならちっちゃい文字の「練習」でっせ。やっぱ、さすらいジャパンやな。

*WBCルール誤解で、松坂登板できず：日本代表首脳陣の誤解でっせ。やっぱ、さすらいジャパンやな。

*阪神球団社長、「カーネルを甲子園に」ケンタに依頼：上位阪神だけじゃなく、勝つ阪神、ええ話やな（注：「上半身発見」、「下半身も発見」。「続・09年3月11日をギャグる」参照）。呪いはとけたぜ、社長！ただし、カーネの話はチキンとしんとあかんでー。あとで、ケンタにならんよーにな。そうすれば、超タッキーで、優勝まちがいなし。あとは、球団幹部たちがビール、サンダースいっきに飲んで、カー報を待ってネルだけ。

■世相編

*たまごかけご飯ブーム：やっぱ、大不況やなあ。ちんまりして、安上がり。でも、大好き。「あのぬるぬる感、たまんないわー」 by オネエさんズ

*不景気で内食ブーム：「内職ブーム」は無理。だいいち職がない。：「うち私欲ブーム」は相変わらず官民間わず、あちこちではびこる。偽装・献金・裏金・天下り・渡り・・・：で、庶民は、パパが外で遊べないから、「内色（・殖・触）ブーム」が各家庭でお盛ん。少子化対策にもなる。不況下での唯一の明るい話題か？

09.03.13～15 でまかせしゅぎじっこうちゅう

【注：引き続き、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というタイトルのブログ記事です。抑うつがひどくなり、息切れ状態になりました。「うつせみのあなたに」というブログを削除・閉鎖し、この世から「消えてしまう」ことを考えました。その苦しみの間に書いた記事です。】



◆ 09年3月13日をギャグる

■ ニュース編

*「小室さんは金で傲慢に」エイベックス社長証言：だから、今はしおらしく金髪やめたのか。なるほど。：だから、金\ [返済\] でまたゴーマンに復帰する計画なのか。なるほど。

*にかい氏パー券で公選法抵触の恐れ：筋書き揺るがず：ああ、……。

【削除】

ジョーチ出のジョセーとふりんのジョージに耽っている噂のジョージ・タカハース
(注:えすッス) 似のジョーシ:「うちは超フレックス (=超テキトー) 勤務の超零細だし、
今日はサンク・ゴッド・イツ・フライデーだし、13日なんて、気にせーへんし。もう、
内緒の

【削除】



◆続・09年3月13日をギャグる
2009-03-13 14:42:42 | でまかせ

■ニュース編

*青森リンゴ、霜被害で大量廃棄の危機：♪りんご、かわいそうや、かわいそうや、りんご〜。頑張ってや！ ちょっとくらい、いたんでいても、食うぞ。

*侍ジャパン、カブスに3-2で辛勝：またルールとかに責任をカブスなよ、さすらいジャパン。これでも応援してんだぜ。次はキューバだ。イチローに、はらたたせるなよ、はらたつさん。：先の話だけど、のむさんか、形だけミスターのほうが、よかったなんて結果論は嫌だぜ。

*武部元幹事長、自民離党も検討：見限ったけべ。：「もう、こんなとこ、知らん！」と雄たけべをあげたらしい。：「割ったなべ、元にかえらず」と合流ってこと、ないよな？
(注：渡辺喜美& 覆水盆に返らず。)

*麻生首相、不人気が人気？ 視聴率高まる：さすがバカボン一家顔。やっぱし、顔力で勝負している。知力ほぼなし。体力、気力は、このところ不安。財力は揺るがず。：あ、そうだ、「不人気が人気？」は「不人気が任期、長びかせる？」とも、読める。不思議だ。ちゃんと当たっている。

*海賊対策、海上警備行動で護衛艦出航へ、政府：だからー、海賊は英語でパイレーツだっちゅーの。むぎゅ。

*検事総長喚問、法相が反対、「検察の独立脅かす」：どっぷり\ [を\] 脅かす？ なるほど。

*性教育をめぐる都議による視察「教育への不当な支配」東京地検認定：抵抗できない子どもたちと、公務員でもいちばん煙たい教師たちから、まず攻める。そして、言うことをきかせる。一方で、自己ロボット化にせさせと励む教委と、いつの間にか飼いつづらされた議員たち。仮想敵国と同じ道を歩んでいる。大将の思うまま。：「知らねーよ、自主的にやってるんだろ。きみ、勉強不足だ、そんな質問」って、いつもの横柄な捨てゼリフ。聞き飽きたぜ。：「わたしはナポレオンでも、ヒトラーでも、スターリンでもない」「そうだろうな、それより、ずっと小物だ」：それにしても、選んで、ひょこひょこついていくから、こんなことになった。これでいいのなら、いたしかたありません。「まことに、いかに存じ～ます（注：昔の青島ゆきおの歌の一節なんだから。そんな古いもん、知るか!）」

*スイス中銀、金融緩和策強化、為替介入も：「水銀が入ったか、えらいこっちゃ」by トンチンカンおやし

*巨額詐欺マドフ被告、最長禁固 150 年か：70 歳とはいえ、米国の刑務所はこわいで。何がこわいって、他の同性受刑者たちによるあれよ（注：rape）。刑務所入る前の、〇〇検査なんて、ちよろいもんよー。ハワイであれ、サイパンであれ、米国領でっせー。罪に問われないように注意しようっと。オー、プリーズ、ダイアナ～。：これも、メディアの報道では、「マドフ」と「マードフ」でまちまち。：「窓拭き」vs.「マーボ（＝マーポー）豆腐」、どちらに軍配があがるか？ まーどーゆーふーになってもいいけど。

*「定額給付金で返す」恐喝容疑の少年ら：これ、ひょっとすると流行るぜ。今年前期、流行語大賞か？

*大相撲春場所、取組決まる：相撲の番付表は勘亭流に似た相撲体（＝相撲文字）で書かれる。政界の番付表は官邸流で書かれる。

*選抜、低めもストライク：低いのに甘くなるってことか。要するに、低いのに基準を置くってことか？何でも不況とつながってくるように思えるのは被害妄想か？：選抜、高めもストライク、では駄目？高校野球ぐらい、景気良くやろうぜ。締めていこうぜ。諦めムードじゃ駄目。：ワープロソフトばっかし、使っていると、「締める」と「諦める」新・KY、KKになるんだよなー。(注：新・KY「漢字読めない」、KK「漢字書けない」)

*WBC世界戦、栗生が新王者に：見出し見て、「ん？」。やっぱ、略語がややこしいなあ。トンチンカンおやじを笑えんわ。(注：今日の「09年3月13日をギャグる」を参照)

*イカナゴ煮の見本を誤って販売、賞味期限切れ：イナゴだと読み間違えて、ぎょっとした人、わしだけじゃないはず。きわめて、イナゴ似。少なくとも字面は激似。：正式名は「いかなごくぎ煮」略して「くぎ煮」とも言うんだって。：ところで、何なのこれ？いかでも、いなごでも、どくでも、くぎでも、ないってことは確からしい。いかなるものなの？

■世相編

*『とてつもない日本』とつぜん売上好調：『とてももたない日本』：『とってももったいない日本』：『とんでもない日本』：『もっと泣いて日本』：結論：『とってもつまらない本』かも。それより、日本、なんとかせんとあかんで。マジで。

*オバマ演説集売れ行き好調：「超一流のスピーチライターがゴースト、超一流の広告代理店と弁護士たちが制作したってこと、忘れないように。オバマさんは読んだだけー。ただし、声と間の取り方は確かにいい。特に、高音と低音の声の出し方は天才的。低音はセクシー。プロンプター依存症が玉に瑕。ちなみにケータイ依存症でもあるね」by わしの知り合いのアメリカ人(注：かなりのインテリみたい)：「とにかく、上のとてつもない話とはだいぶ違うなあ」by わし



◆ 09年3月14日をギャグる

■ニュース編

*首相、与党に追加経済対策を指示する：「首相」とか「総理」が主語に来るたびに、述部が浮いて見えるんだよな、このごろ。「首相は、日本語を破壊している」のではないだろうか？ ただし、「首相は、日本語を破壊している」という文だけは、主語と述部がしっくりくる。

*首相、「追加景気対策を準備」全人代閉会：見出し、上と激似。中身を読むと、中国の内需拡大策の話だった。紛らわしい。いずれにせよ、この文では述部が浮いて見えなかったのは、錯覚か？ ただし、われ、にかいみたいに、しんちゅうにあらず。その意味では、みやこに居すわる横柄な I 大将と同じ。

*WBCキューバと対決へ：はらたつさん、急場しのぎ感覚ではだめですよ。マジでキューバをしのいでこそ、侍ジャパンです。そこんどこ、間違えないように、お願いしますよ。

*WBC王者長谷川、会見：やっぱ、見出しだけ見ると、紛らわしい。(注：昨日のブログ2本を参照)

*首相「学会じゃなく、学者含めて。創価学会っていう意味じゃないよ」：ぶらさがり取材での発言なんだって。オールジャパンがらみでの話なんだって。その次に「あぶねえ」って言っているんだけど、そのしゃべっていることが、ある意味で「あぶねえ」。：「あぶねえ」のと組んだのは、てめーたちだろうって。だから、「あぶねえ」ことになってるんじゃない。おめえのあたまがいちばん「あぶねえ」って思っていねえのは、おめえだけって、知ってっか？ そのことが「あぶねえ」だってわかってっか？ おめえのはべらんめえ調じゃなくて、でらんめえ調、もしくはでたらめえ調、あるいはでまかせえ調じゃねえのかい？ そういえば、せえちょーけえちょー（注：「政務調査会長」）ってのも、昔やったんじゃないか。：結論：このしゃべり方でしゃべっていると、ほんといにでれーっとしてくる。口もともゆがんでくる。ねじれてくる。やっぱ、「あぶねえ」や、こういうしゃべり方のやつって。この国を「任す=負かす」わけにはいかん。まだ、ふほっー、ふえーっ、のほうがまだ。納得。

*五輪招致決議 17日に衆院で採択：そうか、自・公・民などが招致を承知したか？ なんか、みやこの議会みたいだぜ。いずれにせよ、みやこに居すわる横柄なI大将が喜びそうなニュース。ちえっ。2016年の話だぜ。わしは、そんなとき、いくつになるんだ？ どうなってんだろうなあ、この国は。そして、世界は。ごりんじゃなくて、ごろんなんて、嫌だぜ。まして、そのころはごりん中なんて、縁起でもない。どうせやるなら、豪勢にやろうぜ。メダル、欲しいっす。めっちゃ、欲しいっす。

*大卒就職内定率、5年ぶり悪化：そんなことあつか。内定に泣いていたところが、懐かしい。あんときは、嬉しくて泣いた。今は、違う意味で泣く人も多いな。♪ないて～、ないて～、なかれて～、ないて～。：気を落とすなよな。「春」はいつか来るって。

*高速道路値下げ 28日開始、千円で乗り放題、国交相：「千円で乗り放題」って、品がない言い方だと思いませんか？ こっちの想像力が、いやらしいだけか？ 納得。

*センバツの組み合わせが決定、開幕は21日：せんべつの額が決定、垂れ幕は19日までに用意。：後援会も大変だなあ。

*朝青龍、身勝手出稽古、かわいがり：朝青龍、ミー勝手に稽古か？ わい、がり、苦手でんねん。(注：寿司の「がり」＝「しょうが」っす)：「ったく、しょうがねえなあ」by このでまかせギャグにあきれた人：「同感っす」by わい(注：でたらめ関西弁で喋っているときの、わし)：それにしても、「かわいがり」って、めちゃくちゃなシゴキやんか。「かわいさあまって、憎さ百倍」って感じだったぞー。：「こりゃ、完璧にSMごっこやんか？」「SuMo やさかい、しゃあない」「納得」：「ああー、くだらん、めちゃくちゃや」by わい

*郵便局のサービスの低下を指摘民営化委員会が意見書：サービス悪けりゃ、イノッチ取り～(注：(1)昔やっていた何かのCM。(2)V6の「いのっち」：いのはら・よしひこ)：いのはらくん、このままだと、かんぽ生命保険のイメージキャラクターから外されちゃうよ。

*郵便局のサービスの低下を指摘民営化委員会が意見書：サービス悪けりゃ、しょうがない～(注：(1)同上。(2)あらしのさくらい・しょう)：しょうくん、このままだと、郵便事業のイメージキャラクターから外されちゃうよ。：郵政民営化で4分社化された

から、こういうことになるのか？

*郵便局のサービスの低下を指摘民営化委員会が意見書：(1) やっぱ、にしかわにしかわからん。(注：「09年3月12日をギャグる」参照。)(2) それとも、にしかわにしかわかい者のサービス教育はできんのか？(3) それとも、にしかわにしかわのサービスの元凶はなしか？(4) それとも、業種別分割でなくて、「京都にしかわ」と「東京にしかわ」みたいに、このさい思いきって地域別分割にするべきか？(5) それとも、「ゆーせい」から「あいせい」か「ういーせい」か「ぜいせい」に改名するべきか？(注：you / I / we / they) 「ぜいせい」は「税制」みたいでややこしいし、ひとごとみたいで、さらにサービス低下しそうだから、パス。「ういーせい」は、「ういーつつ。ふおーつつ」のなかかわさんを連想させて、論外。「あいせい」は「愛 say」みたいに字面もかわいいし、この中では優勢かも。

■世相編

土日はネタ入荷なしっす。



◆続・09年3月14日をギャグる

2009-03-14 14:28:27 | でまかせ

■ニュース編

*安倍元首相、「信頼回復に全力」再登板に意欲：ちょっと、ちょっと、待ってよー。誰も頼んでないってばー。それとも、誰か後ろにいるの？：「安倍元」「首相」だよ。「ダメモト」ご「愁傷」さま、じゃんか。やめてよー。また、「ぼくちゃん、やっぱり、ぽんぽん痛くなったからやめる」なんてヤだよ。：「きし復活？」「よしだと、はとやまから、きしへ」を思い出させるなあ。超保守への「逆方向」ってやつよ。懐かしい言葉だなあ」
by ある懐古主義オヤジ「懐かしいと思うのは勝手だけどよー。何でもDNAのせいにするなよ。世襲を肯定するわけじゃないけどさ」by わし

*バチカン騒動、事実関係を否定、中川前財務相：地元で謝ったから、今度は全国民向けにすっとぼけ戦術か？ あの時、酔っ払っていたのか、ラリっていたのか知らないけど、「ふおーっつ」状態だったことは、みんながTVで見たんだぞ。そう簡単にはだまされんぞ。世界に大恥さらしたのは、国民みんななんだからな。何？ 警報機が鳴らなかった、だと？ それが聞こえなかったくらい「ふおーっつ」だったってことじゃねーか。あんたは、保身だけや。信用できへん。とにかく、いさぎよくないやつは、だめー。ところで、あんた、またうろちょろしてるけど、ひょっとして、また出る気なの？ 往生際、悪すぎいー。

*米国民、大不況でも楽観的：「経済はネガティブじゃだめ！ 徹底的に、楽観主義と鈍感力でいかなきゃ、だめ！ 経済は、とどのつまりは心理なの！ 資本主義は間違っていたなんて、反省している場合じゃないの！ すべては時間が解決するの！」 by 今、無職でかっかしている、知り合いの元金融関係者「賛成！」 by わし

*消費者心理、2カ月連続で改善、前月比0.3ポイント上昇：0.3ポてのが、こころもとないけど、この調子で、ポジティブにいこう。マジで。「信じる者だけが救われる」っていうじゃん。で、これって、誰が言ってんだっけ？ Sじゃねーよな？ 前言撤回はしたくないぜ。

*与謝野財務相、10兆円超の財政出動を米長官に表明：うちのじいちゃんが、与謝野の顔をテレビで見ると、「青島だあ！」って変な振りをつけて言うんだけど、あれ、昔のギャグなの？ 故・青島幸男と与謝野財務相は顔がちよい似だってことは、認めるけど.....。「じいちゃん、青島さんは亡くなったの。あれは与謝野晶子の息子」って、説明するたびに、「「君死にたまうことなかれ」の与謝野晶子の息子が、自民党にいるわけがない」って、すごい剣幕で怒るんだわ。「青島幸男だって、無所属だったぞ」って、こっちが言い返すと、「あれは、変節漢で信用できん。ふざけた歌ばかり作りやがって」って言って、「すすすすーだらだったすらすらすいすいすいー」とか、「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ」とか、「はいそれまでよ」とか、「銭のないやつあオレンとこへこい」とか、歌かギャグなのか、わけの分かんない言葉を、これまた変な振りをまじえてわめきだすんだわ。わしは、ギャグとかナンセンスソングが好きだから手をたたいて見てんだけど。やっぱ、血筋は争えんとつくづく思う。

*麻生首相、ホワイトデーのお返しは、ICレコーダー女性記者8名に：ぶら下がり取材で失言して、そのレコーダーでばっちり録音されて、墓穴を掘るって筋書きか？ やりかねないから、こわいわー。アイ・シー。納得。

*北京原人、古さはジャワ並み：北京飯店、辛さはジャワ並み、新カレー・メニュー。

*マイケル英公演、チケット5時間で完売、50万枚：マイコー、サイコー。：ノリピー、うれピーと同じノリピーっス：ところで、マイコーももう50歳だぜ。アラフィー。アルフィーもまっさお。そういえば、アルフィーの3人もアラフィーだぜ。あと十年で還暦過ぎ、アラシー（注：around sixty）、嵐寛寿郎（=あらしかんじゅうろう）、アラカン、きみまる（注：きみまるの計算式は around 還暦？）と同じ帰結になったぜ。納得。

*TBSアナ、ストライキ：T「とってこ」、B「場当たりの」、S「ストライキ」。：明日も続けば、T「とにかく」、B「バンキシャに」、S「視聴率負けは確実」。「イヒヒ」by フリーのふくざわ。：T「年食った」、B「ばかアナが」、S「嫉妬するのは管理職になった元アナ」。

*カーネルに眼鏡新調、鯖江市が寄贈：福井の鯖江市はメガネメーカーが多いらしい。わし、メガネには目がねーんだ。メガネフレームを、しょっちゅう変えておま。今度は、サンダース大佐みてーに、黒縁にすっか。とにかく、えー話やなあ。

*WBC、侍ジャパン、サンディエゴ入り：そうか、サンディエゴに入ったかあ。試合開始は日本時間で16日午前5時。日曜だな。サンデーへGO！：原さん、対キューバ戦では、耐久馬力（=たいきゅーばりき）がカギでっせー。わし、明日は早起きして、応援すっからな。（※訂正：16日は月曜っス。早起きは明後日っス。わしってやっぱ、あほっス。反省。around 03-14 15:15）

*スカウト25人殺到、無失点ダル：侍ジャパンは、「見本市」じゃないってば。「日本一」だっちゅーの。むぎゅ。：だるいかないでよ。：「ダル、行かない？ 出よ」by 米のスカウトマン。「ダル、行かないでよ」by 日本のファン。「ダル、（まだ）いかないでよ」by 言わずと知れた女性。

■世相編

土日はネタ入荷なしっス。



◆ 09年3月15日をギャグる

■ ニュース編

*石川議員、容疑否定「進退は考えない」：「しんたいはかながえない」とは？ :「進退は考えない」⇒小沢と同じ戦略=工夫なし：「身体は考えない」？小沢みたいに、わざとらしい「ごほっつ、げほっつ、おい、入院だ！……」

【削除】



◆ 続・09年3月15日をギャグる

【未投稿】

■ ニュース編

*年金記録問題で、与野党「アピール合戦」の様相：年金問題はよくわからん。保険料を払っている国民にもわからん。集めている役人にもわからん。管理しているキャリアにも先のことは読めん。受給している国民にもわからん。なんで、こうなったんや？ やっぱ、単純に考えて、ちょろまかされた莫大な金が消えたことが元凶か？ ぜんぜん捻出できない「捻金」、念じても出てくるわけがない「念金」、どこに眠っているのか「寝ん金」、粘り強く政治家と官僚を突かないと国民が馬鹿をみる「粘金」、燃え尽きたのか「燃金」。：結論：「さっぱりわからねん金」

*G 20、財政出動により、同時金融危機再発防止と不況回避へ：G 5⇒G 7⇒G 8⇒G 10⇒G 20：そうか、いわゆる先進国だけの問題ではなくなってきたとゆーことか？ それだけは納得。あとは、ようわからん。：「G 20に参加した国を挙げよ」。高校生クイズの予想問題やな。

*数社が「受注額」基準に迂回献金、西松の巨額献金事件：やっぱ、「鵜飼」献金や。首に紐がついた鵜を何羽もあやつるし、「返します」なんて言って、一度飲み込んで吐く鵜もいるし、そっくりやがな。がらがらして、べっと吐くんやったら、「うがい」献金か。納得。ちなみに、もともとは餌をやるほうももらうほうも「こりゃーいいわい」なんて、「ゆかい」献金だったんだろうな。納得。

*前原氏、小沢氏に苦言、献金「合法でも問題」：「げほっ、ごほっ。おい、入院だ！」なんて「ごほっ」でも問題やって、本当は言いたかったんやな。納得。釘さしておかんと、あのオーカミおやじ、都合が悪くなったら、やるで一。前科もあるさかい。

*小6女兒を2日間監禁、容疑の35歳男、長崎で逮捕：抵抗できない社会的弱者つーのに、悪さするやつはサイテーや。そう、思いませんか？ここはギャグるブログで、本来はマジっちゃんかんのやけど、黙っておれんわ。この男こそ、監禁。

*花粉症のつらさは、お菓子禁止に匹敵する？民間会社調査：20～40代の花粉症の女性が対象の調査らしい。「お鼻ぐじゅぐじゅ」vs.「あまいのだめ」か？男性対象なら、「お鼻ぐじゅぐじゅ」vs.「〇〇いのだめ」か？〇〇に入る言葉をえろえろ、いや、いろいろ想像して、にやりとしてしまう、わしであります。

*E JAPAN公園延期の裏に、メンバー間に亀裂？：延期になると、数千万円の損害賠償が発生するらしい。Eを「エックス」ではなく「ばつ」で入力してしまったわいな。わかった？それでも読めてしまうから、こわいわ。

*オダギリジョー、映画「プラスチックシティ」舞台挨拶で「調子に乗ってない」：最近、よく雑誌の表紙に載っているだけっス。納得。

*原監督、強豪キューバに「互角以上に戦える」：「互角」以上の結果出して、初めて「合格以上」。明日は、早起きや！

*日ハム二岡、本拠地オープン戦、三振デビューでも大声援：あの歳ですであの清原顔で、におかにおう立ちで三振かー。けど、貫禄あるなあ。最初、テレビで顔見たとき、

マジでバンチョーと勘違いしたで一。激似や。げきにおか。ちなみに、キヨはナガブチと並んで雄くさい男の代表らしいけど、におかもにおうか？

■世相編

土日はネタ入荷なしッス。



◆投稿されなかった記事より【未投稿】

■世相編

*草食\ [系\] 男\ [子\] : 装飾系男\ [子\] : フェミ男\ [オ\] くん (注: ブランドのフェミオ・バ (= ヴァ) レンチノ FEMMIO VALENTINO、および「革命児サパタ」のユーフェミオにあらず) を思い出す。「フェミ男\ [オ\] くん」が流行語だったのは、いつのことだったか? : 草食\ [系\] 男\ [子\] 増加で、(1) 喜ぶ人: 雄っぽい男が嫌いな女性、戦争が嫌いな人、持てない男性? (2) 困る人: 戦争が近いと思っている人、結婚を焦っている未婚女性、与党の政治家、不況を元気がないせいにする人、自衛隊・警察官・体育系サークルの勧誘係の人、少子化を憂える人? (3) 儲かる人: 化粧品会社やアパレル関連の会社の人? (4) 経済的に損する人: スポーツ用品メーカー、スポーツイベント企画会社、スポーツ界の人? (5) うまく利用できそうだと考えている人: 出版関係者、広告代理店の人、TVギョーカイの人、野党の政治家? (6) 複雑な気持ちの人: オネエさん、ゲイ (注: 男女を含む) の人? (7) どうでもいいと思っている人: 男なんかいなくても生きていける女性、肉食女子、肉食女性、女なんかいなくても生きていける男性? & きわめてテキトーな、わし、など。(8) 理屈をこねたい人: とにかく、いるみたい。

■世相編

*国策捜査をギャグる: 「国策?」「そうさ。文句あつか?」: 国策操作、国策走査線、国策捜査線上、国策捜査洗浄、国策捜査洗浄中 (注: 下水管掃除用)、国策捜査する人=

コックサッカー（注：cocksocker）：変種（1）：こっくりさんそうさ、コックさんのそうさ、こくさくソーサ（注：皿、ドミニカの野球選手にあらず）、国産そうさ、国際捜査、コック臭い操作（注：cock、four-letter word ですので、使用の際にはご注意ください。）、こくさく総裁、コック臭い総裁（※オゲーッ！）、コック最高総裁（※ほーっ！）、こくさく葬祭、こくさく相殺、こくさく惣菜：親戚（2）：見込み捜査（＝「とにかくやれやれ」捜査）、泳がせ捜査（＝「リモコン付きストーカー型」捜査）、違法捜査（＝「『現時点では適正な捜査であったと認識している』とコメントする」捜査）、潜伏捜査（＝「対特殊団体」捜査）、おとり捜査（＝「要演技力型」捜査）、強制捜査（＝「有無を言わせない力づく原則外」捜査）、任意捜査（＝「これが原則」捜査）、検察捜査（＝「おれたちがやるから、おまえたちは手を引け」捜査）、隠蔽捜査（＝「今野敏作」捜査）、科学捜査（＝「実際に重箱の隅を楊枝でほじくるド根性型」捜査）

■世相編

*環境問題をギャグる：「ロハス」って、初めて聞いたとき、「お初」を連想したのは、わしだけ？：口ハス（注：「くちはす」と読む。意味は、口を斜（＝はす）にかまえる、つまり歪めること。イメージとしては、ソーリの口か。）：ローハス・クーポン：二酸化炭素排出権取引に用いられるクーポンのこと：エコはエゴ：他の生き物に対しては、エコロジーよりアポロジーでしょう（注：「謝罪」）：リユースは「廃品回収」「おさがり」の「再利用」にあらず：リサイクルは「罹災来る」可能性も無きにしもあらずという諸説あり：結論：とにかくエコはうさんくさい。

【注：「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログを書いていたころから徐々に体調を崩し、駄洒落やオヤジギャグで気晴らしをすることさえできない状態になり、結局 2009 年 3 月 15 日に「でまかせしゅぎじっこうちゅう」を削除・閉鎖しました。

とはいうものの、悔しさと表現欲と焦りに満ちた気持ちは収まりません。せっかく書いた過去のブログ記事だけはちゃんと葬ってやろうと考え（※記事のバックアップはとってありました）、「うつせみのうつお」というタイトルのブログを開設し、1日3記事くらいのペースで徐々に掲載（＝再録）していきました。やがて、その作業も挫折しました。

今思うと、上記の作業は、一種の「お墓作り」に似た「儀式」でした。それだけブログ記事を書く行為が、生き甲斐になっていたのでしょうか。】

09.03.26～27 かわる (1) ～ (5)

【注：2009年3月26日からは、病後なので無理をしないように、ブログ記事の書き方を変えています。以前のように、前日に書き溜めておいたメモを頼りにして、一気にアドリブで長めの記事を書くことができなくなったからです。そこで、記事を少しずつ書くつもりで臨み、区切りのいいところで投稿するという方法に変わっています。したがって、1日に数回投稿しています。ブログのテーマは、「言葉の仕組みと働きを探る」になりました。】

◆かわる (1)

2009-03-26 11:11:36 | 言葉

かわる。

こうやってひらがなでぼつりと書いてみると、漠然として、とりとめのない感じがするの、日本語が大和言葉系の言葉と漢語系の言葉から成り立っているからだと思われます。変わる。代わる。換わる。替わる。漢字に置き換えてみると、ひらがなだけの「かわる」が、いろいろな意味やイメージを担(にな)っているさまが浮き彫りになります。辞書で「かわる」を引いて、いくつかに分かれた意味の項目と定義と、それに当てる漢字との関係を見ていると、不思議な思いに駆られます。

もともと日本語には文字がなかったという説が有力です。だから、中国語の文字である漢字を変形して、ひらがなとカタカナを作ったそうです。かつてはどう発音され、どういう活用をしていたかは知りませんが、「かわる」や「かえる」に相当する言葉が、前後関係だけを頼りにコミュニケーションの道具として使われていた時代、つまり文字のなかった時代を想像してみましょう。

そう言われても、これまた漠然として、とりとめのない感じがしますね。想像しよう

にも、とっかかりになるものはありません。では、発想の転換をしましょう。文字が存在しなかった昔のことなどを考えようとするから、話がややこしくなるのですよね。やめましょう。よく考えてみると、日常生活の会話でのレベルならば、「かわる」と「かえる」の使用法については、現在でも状況はそれほど変わらないのではないのでしょうか。

「ねえ、そろそろカーテンを新しいのにかえようよ」、「あっ、もうすぐ信号が赤にかわるよ」、「ほんとう？ また、あの人、仕事がかわったの？」、「このお味噌汁、おかわりしてもいい？」、「この会社では、専務にとってかわる、これぞという人物がいないことが最大の問題だ」、「最近の〇〇ちゃん、ここに初めて来た時とくらべると、ずいぶんかわったね」、「じゃあ、そのかわりにあなたがお風呂掃除をしてね」、「かわりばんこに運転しながら、大阪まで行ったの」、「きょうは、わたしがお母さんにかわって夕ご飯をつくります」、「君のおじいちゃんって、かなりかわった人だよね」

このように、しゃべっている分には不自由はしないと思われます。

ところが、以上の例文での「かわる」と「かえる」に漢字を当てようとする、自信を持って漢字をまじえた文に変換できるものもあれば、かなり迷うものもあるのではないのでしょうか。変、代、換、替のうちのどれを当てるのか？ パソコンのワープロソフトには、当然のことながら変換機能がついています。変換に迷った時に助けとなるような、簡潔な説明や例が示してあるので役立ちます。それでも、迷うことがあります。そんな時には、辞書を引きますが、それで解決することもあれば、とりあえず、最も適切と思われる漢字を当てたり、自信がないのでひらがなのままで書くこともあると思います。

漢字の読み書きのテストを除けば、いざとなったらひらがなで書けばいい。こう思うと楽ですね。これが日本語の有り難い点でもあるのです。



◆かわる (2)

2009-03-26 14:56:36 | 言葉

「かわる」という言葉にこだわってみたいと思います。一日に一度は口にしたり書いたりしそうな言葉であり、さまざまな意味や記憶やイメージを呼び起こしてくれる言葉です。

「かわる」という言葉を言い換えるとすれば、どんな言葉を思い浮かべますか？「変わる」「代わる」「換わる」「替わる」とワープロソフトを用いて変換すると、意味が具体性を帯び、イメージが膨らんできませんか。それは

* 「かわる」がわかってくる

からです。「かわる」が「わかる」とは、言葉の遊びです。もっと遊んでみましょう。

* わかる。分かる。判る。解る。別る。

こうすると、「わかる」がわかってきませんか？「わかる」でも、できそうです。

* わける。分ける。別ける。

さらに、「わかる」もわかることができそうです。駄洒落となるのを覚悟でもっと遊んでみます。

* わける。沸ける。湧ける。涌ける。

わけがわからないですね。せっかくここまで来たんですから、さらにエスカレートさせてみるのもいいでしょう。

* わく。沸く。湧く。涌く。粹。惑。和久。ワク。わくわく。waku。WAKU。

突拍子もないものまで出てきて、並列されています。「かわる」が「わかる」、「わかる」が「わかる」、「わかる」が「かわる」、さらに「わかる」を「わかる」ことで「わく」がわいて、わくわくしてきた、という感じでしょうか。

駄洒落やオヤジギャクと呼ばれているものは、こういう脈絡を欠いた言葉の連なりを

意識的に、あるいは無意識のうちに頭に浮かべながら、作られるのかもしれませんが。この種の作業に、わくわくする人がいます。ここにもいます。あなたは、どうですか？ くだらない？ そう思われる方のほうが、多いのではないのでしょうか。それはそれで、よくわかりますけど。

*

いずれにせよ、

* 「かわる」という言葉の意味やイメージが、漢字を当てることによって「わかる」ようになる

という過程は、駄洒落のようでありながら、ある程度「言えてる」ことだと考えられます。ちょっと理屈をつけたくなりましたので、やってみます。

「かわる」という「多重的な＝多層的な＝多義的な＝ぐちゃぐちゃした」「話し言葉＝音声」、

および、

ひらがなで表記された「言葉＝書き言葉＝文字」、

つまり、

「とりとめのない記号＝まぼろし」

が、

「わかる」という「多重的＝多層的＝多義的＝ぐちゃぐちゃした」「話し言葉＝音声」、

および、

ひらがなで表記された「言葉＝書き言葉＝文字」、

つまり、

「とりとめのない記号＝まぼろし」

によって、

わけられる＝分けられる＝分類される＝分別される＝区別される＝整理される＝理解される＝意識される＝知覚される。

そのさいに、

大きな役割を果たすのが、漢字＝感じ＝感字＝かつての中国語である。

簡単に言えば、

*ひらがなが漢字の助けを借りて意味がとりやすくなる

という一例です。こう書くと、つい「もしも」と考えてしまいます。もしも、日本語が歴史的経緯によりひらがなだけで表記される言語であったとしたら、日本と日本語はどうなっていたでしょう？ この疑問文の「ひらがな」を「ローマ字」に置き換えても、いいでしょう。

実際、かつて日本語をローマ字表記にしようとする運動があったと聞いた覚えがあり

ます。また、朝鮮半島におけるハングルの使用、そして中国での表記のアルファベット化運動も、頭に浮かびます。

上述の日本語についての「もしも」について考えると、思わずうなり声が出てきて、キーボードを叩く指が止まってしまいます。あなたは、どうお感じになりますか？



◆かわる (3)

2009-03-26 18:17:17 | 言葉

*「わかる」というひらがなで書かれた言葉に、漢字＝感字を当てる、つまり、漢字をまじえることで意味が分類される＝区別される＝明確になる。

このように書くと、いいこと尽くめのような印象を抱きそうになりますが、果たしてそうでしょうか？

ところで、寄り道になりますが、ここで「感字」という言葉について説明をする必要を感じます。このブログでは、既に何度か用いていましたが、「感字」のように辞書に載っていない言葉遣いや言葉を使用するさいには、よくグーグルなどで“○○”というふうに括弧でくくって検索してみます。すると、想像したよりもヒット数が多くて驚くことがあります。また、ヒットしたサイトをのぞいてみて、その使われ方と自分の使い方を比較してみるのもおもしろいです。似ている場合も、まったく違う場合もあります。

辞書に載っていない言葉遣いや言葉というのは、メディアで見聞きした新語や流行語の類であったり、メディアを通して、あるいは日常生活において誰かが口にするなり文字にした表現を見聞きし、「へえーっ、そんな言葉があるんだ」くらいの気持ちで受けとめたものです。あるいは、自分で造語したと思い込んでいるものという意味です。今、「思い込んでいる」と書いたのは、グーグルなどで検索してみると、既に誰かが造語している場合がよくあるからです。

「感字」という言葉については、初めて見聞きしたのが、いつなのかは覚えていません。

手元にある複数の辞書には載っていないことは確かです。グーグルで調べた限りでは、かなり普及している言葉だと思います。個人的には、感字は夏目漱石の当て字をイメージして使っています。漱石の感字＝当て字には感心させられるものが多く、自分なんかは「漱石の感字のファン」だと言っても言いすぎではないと思っています。

さて、さきほど書いて宙吊りになったままの問いを、少し変えて繰り返します。

ひらがなだけで書かれた言葉に漢字を当てることは、便利なことでしょうか？

意味が明確になるのだから、便利というか、良いことに決まっているのではないか。勝手に、そんな返答を想像してしまいます。書き言葉であれば、ひらがなだけで書くよりも、辞書的に「正しい」とされている表記にしたがって書くことが求められる場合があることは確かです。

この文章を書いているパソコンの脇に『朝日新聞の用語の手引』という本があります。かつて仕事で文章を書いていたころには、それにしたがって表記するように指示されました。たとえば、出版関係の仕事にたずさわる人のために手本＝標準となるような表記法があることは納得できます。でも、メールや、ブログ、手紙といった私的な文書において、漢字をまじえた「正しい」表記法は便利なものと言えるでしょうか？

自分の好きなように書けばいい。

結論をいうなら、そう思います。もちろん、程度や限度はあるでしょう。ただ、コミュニケーションの道具としてなら、想定する相手に通じればいい。日記のような自分だけのものなら、自分がわかりさえすればいい。

「正しい」と「正しくない」は、そういう区別が好きな人同士や、かつての国語審議会の役割を果たしている文化審議会国語分科会が勝手にやっていたらいい（※ただし、後者では税金が使われていることを忘れてはなりません）。そう思っています。

と書いたところで、疑問が浮かびました。そもそも、言葉遣いが「正しい」とか「正しくない」とはどういうことなのでしょう？



◆かわる (4)

2009-03-27 10:50:33 | 言葉

言葉遣いが「正しい」か「正しくない」かを、送り仮名の付け方に絞って考えてみましょう。簡単に言えば、たとえば「わかる」にどんな漢字を当て、ひらがなの配分をどうするかです。手元にある複数の辞書と新聞社系の用字用語集を参考にして、以下にまとめてみます。

* 「わかる」 = 「分かる」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」

このように、「わかる」を表記することが「可能」であり、「標準的には」「分かる」と表記するように「なっている」ようです。「なっている」を「勤めている」と理解する人もいるでしょうし、「決められている」と受けとめる人もいるでしょうし、「強制されている」と感じる人もいるでしょう。

いずれにせよ、「分かる」と表記するのが「正しい」と考えているのに近いスタンスだと思います。みなさんの中に『「分かる」だけを使うなんて、もったいないなあ』と感じる方は、いらっしやいませんか？ 次の表みたいなものをご覧ください。

* 「分」⇒ わける、バラバラにする、わきまえる、おのれを知る、わけて配る、デリバリー、というイメージ。「分別 (=ふんべつ)」「分解」「分離」「分裂」「野分 (=のわけ)」「分水嶺」「分析」「微分」「通分」「分類」「分家」「部分」「五分五分」「春分」「秋分」「身分」「分際」「区分」「分割」「分配」「分譲」「分担」……

* 「別」⇒ わかれる、バイバイ、さよなら、ちょっぴりさみしい、離れる、他とは違う、ゴーイング・マイウェイ、ああ何と薄情な、わかる、というイメージ。「別離」「死別」「別

居」「送別」「餞別」「特別」「格別」「別格」「区別」「分別(=ぶんべつ)」「判別」「大別」「差別」「千差万別」「識別」「鑑別」「別荘」「別個」「別記」「個別」……

*「解」⇒とく、バラバラ、わかる、帯なんかをほどく、よかったね、ゆるゆる、自由にしてやる、バイバイ、余計なものを取り除く、脱がしちゃう、説明する、謎をとく、なつとく、わかる、どれどれ見せてごらん、なるほど、やっぱり、そうだったのか、というイメージ。「解体」「分解」「解剖」「和解」「溶解」「融解」「解放」「解禁」「解散」「解雇」「解毒」「解熱」「解消」「解除」「解決」「理解」「誤解」「難解」「不可解」「氷解」「解明」「読解」「明解」「詳解」「図解」「解釈」「見解」「解説」「解析」「解答」……

*「判」⇒わかる、ガッテン、なるほど、われる、明らかになる、白黒をつける、暴露される、さばく、けちをつける、ポンと押す、印をつける、というイメージ。「判断」「判別」「判定」「判明」「判読」「判決」「裁判」「判事」「公判」「審判」「判例」「批判」「談判」「評判」「判子」「血判」……

以上は、複数の漢和辞典などをもとにして、「わかる」に当てはめることが「可能な」各漢字のイメージを調べて分類してみたものです。何ぶんにも素人のやっつけ仕事であることを、ご承知おき願います。また、こうした分類は漢和辞典によっても、微妙に異なることも付け加えておきます。「とりあえず」、こんなふうにも「わけられる」、あるいは、このブログを書いている者の「感想」くらいに受け止めてください。

「いやに、ごちゃごちゃしているなあ。すっきりいこうよ。『わかる』は『分かる』でわかるじゃないの。これで決まり」

といったふうにお「感じ」になりましたか？ それとも、

「これで『わかる』の意味が整理できたような気がするけど、『分かる』だけじゃなくて、場合によっては『別る』や『解る』や『判る』もあっていいかな」

とお思いになりましたか？ 個人的には、「わかる」に当てる漢字として「分」だけを採用して、「別」「解」「判」を捨てるなんて「もったいないなあ」という気持ちが強いです。あなたは、どうお「感じ」になりますか？



◆かわる (5)

2009-03-27 16:50:46 | 言葉

いつの間にか、

「かわる」の話が「わかる」の話

になってしまいました。

「かわる」から「わかる」にテーマが変わり、

「かわる」に代わって「わかる」が登場し、

「かわる」の話が「わかる」にすり替わった

ということです。とはいえ、というよりも、したがって、一貫して「かわる」について書いているつもりなのですが、分かっていたいただけますでしょうか？

というわけで (※どういうわけなのでしょう?)、「かわる・かえる」という言葉について、「わかる・わかる」と同様の表みたいなものを作りたいと思います。そうすれば (※どうすればなのでしょう?)、「わかる・わかる」と「かわる・かえる」が、シンクロ状態=重なり合っている様 (さま) がわかるはずなのです。では、さっそく試してみます。まず、前提です。

* 「かわる」 = 「変わる (or 変る)」 = 「代わる (or 代る)」 = 「替わる (or 替る)」 =

「換わる（換 or る）」

以上が、送り仮名で見た「かわる」のとりあえずの全貌です。次に、上で使われている個々の漢字にまつわるイメージを、複数の漢和辞典や、国語辞典、用字用語集を参照しながら、アマチュアの立場からまとめてみます。

*「変」→ものごとの状態や質や内容が以前と異なった状態になる、変化する、良し悪しは別にしてこれまでとは違うことは確か、化ける、あれあれ、あれよあれよ、ふつうじゃない、うへっ、尋常ではない、不気味だ、いやだあ、異様だ、あらまあ、変だ、おかしい、2つ（※あるいはそれより多い数）のものがそれぞれ違っている、妙なことが起きる、突然起こる、わざわい、困った困った、何だこれは、どうなってるんだ、乱れる、くるう、時があらたまる、場所がうつる、動く、ありゃいつのまにかこんな（or あんな）ところに、というイメージ。「変化」「不変」「変革」「変容」「変移」「変質」「変調」「変転」「変貌」「豹変」「激変」「劇変」「臨機応変」「変装」「変相」「変速」「変性」「変成」「変声期」「変名」「変節」「変心」「変身」「変遷」「変更」「変異」「異変」「凶変」「地変」「事変」「政変」「変死」「変幻」「変人」「変質者」「変種」「変則」「変体」「変態」「大変」「変乱」「変事」「変換」「変動」……

*「代」→AのかわりにBを用いる、かわって引き継ぐ、今度はこれを使うのね、〇〇と申しますよろしく、みがわり、〇〇（or 〇〇たち）になりかわりましておつとめさせていただきます、入れ違い、新しいのはいいけどこんなんで大丈夫かしら、かわるがわる、いれかわりたちかわり時は過ぎる、時世、あれのかわりにこんなにもらっちゃった、あたい、これとあれが同等だっていうことなのか、かち、ねだん、というイメージ。「代理」「(交代)」「(身代わり)」「代人」「名代」「代表」「代行」「総代」「代官」「代議士」「代議員」「代議制度」「代用」「代書」「代筆」「代講」「代弁」「代々」「世代」「時代」「歴代」「上代」「末代」「古代」「近代」「現代」「当代」「先代」「初代」「稀代」「希代」「代償」「身代」「代金」……

(※ () は別の漢字を当ててる場合があるものです)

*「替」→Aに入れかわってBになる、今度はこっちの番、入れ違い、今度はこんのが来たよ、〇〇と申しますよろしく、おっ新顔だね、これが駄目になったから捨てちゃう、あっちにしよう、時があらたまる、というイメージ。「(交替)」「(替え玉)」「(身替わり)」「(引き替え・引替え・引替)」「(取り替え・取替え・取替)」「(組み替え・組替え・組替)」「(入れ替え・入替え・入替)」「(言い替え・言替え)」「(借り替え・借り替え)」「(着

替え)」「(差し替え・差替え)」「替え歌・替歌」「両替」「為替」「鞍替え・鞍替」「付け替え・付替え」「クラス替え」「商売替え」「国替え・国替」「組織替え」「吹き替え・吹替え」「振り替え・振替え・振替」「月替わり」「年度替り」「日替わり」……

*「換」→AとBとをかえる、とりかえる、入れ違い、差し引きゼロ、〇〇さんだと思ってお相手しますからね、〇〇さんだと思って何なりとお申し付けください、新しく来たものの役目と役割を重視する、これで役に立たなかったらクレームどころか返品だ、というイメージ。「交換」「(換え玉)」「(引き換え・引換え・引換)」「(取り換え・取換え・取換)」「(組み換え・組換え・組換)」「(入れ換え・入換え・入換)」「(言い換え・言換え)」「(借り換え・借換え・借換)」「(着換え)」「(差し換え・差換え)」「(置き換え・置換え)」「変換」「転換」「置換(ちかん)」「換気」「乗り換え・乗換え・乗換」「換言」「換金」「兌換」「換算」……

以上は、即席に作成したリストなので、だいたい感覚的にはこんなものではないか、くらいに理解してください。さて、

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」がシンクロする＝かぶる＝ダブる＝重なる＝関連し合う部分がある

ことに、お気づきになったでしょうか？ 上のリストを眺めていて、次のように思いました。

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」のイメージを比較してわかるように、言葉はでたらめ＝いい加減＝ほぼ支離滅裂と言っていいほど、ぐちゃぐちゃした構造を備えているらしい。そのぐちゃぐちゃから、ヒトは自分の都合に合わせて、理路整然＝論理的＝すっきりした意味をくみ取っているらしい。その意味において、ヒトという生き物は頭がいい＝高度な情報処理能力を有していると言えそうだ。

です。

きょうは頭がふらふらしてきて、目がしょぼしょぼしてきたので、この辺で失礼させていただきます。また、お越しいただければ幸いです。

09.03.28～29 かわる（6）～（10）

◆かわる（6）

2009-03-28 10:48:33 | 言葉

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」にそれぞれ漢字を当てることによって、両者の持つイメージ、つまり意味の広がり＝構造がわかるような気がします。かつて自前の文字を持っていなかったらしい日本語に、中国の文字が加わったというか入りこんだ状態になった。そして、漢字の形を少し変えてひらがなとカタカナを作ったというようなことを、学校で習った覚えがあります。

こうした経緯についての専門的な知識はありません。したがって、あくまでも素人として、手持ちの知識を動員して自分なりに考えてみたことを書いてみます。話し言葉だけで存在していた大和言葉に、漢字を当てる過程では、大雑把に言って次のような作業が行われていたのではないのでしょうか。

漢字は表意文字だと言われています。文字通り受けとれば、意味を表す文字ですが、当然のことながら、音声もまた表しています。その漢字に、音声だけで存在していた大和言葉を当てる、という作業をしたわけです。これは、このブログで何度か用いてきた

「感字」

にほかなりません。

「kawaru」にこの漢字を当ててみようじゃないの

という感じです。音の似ている中国語に、大和言葉の音を当ててみたのです。そして、「かな=仮名=仮の名」を作ったということでしょうか。「仮の名=かりのな」を「借りた名」と当て字してみたい誘惑に駆られます。

昔々に、こんなことができたなんて、きっと当時のインテリ階級の人たちでしょうね。正確に言うと、バイリンガルな少数の知識人たちです。帰化人もいたかもしれません。そういう人たちの「輪=ネットワーク=サークル」があったのではないかと想像します。そうだとすれば、ある程度の統一性=共通性のある表記が定着しつつあったのではないかとまで推測できます。

もし、すでに漢字を変形して仮名ができていたとするなら、次の段階は、音ではなく、大和言葉の意味を表すために、仮名と漢字を「当ててみた=組み合わせてみた」。つまり、

「kawaru」の意味に「近い=相当する」中国語の「文字=漢字」と仮名を当ててみた。

この場合の「当ててみる」とは、たぶんくっつけてみることだと考えられます。

その結果として、

「かわる」=「変わる・変る」=「代わる・代る」=「替わる・替る」=「換わる・換る」ができた。

要するに、いわゆる「送り仮名」が決められた。そして、誰かによって決められた「当て字と送り仮名」が普及すると、それが手本=見本=標準=規範=いわゆる「正しい」表記法となった。きわめて大雑把ですが、簡単に言えば、そうした作業が行われたのではないのでしょうか。

感字とは、論理的であるようで、意外と感覚的=いい加減=テキトー=暫定的=とりあえず的な作業だ

と思っています。現在の慣用的な表記もまちまちですが、とにかくその複数の慣用的な表記法ができるに至るまでには、きっと紆余曲折を経てきたことでしょう。文部科学省といったお役所も、出版界といった導き手も、文壇という権威も、全国ネットの新聞社という知識・情報の普及の担い手もなかった時代のほうが、ずっと長かったのですから、そうにちがいません。

*

要するに、

*日本語の表記はばらばらだった

のです。それが、現在になって一応の落ち着きを見せている。でも、あくまでも「一応」です。お役所や、権威や、知識・情報の普及の担い手などが、ちょっとした違いはあれ、せつかく「統一された」表記法を完成させたのに、20世紀の終わりに「強敵＝手強い掟破り」が現れたのです。

「強敵＝手強い掟破り」とはネットです。

インターネットやケータイが「国語を乱し始めた」

のです。感字という、ダイナミックス＝運動＝活動＝勝手きままな動き＝「何だか知らないけど、みんながやり始めたからやってみよう」＝「おもしろい、この言い方（or 書き方）「こんなのは、どうかなあ」＝「ねえねえ、こういう言い方（or 書き方）が流行っているんだって、うちらもやってみようよ」が、ネットによって加速化＝激化＝活発化＝活性化されてきたように感じます。

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」に話を戻します。両者のイメージを、リスト化＝チャート化＝見える化してみても、言葉がいかにくちゃぐちゃした＝ほぼ支離滅裂状態にあるかがわかりました。具体的には、「かわる（4）」2009-03-27では「わかる・わかる」を、そして「かわる（5）」2009-03-27では「かわる・かえる」のぐちゃぐちゃぶりを調べてみました。

*

そういうわけで、ここでは、「わかる・わかる」も「かわる・かえる」も、ぐちゃぐちゃしているという前提で、話を進めます。その「トリトメのない＝テキトーな状態」に、とりあえず「理屈＝道筋＝ルール＝約束事」をつけて「感字 or 当て字 or 送り仮名」を採用することにより、何とか整理がつき、ぐちゃぐちゃしているなりに、多くの人たちに納得 or 妥協 or 追随 or 支持される形で、慣用的な表記法が仮設されたというべきでしょうか。

もっとも、「仮設」ではなく「確立」ではないか、と主張なさる方もいらっしゃるに違いありません。でも、現在の日本人が明治時代、江戸時代、あるいは平安時代と同じ言葉を話したり書いたりしていないのですから、「仮設」としておきます。

で、「仮設」という語を採用したことからおわかりになるように、少しばかり、あやういんです。カーテンを「取り替える」とするか、「取り換える」とするか？ 中には「取り変える」でいいんだ、と言い張る人もいそうです。じゃあ、中をとって「取りかえる」にしておこう、と言う人も多いでしょう。一方で、ネット上では「今日、部屋のカーテン、とっかえた」とか「きょう、部屋のカーテン、CHANGE したっス」なんて書かれていても、全然不思議ではありません。

いずれにせよ、これくらいのレベルでは、大した問題にはなりません。たとえ、これ以上のレベルで言葉遣いの変化をしたとしても、何とかやっていけるでしょうし、実際にやってきたのであり、現にやっているのではないのでしょうか。

「ぐちゃぐちゃ」から「すっきり」へ。正確に言うと、「ぐちゃぐちゃ」であるのに、「すっきり」だと勘違いしてしまう。そうした「勘違い＝錯覚＝思い込み」ができるのですから、ヒトはやっぱり、頭がいいです。いずれにせよ、ああでもない、こうでもない、ああでもある、こうでもある、と言いながらも、それなりに＝テキトーに、ヒトはコミュニケーションをしてしまうのです。

さて、今回は、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」のシンクロする＝かぶる＝ダブる＝重なる＝関連し合う部分について書いてみたいと思います。



◆かわる (7)

2009-03-28 15:52:03 | 言葉

AとBという2つの言葉＝語のグループがあったとします。グループと書いたのは、1つの言葉＝語を辞書で引いてみるとわかるように、複数の意味がある場合が多いからです。日本語では、特に大和言葉系の語の意味が厚い、つまり多層的＝多義的である傾向がみられますね。さて、AとBが別々の言葉＝単語として扱われているとします。

辞書でも別の項目として記載されているし、普段使いながらも意味は別の言葉だとたいていの人が思っているとします。ところが、このAとBの「意味＝辞書の定義」や、それぞれの言葉の使用例をみると、深い関連性があるような気持ちになってくる。大きな辞書で語源を調べてみたけれど、どうやらつながりはなさそうだ。でも、似ているというか、何かつながっている気がしてならない。今回は、そうした話をテーマにしてみます。

「かわる」と「わかる」という2つの言葉のイメージ＝意味＝使われ方を調べて、いかにもアマチュアらしい簡単なリスト＝見取り図をつくってみて、上で述べたAとBという言葉のような印象を抱きました。実は、以前から、そんな気がしたのですが、わざわざ2種類のリストを作って見比べるまではしませんでした。

で、いざ、試してみたところ、共通点というより、何か関連性があるように思えるのです。このブログの過去の記事（「かわる (4)」2009-03-27 と「かわる (5)」2009-03-27 に載っている、「わかる・わかる」と「かわる・かえる」の見取り図もどきを参照していただくと、これから書くことの意味をとる助けになるかと思います。

2つの言葉のグループから、キーワードを取り出して並べてみます。それぞれの言葉のリストには、見出しが付いています。

(a) (表象・認識・知覚)「代理」－「交換」－「理解」－「判断」

(b) (学問)「代理」－「変換」－「理解」－「誤解」－「解釈」－「分析」－「分類」－「識別」－「判断」－「判明」－「解明」

(c) (経済)「交換」－「変動」－「代金」－「為替」－「換金」－「兌換」－「換算」－「判子」

(d) (社会・生活)「代理」－「分類」－「区別」－「差別」－「解明」－「理解」

(e) (政治・立法・行政)「代理」－「代行」－「代表」－「代議士」－「代議制」－「変化」－「変革」－「変節」－「変心」－「判子」－「変身」－「政変」－「事変」

(f) (司法)「代理」－「代行」－「解明」－「理解」－「解釈」－「分類」－「区別」－「代表」－「判事」－「裁判」－「判決」－「審判」

とりあえず、6種類のリストを作ってみました。6種類の見出しと関係のある言葉を取り出したものです。以上のリストから、次のようなことが言えるように思います。

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」は深く結びついているらしい。その結びつきは、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」という動作＝運動＝身ぶりが、シンクロ＝連動し合っていることから生じているらしい。

*

ところで、2つ以上のもの間に共通点や関係性を見出し、それに理屈をつけたり、規則性を当てはめることを、「こじつけ」と言います。

「こじつけ」

がポジティブに受けとめられると、

「法則」とか「理論」とか「説」

という榮譽ある言葉を与えられることがあります。ネガティブに受けとめられると

「でたらめ」とか「でまかせ」とか「めちゃくちゃ」とか「ばーか」など

の罵声が浴びせられるか、単に無視されます。

それはそれでいいとして、みなさんに考えていただきたいことがあります。

「かわる」および「かえる」と、「わかる」および「わかる」という2種類、数え方によれば4種類の「動作＝運動＝身ぶり」に「共通性 or 関係性」があるでしょうか？

それを知るためには、想像力が必要になります。というわけで、あくまでも、「kawaru」「kaeru」「wakaru」「wakeru」という音声として、それぞれの「動作＝運動＝身ぶり」をイメージしてみましょう。

とりあえず、上の(a)から(f)の6種類のリストは、いったん忘れちゃってください。シンプルに、「かわる」「かえる」「わかる」「わかる」をそれぞれイメージしてみてください。頭だけで考えていると難しいですよ。では、体を使って表現してみましょう。

*

自己流にジェスチャーやパントマイムを試みるのです。つまり、自分の母語が通じない他言語の話し手に、4つの言葉＝語の意味を説明する、あるいは伝えるために、身

ぶり手ぶり、場合によっては表情や顔芸を用いてみるシミュレーションを実行してみましよう。一瞬の動作である必要はありません。物語性がある時間がかかる動作でも、一向に構いません。

また、「おーっ」とか「はっ」くらいなら、声を出してもいいことにしましょう。物は試しと言います。実際に、ひとりでこっそりと試してみませんか。他人様（ひとさま）に提案しておいて、自分は何もしないのは失礼ですので、こちらでも、その作業をしばらく実行してみます。本当は、こちらの動作を見て受けとめてくれる相手がいるとベストなのですが.....。

蛇足とは思いますが、このブログではいったい何をやっているのだとお思いの方のために、ここでお断りしておきます。本気です。正気とは申しませんが、本気です。念のため。



◆かわる (8)

2009-03-28 19:13:27 | 言葉

ヒトが用いている言葉というものが、どんな仕組みを持ち、どんな働きをしているかを知るためには、1つの方法として、「言葉の発生」という「物語＝神話＝フィクション＝作り話」を自分なりに考えてみるのがいいと思います。なぜ「作り話」なのかと申しますと、言葉の発生を実証的に知る手段がないからです。タイムマシーンに乗って「言葉の発生」する現場に行き、確かめることなど不可能だからです。超能力に頼ろうとするヒトたちもいるでしょうが、その方々が成功されたさいには、世界を驚かせてほしいと思います。

また、なぜ「自分なりに考えてみる」なのかと申しますと、「言葉の発生」を確かめることができず、定説もないのであれば、自分で想像して自分なりに納得すれば、きっと得るものが多いと信じるからです。専門書（※辞書や話し方・プレゼンの指南書や文章読本の類）を読むとか、専門家（※国語学者であったり、コミュニケーションの達人と呼ばれるヒトなど）の話聞く。そういう選択肢もあります。

でも、しょせん他人の「作り話」です。専門家の意見が「正しい」とか「偉い」というのは、言葉に関する限り肩唾物だと個人的には思っています。参考にする程度ならいいでしょうが、妄信するのは疑問に感じます。大切なことは、自らの実践と試行錯誤ではないでしょうか。

物理学や数学の用語・法則・知識とは異なり、言葉（※手話やボディランゲージ、表情、赤ちゃんの仕草や泣き声などを含む、かなり広い意味でとってください）は、言葉を使うことのできない一部の障害者の方々を除き、たいていのヒトが日々使っているものであり、誰かの占有物ではありません。

さらに言うなら、ヒトは一人だけで言葉を使っているわけではありません。言葉は、コミュニケーションや、知識・情報を得るための道具であると言われていています。つまり、他人との関係において用いられるものです。ヒトは一人で生きてはいません。とはいうものの、

言葉に関しては、誰もが「専門家」

なのです。誰もが自分の使う言葉に責任を持つべきである一方で、自分の好きなように言葉を使ってもいい自由を持っているという意味です。本来は、素人と専門家の区別などないのです。

*

さて、「かわる」「かえる」と「わかる」「わかる」ですが、これを言葉が通じない他の言語の話し手に伝えようと、「自分なりに考えてみる」ことを実践し、その4つの言葉を「動作＝運動＝身ぶり」を用いて相手に伝える努力を「体」を使って実行してみることは、擬似的に「言葉の発生」に身を置く体験になります。いわゆるシミュレーションになります。

「動作＝運動＝身ぶり」に意味を付加しようと、自分の想像力（＝頭）と顔を含めた体の動きを動員してみる。知恵を絞り、体を動かし汗をかいてみる。これが大切ではないでしょうか？

たとえば、脳梗塞や脳出血などで言葉を失ったヒトがリハビリをするさいには、頭（＝脳）だけでなく、体全体を使った機能回復が必要だと言われています。重労働らしいです。言葉の仕組みと働きを知るためには、ただ考えているだけでは、得られるものは少ないと思います。身体全体を動かすことが大切です。

かつてフランス語をフランス語で教えるフランス政府公認の学校に通っていたことがあります。そこでは、やたら体を使うのです。日本語に訳して教えるのではありませんから、当然です。頭だけを使って習う中学や高校での英語の授業とは大違いの方法でした。個人的には、大きな収穫がありました。

「演技」

および

「演じる」

という言葉思い出しましょう。

* 「演じる」とは、自分が別の「もの（※物であり、者です）やこと」になる様（さま）を想像し（＝シミュレートし）、その想像を体で実際に示す（＝表現する）こと

です。言い換えれば、ある「ものやこと」を自分なりに「わかった」と仮定し（＝台本を手にし）、自分をその「ものやこと」に「かえて」みることに、あるいは、自分がその「ものやこと」に「かわって」みることです。

* 「ものやこと」を「わけ」、「かえて」みる。＝「ものやこと」に対して、「わかる・わかる」と「かわる・かえる」という動作を加える。

今、「＝」を用いて書いた2つのフレーズは、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」の関係を、自分なりに言い表したものです。この2つのフレーズは、

言葉の仕組みと働きを、「たとえ」＝「演技」として表現するための「たとえ」＝「演技」でもある

のです。ややこしい言い方になりました。次のように言い換えることもできるかと思えます。

* 言葉を使うとは、森羅万象（＝ものやこと）を知覚して（＝わけて）、音声（＝話し言葉）や文字（＝書き言葉）や身ぶり（＝手話や身体言語など）に置き換える（＝かえる）ことである。

そのさいに、決定的な役割を果たす言葉の「仕組み」および「働き」とは

* 「Aの代わりにBを用いる」という、「動作＝運動＝身ぶり」＝「たとえ＝装うこと＝演技」

なのではないでしょうか。

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」という、言語の仕組みと働きについてきわめて象徴的な意味を持つ言葉を、知恵を絞り想像力を働かせると同時に、実際に体を動かし汗をかいて演じてみる。これは、このブログの記事「かわる（7）」2009-03-28 で提案したことです。

これを実行なさった方なら、以上書いたことの意味がわかっていただけると信じています。これが、言葉の仕組みと働きを考える第一歩だと考えています。よろしければ、さらにこの先と一緒に歩いていただければ、うれしいです。



◆かわる（9）

言葉の仕組みと働きを説明するのに、

「かわる・かえる」

と

「わかる・わかる」

という言葉を使うのが便利だということが、偶然の一致なのか、何か因縁めいたものがあるからなのかは、わかりません。単に、そのように思い込んでいるからなのではないか。そうも思います。

いずれにせよ、この4つの言葉（※数えようによっては2つですが）を用いて、言葉の仕組みと働きを説明するために、どれだけのこと（＝こじつけ）ができるか、試して（＝遊んで）みます。

*わかるからかわる。＝分かるから変わる。＝わけてかわる。＝分けて変わる。＝理解（＝判断＝識別）することで変化（＝変心）する。

*かわるのがわかる。＝変わるの分かる。＝かわってわかる。＝変わって分かる。＝変化（＝変動＝変心）することを理解（＝判断＝識別＝解釈）する。＝変化（＝変動＝変心）することにより理解（＝判断＝識別＝解釈）する。

以上の2例から、

「わかる・わかる」が「知覚＝認識＝思考すること」

そして

「かわる・かえる」が「身体の運動や動きや働き、大きく言えば生きるといういとなみ」

を指し示している

と言えそうな気がします。つまり、言葉とヒトの間にある基本的な関係を言い表しているのではないのでしょうか。めちゃくちゃこじつけている、と言われれば返す言葉がありません。とはいうものの、たとえば大和言葉に漢字を当てる「感字」という作業がかなりのこじつけめいた行為であったことを思い返すと、これくらいのこじつけは許してもらえるかな、とも思います。

*かわるからかわる。=変わるから変わる。= かわってかわる。= 変わって変わる。= かえてかえる。= 変えて変える。=変化するに伴い変化する（=連動・シンクロナイズ・連鎖反応）。=変化し、さらに変化する（=連続・加速化・長期的な変貌）。=改変（=改革）し、さらに改変（=改革）する（=発展=発達=進歩=進化）。

以上の「動作=運動=身ぶり」は、ヒトの普遍的でさまざまな行動・ヒトの経済活動・半ば一人歩きしている状況にある経済の動き・さまざま面から見たヒト（=人類）の歴史・ヒトとは無関係の森羅万象の変化（=変動）など、かなり広範囲な「動き」にこじつける（=当てはめる）ことができそうな気がします。

*わかるからわかる。=分かるから分かる。= 分かるから分かるへ。= わかってわかる。=分かって分かる。=一度理解することによって次々と理解が深まる（=進歩）。=理解が理解を呼ぶ（=コミュニケーション=伝達=ネットワークの拡大=輪の広がり=平和=和解）。=解釈が解釈を呼ぶ（=進歩=発展=深化=議論・論争・対立・批難の拡大）。

以上の「動作＝運動＝身ぶり」は、特にヒト同士の関係性と、人類としてのヒトのいとなみにまで、こじつける（＝当てはめる）ことができそうな気がします。

ここまで書いてきたことから、次のようなことが言えるのではないかと思います。

* 「かわる・かえる」ことなしに「わかる・わかる」ことはない。

* 「わかる・わかる」ことなしに「かわる・かえる」ことはない。（※ヒト以外の生物でもそうですが、特に無生物の場合には「分かる・分ける」を「分解・分裂・分割・分離・解体・溶解」のイメージで考えてください。）

「かわる・かえる」と「わかる・わかる」とが、「シンクロ＝連動している＝関連し合っている」、あるいは、見方を変えれば、「重なり合っている＝かぶっている＝関連している部分がある」と、先に書いたのは、こういう意味だったのです。

いくらかわかっていただけたでしょうか？「このブログを書いている、うさんくさいやつは、いったい何を考えているんだ」という思いが、ちょっとだけでも変わってきたでしょうか？ 妙な文体で、ややこしいことを書いているのは承知しております。でも、少しでも構いません、ご理解いただけたなら、うれしいです。



◆かわる（10）

2009-03-29 14:53:20 | 言葉

こじつけることが好きなヒトがいます。大好きなヒトもいます。ここにもいます。「こじつける」とは、どういう行為なのでしょう。いい語感はありませんね。今、辞書で意

味を調べてみましたが、案の定、自分がこれまで何度も浴びてきた類の悪態もどきの言葉が書かれていました。

普通、批判や罵倒されたり罵声を浴びるとすぐにへこんでしまう性質（たち）なのですが、「こじつけ」「屁理屈」「牽強付会（けんきょうふかい）」といった類の言葉には、免疫・耐性ができているらしく、その種の文句を投げつけられても、さほど傷つくことはありません。やはり、好きなのです。逆に喜んでしまいます。

*ヒトはこじつける生き物である。

たった今書いたフレーズは、日ごろから感じていることを文字にしたものです。これまでの経験から、むっとなさる方が多いだろうと想像します。「こじつける」という言葉を「脱色＝解毒＝中和＝中性化」できないでしょうか？たとえば、「こじつける」を「複数のものごとに関係性を見いだす」なんて言い換えてみてはどうでしょう。少しは響きがよくなりましたか？

「複数のものごとに関係性を見いだす」と書いたとたん、思わず笑ってしまいました。「こじつける」の強引さと、図々しさと、ちょっと恥ずかしいという気持ちが薄れて、迫力がなくなったというか、間が抜けた感じがするのです。どう言えば、わかっていたでしょう。そうだ。普段は正装などしないのに、おめかしをして、やたら気どった表情をして鏡の前に立った時の気分似ています。とってつけたようで、似合わないのです。やはり、「こじつける」でいきます。

*

広い意味で言葉を考えてみましょう。話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、さまざまな標識や記号などをいっしょくたにして、「言葉」と、ここでは呼ぶことにします。自分とは違う言語を話すヒト、いわゆる言葉の通じないヒトに、「かわる・かえる」と「わかる・わかる」という言葉＝動作を、ボディランゲージを用いて伝えてみよう。そんなお遊びというか実験をやってみませんか、このブログの記事「かわる（7）」2009-03-28で、みなさんに呼びかけました。

伝えるのは別の言葉や動作でもよかったのですが、

*「かわる・かえる」と「わかる・わかる」の持つ、言葉の根源的な動態＝有り様（※あくまでも個人的な意見で、単なる思い込みかもしれません）を頭（＝想像力）と体全体（＝体力）を使って演じてみるのが、言葉の仕組みと働きを考えるうえで、助けになるに違いない。

と思ったからでした。さて、そんなややこしいことは抜きにして、たとえば、ペン、パソコン、ケータイ、消しゴムといった身の回りのものや、朝ご飯を食べる、歯医者へ行く、風邪を引く、乗るつもりだった列車に遅れる、といった日常的な動作や状況を、身ぶり手ぶり表情などを用いて、誰かに伝えるつもりになって演じてみる。そんなお遊びをしてみませんか？ きっと、「こじつける」という、ちょっとワルな響きのある言葉を体感できると思います。

具体的には、

*我流の「ジェスチャー＝身振り・手振り＝ボディランゲージ」

が考えられます。あるいは、

*手話

という言語（※念のため、駄目押しに強調させていただきますが、たとえば日本語や英語と同じく、手話は言語です）を学ぶことも視野に入れてよいのではないかと思います。

ここで、話を飛躍させます。上で述べたような「広義の言葉」を使う（※既にあるもの＝手本を使う）、あるいは、作る（＝自分が表現したいものごとを表現する手本がなかったり、伝えたいものごとを伝える手本がない場合には、工夫して自前で作るしかありません）さいには、その前提に「こじつける・こじつけ」があるのではないのでしょうか。

考えてもみてください。Aというものがあれば、それを相手に見せれば、それで済みます。でも、Aが手元や近くにないために、A以外のものでAを表すのです。これって、こじつけではないでしょうか。それこそ、こじつけだという言葉が返ってきそうですが、さきほど書きましたように、幸いにして免疫・耐性があるみたいで、めげたりへこんだりしません。というわけで、さらに性懲りもなく、いけしゃあしゃあと、こじつけをさせていただきます。

*言葉とは、Aの代わりにAでないものを用いるこじつけである。言葉というこじつけが、ヒトをヒトとならしめている。

そうこじつけてもいいのではないのでしょうか。つまり、こじつけをこじつけているわけです。「こじつける・こじつけ」という言葉が、どうしても気に入らない。人間様である自分のプライドが許さない。そんなふうに使われる方のために、解毒済みバージョンを用意しました。

*言語の使用とは、Aの代わりにAでないものを用いるという、人類の英知から生じた崇高なとなみである。言語を使用するという行為が、人間を人間ならしめている。

いかがなものでしょうか。言い「かえて」みました。お「わかり」いただけたでしょうか。

以上をもちまして、「かわる」(1)～(10)の締めくくりと致したいと思います。

辛抱して、ここまで読んでいただいた方に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

09.03.30 なる (1) ~ (3)

◆なる (1)

2009-03-30 10:24:28 | 言葉

春ですね。春が来た。春になった。

春になると、いろいろなものが「はる・はれる」、そして、いろいろなものを「はる」。だから、春なのだそうです。辞書には、そのように書いてあります。

(1) 植物の芽や梅や桜などのつぼみなどが「張る」。

(2) 土地を「墾(は)る」。荒れた野原などを耕し(=田を返して=掘り返して=切り開き)新たに田畑にする。あるいは、冬の間放置してあった田や畑を耕し、作物をつくる準備をする。

(3) どんよりとした天候から徐々に「晴れ」た日が多くなる。日が照ることで気温が高まる。

こうした説明を聞くと、「なるほどね」、「すごいこじつけだなあ」、「分からないことないけど、その説明ってちょっと苦しいんじゃない」、「へえー、そうなんだ」、「うさんくさい」、「で、それがどうしたの?」、「勉強になりました」、「かんげーねー」など、人はさまざまな反応を示すでしょう。自然で当然のことです。なお、(3)の「晴れる」の説明については、どの大きな辞書にも少々自信なげに書き添えてあります。

日本の国語辞典や英和辞典は、伝統的に孫引きが行われてきたと言われていています。確かに、版を重ねた、古くからある辞書には、どれにも似たり寄ったりの説明や定義が書いてありますね。いわゆる学会と出版界というギョーカイの内部事情から、そうなっているのでしょうか。学者の世界では、徒弟制度が未だにはびこっているそうですから、現在でも辞書という商品がほぼ規格化されているのは、当然の結果だと思われます。学派と呼ばれる派閥間の争いもあれば、一匹狼もいれば、在野の学者もいるみたいですが、詳しいことは知りません。

*

いずれにせよ、「はる」です。「はる」について、勝手気ままに考えてみたいです。思いきり、こじつけてみたいです。こちらはアマチュアですから、当然のことながら、いわゆる専門家たちの書いたものから孫引きをする作業が出発点になります。では、遊んでみたいと思います。

* 「はる」 = 「張る」 = 「貼る」 = 「墾る」 = 「晴る・晴れる」 = 「霽る・霽れる」 = 「腫る・腫れる」 = 「脹る・脹れる」

* 「はらう」 = 「払う」 = 「掃う」 = 「祓う」

「はらう」まで書いたのは、「晴れる」と「はらう」のイメージが似ていると感じた。そして「祓う」という言葉が気になる。それだけの理由からです。こじつけに使いそうです。

言葉は、一部のヒトたちの占有物でもなければ、管理下にあるものでもありません。みんなのものです。好きなように使い、好きなように遊びましょう。ちなみに、タイトルは入力ミスでも変換ミスでもありません。「なる」については、いずれ書きます。



◆なる (2)

2009-03-30 14:48:15 | 言葉

春を、「はる」＝「張る」＝「貼る」＝「墾る」＝「晴る・晴れる」＝「霽る・霽れる」＝「腫る・腫れる」＝「脹る・脹れる」にこじつけてみましょう。まずは、個々の言葉のイメージを、複数の国語辞典や用字用語集を参照しながらみていきます。

*「張る」→ふくらむ、ふっくら、ぷくっ、ぷくぷく、ぱんぱん、こわばる、かちかちの寸前、はちきれそう、のびて広がる、うんと広げる、しわのない状態にする、広げて使える状態にする、準備完了、いつでも来い、おれってこんなもんよ、わたしってこれだけもってるのよ、すごいでしょ、あたりにひろがる、たるみをなくす、ぴんとはる、つき出る、つっぱる、せま苦しい、つかえる、緊張する、こちこち、張りきっちゃう、力をこめる、がんばる、元気はつらつ、対抗する、負けてたまるか、いけいけ、押し通す、ばりばり、ぴったり張りついて監視する、離れないでじっと狙う、ストーカーする、度を越す、リミットぎりぎりまでいく、これって高すぎだよ負けてよ、満たす、目いっぱいにする、(平面状のものを糊や釘で別のものにはりつける)、(ぴったり)、(ぺたり)、(べたっ)、平手でびしゃり、ああ痛い、というイメージ。【注：() でくくってあるものは、他の表記にも当てはまるという意味です。】

*「貼る」→(平面状のものを糊や釘で別のものにはりつける)、(ぴったり)、(ぺたり)、(べたっ)、というイメージ。

*「墾る」→「今年はどこ？ こんな荒れた土地で野菜 (or 米) がつくれるかな」「とにかく、鍬(くわ) やスコップや鋤(すき) を使って、まずは地面を掘り返して耕していこう」「冬の間はずいぶん地面がかたくなっちゃったなあ」「去年は豊作だったんだ。だいじょうぶさ。まあ、ぼちぼちやろう」、というイメージ。

*「晴る・晴れる」＝「霽る・霽れる」→雨、雲、霧、靄がなくなる、日がさしてくる、空が明るくなってくる、ぱっとなる、ころころにあった不快な感情や気がかりがなくなる、ああすっきりした、くもりがなくなる、疑われていた状態でなくなる、やっとならぬ無実の身になった万歳、見えなかったものが見えるようになる、おお見える見える、視界が開ける、すかつとする、さっぱりする、というイメージ。

* 「腫る・腫れる」＝「脹る・脹れる」→皮膚が炎症を起してふくれあがる、ぶくぶく、ぷっくり、さわると痛い、さわると熱っぽい、針で突くと何かびゅっと液体が出てきそう、かゆいし手でさわりたいのだけど我慢しとこ、というイメージ。

【※辞書で「春」の語源として候補に挙がっているのは、「張る」＝「墾る」＝「晴る」です。「貼る」と「腫る・腫れる」は、こじつけ用に勝手に並べただけです。】

*

さて、各言葉のイメージが何となく頭で分かったところで、体を動かしてみましよう。「春」を自分の知り合いに身ぶり手ぶりで伝えるとすれば、あなたはどんな動作をしますか？「春」の語源らしき「張る」＝「墾る」＝「晴る」を参考にして考えてみてください。

想像しながら、同時に体で表現してください。どうですか？「春」の語源として、最も有望らしい「張る」の動作をする方は、あまりいないのではないのでしょうか？

では、感覚的にみて、最も有望そうに思われる「晴る・晴れる」で試してみましよう。たとえば、空を仰ぐような動作をし、両手を合わせてかかげ、その手をいきなりぱっと開いてみせる。あるいは、両手の指をピアノを弾くように動かし、前面で上下させて雨が降っているさまを表し、急にその動作をとめて、うれしそうな表情で空を見上げる仕草をする。そうすれば、「晴る・晴れる」は伝えられそうな気がします。でも、そこから「春」までどうもっていくか？頭をひねりますね。「墾る」から「春」を表現するのも、ちょっと難しそうです。

「晴る・晴れる」と「墾る」の動作を使う場合には、ある程度のストーリー性を持たせる必要があります。まず、寒い冬を表し、冬が終わって、晴れの日が多くなり暖かくなっていくさまを表す。これだと何とか「春」になったことを伝えられそうな気がします。次に、土地を耕す動作から、「春」が来たことを駄目押しする。うん、これなら、成功するかも。もやもやしていたものがなくなり、気持ちが晴れてきました。

*

屁理屈が好きな人や、意地の悪いへそ曲がりな人だと、ここで「待った」をかけます。「外国人を相手に、それって通じる？」なんて、言い出します。「そりゃあ、通じるに決まっているでしょうが」と、相手を馬鹿にしたような表情で言い返すと、「赤道直下に住んでいる人にも通じる？」なんて、澄ました顔で尋ねてきます。絶句していると、すかさず、「ひょっとすると、地球上には、四季のない地域に住んでいる人たちのほうが圧倒的に多いんじゃない？」なんて付け加えるでしょう。

悔しいけど、言えていますね。「春」という言葉が、そもそも存在しない言語があるのは確かです。また、読み書きができない人が圧倒的に多い地域も、世界には数多くあります。いわゆる識字率が低い地域ですね。「春」という言葉がない言語を話している、読み書きのできない人たちに、「春」をどう伝えるか？ 念のために。申し添えますが、「読み書きができない＝知識が乏しい＝いわゆる知能が低い」ということはありません。

たとえ読み書きができなくても、世界には四季というものがある地域があり、「春」というものがあるらしい、という知識を持っている人たちはたくさんいるはずですが。逆に、そうした知識のない人たちも多数いるはずですが。後者の人たちに、「春」をどう伝えればいいのでしょうか？ 言葉が通じないので、身ぶり手ぶりで示すほかしかない。今述べた条件・状況で、そうした人たちに「春」を分かってもらうためには、あなたならどうしますか？

*

答えは容易には出ないと思います。また、出す必要もありません。おそらく「これしかない」といった正解もないでしょう。大切なのは、想像力をうんと働かせることです。いわゆる「頭に汗をかく」ことです。そして、文字通り、実際に汗をかくことです。ご一緒に、頭を働かせ、体を動かしてみませんか？

◆

◆なる (3)

2009-03-30 16:55:57 | 言葉

「春」の反対って何でしょう？ たいていは「秋」だという答えが返ってくるでしょう。「春」の有力な語源候補が「張る」、つまり草木の芽がふくらんでくる時期であるなら、春の反対は「成（＝なる）」ではないか。こじつけが好きな偏屈者の中には、そんな突拍子もないことを言う人がいるかもしれません。ここにもいます。

草木が芽をふくらませ、その芽が枝や葉や花などに生育していく。そして、いわば総括として、実をつける。あとは、冬を待つだけ。これって、秋ですよ。

*「なる」＝「成る」＝「生る」＝「為る」＝「慣る・慣れる」＝「馴る・馴れる」＝「狎る・狎れる」＝「熟る・熟れる」＝「鳴る」

このブログでは、よく「＝」を使用します。もちろん、数学的な意味はいっさいありません。「感字」の一種だと考えてください。上の言葉の羅列では、「＝」は「同じ読み方をします＝同音です」という意味です。たった今書いたセンテンスでの「＝」は、「似たような意味です」という意味です。感覚的にとっていただいて構いません。学術論文を書いているわけではないので、その程度のテキトーさはお許し願います。

さて、上でこじつけ用に並べた言葉から、「春」と関係深そうな「成る」＝「生る」＝「為る」のイメージを調べてみました。

*「成る」＝「生る」＝「為る」⇒物事が新しく形をとって現れる、こんなになっちゃった、えっこれがあれだったの、おっできた、植物が実を結ぶ、うまそうなものができたぞ、実がなる、みのも、豊作だ神様に感謝感謝、生物が生まれ出る、かつてとは別のものや状態にかわる、これがこんなふうになったの、質や内容がかわる、ある状態にたつする、驚き桃の木山椒の木、ある時に達する、もうこんな時間か、あるものごとの機能や役目を果たしたり演じる、すっかり〇〇になりきっちゃって、役に立つ、こりゃ使える、完成した状態になる、仕上がる、最終結果にいたる、一件落着、組み立てられる、構成されている、成立する、おめでどうよかったよかった、うまくいく、成功する、おっとやったね、やったあ、というイメージ。

したがって、

*「なる」とは「はる」の結果である。

2つの言葉に限定すると、以上のように言えると思います。

*

さて、春夏秋冬をサイクルで言い表すなら、次のように言えるのではないのでしょうか。

* 「はる」から「そだつ＝かわる＝わかる」という過程をへて、「なる」という状態で一応の「決着＝成功」に至り、次に「ねむる＝やすむ」という態勢をとりながら再び「はる」の状態を待つ。

「秋」の語源については、辞書の記述は頼りなげです。秋空が「あきらか＝すみきってあかるい」からかもしれない。収穫が「あ（＝飽）き満ちる＝十分に満足する」からかもしれない。ひょっとすると、植物の葉っぱが「あか（＝紅・赤）くなる＝紅葉する」からかもしれない。広辞苑という辞書には、そうした意味のことが書いてあります。

「こんな説明では、あきまへんなあ」、「あんたら、言葉で、あきないして、おまんま食うてるんやろ。しっかりせんと、あかんわ」。関西の方なら、そうおっしゃるかもしれません。

*

ちなみに、英語で秋は fall と autumn の2つがありますね。fall のほうが古い言い方でゲルマン語系（※日本語の大和言葉系にあたります）、その意味は「落ちる＝葉っぱが落ちる＝落葉」で米国英語で使われている。主に英国などで用いられている autumn は、「収穫期＝成熟期＝熟年・衰え・老化が始まる時期」という意味のラテン語系（※日本語の漢語系に当たります）の言葉から来ているそうです。autumn ってまさに「なる」ですよ、などどこじつける人がいそうです。ここにもいます。

ついでに申しますと、春は spring です。語源は古いゲルマン語系の言葉で、「はね

る＝突然びよんと飛び出す」とか、「流出口」（※何ですか、これは？）とか「春」（※そのまんまじゃないですか！）とか辞書によってまちまちです。まちがいじゃないでしょうね。昔のことなので、あやふやなんでしょうか？

でも、現在使われている spring の意味を見ると、何となく納得＝体感＝「感字」できます。

*「春」のほかに、「はねる、とびはねる、おどる、穴から飛び出す、はじく、わきでる、生える、芽を出す、ぜんまい、スプリング、泉、源、水源」など。

の意味があります。言い方を換えると、

*びよんびよん、うごうご、ひょっこり、びよーん、ぶしゅーっ、こくこく、わーい、というイメージ。

ですね。

やたら元気がいい。激似とは言いませんが、日本語の「はる＝張る」と、張り合ってませんか＝かぶりませんか？

「はる＝張る＝春」の反対が「なる＝成」だったら、おもしろいのに……。

いや、こじつけっぽくすぎて＝あたりまえすぎて、おもしろくないですね。前言撤回します。言葉の仕組みはわけが分からないほうが、想像力＝創造力を鍛えてくれそうです。

09.03.31 なる (4) ～ (6)

◆なる (4)

2009-03-31 10:48:30 | 言葉

「はる」の反対が「なる」ではなく、「あき」だというのは、語源から解釈すると「晴れてすみきった \ [春の \] 空」から「晴れてすみきった \ [秋の \] 空」に戻ったということです。では、その間にある「なつ」と、その後続く「ふゆ」には、「晴れてすみきった \ [夏の or 冬の \] 空」はないのでしょうか？ そんな屁理屈を言いたくなります。そこで大きな辞書で調べてみました。まず、「なつ」を引いてみました。

あっと、驚きました。このブログの記事「なる (3)」2009-03-30 で、こじつけた「なる」が出てきたのです。語源の説明として、いろいろな説が自信なげに並べてある中で、なんと、いけしゃあしゃあと、「満州語の『春』と語源がいっしょか？」とか、『あつ＝暑い』、『なる＝生』、『ねつ＝熱』からなどとも言われているらしいなんて意味のことが書いてあるのです。辞書には「？」も「らしい」も使ってはありませんけど、よく分からないので専門家として恥ずかしいのだと推測されます。いずれにせよ、

* 「あつ」 + 「なる」 + 「ねつ」 = 「なつ」

国語辞典様が、こんなテキトーな＝でたらめな＝自由奔放な＝大胆な式で、「夏」を説明しているとは！ 「なる」ほどと「なつ」とくできるどころか、「ねつ」いもへったくれも「あつ」たもんじゃありません。それにしても、「なる」が「あつ」たのには、たまげました。「あっちっち」と「ねつ」と「なる」とが、合同結婚式を挙げたのでしょうか？ ところで、もしも3人で結婚したならば、法律的には重婚になるのであろうか、などと要らぬ心配をしてしまいました。

*

開いた口を閉じるのを忘れたままに、次に「冬」を調べました。これには、笑っちゃいました。こじつけが好きな自分としては、わくわくもしてきました。のっけに「ひゆ(=冷)」と書いてあったので、「ひゆーひゆー、北風さんは……」とかいう、幼いころに読み聞かされた童話の一節が頭に浮かびました。そりゃ、そうですね。

「冷たさ=寒さ」を「冬という時期」に転換する。これって、格好をつけてお上品に言えば「比喩=ひゆ」ですね。簡単に言えば「たとえ」です。ややこしく言うと、「Aの代わりにAでないものを用いる」という、言葉の大前提みたいな「代理の仕組み」です。こうしたヒトの行為を、このブログでは、ずばり「こじつけ」と呼んでいます。

さて、辞書に記述してある「冬」の説明に話を戻します。「ひゆ(=冷)」に続けて、「一説に」、寒さが力を「ふるう=奮う=振る」の意味があるので、「ふゆ=振」か？ あるいは、「ふるう=ふるえる=震」か？ または、「ふゆ=殖=殖える」という説もあり。ということが書いてあります。つまり、寒くて、外へ出るのもおっくうだから、家の中で「子づくり=生殖」に励むってことでしょうか。体が温まるでしょうね。なかなか説得力があります。

*

「夏・なつ」と「冬・ふゆ」については、以上のようなことが書いてあるのです。いやはや、「こじつけ」=「だじゃれ」=「オヤジギャグ」=「地口(じぐち)」=「(広い意味での)たとえ」=「(広い意味での)比喩」の力はすごい。事実関係=因果関係=歴史的経緯はあってもなくても構わない、というか、「そんなの知ったことか」という神経=精神の産物である「こじつけ」は「正しい」。パワーがある。こじつけは脳を活性化し、想像力(=イマジネーション)=想像力(=クリエイティビティ)を養う。何だか、「はる=張る=春=spring=ばりばり=びよんびよん=ぴちぴち」の気分になりました。元気をありがとう、という感じです。

*

それにしても、辞書にある「一説によると」、「……という説あり」、「……の意からなどともいう」、「……なる意からとも」といった記述の「歯切れの悪さ=うじうじぶり=みじめったらしさ」ですが、なかなかいい味をかもしだしていますね。情緒と悲哀

と風情を感じさせます。

さらに、「……と同源か」、「……であるところからか」という具合に、「？」を省いた「潔くない＝往生際の悪い」表記も、おちゃめでチャーミングですね。苦しいんですよ、きっと。いや、けっこう、楽しんでいるのかも……。

辞書づくりに励んでいらっしゃる学者さんたちやそのお弟子さんたちが、子づくりと同様にせつせと汗をかいて苦労なさっているさまを垣間見る思いがします。作る楽しみ、産む苦しみ、ですか。

*素人も、自信をもって、こじつけをやっていいのだ。言葉はみんなのものなのだ。

これが、ここまでのとりあえずの「強引なこじつけ＝結論」です。



◆なる (5)

2009-03-31 14:46:06 | 言葉

言語学という学問とそれを研究するギョーカイがあります。どの業界でもそうですが、さまざまな人がいて、いろいろなことを言いますから、喧嘩やいがみ合いも当然起こります。縄張り争いもあります。さらに言うなら、嫉妬あり、中傷あり、イジメあり、献金あり、です。議論とか論争とか言っても、中身は嫉妬・中傷・イジメ・カネがらみという点では「同じこと」で、どろどろの果し合いです。百家争鳴、百花繚乱といった、りんりんらんらんかんかんほあんほあんの言い方も可能です。「何と名づけよう」と、喧嘩は喧嘩です。

その「何と名づけよう」「同じこと」に注目した言語学者が、昔いました。言い換えれば、言葉とその言葉が指しているものごとの間に必然性＝因果関係＝因縁＝切っても切れない関係＝腐れ縁などない。要するに、両者の関係は、でたらめ＝でまかせ＝テキトー＝恣意的＝気まぐれ＝こじつけだ、というわけです。

*「秋」を「あき」と言おうと、fallと言おうと、autumnと言おうと、「なる＝成」と言おうと、どうぞお好きなように、正解なんてなし、

という感じです。

*

でも、というか、ところで、その「秋」って何でしょう？ 四季のない地域に住む人たちにとって、「秋」は体感＝知覚できないものです。たとえば、赤道直下に住むたちを考えてみましょう。

アフリカ、インド洋の島々、東南アジアとオセアニアの間、南太平洋の島々、南アメリカには、赤道直下の地域があります。そこには、「春夏秋冬」という「現象」or「観念＝概念＝五感で知覚できないもの」である「春夏秋冬」を知らない、あるいは聞いたことがあるけど経験したことがない人たちがたくさんいます。さて、そこで暮らしている人たちは、どんな言語を話しているのでしょうか？

大昔から先祖代々伝わってきた、いわゆる「現地の言語」を話している人たちもいれば、歴史的な経緯から「現地の言語」を奪われて、そもそもヨーロッパで話されていた言語を話している人たちもいるでしょう。かつて、インドネシアの周辺や南太平洋のアジア寄りの地域では、日本語で教育を受けた人たちがいましたね。いつだったか、南太平洋のある島に住むかなり高齢の現地の男性が、流ちょうな日本語を話しているのをテレビで見て、びっくりしたことがあります。

その人は、幼いころから数年間日本人が作った学校に通い、日本語で教育を受けていたらしいのです。当然、「秋」という言葉も習って知っているでしょうね。教科書は、当時の日本で使われていたのと同じものだったようです。「春夏秋冬」、それに「雪」なんて「言葉」も「知っている」に違いありません。でも、

*「雪」という「言葉」は「知っている」けれど、「雪の実物」を見たことも触ったこともないだろう、

とも想像できます。

これも、想像ですが、その人が住んでいる島やその周辺の島々には、現地の言語が「奪われる」ことなく残っていて、現在、日常生活ではその言語を話している可能性もあるでしょう。いや、日常生活では、新しい支配者の言語である英語とかフランス語とかを話しているかもしれません。それでもなお、現地の言語がまだ残っている可能性は捨てきれません。

ふだん複数の言語を話している人たちは、世界的な規模でみると意外と多いみたいです。特殊なのは、むしろ日本みたいな国だと言えそうです。話を戻します。さきほどの、南太平洋のある島とその周辺の「現地の言語」が、英語などと併用される形で、依然として使用されていると仮定しましょう。その言語に「春夏秋冬」、「季節」、「雪」という言葉に相当する言葉があるのでしょうか？ たぶん、ないのではないのでしょうか？ あったとしても、外来語として存在すると考えるのが妥当だという気がします。

*

とはいうものの、そうした状況は、この国に住んでいてもざらにあると思われまます。たとえば、アマゾン川流域にしか生息していないという動植物。ものすごく多いらしいですね。言葉としては、辞書や百科辞典に載っている。または、グーグルやヤフーで検索すれば、ひらがなやカタカナや漢字で表記され、その映像（＝写真・動画）まで目にすることができるかもしれません。

言葉＝名前と映像で知っているけど、実際に知覚＝見たり触ったりしたことはない。そういうものが存在するということが、不思議でなりません。当たり前のようにですが、よく考えると摩訶不思議。あくまでも個人的な感想ですけど。

話が大きくなりすぎましたね。もっと身近な例で、考えてみましょう。テレビをつけてみたとき。実際に、近くにテレビがある方はつけてみてください。そこに映し出されているものを、実際に見たり触ったりしたことがありますか？ あるいは、画面に映っている場所に行ったことがありますか？ 100%のうち99.9999...%の確率で、「ない」のではないのでしょうか？

CMを見ながら、「いや、あるよ。ほら、今CMをしていた、あれと同じシャンプーなら、うちにもあるよ」なんて叫んでいる方もいらっしゃるでしょう。同じシャンプーには違いないでしょうが、同一のシャンプーですか？ もし、そうなら、あなたか、そのCMに出ている人のどちらかが盗んだことになりませんか？

いやですね。こういう屁理屈、こじつけ。へそ曲がり、偏屈者の言うゴタク。ごめんなさい。頭の体操をしていると思って、許してください。

* 言葉が何を「指している＝意味している」のかは、分かっているようで、よく分からない。

* 「言葉」と「その言葉が指すもの」の関係はかなりテキトーであるらしい。

そんなふうに言えませんか？ でも、こんなことを考えながら、生きていく＝生活していく必要も義理も責任も全然ないことは確かです。ちょっと、頭に揺さぶりをかけてみる。たまには、そんな頭の体操をして、脳を活性化させてみましょうよ。



◆なる (6)

2009-03-31 16:45:43 | 言葉

「なりきる」という言い方があります。

「なる」＋「きる」＝「なりきる」、ということです。辞書を引けば書いてありますが、「きる」には「切断する＝中断する＝オフ状態にする」という意味＝イメージのほかに、「使いきる」「困りきる」みたいに、限界まで徹底的にその動作をし尽くすという、意味＝イメージもあります。

「なりきり」状態の人とは、たとえば、カラオケなんかでその歌の世界に入りこんでし

まって、なかなかマイクを手放さない人、あるいは、その歌を歌っている歌手になったつもりになって「酔っ払った」＝「夢を見ている」ような状態になっている人を思い浮かべるといいでしょう。俳優なんかが、舞台の上や、テレビや映画でその役柄になりきったような演技を見せてくれる場合もありますね。いわば、「迫真の演技」状態です。あれも、「なりきり」状態のいい例だと思います。

歌っている人であれ、演じている人であれ、「なりきった」人というのは、ちょっと危ういというか怖いですね（※あんたも十分あやうくてこわいよって、今誰か、おっしゃいませませんでしたか?）。「おい、大丈夫か？」なんて言いながら、肩をゆすってみたり、それでも「目覚めない」場合には、ほっぺたを軽くひっぱたいてみたりする。

ようやく目覚めたものの、しばらく、ぼーっと、あるいは、ぼけーっとしている。まだ覚めていなくてその余韻にひたっているのか、あるいは、自我忘失＝もぬけのカラ状態＝「ここはどこ？ わたしはだれ？」状態みたいになっている。そんな人を見た経験はありませんか？

*

以上は極端な例でしたが、多かれ少なかれ、

* 言葉を話すことは、自分以外のものに「なる or なりきる」ことである。

と以前から思っています。「自分以外のもの」って何でしょう？「何でもあり」だとイメージしてください。「自分」以外なら「何でもあり」。では、その「自分」って何でしょうか？ 分かりません。

* 分からないようにできている

のです。というか、

* 分からないような仕組みになっている

あるいは、

*分からないように仕組まれている

とも言えそうです。なぜなら、

*Aの代わりにAでないものを用いる。

という、言葉の仕組みの大前提があるからです。

人類というレベルでのヒトという種(しゅ)が、物心がついたころからずっと「自分って何」と考えてきた。それこそ数えきれないたくさんのヒトたちが、この惑星のあちこちで「私って何」と考えてきたに違いありません。それなのに、究極的な結論が出たという話は見聞きしたことがありません。というか、物好きな人たちがそれぞれ勝手に結論を出してきたというのが、正確な言い方かもしれません。いずれにせよ、「決定打=コンセンサスを得られるだけの結論」は出なかった。だから、「自分とは何か?」という問いは保留するしかありません。

「自分とは何か」を保留するのですから、「自分以外のもの」=「何でもあり」=「森羅万象」=「世界」=「宇宙」とは何かも、きっと保留するしかないでしょう。個人的な意見を述べるなら、「自分」も「自分以外のもの=何でもあり」も、「まぼろし」なのではないか、と考えています。つまり、

*すべては、まぼろしである。言葉自体も、言葉が「指し示している=意味している」とされるものごとや現象も、すべてがまぼろしである。かもね。

という感じです。これは、このブログでよく述べている、

*Aの代わりにAでないものを用いる。

という、言葉の仕組みの大前提と深くかかわっています。

*

ところで、「まぼろし」と聞いて、あなたはどんなイメージを抱きますか？「ないのに、あるように感じられるもの」とか、たとえば「影絵みたいなもの」とか、影絵が発達してできた「映画みたいなもの」とか、映画の延長上にある「テレビやパソコンのモニターに映った画像みたいなもの」とでも言えばいいでしょうか。

本当は、もっと「極端な＝究極的な」ことを言いたいのです。このさい、言っちゃいますね。ヒトが見ているものって、確か、目という知覚器官がとらえた映像を脳で処理したものですよね。聞いているものって、確か、耳という聴覚器官がとらえた音声を脳で処理したものですよね。ということは、

*まぼろしとは、ヒトが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙である。

ということになっちゃうんですけど、言いすぎですか？ たまに見聞きする言い方＝考え方ですよね。いずれにせよ、それを言っちゃおしまいですか？ 心の隅ではちょっとだけそんな気がします。

でも、ぶっちゃけた話、心の大部分では、本気で「まぼろしとは、ヒトが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙である」と個人的には考えているのです。似たようなことを考えている人たちが、ほかにもいるらしい。似たようなことが書いてある本もあるらしい。そんなふうに薄々感じているのですが、本を読んだり、人の話を聞いたりすることや、お勉強が根っから嫌いなので、詳しいことは知りません。

でも、こういう類のことを考えたり、書いたりすることは好きです。大好きと言ってもいいでしょう。だから、毎日、こんなブログを書いているのです。しかも、1日に何回か分けて更新しているのです。暇だということもあります。うつなのと、無職なのが重なって、時間だけはあるのです。お金はありませんけど。というか、預貯金がどんどん減ってきていますけど.....。それはそれでいいとして、とにかく、いろいろ考えてメ

モをとったり、ブログに書いたりする。それだけが、生きている証しなのです。

*

話を戻します。

* 言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる or なりきる」ことである。

さきほどのフレーズを少し変えてみました。このように、言葉を加えていくと、より正確になるような気がします。いわば独り相撲をとっているのですから、正確もへったくれもないのですが、とにかくそんな気がするのです。一方で、言葉を加えると、よりややこしくなることも事実です。このややこしくなったフレーズを、今後説明していく予定です。

* 言葉は重ねるごとに、言おうとしていることをややこしくしていく。言葉は、ヒトを裏切る。

* 言おうとしていることを簡単にしようすると、言おうとしていることがどんどんこぼれ落ちて消えて、やせ細っていく。言葉はヒトを裏切る。

* 言葉は、ヒトにとって極めてやっかいなものである。ヒトは極めてやっかいなものを身につけてしまった。

以上の3つは、愚痴=ぼやき、ですね。失礼しました。では、次回まで。

09.04.01 なる (7) ~ (8)

◆なる (7)

2009-04-01 10:49:47 | 言葉

「なる」と「かわる・かえる」は似ています。これらの言葉を見聞きして、どう感じるかは人によって違うでしょう。また、同じ人でも、感じ方は文脈やTPOによって異なると思います。そこで、一般論という「横着＝杜撰（ずさん）＝テキトー」をしてみると、

* 「なる」は、自然の成り行きで、ある状態になってしまうこと。

* 「かわる・かえる」は、何らかの事情や働きかけによってある状態になってしまうことであるが、元に「かえる」という可能性があったり、ヒトの場合にはその可能性を意識している。

というニュアンスの違いを感じます。しょせん個人的な感想を一般論と名づけたからですから、きわめてテキトーで「穴＝すき」だらけですが、いちおう、とりあえず、こんな違いを意識しながら、話を進めます。

* 言葉を話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる」ことである。

と、「なる (6)」2009-03-31 で書きましたが、またもや変更を加えます。

* 言葉を話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる・なりきる」ことである。

「なる」に「なりきる」を付け加えただけですが、これって「自然の成り行き」をヒトが演じるという意味を込めた駄目押しのもりなんです。「なりきる」という言い方が、気に入ってしまいました。いかにも「人間ぽい＝ヒト特有だ」というニュアンスがある」言い方だと思いませんか？

*

ところで、「なりきる」ことができる生き物は、ヒトくらいしかいないような気がしませんか？ いや、そうでもないかも。ヒトに「飼われている」イヌなんかを見ていると、自分がヒトだと「思いこんでいる＝なりきっている」ワンちゃんがありますよね。かわいそうです。アイデンティティの喪失＝奴隷状態ではないかななどと、考えてしまいます。

イヌと金魚ほど、ヒトが「悪さをする＝人工的に容姿を変える＝細工する」対象になった生物はいないのではないのでしょうか？ ワンちゃんほど、ヒトに忠実な生き物はめったにいません。「……の犬になる」とか「……の犬になりさがる」とか言いますが、あわれだと思えます。馬鹿にしてもいます。

英国かどこかで、ワンちゃんに対する過剰な交配に歯止めをかけるとか何とかいう記事を、先日新聞でちらりと見ましたが、英国って不思議な国ですよ。超過激な動物保護団体があるかと思うと、すごいブリーディング（＝人工的な交配）をしていたり、狩りのことをスポーツなんて呼んで楽しんでいます。

ワンちゃんを手下として使って鳥や動物を追い回して拳銃の果てにはドーンと撃ち殺し、剥製なんぞにして、「えへへ、すごいだろ」とか「あの時は、苦労したよ」なんて悦に入っている。そうか、だから、その反動として超過激な動物保護団体があるのですね。納得。

試しに英和辞典で sport を引いてみてください。「突然変異」や「変種」なんて意味まであります。徹底していますね。本屋さんで犬百科事典の類を、ぺらぺらめくると、元はオオカミだったらしいワンちゃんの「変異」ぶりに「こりゃ大変だ」と感心すると同時に、「ヒトってやつは、けしからん生き物だ」という憤りと悲しさを覚えます。

ついでに、sportsman も英和辞典で引いてみると面白いですよ。日本語でいう「スポーツマン」はむしろ「アスリート」athlete に近いなんて、親切に教えてくれている辞書もありますね。英語の本家、英国（特にイングランド）では sport という言葉には、狩り、釣り、乗馬といった、芸の域に達したアート（= art）のニュアンスがあるみたいです。

そういえば、お馬さんにも、ヒトはいろいろ悪さをしてきたみたいですね。ぜひ、サラブレッド（= thoroughbred）も英和辞典で調べてみてください。そもそも、「thorough」（=完全に、完璧に、入念に、徹底的に）＋「bred」（育てられた）ですもの。ヒトって、大したもの＝罪深い生き物です。

英国人だけでなく、金魚のメッカ（※元は中国らしいのですが）である日本に住むヒトたちも、フナとかヒブナとかいうお魚を、せっせとそれこそ命をかけて交配させてきたのですよね。デメキン、ランチュウなんて、水中でどこか泳いでいるさまを動いているのを眺めていると、「生きにくそうだなあ」なんて同情してしまいます。

自然にではなく、人工的＝ヒトが手を加えた＝ヒトが慰みに悪さをした結果として、「かわりはてた＝変わり果てた」生き物って、あわれです。もしも、この惑星で全動物による裁判が行われたとするなら、ヒトって、きっと「無期懲役」では済まされませんよ。さらに、当事者である一部のヒトの責任だけでなく、ヒト全員の連帯責任になるでしょう。

*

「かわる・かえる」という言葉も「かわりはてる」という「コンプリート＝完全版」にまで至ってしまうと、「自然の成り行き」という感じは希薄な気がします。誰かの企みやせっぱ詰まった事情によって、やむを得ずそうなってしまったあげくに、「元にはかえることができない」＝「もどれない」感じがしてなりません。

さて、「なる」のコンプリート＝完全版である「なりきる」について考えてみましょう。この言葉は、さきほど述べたように、ヒト独特の行為という気がします。「思い込む」とかなりかぶる＝ダブる＝重なる面があるからかもしれません。

唐突ですが、このブログで書いてきた2つのフレーズを、合体させてみます。

* 「まぼろしとは、ヒトが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙である」+ or (E) 「言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる・なりきる」ことである」＝「ヒトは言葉を使用することによって、自らが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙＝まぼろしに、一時的に、あるいは部分的に「なる・なりきる」

こんなん出ましたけど――。どうお思いになりますか？ 「ゲイ・サイエンス (= Gay Science)」という言葉をご存知ですか？ 初めてこの言葉を目にした時には、ぎょっとしました。さまざまな思いが頭の中を巡りました。何だろう？ その言葉が書いてある文章をよく読んでみると、あるドイツの哲学者の著作の英訳タイトルだったのです。

この国では『悦（よろこ）ばしき知識』という書名で売られています。ほかのタイトルでも訳されているらしいのですが、知りません。ややこしそうな本だったので中身は読んでいませんが、「学問や知性というのは楽しくていいのだ」と書いてあると勝手に理解しています。ですから、

* ヒトは言葉を使用することによって、自らが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙＝まぼろしに、一時的に、あるいは部分的に「なる・なりきる」。

というフレーズも、へそ曲がりの素人が楽しく考えた結果だ、くらいに理解してください。

*

ところで、偏屈者かどうかは別にして、学者とか研究者とか呼ばれている人たちが、「学説・理論・法則」などと称するものを、作りあげて＝捏造して＝でっちあげています。でも、ヒトの「知」とは、知覚器官と脳という「限界性＝枠＝思い込み」の中に成立する「まぼろし」です。したがって、「学説・理論・法則」などは、格好をつけずに「考え方・受けとり方・感じ方・とらえ方」と言うべきでしょう。

ヒトが「真理・真実・現実・事実・実体・もの自体・本質」などと呼んでいるものもまた、「考え方・受けとり方・感じ方・とらえ方」と言った＝呼んだほうが、潔い＝正直＝

倫理的あり、また正確でもあると思います。

要するに、学問の世界が、百家争鳴＝百花繚乱＝りんりんらんらんかんかんほあんほあんの状況なのは当たり前で、

*唯一の正解なんてヒトには無理。ヒトはえんえんと前言撤回と新説提案を繰り返していくほかない。

と感じているのですが、どうお考えになりますか？

というわけで、上記の「へそ曲がりの素人が楽しく考えた結果」＝「いわゆるひとつのゲイサイエンス」の断片について、しばらく考えてみたいと思います。



◆なる (8)

2009-04-01 16:49:23 | 言葉

「唯〇論」という言い方があります。ある特定のものごとや現象や特質みたいなものを用いて、森羅万象をひっくるめて面倒みよう、といった場合に用いるネーミングの産物、あるいはブランドのことです。グーグルなどで検索するさいに、半角の「*」を使うことがありますね。試しに“唯*論”で検索してみたところ、あるはあるは、そのヒット数の多さにびっくりしました。まず、以前に見聞きしたことのあるものを列挙します。

唯幻論＝唯心論＝唯物論＝唯臍論＝唯言論＝唯我論＝唯脳論＝唯神論＝唯金論.....

次に、初めて見たものの中で、特に印象的だった使用例を並べます。

唯ゲーム論＝唯エネルギー論＝唯情報論＝唯退屈論＝唯創論＝唯遺伝子論.....

この言葉の羅列を見て感じるのは、

*「唯〇論」というのは、メタな立場＝「これですべてが解決＝説明＝解明できるぞ。大したものだろ」という視座に立ちたいという欲望である。

と言えそうです。でも、これまで見聞したところでは、メタな位置に立とうとするとメタメタ＝めちゃくちゃになることは確かです。だから、わざと上の言葉を全部「＝」で結びました。ちなみに、「＝」は一種の感字であり感覚的なものです。「すべての面倒をみる」というメタな心意気があれば、ほかの「唯〇論」と「＝」で結んでもいいことになります。

なにしろ「何でも面倒をみよう！ まかせとき！」というのですから。ということは、「＝」は権威のあるお墨付きの印（しるし）であり、5つ星とか勲章みたいな「榮譽」のシンボルということになりませんか？ つまり、

幻＝心＝物＝臓＝言＝我＝脳＝神＝金＝ゲーム＝エネルギー＝情報＝退屈＝創＝遺伝子.....

という「存在の偉大なる連鎖」が形作られると言えます。やっぱり、「ぜんぶ、わたしに、まかせなさい！」状態です。

*

それにしても、すごく野心的な考え方ですね。思わず、占いを連想してしまいました。星、タロット、水晶、姓名、生年月日、動物、風水、色、夢、手相、人相、鼻糞の色と質、オーラ.....。「何でもあり」が「何でも占っちゃう」。

それは脇に置いて、上記のような列挙作業をしたのには、理由があります。このブログでやっていることが、

*「唯〇論」という「まぼろし」を形成する作業に似ている

からです。そういうわけで、このブログにはそんな野心は毛ほどもありません、と断っておきたいのです。

*このブログでいろいろやっていることは、ぜんぶ「お遊び」

なんです。「本気のお遊び」と言ったほうが適切かもしれません。本気でテキトーなことをする。そんなことができるのか、という疑問を抱いている方もいらっしゃると思います。でも、できるんです。というか、たぶん、やっているのです。少なくとも、やっているつもりなんです。

ちなみに、「テキトー＝適当」や「いい加減」は、たぶんポジティブな意味がネガティブな意味を産んで＝生んでしまったのではないかと推測しています。辞書では両方の意味が、語義として別個の項に記載されています。つまり、並列＝併記されています。したがって、

*ヒトは言葉を使用することによって、自らが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙＝まぼろしに、一時的に、あるいは部分的に「なる・なりきる」。

というフレーズは、

*「ポジティブであり、かつネガティブ」であるという両義的な意味で「テキトーに」、
「森羅万象＝世界＝宇宙＝まぼろし」と「言葉」を「本気で」関係づけている。

のだ、という意思表示なのです。「絶対にこうだ」とか「これしかない」なんて、主張してはいけません。そんなことは自分にはできないし、そんなことを言う度胸もありません。単に、「こんなふうにも考え＝受けとり＝感じ＝とらえることができますよ」、「ここで書いていることは、正解とか真理とかとは無縁ですよ」と言っているに過ぎません。お山の大将の気分はとは、ほど遠いです。ただし、言葉はきわめてやっかいなものですよ、とは強く言っておきたいです。

たとえば、

*森羅万象は、おそらく、すべてがまぼろしであり、広義の言葉（＝話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（＝家庭だけで通じる断片的な手話）、さまざまな標識や記号など）としてしか、ヒトは知覚できない。

と書いた場合には、そのフレーズ自体さえも、例外なく含んでの話だという理屈になります。少し飛躍すると、「わたしは嘘をつく」とかいうフレーズに、ちょっと似ていますね。正しいのか正しくないのか判断できない。こういう場合には、「正しい」「正しくない」という枠組み＝仕組みを疑ったほうが、いいような気がします。

*正誤、真偽は言葉のあやである。

以上のように書いても、あややという感じで、あやうくてあやしげで事態は好転しそうもありません。さきほど「……という理屈になります」と書きましたが、「理屈＝物事のすじみち＝論理というヒトの発想あるいはヒトの思考のパターン」自体に「問題点＝欠陥＝無理＝テキトーさ＝穴とすき間だらけ状態＝まだら模様＝むら」があるに違いありません。でも、それしか使用する選択肢が見当たらないので、それと付き合っていくしかない。きっと、そんな感じ＝状態＝状況なのではないでしょうか。

*

*言葉とは、Aの代わりにAでないものを用いるこじつけである。言葉というこじつけが、ヒトをヒトとならしめている。

このフレーズは、以前このブログで書いたものです。「こじつけ」という「作業＝行為＝いとなみ」で、「広義の言葉」の仕組みを説明する考え方です。この「Aの代わりにAでないものを用いるこじつけ」という仕組みは、「うまくいく」こともあれば、「うまくいかない」こともあります。たとえば、

- (1) ヒトが仲間を月面に降り立たせたり、
- (2) コンピューターやインターネットを作ったり、
- (3) がんの治療において完全とは言えなくてもある程度の成果をあげている。

これらは、言葉の使用がうまくいった例でしょう。一方、

- (1) 家族内でコミュニケーションを円滑に進められなかったり、
- (2) 言い間違いや失言や誤解をきっかけに争い（or 戦争）が起こったり、
- (3) 文書の解釈をめぐる利益（or 国益）が失われたりする。

これらは、言葉の使用がうまくいかない例でしょう。今挙げた2種類の例について、さらに屁理屈を言うなら、前者のグループの3例がネガティブな結果を生む場合もあれば、後者のグループの3例がポジティブな結果を生む場合もあります。

*

たとえば、コンピューターの発明と普及は大したものです。でも、それがどれだけ地球温暖化を進め、また戦争でいかに大きな役割を果たしているか。一方、家族内のコミュニケーション上の問題がきっかけで一悶着あり、「雨降って地固まる」式に、かえってその後深い和解が成立する。あるいは、文書の解釈で相手国に押し切られ一時的に損失が出たが、その損失に打ち勝つために国民が努力して長期的な高度成長を成し遂げる。

今挙げた例に類したことは、ざらにありますね。ということは、「うまくいく」「うまくいかない」という「分ける作業」自体に、無理＝限界＝不具合があるのではないのでしょうか。「うまくいく」「うまくいかない」とか、「正しい」「正しくない」は、表裏一体＝見

方の相違、極端に言えば、同じこと。あえて、区別する必要なし。何もかもがつながる。やっぱり、根本に「こじつけ」という仕組みがあるからだ、「らしい=かもね」。

言いすぎでしょうか？「人間様も、言語様も、もっと偉いんだぞー」ですか？でも、もしも言葉の大前提である「こじつける・こじつけ」がテキトー（※ポジティブ=ネガティブな意味です）ならば、その使用も「テキトーに（※ポジティブ=ネガティブな意味です）」を意識して行わないと、言葉に裏切られてがっかりしたり、それどころか、とんでもない事態に陥ることもあり得るのではないのでしょうか？要するに、言葉を過信するのは禁物。使用には十分注意しましょう。などという、製造物責任法=PL法の精神が必要なのではないかと思います。

つまり、

*言葉は欠陥品である。

「らしい=かもね」。さて、蛇足的な弁解で、道草をしてしまいました。次回は、本題である「ヒトが言葉を使用することで「森羅万象=まぼろし」になりきる」という状況について説明する予定です。

09.04.02 なる（9）～なる（10）

◆なる（9）

2009-04-02 11:16:11 | 言葉

ヒトは、ひとりひとりが1台のテレビ受像機（※意識や認識の比喩です）を持っている。たぶん、その受像機の画面1面を見るのだけで精一杯で、2面以上の画面には継続して集中できない。その1面の画面に映っている映像は静と動を繰り返している。静の状態の時には、その映像を「ぼけーっ」と眺めているか、「いったい何だろう」とさまざ

まな解釈を試みている。一方、動の状態の時にも、その映像を「ぼけーっ」と眺めているか、「いったい何だろう」とさまざまな解釈を試みている。

以上のような形で、ヒトは「認識＝知覚＝意識」という作業に従事しながら、生きているのではないか。そんなふうに、以前から思っています。

*テレビ画面という「たとえ」＝「Aの代わりにAでないものを用いる」＝「こじつけ」を用いて考えて、ヒトの「認識＝知覚＝意識」を言葉という「たとえ」＝「Aの代わりにAでないものを用いる」＝「こじつけ」にしたものです。このように、ヒトは、広義の言葉の枠から出て、思考したり認識したりすることができません。

*「こじつけ」の外へは出られない

とも言えます。仮にその枠から出たら、そのヒトはヒトではなくなってしまいます。その他のヒトたちとコミュニケーションを成立させることができなくなってしまいます。

複数のヒトたちの脳内で、共通した新たな「変異・異変」が起こり、DNAレベルにおいてある程度の共通性のある資質を備えた集団ができれば、話は別です。別の新たな「こじつけ」の仕組みが生じるかもしれません。この場合は、ヒトは新たな「こじつけ」の枠の中で生きることになります。

あるいは、「こじつけ」とは異なる「認識＝知覚」の仕組みを獲得するかもしれません。この場合には、ヒトは「こじつけ」の外に出ることになるでしょう。太古に、うだつのあがらない尻尾のないおサルさん（※ monkey ではなくて ape）の中のある種（しゅ）が、おそらく脳内でズレを起してしまって、「尻尾のないおサルさん+ α 」＝「ヒト」＝「人間様」になったという説＝お話＝神話＝「かもね」があるくらいですから、再び、ヒト、または、ほかの生き物の脳内で「変異＝異変＝ズレ」が起きることはあり得ると考えられます。

*

以上の話を前提に、

*ヒトが広義の言葉を使用するさいに、森羅万象になりきる。

もっと詳しく言えば、

*ヒトは広義の「言葉」(＝「森羅万象」の代わり＝まぼろし)を使用するさいに、その「森羅万象」になりきる。

さらにもっと詳しく言えば、

*ヒトは広義の「言葉」(＝森羅万象の代わり＝まぼろし)を使用するさいに、一時的に、あるいは部分的に、その「森羅万象」に「なる・なりきる」。

のではないか、ということについて、考えていることを「言葉という名のまぼろし」にしてみようと思います。ぶっちゃけて言えば、こじつけてみようと思います。

まず、広義の「言葉」(＝森羅万象の代わり＝まぼろし)を対象とした場合の、「かわる・かえる or 化ける or 演じる =装う」と「なる・なりきる」の違いについての個人的な感想を述べます。

「かわる・かえる or 化ける or 演じる =装う」には、不自然なことをするという意識が伴います。「自分はAなんだけど、Aでないものを演じるのだ」とか「そのうち、またAに「かえる」のだ」という感じです。

一方で「なる・なりきる」においては、そうした意識は希薄です。そもそも「なる」とは、自然＝当然＝当たり前な現象で、本来は意識的に行うことができないものなのです。たとえば言えば、草木が葉や枝や花を「成す」というイメージです。ヒトに性毛が「生える」というイメージです。言い換えれば、「成長」「生育」という感じですね。

でも、「なりきる」は、違います。まず、不自然なことをするという意識から出発します。しかし、その意識が薄れます。ほとんどなくなるまでいきます。「思い込んで

いる」からです。もっとも、「思い込み」には程度の差はあると思われますけど。

*「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる = 装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を「当てる」=「こじつける」ことである。

という考え方もできそうです。ややこしくなるのを覚悟で、もっと詳しく言うと、

*「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる = 装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を意識的に「当てる」=「こじつける」と同時に、「なる→なった」という状態にほぼ無意識のうちに陥ることである。

ともいえそうな気がします。自己催眠、錯覚、酩酊、夢想、妄想、忘却などという言葉が頭に浮かびますが、そうしたラベル=レッテルは、ここではあまり重要ではないと思われるので、深入りするのはやめておきます。大切なのは、「なりきる」が「思い込む」から強くバックアップ=サポートされていることです。

*

ヒトは、広義の言葉（=話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語=ボディランゲージ、手話、ホームサイン（=家庭だけで通じる断片的な手話）、さまざまな標識や記号など）を使用するとき、その言葉を「信じ」ます。

たとえば、「ハリー・ポッター」「ヤッターマン」「石鹸」「ケータイ」「愛・愛情」「平和」「戦争」「不景気」「お金」のうち、どれでもいいですから、1つだけを思い浮かべてください。

漠然としていませんか？ 今挙げた言葉のどれも、頭に浮かべたとたんに、さまざまなイメージ+記憶+映像+感情が喚起されます。おそらく、脳が必死でその言葉から「生じる=喚起される」「情報=データ」を処理しようとしているのでしょう。

それが「信じる」ということです。「疑う」余裕などないのです。この「信じる」とい

う段階で「なりきる」の前提である「思い込む」の下地ができました。無意識のうちに、そうした「作業＝メカニズム」が、たぶん脳内で「生じます＝機能します」。

*

次に、その言葉を使ったフレーズやセンテンスや話を見聞きしたり、独りでつぶやくなり他人に話すなり書いてみたり、その言葉が指すものを映像あるいは音声という形で情報として知覚したとしましょう。

たとえば、「ヤッターマンが近くの映画館で上映されているそうだ」と誰かが言った。／ある石鹸のCMがテレビで流れるのを目にした。／知り合いが会社から解雇された、と聞いた。／財布を開けて中身をチェックしてみた。

このように、具体的にある出来事と遭遇した瞬間、無意識のうちに「信じる」→「思い込む」→「なりきる」が「一瞬に＝ほぼ同時に＝並行して」、おそらく脳内で起こります。

「脳内」というのは、さきほど書いた、ヒトひとりひとりが持っている、たった1台の「テレビ受像機」の、たった「一面の画面」のことです。「意識」と言ってもいいかとも思います。こうした脳内での情報処理のメカニズムを、

*ヒトは広義の「言葉」（＝森羅万象の代わり＝まぼろし）を使用するさいに、一時的に、あるいは部分的に、その「森羅万象」に「なる・なりきる」。

と、このブログでは表現しているのです。大切なのは

*「脳内で」「なりきる」

です。そのきっかけとなる

* 「信じる」

も、きわめて重要だと思います。



◆なる (10)

2009-04-02 16:42:57 | 言葉

みなさんの中にも「花粉症」で悩んでいる方が、たくさんいらっしゃるでしょう。自分も薬で症状をやわらげながら、何とか耐えています。春は、いろいろなものが「張る」から「はる」と言うでしたね。

* 「はる」 = 「張る」 = 「貼る」 = 「墾る」 = 「晴る・晴れる」 = 「霽る・霽れる」 = 「腫る・腫れる」 = 「脹る・脹れる」

* 「はらう」 = 「払う」 = 「掃う」 = 「祓う」

このブログのバックナンバーである「なる (1)」2009-03-30 で、以上のように書きました、辞書では「春」の語源の候補に挙がっていない「腫る・腫れる」 = 「脹る・脹れる」まで並べたのは、花粉症が頭にあったからです。

花粉症の主な症状である粘膜の炎症とは、確か粘膜が「腫れる」ことですよね。鼻の内部や目などの粘膜が腫れてしまう。それでクシャミが出たり、目が痒かったりする。これは素人の単純な理解ですから、専門家の方からは、そんなものじゃないと言われるかもしれませんが。とにかく、春は「腫る・腫れる」もあり、としておきます。

さらに、「はらう」まで挙げてあるのは、春になるといろいろな過去のものを「払う」 = 「取り払って心機一転する」というイメージがあるのと同時に、春は「お祓い」の季節だというイメージもあるからです。

「福は内、鬼は外」と声をあげて豆まきをする節分もあるし、何か新しいことを始めるさいには、鬼＝魔物の類や身のけがれを「はらう＝祓う」儀式をします。入学式・入社式なんていう儀式も、まさに「お祓い」だという気がします。そういえば春は、神社も神主さんも忙しそうです。

このように、語源と呼ばれている専門家による「説」＝「こじつけ」に感心するだけでなく、素人がいろいろなものを自由に＝勝手に「こじつける」ことがあってもいいのではないのでしょうか。言葉はみんなのもの。言葉はこじつけが命。正しいも正しくないも、こじつけの前では影が薄いというか、意味がない。言葉はきわめてテキトー＝恣意的なもの。そう思っています。

権威は好きではありませんが、「偉い」と言われている何とかいう名前の学者も、似たようなことを言ったそうです。その弟子たちも、そう言っているそうです。詳しいことは知りません。ごめんなさい。

*

「なる」というタイトルでつづってきたこの文章では、言葉の仕組みの根底にある「こじつけ」に加えて、「なる・なりきる」にこだわりました。なぜ、そんなにこだわるのかと不思議に思った方が、きっといらっしゃるでしょう。

そういう疑問を想定したうえで、「なる・なりきる」にこだわる理由を説明させてください。どうも世界が変になりつつある。悪くなりつつある。そんな気がしてならからです。現在、よく話題にされる例を挙げると、いわゆる「地球温暖化」、そして「大不況」です。

「温暖化」の「化」は「化ける」ことであり、「変化」の「化」ですから、「かわる・かえる」という言葉の親戚と言えそうです。個人的には「かわる・かえる」には、いつかまた「かわる・かえる」という楽観的な響きを感じます。

たとえば、「老化」なら、美容整形や厚化粧や若作りや途方もない値段の健康食品で何とかごまかせるさ、というイメージがあります。

「少子化」も、国が何とかしてくれるさ、くらいに考えているヒトが周りにたくさんいます。

このように、「〇〇化」という言い方には、「化けた＝変わった＝変えた」ところで、いつか以前いたところに「帰る」、以前の状態に「返る」「返す」というお気楽な感じがしてなりません。

一方、大不況は、「〇〇化」とは呼ばれていませんが、これまでの歴史を振り返ってみると、経済には波みたいなものがあるらしいので、いつかまた好景気に「変わる・返る・もどる」だろうという気はします。

ちなみに、ヒトの経済活動の根底にある「お金＝貨幣」「価値＝値打ち」「モノ（※製品・原材料）、サービス（※活動・機能）、ヒト（※人的資源）」という広義の言葉たちも、「Aの代わりにAでないものを用いる」という「こじつけ」の仕組みを支えたり、その担い手になっています。このブログ流に言えば、ヒトの「なりきり」の枠内にあるということになります。

さて、地球温暖化は、どうでしょう？ 不景気のように楽観できるでしょうか？ ヒトの「なりきり」の枠内にあると考えていいのでしょうか？ 個人的には、かなり悲観しています。もう、「変われない・返れない・戻れない」のではないかと。

*

* 「なる」＝「成る」＝「生る」＝「為る」

* 「かわる」＝「変わる（＝変る）」＝「代わる（＝代る）」＝「替わる（＝替る）」＝「換わる（＝換る）」

以上の2グループの言葉たちを眺めていて感じることは、

* 「なる」の圧倒的な力強さ

です。ヒトの力や、ちょっとした小手先の細工では、どうにも「ならない」、後戻りや軌道修正は無理といった、

* 「自然=宇宙」の「力=摂理」

を感じます。それなのに、

* ヒトは「こじつけ」の達人であり、「こじつける」ことによって、この惑星を「支配している」つもりになっている。

と言っても過言ではない状況にあると思います。

その「こじつける・こじつけ」＝「Aの代わりにAでないものを用いる」という仕組みに、「ヒトは森羅万象になりきる」という「視点＝考え方＝意見＝思いこみ＝こじつけ＝「こんなふうにも考えられます」」を付け加えるのが、この「なる」というタイトルがつけられた一連の記事の目的でした。

* 「森羅万象になりきる」という発想＝考えは、森羅万象を支配できるという、貪欲で身の程知らずな「幻想＝まぼろし」

にほかなりません。森羅万象を「こじつける・こじつけ」という仕組みの枠の中に強引に取りこんでしまおうとする無謀で理不尽な発想である、とも言えるかと思います。おそろしいのは、「こじつけ」の一種である「なりきる」が、「信じる」→「思い込む」→「なりきる」という脳内での無意識のプロセスで処理されているのではないかということです。

もちろん、これも、個人的な視点＝考え方＝意見＝思いこみ＝こじつけ＝「こんなふうにも考えられます」です。この段階まで考えを進めると、「なる (9)」2009-04-02 で深

入りするのをやめた、自己催眠、錯覚、酩酊、夢想、妄想、忘却といった言葉が重要になります。ひょっとして、

*ヒトは「大いなる勘違い」をしている

のではないのでしょうか？

もしも、ヒトを取りまく環境や事態が、ヒトの手に負えないほど悪化しているのなら、どうすればいいのでしょうか？ 思い浮かべていただきたいのは、さきほど挙げた例でいうと、大不況ではなく地球温暖化です。もはや、人知の及ぶところではない。ヒトの力を超えている。そう危惧しています。

自分が変われば世界が変わる、などといった自己啓発書的次元の話ではないのです。言い換えると、ヒトの、森羅万象を「こじつける」という仕組みの枠では、どうてい処理できない段階にまで来ているのではないか、ということです。どうすれば、いいのでしょうか？

*

ヒトが一種の自己催眠、錯覚、酩酊、夢想、妄想、忘却に陥っているのなら、目を覚まさせる努力をすれば何とかなるかもしれない、と思えないことはありません。でも、その程度の軽症なののでしょうか？ 個人的には、もっと重症＝重篤だと考えています。どうにも「ならない」と諦めるしかないのでしょうか？ 以下に、素人なりに考えた結果として提案したいことを書きます。

「こじつけ」は広義の言葉の大前提ですから、これをやめるとヒトでなくなってしまうので、パスです。

では、

*「なりきる」をやめて「なりそこねる」

を実践してみてもはどうでしょうか？ 今、首を傾げている方、あるいは、お笑いになっている方、ごもっともです。きわめて説明不足です。少し言葉を補わせてください。

* 「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる＝装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を意識的に「当てる」＝「こじつける」と同時に、「なる→なった」という状態にほぼ無意識のうちに陥ることである。

と、「なる (9)」2009-04-02 で書きました。また、

* 大切なのは、「なりきる」が「思い込む」から強くバックアップ＝サポートされていることです。

とも、書きました。何を言いたいのかと申しますと、

* 「森羅万象になりきる」の前提である「Aの代わりにAでないものを用いる」という「こじつけ」＝仕組みは、自然ないとなみ＝思考法＝考え方である、という「思い込み」を疑おうではないか。

ということなのです。

* 「Aの代わりにAでないものを用いる」という考え方は、実はきわめて不自然なことなのである。

ということに意識的になろうではないか、と言ってもいいです。とはいうものの、これを実践するとなると、広義の言葉（＝話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（＝家庭だけで通じる断片的な手話）、指点字、さまざまな標識や記号など）を使用するさいに、その有効性をいちいち疑ってかかる必要が出てきます。

「森羅万象になりきる」という、ヒトにとってきわめて「自然な」行為をしにくくなります。すると当然のことながら、やはり広義の言葉である「お金＝貨幣」「価値＝値打ち」「モノ（※製品・原材料）、サービス（※活動・機能）、ヒト（※人的資源）」を使用しての経済活動もしにくくなります。

実は、狙いはそこにあるのです。

*ヒトの経済活動、特に現在グローバルな展開をみせている市場経済、あるいは資本主義というものの根底に疑いの目を向ける。

これが第一歩ではないでしょうか？ いや、それしか地球温暖化を回避する道はないのではないのでしょうか？ 大不況の克服が目的ではありません。地球温暖化の回避が目的なのです。

*

経済が特に苦手なド素人のたわごとととられるのを覚悟で、以上のことを書きました。この大切な問題については、もっともっと考えてみたいです。自他ともに認める偏屈者であるとはいえ、これでもヒトのはしくれです。ヒトはもちろん、この惑星が大好きです。温暖化なんかで、地球を台無しにしたいことはありません。

最後に、これまた大好きな「こじつけ」＝「だじゃれ」＝「オヤジギャク」をぶちかまさせてください。

いろいろなものが「張る」という「春」という「晴れ晴れとした」喜ばしい季節に、花粉により粘膜が「腫る」という病に悩まされながらも「張りきって」、

*「なりきり・なりきる」というヒト特有の「思い込み」に殴りこみをかけましょう

そして、

*この地球から鬼＝魔物を「取り払おう」

と考え、「お祓い」をみなさんに呼びかけている次第です。ちょっと遅めですが、

*福は内、鬼は外！

09.04.03 たとえる (1) ～ (2)

◆たとえる (1)

2009-04-03 11:06:30 | 言葉

比喩に興味があります。比喩をグーグルなどの検索エンジンを利用して調べてみると、修辭法（＝修辭学＝レトリック）の一種として取り上げられている場合が多く見られます。比喩を隠喩（＝暗喩）、直喩（＝明喩）を始め、細かく分けていき、大きく修辭法の中に位置づける方法もあります。

そうした方法を眺めていると、もとはヨーロッパの古典語、つまりギリシア語やラテン語で詩を作ったり、演説をしたり、あるいは文章をつづるさいの技法であったことが分かります。現在、この国で売られている、文章読本や、論文の書き方、話し方、効果的なコミュニケーションあるいはプレゼンの方法をテーマにした書物に似ています。そういえば、昔、「綴（つづ）り方」なんて言葉もあったことを思い出しました。

言葉というやっかいなものを何とか手なずけようとする試みは、学問や芸として体系化されたものであったり、年長者から若い者たちへの注意や小言といった、その場その場での日常的で小規模な出来事であったりしながら、昔から存在していたみたいです。

太古にヒトという種（しゅ）が、「尻尾のないおサルさん+ α 」になってしまい、ヒトが誕生したらしい。こんな説＝お話＝神話があります。「+ α 」の「 α 」に、狭義の言葉（＝話し言葉）が含まれていることは確かです。

* 言葉を持ってしまった＝獲得してしまっただ。

それは、たぶん、「尻尾のないおサルさん」の脳内で何かが起こっただろう、と推測されています。このブログでは、

* 「ズレてしまった」

と表現しています。いつ、どこで、どんなふうにおこっただのかは、専門家や研究者により諸説があるようです。

*

素人としては、今、自分自身でも知覚できる範囲内で、言葉について考えるしかありません。本や権威（＝オーソリティ）が嫌いな無精者で、しかも屁理屈ばかりこねている偏屈者が、言葉の仕組みや働きについて考えるさいに頼りにするのは、

* 自分自身の頭を使い体を張って考えるというスタンス

と、

* 周りの身近な出来事や現象や、新聞やテレビやネットなどをと通して得られる情報＝データを観察するという方法

だけです。これまでの人生を振りかえってみると、どういうわけか言葉にこだわり続けてきた。言葉がおもしろくて仕方ない。そんな1匹の元「尻尾のないおサルさん」＝ヒ

トが、このブログを開設して、毎日ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもあるを実践しているのです。

*

比喩に話を戻します。比喩にいくつか種類があるのは確認できましたが、ここではきわめてマイペースでテキトーに「遊びの精神」で、主に「たとえる・たとえ」という言葉を使いながら話を進めていきます。さて、「たとえる」という大和言葉系の言葉の語源が気になったので、ネットで検索したり、手元にある辞書を見てみましたが、分かりませんでした。でも、それなりに収穫はありました。

* 「たとえる」「たとえ」「たとい」「たとえば」「たどる」

以上の羅列の最後にある「たどる」は、めちゃくちゃこじつける時に使えそうな気がしたので、一緒に並べておきました。こんなふうに、言葉を並べて眺めていると幸せな気分になります。抑うつ状態もやわらぎます。いろいろな考えが頭に浮かび、気もまぎれます。そんなわけで、まず「たとえる・たとえ」から、考えてみたいと思います。

* 「たとえる・たとえ」

とは、

* 「こじつける・こじつけ」＝「Aの代わりにAでないものを用いる」という仕組み

とそっくりだということに気がつきます。

たとえば、「あなたは天使のような人だ」とか、「あなたは天使だ」とか「あなたの背中に翼が見える」なんていうのが、「たとえ」の使用例です。ここで、「Aの代わりにAでないものを用いる」を「Aの代わりにBを用いる」と書き換えてみます。この場合、まずAとBは「異なって」いなければなりません。同時に、「似て」いなければなりません。正確に言えば、

*ヒトが「Aの代わりにBを用いる」場合には、AとBは「異なっている」、あるいは「別のものである」と同時に、「似ている」と知覚＝認識していなければならない。

ということです。AもBも、広義の言葉（＝話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（＝家庭だけで通じる断片的な手話）、指点字、さまざまな標識や記号など）だと理解してください。

*言葉のすごさは、異なっているものや別のものを結びつけてしまう（＝関係づけてしまう）厚かましき＝デタラメぶり＝大胆さ＝志の高さである。

と言えそうです。狭い意味の言葉（＝話し言葉や書き言葉）を使用するだけでも、

(1) 知覚＝認識＝経験したことを記録する

(2) 頭の中で想像シミュレーション＝作り話＝フィクションを作成する

といったことが可能になります。たとえば、このブログもそうです。

*

この場がないものがあるものとして、思い浮かべ、言葉という代用品をパーツにして組み立てる。一種の「魔法」ですね。ヒトは、こんな仕組みを発明したのか、わけの分からないうちに獲得してしまったのか、あるいは、異星人から学んだのかは不明です。

現在、言えることは、そういう仕組みをヒトが手にして使用しているということです。その根底に「こじつける・こじつけ」＝「たとえる・たとえ」という「作業＝行為＝いとなみ＝仕組み」があると言えそうです。まずは、この前提を確認したうえで、次の話に移りたいと思います。



◆たとえる (2)

2009-04-03 16:22:11 | 言葉

* その場に無いものを有るものとして思い浮かべ、言葉という代用品をパーツにして「まぼろし」を組み立てる一種の「魔法」。

以上の文をよく読み返してみてください。「たとえ」が使われています。「という代用品」「をパーツにして」「まぼろし」「組み立てる」「魔法」という個所です。見方を変えれば、

* 「たとえる」以前に、個々の「言葉」が、すでに「たとえ」である

と言えるし、

* 今書いたそのセンテンス全体が「たとえ」である

とも言えるでしょう。

このように、「言葉」と「たとえる・たとえ」をめぐって、「考え」、そしてそれを「言葉」として「表現する」行為自体が、「Aの代わりにAでないものを用いる」＝「Aの代わりにBを用いる」という「操作＝作業」になってしまいます。当たり前と言えば当たり前です。不思議と言えば不思議です。このように、

* 言葉の使用とは、見方＝視点＝力点を変えれば、「何を何とでも言える」方便＝便利なもの＝仕組み

なのです。

*

こうした言葉の仕組みや働きについて考える場合には、あまりにも大雑把で不正確な言い方にならないように気を使う必要があります。たとえ、素人が「遊びの精神」で言葉について書く場合にも、ある程度の「節度＝倫理＝読んでくれる人への心配り」がなければならぬ、と考えています。そこで、これまでの記憶を動員して、言葉について、できるだけ正確に語るさいのパーツ＝ツールを整理してみます。

*言葉：1つの単語＝語を意味することもあれば、2つ以上の単語からなる語句＝フレーズや、1センテンス、さらには連続した複数のセンテンスから成る連なりを指す場合もあります。たとえば、「花」も言葉（※単語）、「花冷え」も言葉（※単語 or 語句）、「きのうは花冷えがした。」も言葉（※センテンス）、「きのうは花冷えがした。わたしは風邪を引いた。そこで、会社を休んだ。」も言葉（※センテンスの連なり）です。なお、日本語、英語など特定の言語を指すこともあります。

*言葉・言語：広義と狭義があります。広い意味では、表象＝象徴＝シンボル＝記号といった抽象的で漠然としたとらえ方をすることがあります。たとえば、話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（＝家庭だけで通じる断片的な手話）、さまざまな標識や記号など、です。一方、狭い意味では、話し言葉だけ、あるいは、話し言葉と書き言葉の両方だけを指すこともあります。なお、上と同様に、日本語、英語など特定の言語を指すこともあります。

*言語活動：上記の言葉・言語をヒトが使用する行為を指します。

*表象：広義の言葉・言語とほぼ同じと考えられます。ただし、表象の誘発する「Aの代わりにAでないものを用いる」という「仕組み＝働き」を重視し、表象をその「仕組み＝働き」の「パーツ＝要素」としてとらえる考え方もあります。

*表象作用：ヒトが表象を使用したり、表象と遭遇したさいに、ヒトの意思や動機や意図とは無関係に働く「Aの代わりにAでないものを用いる」という「代行＝代理」の仕組み自体を指します。このブログで、「こじつける・こじつけ」「なりきる・なりきり」と

呼んでいるものに、」ほぼ相当します。神話・神話研究、心理・心理学、文芸批評、映画批評などと親和性があります。

*記号：広義の言葉・言語とほぼ同じものを指します。ただし、「記号」が「意味するもの」と「意味されるもの」から成り立っているという視点を重視しているのが特徴です。また、記号の「ひとり歩き」状態も注目されます。このブログで「まぼろし」と呼んでいるものにほぼ相当します。

*記号作用：ヒトが記号を使用したり、記号に遭遇したさいに、ヒトの意思や動機や意図とは無関係に働く、記号の「意味するもの」という側面と「意味されるもの」という側面のかかわりあいを指します。また、「記号」を「発信する側」の「送るメッセージ」、「受信する側」の「受けとるメッセージ」という分け方と、両者の差異、および、その差異が引き起こすと考えられる記号の「ひとり歩き」も重視する用語です。経済・経済学、文芸批評、情報・情報学・情報理論、コンピューター科学、人工知能研究などと親和性があります。

*

以上は、きわめて個人的な感想＝印象です。専門的＝学術的な定義を知りたい方は、グーグルなどで検索するか、その手の専門書を参照ください。1つ言えるのは、

*学者＝専門家により、定義や分類や用語はまちまちだ

ということです。

*そもそも「何とでも言えるもの＝テキトーなもの」を相手＝対象にしている

からです。

科学＝学問を装っているらしきものには、十分にご注意ください。とりわけ、数字や統計や数学的モデルを用いている分野は要注意です。肩間にしわを寄せて真剣に取り組

むのではなく、ギャグとして笑い飛ばす心の余裕と率直さと常識をもって臨みましょう。なお、「言葉・言語を対象とする科学＝学問」という言い方を、修辞技法では、撞着語法＝形容矛盾（＝でたらめ）と言います。

ただし、今、述べていることは、数学や自然科学以外の学問＝科学、つまり「社会科学」や「人文科学」というネーミングも撞着語法＝形容矛盾（＝でたらめ）だと考えている、学問や科学に関してはド素人の偏屈者が勝手に思いこんでいる「個人的な感想」なので、その点を考慮してください。

ちなみに、「人文科学」や「社会科学」は芸＝技＝道です。華道や書道や茶道や占いなどと同じように、さまざまな流派があり、徒弟制度があります。「正しい」「正しくない」ごっこをやっているさまは、「○道」よりも、熾烈（しれつ）で巧妙をきわめています。

「人文科学」や「社会科学」が学問＝科学とされているのは、歴史的経緯からみて、既成利益集団と職能集団が築きあげてきた「制度」を守ろうとする力学が働いているからです。「たとえ」＝「こじつけ」＝「Aの代わりにAでないものを用いる」という仕組みが、学問や科学と呼ばれる分野までに及んでいる点に注目しましょう。

ここでお断りしておきますが、自然科学だけを学問＝科学だといって擁護しているような印象を与えかねない表現になっていますが、それは本意ではありません。単に、自然科学にめっちゃ弱いので、保留にしているだけです。

*

さて、次に「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」といった、広義の言葉・言語の仕組みと働きについて考える作業を進めるうえで、いくつかの方法がありますので、以下に紹介しておきます。

(1) 遺跡・遺物・古文書に注目する：いわゆる考古学・考古学者や歴史学・歴史学者が採用している方法です。「実証」という作業が可能である場合も、不可能である場合もあります。なお、「実証」については、文字通りにとってはならない「実証」がしばしば観察されます。

(2) 赤ん坊からティーンエージャーの入り口にいるヒトを観察する：人類というレベルでの言葉・言語の獲得 or 誕生 or 発生を、1個のヒトの発達＝成長にたとえて（＝こじつけて）考える方法です。心理学者と精神医学者（or 精神科医）間で激しい縄張り争いが行われています。また、この分野での百家争鳴＝百花繚乱＝りんりんらんらんかんかんほあんほあんの状況は、上述の（1）の比ではありません。

(3) ヒト以外の動物、特に知能が高いとされている一部のサルや、イルカ、クジラなどを観察したり、実験の対象とする：研究者の主観がかなり反映された研究論文があるのが特徴です。おそらく、画期的な研究の成果を発表したいという欲求が強すぎるために、「思い込み」に支えられた「なりきり」状態になり、対象に自己を「たとえる」＝「こじつける」という作業をほぼ無意識のうちに行っているからだと思われます。対象の動物と仲良くなりすぎた結果である、という見方も可能だと思われます。

(4) 主に理屈＝論理（※厳密に言って、そのようなものがあればの話ですが）という「手続き＝約束事＝パターン＝癖＝脳内で働いているらしい惰性」を用いる：哲学者、言語学者、記号学者と呼ばれているヒトたちが、ああでもないこうでもない、ああでもないこうでもあると考えるさいに、きわめてゲーム的色彩の強い方法を使って、言葉・言語の様相や仕組みや働きを対象に「思考＝試行錯誤」あるいは「思想＝試走」しています。ここでも、統計や数学的モデルを用いるヒトたちや流派が存在します。要注意であることは、さきほど触れた通りです。

(5) 人工知能（＝AI）を作る：ヒトの脳の機能と言語活動を模倣した人工知能や、それを搭載したうえで、人工の聴覚・発声器官を装備したロボットという形で「知能とその働き」を再現する作業＝工作が、即ヒトの脳の機能と言語活動の解明になるという、素朴であると同時にきわめて困難＝無謀な試みに挑んでいます。多分野の研究者が参加しています。それぞれの「いいところ取り」が成果のカギです。なにしろ、結果ははっきり出ますので、（1）～（4）のように言葉を用いるだけで煙に巻いたり、お茶を濁したり、あまりテキトーなことはできません。数学やコンピューター言語の知識がゼロに近い自分には、これくらいの感想しか書けません。

(6) 脳の損傷などで言語能力を失ったり、言語をつかさどる機能の一部を損なわれたヒトを対象にします：医学者（or 医師）や生物学者が、言語聴覚士や、理学療法士、作業療法士などの助けを借りて、あるいはこき使って、患者の脳や神経系統を始め、言語と関係の深い諸器官の状態を健常者と比較したり、リハビリテーションの過程で、同様の

比較を続けることにより、言葉・言語の様相や仕組みや働きの解明を目指します。

以上のように、言葉・言語の研究は多岐にわたっています。上記の仕事に携わっているみなさんに敬意を表します。ごくろうさまです。

さて、このブログでは、上記のパーツ=ツールと、(1)～(6)の分野の成果として見聞きした情報・データを用いて、あくまでも素人の「遊びの精神」(※ポジティブな意味にとってくださいね)で、自分なりに考えていることをつづっていきます。気取らずに言えば、めちゃくちゃ、こじつけていくつもりです。

09.04.04 たとえる (3) ～ (4)

◆たとえる (3)

2009-04-04 11:08:28 | 言葉

「たとえる・たとえ」のメカニズムは、いったいどうなっているのでしょうか？ その問いに答えるためには、

(1) 説明する：「何と言ったらいいのでしょうか、たとえばですね……」、

(2) 言い換える：「……とも言えます」、

(3) 似た言葉をもってくる：「ほら、あれですよ。……と似た感じがするんですけど」、

と3つの案が浮かびました。よく考えると、この3つの方法には「たとえる・たとえ」という言葉の代わりに「たとえる・たとえ」以外の言葉を用いるという共通点があります。当たり前ですね。それ以外に方法はなさそうですから。

いずれにせよ、ただ今行った作業は、「たとえる・たとえ」行為以外のなにもものでもない、のではないのでしょうか？ 国語辞典を作るという作業を連想します。ある言葉を、別の言葉に置き換えて「利用者＝読者」に分かるように記述する。やっぱり、その作業も「たとえる・たとえ」です。袋小路に入ってしまった。発想を転換しましょう。

*

*ヒトは広義の「言葉」（＝森羅万象の代わり＝まぼろし）を使用するさいに、一時的に、あるいは部分的に、その「森羅万象」に「なる・なりきる」。

以上のフレーズは、以前にこのブログで書いた文章から引用したものです。このフレーズを読み返してみると、「なる・なりきる」と「たとえる・たとえ」とは、かなり似た行為ではないかという気がします。

*「なる・なりきる」とは、ヒトがある対象を知覚した瞬間に起きる「酔っ払ったような状態」＝「夢を見ているような状態」＝「自分が自分であるということを忘れてしまうような状態」＝「意識」である。

と「たとえる」ことができるのではないのでしょうか？ 最後に、そっと「意識」を付け加えたのは、それがヒトのいつもの状態＝常態だからです。これを言い換えると、

*ヒトは常に「酔っ払っている」＝「夢を見ている」＝「自分を忘れてる」

となります。つまり、

*「自我亡失状態」＝「意識」

なのです。そして、その仕組み＝働きが瞬間的なものなら、

* 「なる・なりきる」＝「意識」＝「自我亡失状態」

と言ってもいいような気がします。

*

* ヒト一人ひとりの持つ「意識」という「たった1台のテレビ受像機のたった1面の画面」を占めていた「自我」が消えてしまい、その代わりに知覚している対象、つまり、ヒトの知覚体験の枠内にある「何か」が、その「画面」にあらわれる＝映し出される。

以前は、以上のように考えていました。でも、今は何だかじっくりこない感じがしています。上の文にある「自我」ですが、そのようなものはないのではないのでしょうか？

* 「自我」が「消えてしまう」、のではなく、「そもそもない」と考える

ほうが妥当に思えてきたのです。ヒトの意識という画面には、「何か」が映し出されているが、それが「自我」であるということはない。その「何か」とは、ヒトが知覚している情報＝データの総体ではないかと思います。

ヒト（※正確には「ヒトの脳」というべきかもしれませんが）は、画面に映し出された「画像＝情報＝データ」を他人事（ひとごと）のように眺めているだけであって、「自分自身を意識している」＝「自分のことに集中する」のではない。あくまでも他人事。それを自分の事と勘違いしている。その「勘違い」が「自我」だとも言えるのではないのでしょうか。ズバリ言うと、「自我」なんてない、ということです。したがって――飛躍しますが――自分探しなんかしても意味はない、とも言えます。

*

部屋に閉じこもって、テレビの画面に映っている番組やゲームの画像、あるいはパソコンのモニターに映っている画像に、見入っているヒトを想像してください。画面に目が離せないほど集中している。または、ぼーっとして画面を見ているものの、その部屋は密室で、調度も窓も何にもない。画面を見るしかすることがない状態。それが、ヒトの意識ではないでしょうか？ このように仮定すれば、

*そもそも「他者」に対立する概念である「自我」などというものはなくて、各ヒトの持つたった1台のテレビ受像機の画面には、常にヒトが知覚している情報＝データが映し出されている。

となり、

*もしも、ヒトに「自我」があるとなれば、それはテレビ画面に映し出されている映像ではなく、画面という「器（うつわ）」である。そして、その「自我」は画面には映し出されない、つまり、知覚されない。したがって、「自我」はないと言える。

と言うほうが適切かもしれないという気がします。ヒトは、湯のみやお茶碗のような器である。貝がらや、木に空いた「ほら」、洞くつのような「空っぽのあな＝空洞」、言い換えると「空＝くう＝うつほ＝うつお」です。

*ヒトは、常に「何か」（＝「ヒトが知覚している情報＝データ」）を知覚している「器」である。言い換えるなら、ヒトは、常に「何か」に「なりきっている」。

*

以上のような説明の仕方＝考え方もできるのではないのでしょうか？ で、今、思いついたのですが、簡略化されたイメージとしては、コーヒーサイフォンです。

*ヒトとは、知覚器官（＝上ボール）と脳（＝下ボール）とをシナプス（＝足管）によってつながれた、コーヒーサイフォンのような形をした器である。

知覚器官 上ボール

| |

シナプス 足管 = テレビ受像機の画面 = ヒトの意識

| |

脳 下ボール

ヒトの意識とは、上記の図の左側にある3つのパーツ全体であるような気がします。脳だけが特権的存在=上部構造=司令塔として、意識=知覚を統率しているというよりも、脳は知覚器官とシナプスを通して、常に信号を交換し合い、連動=連携している、と考えたほうがよさそうです。

脳、知覚器官、シナプスは、「ダイナミックス=動態」の中にあり、その「動き=働き」が、常に画像 (=信号) を映し出しているテレビ受像機の画面にもたとえられる。

*その動きにおいては、「見る \leftrightarrow 見られる」という関係性はなく、「見る = 見られる」という「流動性=不確定性」が「立ちあらわれている=生起している」。

というイメージを抱いています。

以上のように、めちゃくちゃこじつけながら、ヒトの「なりきる」=「たとえる」をたどってみました。ややこしいですね。もっといいこじつけ方が思いついたら、変更したいと思います。いずれにせよ、

*「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」＝「表象作用」を説明するには、「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」＝「表象作用」を用いるしかない。

みたいです。当たり前ですね。



◆たとえる (4)

2009-04-04 17:24:23 | 言葉

広義の言葉を使用する限り、ヒトは、

*「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」＝「Aの代わりにAでないものを用いる」＝「Aの代わりにBを用いる」

という仕組み＝働き＝メカニズムから逃れることはできないようです。

となると、

*積極的にそのメカニズムを使いながら、常にそのメカニズムを意識する、

というスタンスをとることが、唯一残された道ではないでしょうか。この用心深いスタンスを採用することで、ついつい

*対象（＝森羅万象）に「なりきってしまう」ヒトの思考パターンに揺さぶりをかけ、できる限り「なりきりそこねる」ように努める。

つまり、「おい、それ以上、酒を飲むなよ」「うとうとしちゃだめ」「自分の住所氏名を言ってみろ」と、自分や他のヒトに声を掛けてやり、目を覚ましたところで、「今、使っ

ているのはたとえだよ。それを忘れちゃだめ」と思い出させてやることです。

*

上記のメカニズムを回避することは不可能なのです。だから、せめてそのメカニズムが働いているのを常に思い出し意識することで、そのメカニズムに備わっている「陥穽（かんせい）＝落とし穴」にはまらないように警戒する。そんな戦略をとるのです。それほど気をつけなければならない、上記のメカニズム特有の「陥穽＝落とし穴」とはどんなものでしょうか？「Aの代わりにBを用いる」という言い方を使って説明します。

(1) AからBに話がすり替わっているのに気づかない。

(2) AとBは似ているだけで、同一ではないために、B特有の性質・属性があるのに、その性質・属性がAにも適用されると思い込んでいる。

(3) 最悪の場合には、全面的にBを用いながら、Aの話を展開している。

(4) そもそもAもBも、「たとえ」（＝広義あるいは狭義の言葉）であることを忘れている。

(5) Aという「たとえ」をAと名付けられた「実体」と混同している。

(6) Aという「たとえ」の代わりに用いているBという「たとえ」を、Bという「実体」と混同しながら、Aという「実体」を思考の対象としているつもりになっている。

ややこしいですね。以下の図式を参考にしてください。

*

「Aという「実体」」（※実際には、ヒトは直接に知覚＝認識することができない）

↓

「Aという「たとえ」」（ヒトがふつうAそのものと知覚＝認識しているもの＝広義の言葉）

↓

「Aという「たとえ」の代わりに用いている、Bという「たとえ」」（※ヒトがAそのものと知覚＝認識しているもの（＝広義の言葉）の代わりに、Bそのものと知覚＝認識しているもの（＝広義の言葉）を思考や表現やコミュニケーションの道具にしている状況で立ちあらわれるもの（＝広義の言葉））

↑

「Bという「たとえ」」（※ヒトがふつうBそのものと知覚＝認識しているもの＝広義の言葉）

↑

「Bという「実体」」（実際には、ヒトは直接に知覚＝認識することができない）

*

以上ですが、図式の真ん中にある、

*ヒトがAそのものと知覚＝認識しているもの（＝広義の言葉）の代わりに、Bそのものと知覚＝認識しているもの（＝広義の言葉）を思考や表現やコミュニケーションの道具にしている状態で立ちあらわれるもの（＝広義の言葉）

は、

* Bそのものと知覚＝認識しているもの（＝広義の言葉）

と同じではないかと思われる方がいらっしゃると思います。ごもっともですが、わざわざ区別したのは、前者と後者では、前者のほうに、ヒトの意思や動機や意図とは「おそらく」無関係に「ひとり歩き」するという重大な特性がみとめられるからです。

*

依然としてややこしいですね。具体的な例を挙げます。言うまでもなく、例は「たとえ」です。あくまでも、「たとえ」だということを意識しながら読んでくださいね。書くほうも読むほうもお互いに、対象に「なりきりそこねる」努力をしましょう。

たとえば、

「あなたは天使のような人だ。わたしはあなたがそばにいてだけで心が休まる。あなたとこうして肩を並べ、あなたの背中に生えている翼の先が、わたしの肩先に触れるとき、わたしは最高に幸せな気分になる」

と、「わたし」が「あなた」に話したとします。

馬鹿みたいな例ですね。すみません。さて、説明に入ります。

まず、「わたし」は「あなた＝A」を「天使＝B」にたとえています。次に、「あなた＝A」の「背中＝A」に「翼が生えている＝B」とエスカレートしています。さらに、その

「翼の先=B」という細部にまで、たとえばエスカレートします。

このあたりで、すでに上述の(1)～(6)の全兆候がみられます。どれだけ、「なりきり」状態=錯覚が進んでいるかは、この文を読んだだけでは不明です。というか、判断できません。

続いて、「わたし」は自分の肩先に「あなたの翼の先が触れる=B」とまで言い始めます。かなりエスカレートしてきていますね。その結果、「最高に幸せな気分になる」で文が終わっています。

以上の例のうち、「わたし」が自分の肩先に「あなた=A」の「翼の先=B」が「触れる=B」と言っている部分に注目してください。ちょっと、くどく説明します。「わたし」は「あなた=A」を「天使=B」とたとえているという段階、すなわち、「あなた=A」を、

* Bそのものと知覚=認識しているもの (=広義の言葉)

つまり「天使」という広義の言葉(※この場合は「わたし」の抱いている架空の存在である「天使」について本や映画やテレビなどで見た視覚的なイメージを頭に描きながら「話し言葉」にしたものでしょう)に置き換えている段階でエスカレートし、「あなた=A」の「背中=A」に「翼=B」を生やしてしまい、その挙句には「翼=B」の「先=B」という細部が「わたし」の「肩先」に「触れる=B」とまで言っています。この部分に、

* ヒトがAそのものと知覚=認識しているもの (=広義の言葉)の代わりに、Bそのものと知覚=認識しているもの (=広義の言葉)を思考や表現やコミュニケーションの道具にしている状況で立ちあらわれるもの (=広義の言葉)

がみとめられます。

* 「あなた=A」を「天使=B」にたとえた「わたし」が、「あなた=A」を相手に話し言葉を用いている状況で、「おそらく」「わたし」の意思や動機や意図とは無関係に「たとえ」がエスカレート=暴走=「ひとり歩き」してしまったのではないか

と思われます。「おそらく」を括弧でくくったのは、判断が難しいからです。

*

*話す、書くという発信行為であれ、聞く、読むという受信行為であれ、ヒトは、その道具である言葉の「ひとり歩き」(※ヒトの意思や動機や意図とは無関係に生じる)という状況に遭遇しやすい。

のではないかと、日ごろから思っています。そんな経験をなさったことはありませんか？自分や周りの人たち、あるいはテレビで放映される人たちの言動を見聞きしたり、新聞やテレビで報道されるニュースを見聞きするたびに、そうした言葉の「ひとり歩き」がかなり頻繁に起きている気がします。そして、それが原因で重大なトラブルが生じているような印象を受けます。

言葉の「ひとり歩き」には、さまざまな種類がありそうですが、整理はできていません。ただ、「たとえる・たとえ」が原因だと思われる混乱・錯覚や、「酔っ払ったような状態」＝「夢を見ているような状態」＝「自分が自分であるということを忘れてしまうような状態」＝「自我亡失状態」について言えば、これまでの人生で、自分自身および他の人たちが陥るさまを、数えきれないほど見聞きしてきました。

*

なぜ、このようなことがこんなに頻繁に起こるのでしょうか？いろいろと考えてみました。

*広義の言葉(＝森羅万象の代わり＝森羅万象を知覚して得た信号化された情報・データおよびノイズ)を使用する時には、ヒトはその言葉をいったん信じなければならない、つまり、言葉になりきらなければならない、あるいは、自分の意識を委(ゆだ)ねなければならないからではないか？

*ヒト（※正確に言えば「ヒトの脳」or「意識」としてのヒト）とは、広義の言葉である、信号化された情報・データおよびノイズを受身的に映像として映し出す「テレビ受像機の画面」ではないか？

*ヒト（※正確に言えば「ヒトの脳」or「意識」としてのヒト）とは、広義の言葉である、信号化された情報・データおよびノイズを知覚器官で受信し、シナプスを通して脳に送り処理する「器（うつわ）」ではないか？

*ヒト（※正確に言えば「ヒトの脳」or「意識」としてのヒト）は、自分が受信あるいは発信する信号化された情報・データおよびノイズを完全に統御することはできない。統御しそこなった情報・データおよびノイズは、バグや誤作動を引き起こす。ヒト（※正確に言えば「ヒトの脳」or「意識」としてのヒト）は、そうした不具合を広義の言葉の「ひとり歩き」、あるいは原因不明の（or 他の原因による）災難・災厄と知覚しているのではないか？

要するに、広義の言葉（＝森羅万象の代わり＝森羅万象を知覚して得た信号化された情報・データおよびノイズ）に対し、ヒトはかなり受動的であり、無力＝劣勢な立場に置かれているらしいということです。今のところは、そんなふうに思っています。

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

◆たとえる (5)

2009-04-05 11:10:29 | 言葉

例の馬鹿みたいな話を蒸し返させてください。

*「あなたは天使のような人だ。わたしはあなたがそばにいてだけで心が休まる。あなたとこうして肩を並べ、あなたの背中に生えている翼の先が、わたしの肩先に触れるとき、わたしは最高に幸せな気分になる」と、「わたし」が「あなた」に話したとします。

です。何度読んでも、くだらない文章です。では、視点を変えて考えてみましょう。「わたし」と「あなた」って、誰なんでしょう？ 恐縮ですが、もっと長めのバージョンをお読み願います。

*「あなたは天使のような人だ。わたしはあなたがそばにいてだけで心が休まる。あなたとこうして肩を並べ、あなたの背中に生えている翼の先が、わたしの肩先に触れるとき、わたしは最高に幸せな気分になる。真綿のような羽根のかたまりが、わたしの肩にもたれかけてくる。その柔らかな重みがわたしに力を与えてくれる。わたしは思わず手を伸ばし、翼に包まれたあなたの肩を抱く。あなたの体温がわたしの腕、そして胸へと伝わってくる。あなたの体が意外に熱いのに、わたしは驚く。あなたの体がわたしのほうに傾いてくる。あなたを受けとめようとわたしもあなたに体の重みを預ける。あなたを支えきれなくなりそうで、わたしは体をずらしてあなたの上体を両腕でかき抱く。顔と顔が接する。そのとき、あなたが涙を流しているのを感じた。別れは近い。あなたが翼を広げ、天に帰る時が近づくのを、わたしは悟る」

えらくエスカレートしてきました。さて、「わたし」と「あなた」って、誰なんでしょう？ そもそも、これは、どういう場面なのでしょう？ この文章は何なんでしょう？

冒頭で、「あなたは天使のような人」だと言っていますから、「あなた」は「ヒト」だと考えられます。「わたし」は「あなた」を「天使」にたとえているということですね。「.....のような」が使われていますから、「修辞法＝レトリック」で「直喩＝明喩（※シミリー）」と呼ばれている技法です。

「天使」というたとえを使ってしまった都合で、「背中」に「翼」があることになり、その「翼」の「先」まで話が細かくなっていき、たとえである「翼」＝「羽根のかたまり」が「真綿のような」と形容されて、「真綿」にたとえられる。

*たとえがたとえを生んでしまっている

ということですね。要するにエスカレートしているわけです。

「わたし」は「あなた」を「力」「体温」「重み」「熱」という要素で知覚していきます。これも、一種のたとえです。「あなた」という対象の「一部＝要素」で「あなた」という「総体」を置き換える。このようなたとえ方を、修辞法＝レトリックでは「換喩（※メトニミー）」とか「提喩（※シネクドキ）」と読んでいます。「力」「体温」「重み」「熱」といった言葉が使われているくらいですから、「わたし」と「あなた」はドッキングしていきます。

次に「顔」が「接する」ことで、「わたし」は「あなた」の「涙」を知覚します。「涙」が「別れ」のたとえであることが、すぐに分かります。「別れ」は「あなた」が「翼を広げ」、「天に帰る」という言葉に置き換えられる。これも、たとえといえばたとえでしょう。

*言葉同士がたとえ合っている

とも言えます。たとえの「一騎打ち」「同士打ち」「ガチンコ」みたいですね。くどいですが、ただ今書いたフレーズもまた、たとえです。それにしても、上のくだらない文章に出てくる、

「わたし」って誰？「あなた」って誰？ここはどこ？そもそも、この文章って何？

*

読むということ、そして書くということが、いかに「テキトー＝恣意的＝なんでもあり＝でたらめ」であるかをめぐって、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもあると研究者たちが言い争う、百家争鳴＝百花繚乱状態が長きにわたって続いているようです。

もう終息しましたか？不勉強なので、最近のギョーカイの事情には通じていません。ちょっと気になるので、たった今、“開かれた作品”“開かれたテキスト（or テキスト）”をグーグルで検索してみました。細々とながらも議論している人たちが、まだいるようです。

きて、上の文章ですが、書いてあることに沿っている限り、どのように解釈しても構わないと思います。正解なんてありません。その文章を書いたヒトがしゃしゃり出てきて「実はこうなんですよ」なんて「種明かし」したところで、そんなこと「カンケーネー」とせせら笑えばいいのです。実際、「関係ない」のですから、無視して大丈夫です。書いたヒトの特権なんてありません。仮にあったとしても、せいぜい「著作権」とか「知的財産権」というお金がらみのお話だけです。

*

ところで、あの文章って誰が書いたんでしょうね？ ひょっとして、この自分ですか？ どんなメッセージを込めて書いたのでしょうか？ 忘れまして。何しろ、書いている言葉に「なりきって」しまい、メッセージや意図を考えたり、込めるなんて余裕はありませんでした。

書いているうちに、言葉がどんどん自分から離れていくような気分になり……。いわゆる「作者はいない」状態ですね。言葉が「ひとり歩き」してしましまして、えへへ——。これじゃあ、まるで、政治家や官僚の言い訳じゃありませんか！ ああ、みっともない。失礼しました。

自分でキーボードを叩いて書いておきながらも、特権的立場＝「It's mine.」＝「わたしは作者だ」＝「無断での複製・複写を禁ず」など、自分にはまったくなく、あの文章は書き手であつら自分の手を離れた、いわば「絵に描いた餅」＝「砂上の楼閣」＝「蜃気楼」＝「まぼろし」＝「何だ、これ？」みたいなものなのです。と言ってしまつては、話がおしまいになりますので、またちょっと視点を変えて、遊んでみましょう。

アレゴリーってご存知ですか？ アレゴリー？ アレって、ゴリ押しに訳の分からないことを書いておいて、実はこんな意味があります、なんていう一種の修辞技法＝レトリックでしたっけ？ そうなんですよ、カワサキさん。

さきほど挙げた「死ね口説き＝シネクドキ」、「てーゆー＝提喻」、わけの分からないテクニックの親戚です。例の拙文＝駄文を、アレゴリー＝寓喩＝寓意＝諷喩として扱ってみたらどうでしょう？ そういえば、聖書もアレゴリーに満ち満ちていますね。それはさ

ておき、あの馬鹿みたいな文章をアレゴリーとして読んでみたら、少しはお勉強っぽいことができるかもしれません。



◆たとえる (6)

2009-04-05 17:13:01 | 言葉

*「あなたは天使のような人だ。わたしはあなたがそばにいてだけで心が休まる。あなたとこうして肩を並べ、あなたの背中に生えている翼の先が、わたしの肩先に触れるとき、わたしは最高に幸せな気分になる。真綿のような羽根のかたまりが、わたしの肩にもたれかけてくる。その柔らかな重みがわたしに力を与えてくれる。わたしは思わず手を伸ばし、翼に包まれたあなたの肩を抱く。あなたの体温がわたしの腕、そして胸へと伝わってくる。あなたの体が意外に熱いのに、わたしは驚く。あなたの体がわたしのほうに傾いてくる。あなたを受けとめようとわたしもあなたに体の重みを預ける。あなたを支えきれなくなりそうで、わたしは体をずらしてあなたの上体を両腕でかき抱く。顔と顔が接する。そのとき、あなたが涙を流しているのを感じた。別れは近い。あなたが翼を広げ、天に帰る時が近づくのを、わたしは悟る」

上で引用したのは、前回の「たとえる (5)」2009-04-05 で取り上げた例の馬鹿みたいな話ですが、あのようにたとえがエスカレートしていく話を、実際にあなたの目の前で、誰かが口にしたとします。たとえば、あなた、あるいは、相手の人の部屋で、です。相手は、あなたと別れることを前提にしていることは確かですね。

とにかく、そんなシチュエーションなのでしょう。想像してみてください。不気味じゃありませんか？「ばーか」と、あなたがひとこと言えば、「ごめん」なんて言いながら舌を出すくらいの性格の人なら、心配は要りません。

一方で、冗談が通じないような、とてもシリアスで一途な人から、あんなことをじっと目を見つめられて言われたら、どうします？ こっちとしては、へたなことを言えませんか。相手は、ストーカーになる素質十分じゃないですか？ 言葉を選んで、感謝の意を表し、そうそうにお引取り願いたいですよ。

*

さて、アレゴリーの話に移ります。アレゴリーについては、さまざまな定義があります。特に聖書がからんでくると微妙になります。聖書はあくまでもキリスト教およびユダヤ教という宗教の「聖典」であると考えている人たちにとって、聖書を一種の「文献」や、「古文書」、「文学作品」、「テキスト(=テキスト)」としてとらえるスタンスは、なかなか容認できないでしょう。

でも、そうしたスタンスの学問領域もあれば、そうしたスタンスで聖書を研究の対象とする人たちが、アカデミックなギョーカイにいます。欧米であれば、そんな人たちに對する風当たりは強いだらうと思われま。場合によっては、命がけの行為かもしれません。

話を戻します。

一般には、アレゴリーとは、「あなたは天使のようだ」(直喩=明喩)のように、「……のよう」「……みたい」を使わずに、「あなたは天使だ」とズバリ表現する「隱喩=暗喩」を多用したストーリー性のある文章と言っているかと思ひます。グーグルなどで検索すると、その他にも、さまざまな領域でさまざまな定義があるようです。ここでは、対象を文章に絞って話を進めます。

隱喩を多用した一貫したストーリー性のある文章だと定義すると、当然のことながら、かなり長いものまで指すことになります。比較的新しいものでは、ジョージ・オーウェル作の『動物農場』や、ジョナサン・スウィフト作の『ガリバー旅行記』といった1編の文学作品、そして、古いものでは、バニヤン作の『天路歷程』(※すごく長いらしいです)や、渡辺淳一ではなくてミルトン作の『失樂園』(※すごく退屈らしいです)、13世紀のフランスで書かれたという『薔薇物語』(※これも長くて退屈らしいです)といったものがあるそうです。

個人的には、隱喩に満ちたストーリー性があるちょっとした小話程度のものをイメージしています。これだと、今も、エッセイや、小説、ブログ、日記、マンガ、アニメ、会話などの形で、その辺に転がっていきそうな感じがします。

1編の作品としてではなく、長い文章において断片的＝部分的に挿入されている短いものもアレゴリーに含めましょう。たとえば、このブログの「たとえる(5)」2009-04-05で出てきて、この記事の冒頭にコピペした、あの馬鹿みたいな話のように。あれくらい不完全でテキトーなものも、「アレっ、ゴリ押しじゃん」という感じでアレゴリーとして考えちゃいましょう。

あの話の「わたし」と「あなた」は恋人同士で、場所は病院の個室。見舞いに来た「わたし」は、余命いくばくもない患者の「あなた」が上体を起こしているベッドの横にある椅子に腰かけている。時刻は午後の2時くらい。まどろんで半分夢見ている状態の「わたし」が、「あなた」を天使に見立ててそっと肩を抱いている、という設定。あるいは、「あなた」が亡くなった後に、「わたし」が「あなた」との上記の病室での出来事を回想している設定でもいいでしょう。

こういう設定ならば、「直喩＝明喩」が「隠喩＝暗喩」へとエスカレートしていき、非現実的、つまりおとぎ話めいた表現になるのも説得力があるのではないのでしょうか？

*

あの話を、本格的なアレゴリーにすることも可能です。たとえば、「わたし」と「あなた」は敵対関係にある隣国同士。「わたし」国は、「あなた」国を「支援」や「保護」や「安全保障」という美辞麗句でもって侵略・侵入し、やがてはジェノサイド(＝集団殺戮)によって、せん滅させようとしている。「わたし」国に占領され、監視下にある「あなた」国の新聞記者、あるいは作家が、新聞の記事か寄稿文の中に、あの小話をそっと挿入する。以上の状況を頭に入れて、冒頭に引用したあの馬鹿話を、ここでもう一度、ぜひ読んでみてください。待っていますので.....。

*

読んでいただけましたか？ 案外、言えてませんか？ 2国のたとえとして読むと、不気味ではありませんか？ 分かる人だけに分かる風刺というやつです。「ペンは剣よりも強し」の精神です。アレゴリーと風刺は、相性が非常にいいらしいです。世界に、似たような関係にある国々や、似た状況にある地域がありませんか？ 悲しいですが、ありますね。

たとえば、村上春樹というか、「世界の Haruki Murakami」が、今年（2009年）の2月15日に「エルサレム賞」の授賞式で行ったスピーチの一部が話題になりました。「卵」と「壁」と「システム」が出てくる部分です。隠喩＝暗喩が用いられています。短いですが、ストーリー性もあります。このブログでイメージしているアレゴリーの好例だと思います。

*

さて、アレゴリーというと、個人的には「憑依（ひょうい）」という言葉を連想します。憑依とは、霊や魔物のようなものが入りつく（＝取り憑く）ことです。怖いです。憑依という言葉を見聞きすると、『エクソシスト』（※悪魔祓いをする祈祷師という意味ですね）なんていうホラー映画以外に、シャーマニズムのシャーマンが頭に浮かびます。シャーマンとは、「わたしは誰？ ここはどこ？」という具合にトランス状態になって、神や、霊、精霊などと交信し、預言（＝託宣を預かること）や予言（＝未来を予測すること）を行うヒトです。

女性の場合には巫女（みこ）とも呼ばれていますね。預言や予言というと、そのものズバリの＝具体的なお告げもあるようですが、何だか訳の分からない断片的な言葉を吐いたり、荒唐無稽で支離滅裂に近いような話をすることもあるみたいです。

そのでたらめぶりが、取りようによっては「たとえのエスカレート」＝アレゴリー＝「何か重要な意味がありそうだ」っぽく聞こえる場合があります。「こんなん出ましたけど」って感じで出てきます。そして、お告げをした後のシャーマンさんは、平常に戻ってケロッとしていたりします。

その落差が、趣（おもむき）があって好きです。シャーマンさんにも、いかにもうさんくさそうなヒトや、なりきり名人みたいな玄人（くろうと）っぽいヒト、どちらかという精神的な疾患をわずらっているのではないかと思われるヒトなど、いろいろいます。どのような職業にも、上手下手（じょうずへた）や、さまざまな流派や、ヒトそれぞれの流儀・プレゼンの仕方があるのと同じです。

*

予言ではなく預言といえ、個人的には聖書を連想します。聖書には、旧約と新約の2つがありますね。どちらも「たとえだらけ」です。つまり、文字通りに受けとっては意味が分からないということです。

新約のほうに「ヨハネの黙示録」と呼ばれている書がありますが、これがやっかいな問題をかかえています。「ハルマゲドン」という善と悪の最終戦争が出てくるからです。さきほどの村上春樹のスピーチとも大いに関係します。

また、現在のオバマさんの前のブッシュ（※特に父子の息子のほう）大統領の政権の中枢に、聖書の言葉の一字一句が真実だと考えるファンダメンタリストと呼ばれる人たちと、その人たちに近い考え方の人たちが入りこみ、かなりあやうい状況になっていました。実のところ、チョーあぶねー＝きな臭かった＝一触即発だったらしいですよ。ああ、怖い。文明の「衝突＝ガチンコ」のほんまもん状態ですもの。

何が恐ろしいのかと申しますと、自己成就的予言＝予言の自己実現＝「信じているうちに、その通りになっちゃった（※実は、自分が信じていることを無意識に自分で実現してしまう）」＝self-fulfilling prophecy とかいう心理が働くらしいからです。「国語で100点を取るぞ取るぞ」と信じて実際に100点を取れたくらいなら、まだいいです。「悪魔（※比喩です、実は「敵」）との最終戦争が起こるぞ起こるぞ」だと、とんでもないことになります。特に、核兵器が使われた日には、連鎖反応が起きても不思議ではありません。この星、めちゃくちゃになりますよ。

*

聖書に書いてあることを真実だと受けとると、大変なことになるのは、容易に想像できますね。怖いですよ。マジで怖い。マジこわ。テレシコワ。コルゲンコーワ。講和条約。CHANGE さまままでっせー。何だか文体と書いていることが乱れてきたというか、訛ってきているのは、恐怖心をやわらげようと自分なりに努力しているからなのです。ご理解いただければ幸いです。それくらい、怖いということです。

ところで、ノストラダムスの大予言って、覚えていらっしゃるでしょうか？ 1999年の7月に、空から恐怖の大王が降りてくる、とかなんとかという話です。外れてよかったですね。あれと、例のコンピューターがらみの2000年問題——あの2つを乗り越って21世紀に突入できた「尻尾のない只のおサルさん」＝「尻尾のないおサルさん＋ α 」＝ヒ

ト＝人間様、万歳！ って感じですか。

*

アレゴリーに話を戻します。アレゴリーという仕組みは、普通の「たとえ」に比べて、微妙な心理が働いています。普通の「たとえ」は、

*「Aの代わりにAでないものを用いる」＝「Aの代わりにBを用いる」

ですね。つまり、Aを誰かに説明したかったり、伝えたかったりしたい時に、Bをもってくと都合がいいから、Bで代用する、という単純な発想です。一方、アレゴリーは、屈折した感情があり、いかにも「訳あり」っぽいのです。以下に、まとめてみます。

*アレゴリーとは「Aの代わりにBを用いる」という「たとえ」の一種であり、

(1) 実はAが分かっていない、

(2) Aを直接的に伝えてはならない事情がある（※たとえば、ずばりAだと言うとヤバかったり、身の危険がある）、

(3) もったいぶってAを素直にAと言いたくない、

(4-0) Aがでたらめである場合に、代りにBをもってきて、

(4-1) Bでお茶をにごす＝テキトーにその場をごまかして知らん顔を決めこむ、

(4-2) BをヒントにしてAを暗示する＝「ごめん、これだけで勘弁してね」＝「お願い、これだけで分かってちょうだい」という感じで、とりあえず事態を処理する、

(4-3) 工夫を凝らして「ちょっとだけよー」or「わかるかな？」という感じでBと言っておき、相手の苦勞する様子を見て楽しむ、

(4-4) Bもでたらめにしておく、

という可能性のある仕組みである。

と言えるのではないのでしょうか？ ややこしいですね。

*

少し手を加えて、次のようにも言えます。

*アレゴリーとは「Aの代わりにBを用いる」という「たとえ」の一種であり、次の4つの仕組みがある可能性が考えられる。

(1) Aが分かっていない場合に、Bでお茶をにごす=テキトーにその場をごまかして知らん顔を決めこむ。【※日常的に、よくある例だと思います。】

(2) Aを直接的に伝えてはならない事情がある(※たとえば、ずばりAだと言うとヤバかったり、身の危険がある)場合に、BをヒントにしてAを暗示する=「ごめん、これだけで勘弁してね」=「お願い、これだけで分かってちょうだい」という感じで、とりあえず事態を処理する。【※こうした事態に追いこまれているヒトたちに同情します。】

(3) もったいぶってAを素直にAと言いたくない場合に、工夫を凝らして「ちょっとだけよー」or「わかるかな？」という感じでBと言っておき、相手の苦勞する様子を見て楽しむ。【※文学や学問のギョーカイに、よく見受けられます。】

(4) Aがでたらめである場合に、Bもでたらめにしておく。【※スピリチュアルとか、宗教とか、占いとか、政治とか、行政とかいう特定の分野だけでなく、こういうことをするヒトって、結構います。自分も謙虚に反省します。】

以上ですが、どうでしょう？

こっちのほうが、すっきりしていますね。いずれにせよ、屈折しています。だから、分かりにくいし、難解だとも言われるのです。そんなわけで、アレゴリーは、「アレッ、ゴリ押ししている」＝「ちょっとそのこじつけて強引すぎて苦しいんじゃない？」という、印象を与えるのではないのでしょうか？

09.04.06 たとえる (7)

◆たとえる (7)

2009-04-06 16:29:09 | 言葉

「たとえば……だとすれば」とか「たとえ……だとしても」とか言いますね。英語でいえば、それぞれ「if……」とか「even if……」となります。ということは、「たとえる・たとえ」は「もしも……なら」の「仮定」とつながっていると言えそうです。よく考えれば、そうですね。「Aの代わりにBを用いる」は「Aであるが、Bとして考えてみる」とほぼ同じで、さらに「本当はAであるが、もしもBであれば」と言っても、それほど大きな違いはなさそうです。

* 「たとえる・たとえ」と「もしも」は、つながっている。

らしい。いや、ほぼ確実にそうだと言える。「たとえる・たとえ」を「たとえる・たとえ」してみたら、「もしも」になった。

* 「比喩」が「比喩」によって、「仮定」になっちゃった。

* 「ひゅーひゅー」(E「ひゅーひゅー」＝「もしも」)

というわけです。面白いですね。不思議ですね。でも、こうなってしまったからには、きっと当たり前なんでしょうね。不思議と思う、こっちの頭が悪いだけなのでしょう。それとも、以上の「議論＝前提」自体がおかしいのでしょうか。

*

とにかく、話を進めましょう。

「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……。この種のタイトルの本や、この種のキャッチフレーズを針小棒大にふくらませた本が、書店にいっぱい並んでいます。この大不況のもとでは、出版界もまた景気がさうとう悪いですが、自己啓発や発想法・思考法関連の本は割と売れているみたいです。

そうでしょうね。現実がネガティブであれば、頭の中くらいはポジティブにしていないと、やってられません。テーマが肥大化しそうなので、「仮定」のメカニズムを「たとえる・たとえ」という観点から考えることに的を絞ります。関係ありそうな言葉の意味を、文字通りにとっていきましょう。

* 仮定：仮に定める。

* 仮想：仮に想う。

* 仮想現実：仮に想う現実。

* 架空＝仮空（※感字です）：仮に空想する。

* 空想：空っぽのものを想う。空（うつお）を思考する。

以上のように並べてみると、イメージがつかめてきませんか？

* Aの代わりにBだと定める

= Aの代わりにBを想像する

= Aの代わりということは、Aにはもう用はないのだから、Aを省略して、Bだけを考える

= Bが、ヒトの頭の中でひとり歩きをする

= Bのひとり歩き

= Bとは夢・空想・仮想現実・擬似世界・シミュレーション

という具合に「たとえる・たとえ」がひとり歩きし始めました。あれよあれよ、という感じです。この場合のAとBを、1個のもの・こと・さま・現象ではなく、それぞれ無限大だと仮定してみましよう。つまり、Aを「森羅万象A（※無限大）」に、そしてBを「森羅万象B（※無限大）」と記述するのです。

* 「森羅万象A (※無限大)」の代わりに「森羅万象B (※無限大)」だと定める

= 「森羅万象A (※無限大)」の代わりに「森羅万象B (※無限大)」を想像する

= 「森羅万象A (※無限大)」の代わりということは、「森羅万象A (※無限大)」にはもう用はないのだから、「森羅万象A (※無限大)」を省略して、「森羅万象B (※無限大)」だけを考える

= 「森羅万象B (※無限大)」が、ヒトの頭の中でひとり歩きをする

= 「森羅万象B (※無限大)」のひとり歩き

= 「森羅万象B (※無限大)」とは夢・空想・仮想現実・擬似世界・シミュレーション

以上のようにすると、迫力が出てきませんか？ 一気に話が大きくなってしまいました。なにしろ、せっかく森羅万象と無限大をもってきたのですから、大きくなってくれないと困ります。

さて、ひとり歩きし始めた「森羅万象B (※無限大)」ですが、危なっかしくありませんか？ もう、「森羅万象A (※無限大)」なんて、「用はない」「関係ない」って感じになってきましたよ。大丈夫なんでしょうか。

♪歩き始めたみーちゃんが、赤い鼻緒のじょじょ履いて、おんもへ出たいと待っている～

状態ですよ。「おんも」＝「おもて」＝「家の外」へ出してもいいのでしょうか？ そんな心配をしていて、はっと気づきました。頭に浮かんだのは、らっきょう、キャベツ、マ

トリョーシカです。そもそも、

* A自体が「たとえ」だったのだ！！

ということは、「森羅万象A（※無限大）」は「かりそめ（＝仮初め）」の姿で、実際には、そもそもが「森羅万象B（※無限大）」みたいに「何かの代わり」であった。その「何か」もまた「何かの代わり」、つまり剥いても剥いても、また出てくる。これって、やっぱり、らっきょう、キャベツ、マトリョーシカです。

*

* 「森羅万象○（※無限大）」の「○」は常に「何かの代わり」である。少なくとも、知覚という枠の中に閉じ込められているヒトにとっては、そうである。

以上のような感じではないでしょうか。その「何か」と「何かの代わり」を何と呼ぼうと事態は同じです。「象徴＝シンボル＝表象＝代理＝代行」、「記号＝シーニュ＝まぼろし」、「アレゴリー＝寓喩＝とたえのエスカレート」、「信号＝データ＝情報＝デジタル化されたデータ＝デジタル化された情報」、「らっきょうの皮」、「広義の言葉」……何とでも呼んでください。

「たとえ」であるからには、「仮面」と同じ。ただし、「外す」「剥（は）ぐ」「めくる」という作業を何度繰り返しても、終わりはない。「実体」「真実」「現実」……。何とでも呼んでください。そんなものには到達できない。できたとしたら、単なる「錯覚＝勘違い平行棒」か、「ヒトでないヒト＝人でなし」。

*

次のように「たとえる」こともできます。部屋に閉じこもってテレビの画面、あるいはパソコンのモニターばかりを見ているヒトと同じです。「画面 or モニターに映し出されているもの＝画像である「実物」（※そんなものは実際にはあり得ませんが、一応、そう呼んでおきます）」に手を触れたり、その匂いをかいだり、それを素手で叩くなり、ものを投げつけるなり、直接働きかけることは不可能。そんなふうにも言えます。

「身も蓋もない」ですか？ 以上も、当然のことながら「たとえ」なわけで、もっと違った言い方＝たとえ方、つまり「身も蓋もある」言い方＝たとえ方をして、「身も蓋もある」気分になることもできるかもしれません。たとえば、さきほど挙げた「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……という「たとえ」です。巧妙にできていますが、やっぱり「たとえ」です。ころりとだまされる人たちがたくさんいても、責めることはできません。次元が違うからです。

* 「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……では、「たとえ」はタブーであるか、意識しない約束になっているか、そもそも問題にされていない。「忘れている」「知らない」「分からない」「とぼけている」のいずれかであると考えられるが、「たとえ」であることを問題にしない点では同じである。

次元が違うというのは、

* 「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……では、言葉やその大前提である「Aの代わりにBを用いる」は問題とされない。「ポジティブである」、「元気が出る」、「生きる勇気がわく」、「何でもできる気持ちになる」……ことが金科玉条＝絵に描いた餅＝砂上の楼閣なのである。

という意味です。

たとえば、天動説信奉者と地動説信奉者くらい違うのです。あなたは、どっちのほうですか？「たとえ」派（or 教）ですか？「たとえ？ 何、それ？」派（or 教）ですか？ 後者のほうが、ハッピーになれます。お金持ちにもなれる可能性が高いです。前者だと、アンハッピーになるでしょうね。

ここに、うつで無職でいい年をして親の年金にたかっている者がいます。ご多分に漏れず、前者です。「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……系の本を読もうとしても、馬鹿馬鹿しくて読めないのです。このご時勢に困ったものです。

実は、「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……って、言っているのです。かなり有効性や実効性があるのです。改宗しようかと思っているくらいなのです。

というわけで、みなさまには「思いは実現する」「夢はかなう」「自分が変われば世界が変わる」……を、強くお勧めいたします。

09.04.07 たとえる (8)

◆たとえる (8)

2009-04-07 14:13:58 | 言葉

世の中には、「本当に、頭がいいなあ」とつくづく感心してしまう人たちがいます。2種類に分けられそうです。情報処理能力に長けた人たちと、特化された分野に秀でた人たちです。

まず、後者ですが、ボビー・フィッシャーなんかをイメージしています。日常生活においては変人・奇人のたぐいにみなされていましたが、チェスプレイヤーとしては天才と呼ばれた人です。昨年、亡くなりました。

ほかの例を挙げると、発達障害という枠でくくられている方々の中に、驚くべき特殊な能力を持った人たちがいます。たとえば、1、2分見ただけの都市の風景写真を、細部にわたるまで克明に絵として再現できる人たち、西暦○年△月□日は何曜日か、と尋ねると即座に正解を口にする人たちなどが好例です。自分のような凡人には不可能な能力=脳力を備えています。

遅れましたが、前者としては、たとえばいわゆる偏差値の高い大学などに進学するような人たちをイメージしています。人並み以上の努力をした結果、そうなる方々もいらっ

しゃるようです。一方で、よく「あの人は勉強しないけど成績がいい」と言われるような人たちがいますね。あのような方々は「勉強しない」のではなく、「一度だけ勉強する」ことで、多くの情報を脳にインプットできるたぐいの能力＝脳力を持っているというのが、正確な言い方かもしれません。

経験的に言って、今挙げた

* 情報処理能力に長けた人たちに共通するのは、類まれな記憶力に加えて、「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」の才能にも秀でていることだ、

と思います。過去に、何度もこの種の人たちと接する機会がありましたが、ほんとうにすごいです。まさに「頭の回転が速い」という印象を抱きます。

*

さて、この世＝ヒトの世＝うつせみ＝ヒトの知覚している世界は、森羅万象の「たとえ」で構成されている仮想世界です。

* Aの代わりにBを用いる

くらいでは、迫力がないので、

* 「森羅万象A（※無限大）」の代わりに「森羅万象B（※無限大）」を用いる。

と言ったほうがいい状態にあります。

そうした代理の「仕組み＝メカニズム」の「イメージ＝モデル」が、「身も蓋もない」＝「それを言ったらおしまいだ」、つまりネガティブで、非生産的＝非建設的で、元気も出ないし、生きる勇気もわかないし、何にもする気にならなくさせるものであれば、「百害あって一利なし」ということになります。

実際、そうだと思います。異端審問の直後に「それでも地球は回る（＝それでも地面は動く）」とガリレオがつぶやいた、とかいう話＝伝説がありますが、地動説は後に科学上の成果をもたらしたみたいです。

一方で、

* 「それでも、世界はたとえにすぎない」

と何度つぶやいてみたところで、この先、何一ついいことはないに違いありません。たぶん、科学上の成果などには、つながらないでしょう（※あくまでも、たぶんですよ）。もしそうであれば、いっそのこと「改宗」して、

* 「世界は「たとえ＝仮想現実」なんかじゃない」

と叫んで、みんな＝圧倒的多数派と同調し、ポジティブに元気よく生産的＝建設的で前向きに、生きていく決意をすればいいのです。要するに、居直るのです。いや、「居直る」なんて根性＝発想では駄目ですね。「なりきりそこねる」教を引きずっているのが見え見えで駄目です。「改宗」するからには、徹底的に自己洗脳をしなければなりません。

*

ところで、「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」には、2種類あります。この区別をしっかりとつけておきましょう。情報処理は、狭義の言葉（＝話し言葉と書き言葉）で行われることが多いですから、広義の言葉（＝話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（＝家庭だけで通じる断片的な手話）、指字、映像、図像、さまざまな標識や記号）があることは、いったん忘れましょう。

では、2種類の「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」について、以下に書きます。

(1) 言葉の物質性＝音声＝文字（※漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字）の形（※運動・身ぶり・表情）に注目する。

(2) 言葉の抽象性＝意味（※語義）＝イメージ（※運動・身ぶり・表情）に注目する。

なお、（※運動＝身ぶり＝表情）という（ ）でくくられた部分があるのは、言葉の物質性と抽象性の両方に備わっている「両面性 or 共通性」があるからです。ここではその詳細な説明は関係がないので割愛します。できるだけ単純に説明します。

(1) 言葉の物質性のうち、特に音声にこだわって「たとえる」＝「こじつける」と、いわゆる、だじゃれ、オヤジギャグ、地口といった言葉遊びになります。例の「空、\ [雲 \]、傘、雨」とかいうよく知られたギャグ、失礼、モデルを使えば、「そら見たことか、蜘蛛がぞろぞろ出てくるのを、重なりあって皆が眺めているうちに、飴玉をアリに持っていかれてしまった」なんていう、きわめてイカレてナンセンスなだじゃれが作れます。まったくの無意味、使用価値なし、センスなしというやつです。

(2) 言葉の意味（※語義）＝イメージにこだわって「たとえる」＝「こじつける」と、思考のプロセス（※たとえです）とか、フレームワーク（※たとえです）とかいう、今流行りのお洒落なモデル（※たとえです）になります。「空を見て、雲が広がってきているのを見て、雨天を予想し、傘をもって出かけたなら、雨が降って役に立った」という、理路整然とした、ご立派なお話になります。こういうプロセスを、論理と呼ぼうと、事実に基づいた予測と呼ぼうと、言葉の意味（※語義）が喚起するイメージを用いて、「たとえる」＝「こじつける」を行ったという点は否定できません。

今挙げた（2）の作業＝操作が得意なヒトたちが、さきほど取り上げた情報処理に長けたすごく「頭のいい」ヒトたちなのです。とはいえ、（1）とは全然関係ないということはなく、いわば「余技」として「だじゃれ」を使いこなす名手も、驚くほどたくさんいます。器用なんですね。

*

さて、ここで提案したいのは、

*「論理的である」とは、「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」に優れているということである。

らしいという説です。ただし、上述の（２）の場合であることを、再度お断りしておきます。（１）はノー・グッドです。今、「らしい」とか「説」という言葉を用いたのは、自分が（２）の作業＝操作がきわめて苦手だからです。ですので、身の程をわきまえて「らしい」と「説」を使って、しおらしく表現しておきます。

以上が、「（１）言葉の物質性」と「（２）言葉の抽象性」という２つの要素に注目した「たとえる」＝「こじつける」という、２種類の作業＝操作についての簡略化された説明です。実は、このブログでは、それよりもっとややこしい説明をしたいのです。そちらのほうが興味深いからです。まず、見通しだけを立てておきます。

（a）同一の狭義の言葉（※話し言葉と書き言葉です）を使って（１）と（２）の「作業＝操作」を同時に行う、すごい人たちがいる。

（b）（２）はさらに２種類に分れ、（A）自己変革派と、（B）思考・発想法派の人たちがいる。

以上ようになります。

この続きは次回に書きます。

09.04.08 たとえる (9)

◆たとえる (9)

2009-04-08 14:45:19 | 言葉

ある言葉（※単語・語句・フレーズ・センテンス）の、物質性＝音声 or 文字（※漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字）の響きや形に注目すると同時に、その言葉の抽象性＝意味（※語義）＝イメージにも注目して、「たとえる」＝「こじつける」を行うのは、できそうで、なかなかできない技です。

知的なアクロバットみたいなものです。たとえば、クロード・レヴィ＝ストロースというフランスの文化人類学者が *La pensée sauvage* というタイトルの本を書きました。フランス語です。

pensée を仏和辞書で引くと分かりますが、別項扱いで2つの意味があります。名詞で、「思考、考え方」と「三色スマレ、パンジー」です。「パンセ」みたいに発音します。パスカルの『パンセ』という本がありますが、レヴィ＝ストロースは、その『パンセ』の愛読者だったようです。

一方、*savage* には、形容詞として「野生の、未開の、自然のままの」の意味があり、名詞だと「未開人、原始人」という意味になります。「ソヴァージュ」みたいに発音します。「ソバージュ」というヘアスタイルは、ここから来ています。確かに「野性味」がある髪型ですね。

すると、この本のタイトルは、2通りに訳せることになります。1つは、邦訳で採用されている「野生の思考」、もう1つは「野生の三色スマレ」です。だじゃれ＝オヤジギャグといえ、それまでなのですが、言葉の音声＝発音や、文字＝スペリングの類似だけでなく、その言葉の意味・語義やイメージの類似にまでかかわっているのが、特徴的です。

*

古い例で恐縮ですが、「僕さあ.....、ボクサー」なんていう、ガッツ石松氏のギャグとは一線を画します。いわゆる「深読み」ができそうです。たとえば、

* 「野生の思考とは、ヨーロッパ的2元論=2項対立にしばられた思考法ではなく、3つ目の思考も含む豊かで柔軟な世界観である」(※「野生」と「思考」と「3」が出てきていますね)

という感じの深読みです。「感じ」と書いたのは、この本を読んだことがないので、勝手に想像しているという意味です。したがって、この想像は当たっていないかもしれません。厳密にはそうでなくても、そんな「感じ」だとして話を進めると、要するに、

* 「○か△か」という選択と排除の論理

ではなく、

* 「○でもあり△でもある」、あるいは「○でなく△でもある」、あるいは「○でもあり△でもあると言えるし、○でもなく△でもないとも言える」みたいなぐちゃぐちゃした考え方

になりそうです。

どういふわけか、太古に言語を獲得してしまったヒトは、必死で「○か△か」という「分ける」作業を繰り返し、「分かる」という、いわば「知の快感」を覚え、「1か0」という究極的に「分かりやすい」仕組みを基本とするコンピューターを作り、今日に至っているわけです。つまり、

* 「ぐちゃぐちゃ」から、「○か△か」=「1か0」へ

というイメージです。白黒を決めて、「すっきり」させちゃったということですね。便利
といえば便利、単純明快といえば単純明快。杜撰（ずさん）といえば、杜撰、大雑把と言
えば、大雑把。

このブログでは、

*テキトーといえば、テキトー

と考えています。「テキトー＝適当」は「いい加減」と同じで、ポジティブとネガティブ
の両方のニュアンスがあるからです。

たとえば、「1か0」という「単純明快」な作業を、「疲れることを知らない」機械（※
お察しの通り、コンピューターのことです）に無限大に近く何度も何度もさせると、「き
わめて複雑」なことができます。実際、そういう作業を機械に任せながら、ヒトはこの
惑星で「君臨した気持ち」を味わっているのです。大したものです。

*

話を、*La pensée sauvage* までに、戻します。言葉の音声面だけでなく、その意味＝イ
メージまでに踏みこんだ「たとえる」＝「こじつける」の名手を、自分の知っている範
囲で挙げます。

ステファヌ・マラルメ、ジャック・デリダ、ジャック・ラカン、高山宏なんか、すごく
上手です。ほかにもいるはずですが、知りません。カタカナの3人はフランス人ですが、
その作品や講義録や論文の多くは翻訳不可能です。

したがって、翻訳書の出版は、無理を承知の「悪徳商法」に近いものになります。解
説書の出版がもっとも読者にとって誠実な態度であり、また実際に読者にとって分かり
やすいものとなります。

ジャック・デリダについての解説では、豊崎光一という人が、大変いい仕事をしていました。残念ながら、故人です。本も、今では入手しにくいと思います。豊崎氏は、ミシェル・フーコーの解説書でも、優れた業績を残しています。

*

さて、「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」という、作業＝仕組み＝メカニズム＝運動＝操作は、「AをBにすり替える＝置き換える」行為にほかなりません。そのさいに、

(1) Aが消えてBが前面に出る、

(2) Aが後ろに控えBが一步前に進み出る、

(3) AとBが重なる、

という3つのパターンが考えられます。

(1) は、話を完全にすり替えるわけですから、要注意です。

(2) は、やや要注意ですが、まだAとBの両者が意識できる分だけ、ましです。

(3) は、AとBの両方の存在を同時に意識できるので、面白い知的な遊びができそうです。ただし、難易度が高いです。個人的には、(3) がスリリングで好きです。よくできた(3) の場合には、名うての職人の芸に似た趣を覚えます。

さきほど、La pensée sauvage の意味の仕組みを説明したさいに、「○」と「△」を用いました。あれを「A」と「B」で説明してもよかったのですが、話がややこしくなりそうだったので、やめました。でも、以上、いろいろ書いてきましたので、この辺で「○」と「△」を、それぞれ「A」と「B」に、「たとえる」＝「こじつける」という作業をしても、よさそうに思います。少しややこしいですが、お読み願います。

*

太古に言語を獲得したヒトという種（しゅ）が、言語活動を徐々に洗練化し、同時に思考法＝発想法を徐々に洗練化していったと考えてみましょう。実際、そうであったかどうかは知りません。諸説があるということだけは、知っています。そもそも、ヒトが「言語を用いて思考をする」のかどうかについても、議論が絶えません。個人的には、言語を、

*話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、ホームサイン（※家庭だけで通じる断片的な手話）、指点字、映像、図像、さまざまな標識や記号など

くらいに広くとれば、ヒトは言語を用いて思考すると考えても、いいのではないかと感じています。

ただし、そのプロセスは、きっと「ぐちゃぐちゃ」でしょう。でも、そのプロセスを経た結果、広義の言語として出来上がった作品 or 論文 or 製品 or 「ものや、ことや、現象」は、「すっきり」したものに仕上がっているのが普通です。「ぐちゃぐちゃ」から「すっきり」に至るまでに、どのような仕組みが働いたのかを、「図式的」＝テキストに言い表すと、次のようになります。

広義の言語を前提として考えた場合には、さきほど書いた、

* 「○か△か」という選択と排除の論理

は、

* 「AかBか」という選択と排除の論理

となり、そして、

* 「○でもあり△でもある」、あるいは「○でなく△でもある」、あるいは「○でもあり△でもあると言えるし、○でもなく△でもないとも言える」みたいなぐちゃぐちゃした考え方

は、

* 「AでもありBでもある」、あるいは「AでなくBでもある」、あるいは「AでもありBでもあると言えるし、AでもなくBでもないとも言える」みたいなぐちゃぐちゃした考え方

と書き換えることができます。何を言いたいのかと申しますと、

* ヒトの思考プロセスは、「たとえ＝比喻＝こじつけ」という仕組みが基本になっている。

のではないかと、ということです。この仕組みが大前提としてあって、ヒト全体（＝人類）の「知」が「発展」＝「進化」＝「進歩」してきたのではないかと。また、個人のレベルでのヒトが、1人で、あるいは複数のヒトたちと一緒に、思考し議論する場合にも、同じ仕組みが用いられているのではないかと。

以上のように、イメージしています。

*

ものすごく単純化した説明をすると、次のようになります。

(例1) 「 $1 + 1 = 2$ 」という「ぐちゃぐちゃした」思考＝発想＝イメージがあった。

↓

自分の指 (or 目の前にある石ころ or 遠くに見える山) を1つ、2つと並べて＝数えてみた。：(「たとえる」＝「こじつける」という仕組みが脳内で働いた)

↓

「 $1 + 1 = 2$ 」という「すっきりした」思考＝発想＝イメージが獲得された。：(「たとえる」＝「こじつける」という仕組みが脳内で働いた)

(例2) 「わかる・わかる」という「ぐちゃぐちゃした」思考＝発想＝イメージがあった。

↓

自分の親指、人差し指、中指……(or 目の前にある石ころ a、b、c…… or 遠くに見える山 a、b、c……) を、それぞれ別個の a、b、c……と認識した。：(「たとえる」＝「こじつける」という仕組みが脳内で働いた)

↓

「親指、人差し指、中指……」or「ものごと・現象 a、b、c……」が (or を) 「分かる・分ける」という「すっきりした」思考＝発想＝イメージが獲得された。：(「たとえる」＝「こじつける」という仕組みが脳内で働いた)

つまり、「たとえる・たとえ＝こじつける・こじつけ」を、「思考する＝発想する＝イメージする」さいに、「たとえる・たとえ＝こじつける・こじつけ」を試してみたのです。蛇足ながら、以上は、あくまでも言葉の「お遊び」であることを申し添えておきます。「たとえる＝こじつける」に対し（or に際し）、そうした「お遊び」以上のことなどができるでしょうか？

【注：抑うつ、体調不良、そして言語の仕組みと働きにこだわることへの懷疑の3つが重なって、心身ともに最悪の状態になりました。「たとえる」シリーズの完結編である「たとえる（10）」は、2009年4月17日に持ち越しになりました。】

09.04.06～09 でまかせしゅぎじっこうちゅう

【注：抑うつが悪化すると、駄洒落とオヤジギャグで憂さ晴らしをする癖がついてしまい、以下の駄文を書いていた。まことにお恥ずかしい代物ですが、自分が書いた文章は、やはりかわいいものなので再録いたします。各記事の日付をご覧になりながら、当時の時事を思い出してください。】



◆ 09年4月6日にギャグる

2009-04-06 13:38:09 | でまかせ

■ ニュース編

* 清原和博氏、日刊スポーツ評論家に就任：朝刊の折込広告に、キヨの握りっ屁ポーズ。

ちらっと見たとき、健康食品のイメージキャラクター就任かと思った。次に浮かんだイメージは、選挙ポスター。「キヨに、キヨき一票を」なんちゃって。まさか！？：新人評論家として、きーよ、迎えてやろーぜ。：広告には「キヨ見参！！」って書いてあったけど、何て読むんだ？「きよみさん」かい？ そうか、どっかの飲み屋のママに捧げたメッセージかあ。納得。：「キヨ、原を意識してるかな？」「末は監督という意味か？ 無理ちゃうか？」「いや、大いにあり得るぞ」「で、球団は？」「アホやな、WBCの監督やがな」「そりゃ、10年早いぜ」「そうかなあ。まっ、これから先、いろいろ毀誉（=きよ）褒貶（=放屁）もあると思うけど、せいぜい野球界に寄与（=きよ）しておくんなはれって感じやな」：♪ You きーよ、いいわーよ、われらーが、やどかりー

*「ニッカンで、野茂のメッセージの読めるんだってよ」「そうそう、独占インタビューで、月イチの連載だってな」「あの仏頂面、けっこう言うから楽しみやな」「ぼそつと言うけど、けっこう毒舌だったりするしな」「そういう「のも」野茂らしくて好きや」「大リーグでNO MOREされちゃったけど、あいつの快拳があったからこそ、今のIchiro、Matsui、Matsuzaka がいるんや」「そ野（や）、茂（も）っと評価すべきや」「日本の野球界は冷たい」

*謎：あれはミサイルかいな、人工衛星かいな？：迎撃しなかった（=見てるだけー）のかいな、迎撃できなかった（=あちゃー！）のかいな？：何回も鳴らしたのは、誤報（=失態）かいな、号砲（=合図）かいな？：2段目ブースターはどこかいな？ブースカなら捜せるのかいな？：とにかく、しっかりしてちょうだいよ。いくら税金つかってんの？：結論：伝言ごっこバケツリレーは役に立たない。時間がかかるし、ゴホーになるし、国民にとっていい迷惑や。

*飛翔体：今年上半期の流行語候補：必勝隊、必勝体、非正体、非招待、非常態、非常たい（※九州弁？）、非情たい（※九州弁？）

■世相編

（※前ブログ閉鎖で削除してしまった記事より【未練がましく必死で再現】）

*ナックル姫えりちゃん頑張れ！：新語：なっくる（※動詞）使用例：「わたし、きょうはなっくります」、「なっくろうぜ」、「おい、なっくるなよ」、「なっくりにたかったら、なっ

くればー」：なっくり（※形容詞）使用例：「なっくりした女の子」、「なっくりした男の子」、「こう、なんていうか、なっくりした感じにしてちょうだい」（※美容院などで）、「〇〇さんと△△さんって、なっくりじゃない。激なくて感じしない？」：ナックラー（※アムラーのパクリ）：ナックラー効果（※ドップラー効果の親戚）：えりる（※動詞）使用例：「さっき、えりっちゃった」、「もう、30分も、えりっぱなし」、「もう、えりらないって、ママに約束してちょうだい」：えり好み 使用例：「これって、えり好みよね」：えりも岬（※襟裳岬とは違う新名所）：えりもミー先使用例：「えりもミー先と、群衆が押し寄せる」：お先なっくら（※「お先真っ暗」の反対語）：超ナッキー（※超ラッキーよりも超ラッキーの意か？）：えりを正す（※「襟を正す」の意味はなし）：いとしのえり（※新曲のタイトル）：エリラー（※「アムラー」のパクリ）：エリスト（※「サユリスト」のパクリ。オジサン用語）：エリーター（※フリーターの新種）：根がえり使用例：「わたしって、根がえりだから、人にこきつかわれやすいのよねー」 or 「ちょっと、あんまり根がえりしないでよー。眠れないじゃないのー」：ちゅうがえり使用例：「きょうは、道草しないでちゅうがえりして帰ってくるのよ」：ナックルボウル（※新しいボウリング場の名前）：ナックルボウル（※新しい調理用の器）：ナックル棒：ナックル坊：ナックル帽：ナックル貌：ナックル顔：ナックル面（※づら）：すべて意味不明・意味未定 テナント募集中 モデルルーム見学自由早いもん勝ち ご自由にお使いください！ by えりちゃんふぁん倶楽部発起人



◆ 09年4月7日にギャグる

2009-04-07 09:58:05 | でまかせ

■時事編

*飛翔体：なんだったんだー、あれは！：ミサイルだか人工衛星だがロケットだか、なんだかわからん。だから、テキトーな名前を付けた。付けて垂れ流したのは、ワル知恵の働く官僚か？それを何も考えずに広めたのはマスコミか？：何だかわからん物が、どこへ行ったかもわからん。とにかく、飛んだ。この国をまたいだ。だから「飛翔体」だど？ふざけんな。：「未確認飛行物体」は、使用済みだし、「未確定飛行物体」ではパクリっぽいし、だいいち長すぎる。だから、「飛翔体」、正体がわからんから「非正体」（※これ、昨日ギャグったやつのリユースっす）、招待もされてないのに頭の上をまたぎやがったから「非招待」（※これも昨日ギャグのリユースっす）、詳細は不明だから「非詳体」か？

*結局、このヒショウタイのヒジョウジタイで、

- ・誰が得をしたのか？
- ・誰が損をしたのか？
- ・誰が赤っ恥をかいたのか？
- ・誰の金が消えたのか？
- ・誰が頼りにならないことがわかったのか？
- ・誰がテレビに出て解説していちばん儲けたのか？
- ・何が役に立たないことがわかったのか？
- ・何がわかったのか？
- ・何がわからなかったのか？
- ・何をすべきだったのか？
- ・何をしてはいけなかったのか？
- ・誰が何と言ってみんなに馬鹿にされたのか？
- ・そもそも、失敗したのか、成功したのか？ 非詳体だけでなく、こっちの対応もだぜ。

以上の分析をしているやつは、政府にいるのか？ 危機管理はどうなってるんだ？

それとも、非詳体のことは、もう忘れることにして、お茶を濁して誤魔化して、次のやつにバトンタッチか？ で、自分は昇進か？ それとも、退職金がっぼりもらって天下りか？

無責任体質、事なかれ主義の横行では、この国、まことにヤバいぜ。

*飛ぶ：向こうから飛んできてどうしようもない物：(1) 黄砂 (2) 飛翔体 (3) ヤジ (4) 流言飛語 (5) 横綱が負けたときの座布団 (5) スギ花粉

*ETC：E：いー思いするのは、T：定職のある、C：カードを持った人たちだけ。：E：えーこと、T：得すること、C：シートに腰掛けたままでいられることだけ。：E：えーことばかりやらないでー、1,000円乗り放題で、T：トイレが足りなくて、C：シッコもらしたわいな：E：えらいめに遭わせて、T：大変申、C：し訳なく思っております。：E：えらい苦しいギャグやなー T：とてもじゃないけど、あんたC：失格や。：E：えへへ、T：てなわけで、C：失礼します。

*辞めない2人：

(1)

おうじょう際の悪い

ざぶとんを離さない

わからず屋と言われても

いっこうに気にしねーぞ

ちけんの特捜ごときの

ろくでもないコックサック捜査に

うおう左往してたまるか、と思っているらしい。

(2)

あっさり

そう簡単に

うござれて

たまるか

ろんどの集合写真で

うしろに回されて恥さらしたくらいは気にせん、と息巻いているらしい。

■あのヒト\ [たち\] は今

*「ピカピカの1年生」:「♪ピカピカの1年生～」のCMに出た全国の元・ピカピカの1年生さんたち、お元気でしょうか？ あの春、放送されたCMのビデオは、保存してありますか？ それとも、人生の汚点として必死に忘れようとなさっている方もいたりして。でも、とにかくテレビに出られてよかったですね。ひょっとすると、今では、ピカピカの1年生のパパやママになっている方々もいらっしゃるのではありませんか？ もしかして、額から頭にかけて、ピカピカになりつつある方々もおいでになるのではありませんか？「♪ピカピカのおとっつあん～」なんてCM企画があれば、ご出演なさいますか？ スポンサーのご好意と打算で、ほぼ只で、ピカピカとおさらばできるかもしれませんよ。えっ？ それこそ、人生の汚点になりますか？ でも、その種のCM、あるじゃないですか。「元ピカピカ」、「ピカピカになりかけ」、「ピカピカよ、バイバイ中」のみなさんで埋めつくされた会場で、舞台上がって嬉しそうに、「.....円！」なんて、てかてか、じゃなくて、でかでかと書かれたプラカードを掲げている人たちの出てるCM。いずれにせよ、今春、ピカピカの1年生になった良い子のみなさん、おめでとうございまーす。

■スポーツ編

*づらボクサーの毛は何本？

「つら」の上に2本だけ「」っす。



◆ 09年4月8日にギャグる

2009-04-08 09:09:23 | でまかせ

■ニュース編

*「かんぼの宿」評価額問題：このさい、徹底的に「にしかわ」「にしかわ」かわからんことを洗い出せ。そう「ゆうせい」ふの姿勢が求められるのではないか？「そう、むしょう」に思えてきた。「くにを」代表して、「くにお」にやらせてみようぜ。「よしふみ」を、「よーし、ふみ」つぶそうぜ。：思い返せば、かんぼの宿が、あんなにひ「まやとは」不思議やったなあ。：ところで、「わかしに」したくなかったら、「かんぼ」う「は、とやま」の薬売りに任せとけ。とき「おり、くす」りの相談に応じてくれる親切な人もいるぞよ。

*東京地検、事情聴取：みんしゅルートはさておき、じみんルートのほうは、やっぱり、親ちゅうで、今はとかく評判の悪いどーろぞくの「にかい\ [に\] かい」？ じつていのほうから、攻める気だな？「じ\ [れ\] ってい」なー。筋書きとしては、総選挙前「にしまつ」する「とし、ひろ」げるのは、その辺までで、やめておく気だな。「こう、くさい」捜査は、とうぜん批判されるだろうなあ。

*安心できない

保証なし

理屈ばっかし

*続・安保理：「決議」（※みんなで決めたもの）→「（議長）声明」（※単なる困った議長のぼやき？）ふざけんな！

*桜と一郎：いっそ、きれいに、散ろうか～

*太郎と一郎：二人とも、「ちろうか」？「ねえー、早くしてよん」

*バチカンの警報機、鳴っていたと政府が答弁書：今ごろになってなんだ！ また、あのモーロー問題を蒸し返すつもりか？「ふおーっ」「ぶふおー」「（今質問した記者は）どこだー！」は、やっぱり、酒づけじゃなくて薬づけでしたって、弁解する気か？

*上のニュースとはぜんぜん関係なしで「薬漬け」を定義：たとえば、「あの神経をことごとくすり」減らしたスケジュールをこなした夜、大使館宛にファ「クスリ」いや、ファクスで、よ「くすり」上がった新しい選挙用ポスターが送られてきたんで、そのチェックをして、秘書と然るべ「くすり」合わせをしたあと、ホテルの部屋にもどり、さっそく「クスリ」ツパに履き替え、水虫の「薬」を塗って、一滴の酒も飲まず、睡眠「薬」を少々飲んで、「ぐっすり」と寝て、翌日は、昼食会で乾杯を余儀なくされて、ちょっとだけ酒を口にする機会はあったが、ごく少量だったし、その後、出向いた会場の建物の前で、いきなり細「くすり」ムな体型の女性が音もな「くすり」寄ってきて、あやう「くすり」に遭いそうなるという、まった「くすり」リングとしか言いようのないアクシデントがあったりして、心が動揺していたので、気を静める「薬」と元気の出る「薬」を飲んで、会見に臨んだが、会場にいた記者の中で「くすり」と笑った失敬なやつがいて、ちょっとむかついていて機嫌が悪かったのは確かだが、例の会見のあったあんどきは、目がしょぼついていたんで、直前にしゃきっとする目「薬」と胃「薬」と酔い止めの「薬」と酔い覚ましの「薬」と両肩に貼り「薬」と、主治医が処方したわけの分からん「薬」しか服用していなかったし、まった「くすり」ーピーな気分ではなかったが、それを「薬」漬けだと認識する方がおられれば致し方ないとか言えない」というような状態を「薬漬け」と言うのではないかな？

*「麻生ビジョン」策定へ：「麻生+ビジョン」？ 前半と後半がぜんぜん、合っていない。齟齬（そご）をきたしておる。ミスマッチ造語。「麻生+ビジョン」、略して「あ・そ・び」。

■死語復活キャンペーン

*「ノンポリ」：学生運動が盛んだったころに、政治運動に無関心だった人たちを指した言葉。現在の「無党派層」の親か？ nonpolitical から来ているらしい。では、unpolitical もあっていいのではないかな。そうすると「アンポリ」か？ 無関心、無気力な語感は出ているなあ。それはそうと、「ノンポリ」で「アンポリ」ばかりが増えると「アンノン族」とゆーことになる。こんなんじゃ、「安穩」に暮らしてられんぞ。再度、政治の時代よ、来たれ！



◆ 09年4月9日にギャグる【投稿間際に気が変わって、結局未投稿に終わった記事】

■ニュース編

*ヤミ専従、農水省のウソ：また、役人のウソやんかー。腐っているのは、政治家や議員だけではなく、影で実際にこの国を動かしている役人と高級官僚、つまり公務員だ、ということ。「見える化」せんとあかん。あいつらは「見えない化」が実にうまい。そう思うと、公務員の集まりである検察が、必死になって政権交代を阻止しようとしている訳が「見える化」してくる。腐れ縁の与党と結託している様が「見える化」してくる。うーん。迷うなあ。小沢かあ。コンセプトは分かるが、脇が甘すぎるなあ。とにかく、敵は、役人と政治家の腐れ縁という結論か？ このままじゃ、この国、ほんまにヤバイ。経済がうまく行っていたときは大目に見たけど、景気がこれだけ悪くなった今、そろそろ長期政権の膿を出す時やな。さもないと、この先、「めちゃくちゃでござりまするがな」。ところで、この「めちゃくちゃでござりまするがな」ってギャグを言った芸人さんを知っている人、どれくらいいるかな？「責任者、出て来い！」より、古いでござりまするがな。（※ぜひ、「花菱アチャコ」と「人生幸朗」をウィキペディアで、検索しておくねはれ。笑えませー。） by「死語復活キャンペーン」主宰者

*「これまでより進歩した打ち上げ」官房長官：「立派に打ち上がった映像でございました」、しかも「かなり大型になっている」だって？これが官邸の鑑定の結論かい？「褒め殺し」くらいの芸ができないの？あとは身内だけで「ごくろうさん」って「打ち上げ」かい？こっちは、ぜんぜん「進歩」してないやんか。何でも先送りの事なかれ主義ばっかし。自分たちの「打ち上げ」＝「一件落着」ばかりが頭にあるから、ああいう発言になるんだ。妙に嬉しそうだったしな。

*上の続報：「言葉遣い間違った」官房長官：馬○さ加減が、大将とかなりかぶるぜ。これからも、この人のしゃべること、よーく聞いてみ。そうとう足りんぞよ。

*「弱い決議より、強い議長声明のほうが良いという議論もある」政府高官：またかよ、「政府高官」。誰なんだ？「弱い決議より、強い議長声明」だって？弱いビンタより、威勢のいい悪態って意味？犬の遠吠えにしか聞こえんぞ。いや、それ以下や。

*インドの記者、内相に靴を投げる：「イラクでも、中国でも、あったなあ。今度はインドかいな？」「ある種の宗教では、足の裏を見せるとか、靴を投げるとかは、ものすごい「クツ」じょくなんやて。そやから、へたに足組みもできへん国もあるらしい」「あんた物知りやなあ。勉強になりました」

*代表、続投の意思を改めて表明：「あれも、国民に靴を投げてるようなもんか?」「そや、「クツ」じょくやなあ。あの人に投げてほしいものは「さじ」や」

*総裁、続投の意思を改めて表明：「あれも、靴を投げてんのか?」「そや、「クツ」じょくやなあ」「わし、あの人に是非投げて欲しいものがある」「なんや?」「ご祝儀よ、給付金よ」「あほ、あれは、もともとわいらの税金やがな。もう、投げんといてほしいわ。やっば、あの人に投げてほしいものも「さじ」やな」「前の2人が「さじ」を投げたから、やりにくいんじゃないかなあ」「ほなら、代わりに、まわりのもんが「タオル」投げてやってもいいで」

■世相編

*マイバッグ普及で万引き増加：そもそも、あのレジ袋削減・有料化＝マイバッグの大量生産という「形だけエコやってます運動」には、大いに疑問あり。ほかの「エコ運動」に結びつくのではなく、ほかの「エコ運動」を忘れる効果大きい。マイバッグから「ノーカーデー」に転向した人が、どれくらいいるだろうか？万引き魔に転向した人のほうが、確実に多いはず。きわめて罪作りな運動である。やっぱり、業界と役人の陰謀めいている。

■メディアリテラシー編

*たとえば誰とは名指せませんが、一般論として、芸能人にスキャンダル（※愛の破局・離婚・交通事故・家族の不祥事など）があった場合には、危機管理のエキスパートの助言により、テレビをはじめとするメディアでの露出度を高めることは、ギョーカイの常識でございます。芸能人が商品であることを考えれば、当然の措置であると、ご理解いただけると存じます。その代わりに、法律の専門家、広告代理店、番組枠獲得業者などへのコンサルタント料・実費・謝礼が高くなりますので、当該の芸能人は、ますます所属事務所に拘束され、スキャンダル以降ハードなスケジュールをこなすのを余儀なくされることとなります。当然のことながら、これはある一定の水準にあるタレントの話であり、それ以下の方々は、以上とは違った意味で、ワイドショーなどに出演料なしで露出しまくる形で恥の上塗りをするか、ただ消えていくのみという運命をたどります。ニュース報道および週刊誌の見出しと、テレビ番組の連動性を意識してご覧になれば、テレビの新しい楽しみ方が可能となります。

■経済編

*新車買い替えに25万円の奨励金:「日本でもナノ、発売にならへんかなあ」「インドのタタとかいう会社の超低価格車のことかい?」「そや、タタき売りみたいな値段やでー。約29万とかゆーとるでー。こんなことタタあることや、ありやへんでー」「あれは、エアコンなし、パワステなし、のこないない尽くしナノよ。ドアミラーも、ワイパーも1本だけナノよ、知ってた?」「結局は、いろいろ付けんとかかんみたいやなー。タタより高いものはないってことナノね」

09.04.17 たとえる (10)

【抑うつ、体調不良、そして言語の仕組みと働きにこだわることへの懐疑の3つが重なって、心身ともに最悪の状態になりました。

狂ったかのように(※実際とちくるっていたのでしょう)、長文のブログ記事を毎日書いて投稿することはいっさいやめました。しばらく何もしていない状態を続けて、ようやく落ち着きました。その間に、せめて自分の書いたブログ記事たちを「供養」しようと考え、記事を古い順に時系列に沿って並べるホームページの作成に取り組みました。

ようやく「うつせみのうつお」という名の、記事たちの「お墓」(=倉庫)を完成しました(※後に削除したため、今はその「お墓」はありません)。「お墓」作りに没頭しているうちに、いつしか抑うつも和らぎ(※新しく処方されたお薬が効いたのかもしれませんが)、「宿題」だった「たとえる (10)」を書く気になりました。】

◆たとえる (10)

2009-04-17 18:31:53 | 言葉

【※この記事の前号は「たとえる (9)」2009-04-08 です。】

「たとえる (9)」2009-04-08 では、だじゃれを例に取り、

* 言葉の物質性 = 音声 or 文字 (※漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字) の響きや形 (※運動 = 身ぶり = 表情)

に注目した言葉の使い方について考えました。ここでは、

* 言葉の抽象性 = 意味 (※語義) = イメージ (※運動 = 身ぶり = 表情)

に注目した言葉の使い方について書いてみます。簡単に言えば、通常、「筋道を立てて話す (or 考える)」と呼ばれている作業です。この作業においても、基本となるのは、だじゃれの場合と同様に「たとえる・たとえ」=「こじつける・こじつけ」という「仕組み」です。

* 「森羅万象 A (※無限大)」の代わりに「森羅万象 B (※無限大)」を用いる。

と、大げさに言い表すこともできます。

しかし、こうした「仕組み」が働いているのだ、という「考え方」に触れた (or 「染まった」=「かぶれた」) ヒトが、以下に述べることを理解するためには、いったん上記の「考え方」があることを忘れなければなりません。さもないと、「筋道を立てて話す (or 考える)」と呼ばれている作業について考えるさいに、脳に無理 = 負担がかかる恐れがあるからです。

絵を描く、あるいは工作をするといった作業を例に取れば分かりますが、その作業自体や、その作業に用いる道具に疑問や不審を抱いているならば、作業はうまく進みません。最悪の場合には、その作業を途中で放棄してしまうでしょう。やる気を失ってしまうのです。「ああ、馬鹿らしい」「こんなお遊びをやって何になるの」では、お絵描きも工作も全然楽しくないですから、当然でしょう。

したがって、これから書くことを、ある程度身を入れて読んでいただくためには、

* 「世界は、たとえ＝仮想現実なんかじゃない」

と自分に言い聞かせる必要があります。「世界は、たとえ＝仮想現実なんかじゃない」と、実際に声に出しておっしゃってみてください。「声を出す」という身体的作業が大切です。頭（or 心）の中でつぶやくだけでは、効果は期待できません。

*

何だか、自己啓発書めいてきたな、とお感じになられた方、正解です。これからお話したいのは、そのたぐいの話題なのです。「筋道を立てて話す（or 考える）」となると話が、広がりすぎて「何でもあり」状態になりますので、いわゆる「ビジネス書」の中でも、いわゆる「自己啓発書」とか、いわゆる「発想法・思考法」などと分類されている書物を対象に、話を進めていきたいと思います。この種の本について考えるさいには、

* 言葉の力を信じる。

というスタンスが問題になるので、ある種の「二重人格＝二枚舌」になっていただく必要があります。

もっとも、上で述べた、

* 「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」という、言葉の「仕組み」がピンと来なかったり、「嘘っぱちだ」と感じる人たちにとっては、「世界は、たとえ＝仮想現実なんかじゃない」などと、声に出して自分に言い聞かせる必要がない

ことは言うまでもありません。自分自身に言い聞かせる必要のない人のほうが、ヒトの世界では圧倒的多数を占めていると思われれます。

なぜ、このようなことをわざわざ書いているのかと申しますと、

*「たとえる・たとえ」＝「こじつける・こじつけ」という「仕組み」があるという「考え方」が心の隅にあると、以下に述べるお話を「理解する」というより「味わう」ことが難しくなる

からです。そうです。これから述べることは、頭で理解すると同時に、体で「味わって」もいただきたいのです。ここでの「味わう」とは、きわめて実際的＝実用的な行為です。「考える」「理解する」といった、「霞を食う」ような「浮世離れした」スタンスとは趣が異なります。

これまで「たとえる」(1)～(9)において述べてきた内容とは、それくらいレベルという次元の違うお話を、これからしたいと思っています。以上、くどくどと書いたのは、個人的な経験と実感からくる「老婆心」のようなものがあるからです。これが、単なる「心配性」が高じた「杞憂」であれば、「徒労」だったということになりますが、念のために、以上書き添えました。

*

さて、誰とは名指しませんが、ある10代のプロゴルファーが、この国で人気を集めています。人気だけでなく、実力もつけてきました。個人的に注目しているのは、その発言です。実にプラス思考＝ポジティブなのです。

先日のことですが、ある新聞が目玉にしているコラムに、「どうしたら、あのようない子が育つのだろう」みたいな手放しの褒め言葉が書かれていて、思わず苦笑してしまいました。なんてナイーブなコラムニストなのだろう、と感じたからです。単に、読者のレベルに合わせて迎合しているだけなのかもしれませんが、それにしてもナイーブすぎます。

プロのスポーツ選手、とりわけ抜群の実力と人気があり、CMや取材を含め、メディアにその映像や音声を「露出」させることで、莫大な収入を得ている商品価値の高い選

手には、大勢のスタッフがついています。

対象となるスポーツ自体のトレーナーを始め、健康管理、メディア対策の専門家はもちろん、心の管理をするプロフェッショナルが付き添っています。タレントの付き人さんみたいに、常に付き添っているという意味ではなく、エージェント、コンサルタント、コーチといった名称を持ち、有料で、面談・電話・メールといった形で相談に応じたり、サポートを行っているのです。

*

話は少し変わりますが、書店では、自己啓発書専用のコーナーがあり、さまざまな「流派」のスペシャリストたちによる本であふれています。現在の大不況は出版界にも及んでいます。自己啓発書や思考・発想法関連の書籍の売れ行きはなかなか好調のようです。「自分を変えたい」、「ポジティブな思考ができるようになりたい」、「いいアイデアが浮かぶスキルやツールを身につけたい」などと望む人たちが、いかに多いかを示している現象と言えるでしょう。

さきほどの10代のプロのスポーツ選手ですが、テレビでその発言を聞いていると、自己啓発書に書かれている雛形（ひながた）（※流派の違いはあっても、ほとんど同じようなことが書かれていますね）とそっくりなことを口にしてしているのです。表面上の言葉遣いがそっくりであるだけでなく、その言葉の根底にある思考のパターンもまたそっくりなのです。

ただ1つすごいと思うのは、その雛形を口にするだけでなく、然るべき「結果を出している」ことです。だからこそ、テレビでそのインタビューを見ている人たちが、画面に釘付けになり、催眠術にかかったようにうっとりとしてしまうのです。この文章を書いている者も、その1人です。そのスポーツ選手がテレビに出てきて話しているのを聞いていると、思わず聞きほれてしまいます。

「さすがー、超プラス思考」。「すごいなあ」。「あの本で書いてあったことと、そっくりの言動をしている「成功例」が、今、目の前の画面に映ってしゃべっているじゃん」。「やっぱり、夢は実現するのだ」。「何ごとにもポジティブに向きあえば、きっといいことが起きるのだ」。「若いのに、なかなかしっかりしたことを言うね」――。

同じ画面を見ている他の人たちの発する、そんな声が聞こえてくるようです。言動がポジティブなのは、とうぜんです。そういう訓練（＝コーチング）を受けているのですから。

*

「頑張っははいけない」といわれている、うつを患っているため、以前は、「元気の出る」たぐいの本を避けていました。ところが、最近思うところがあって、比較的大きな書店に何日か通い、立ち読みしてみました。偏屈者でネガティブ思考に傾きがちな自分にとっては異例の行動です。

数日間かけての立ち読みの結果、その種の本が、(A) 自己変革派と、(B) 思考・発想法派の2つに分かれるという印象を抱きました。取り立てて言うほどのことではないのですが、この分野に不案内な自分にとっては、発見でした。買い求めて、じっくり読む金銭的な余裕がないので、100冊前後の本をスキムしただけだとお断りしたうえで、次のような構図＝図式＝横着をしてみました。

* (A) 自己変革派：言葉（＝単語）と言葉遣い（＝語句、フレーズ）がポジティブであるか、ネガティブであるかに異常にこだわる。単語とフレーズをポジかネガかのいずれかに区別＝分類＝色づけしたうえで、後者を前者に転じるための多種多様なテクニック＝スキル＝ツールを提供している。科学的根拠（※そんなものがあればの話ですが）を売り物にするものもあれば、スピリチュアリティ・霊・神仏・超越者の存在を大前提とするものもある。

* (B) 思考・発想法派：自説に科学的根拠（※そんなものがあればの話ですが）があることを標榜するものが大半を占める。キーワードは、「脳・脳科学」「心理・心理学」「論理・論理力」「思考・思考法」「創造性・創造力」「想像力」「情報処理法」。（※論理や体系だけでは事足りないらしく、現在売れ筋の本では、ブレインストーミングや水平思考やセレンディピティと称して、支離滅裂や偶然やテキトーまでも創造性を高める道具にしよとする食欲さ＝厚顔さ＝頼もしさ＝好ましさがみられる。）

* (A) と (B) に共通する目標は、究極的には「成功」（※富と幸福の実現）である。

* (A) と (B) に共通する作業は、(1) 自分自身の身体 (※頭=脳も含む) を、言葉の抽象性=意味 (※語義) =イメージ (※運動=身ぶり=表情) に「たとえる」=「こじつける」、(2) 言葉の抽象性=意味 (※語義) =イメージ (※運動=身ぶり=表情) を、自分自身の身体 (※頭=脳も含む) に「たとえる」=「こじつける」ことである。ただし、森羅万象が広義の言葉であるという立場に立つなら、(1) と (2) は表面的な違いであって、本質的には同じ作業である。簡単に言えば、本に書かれている狭義の言葉を、「行動=実際に体を動かす」に移すこと。つまり、狭義の言葉を、体を使った広義の言葉に「たとえる」=「こじつける」こと。要するに、「体を張れ」と促している。

【参考：このブログでは、「狭義の言葉」とは、話し言葉と書き言葉を指す。「広義の言葉」とは、話し言葉、書き言葉だけでなく、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語=ボディランゲージ、手話、ホームサイン (※家庭だけで通じる断片的な手話)、指点字、映像、図像、さまざまな標識や記号などを指す。】

* (A) と (B) は共に、「世界は、たとえ=仮想現実である」という意識に強く支えられている。しかし、それを「半ば本気で」しか意識していない。言い換えると、「意識している振りをしながら意識していない」、あるいは「意識していない振りをしながら意識している」。なぜなら、「世界は、たとえ=仮想現実である」は、探求すべき「真理」ではなく「方便」=「ツール」であり、最終的な目標はあくまでも「成功」(※富と幸福の実現) を手に入れることだからである。

以上のような大雑把な印象=感想を抱きました。

*

上述の (A) と (B) は、非常に実用的=「現実」的であるがゆえに、きわめて説得力があり、また「実社会」を生きるうえで有効な考え方=処世術だと思います。その根底には、

* 言葉の力を信じる。

という、ヒトに備わった自然な欲求があります。その欲求に素直に従うことで、自己催眠＝願望実現信仰＝「信じることで夢はかなう」を誘発し（※あるいは引き寄せ）、ひいては「成功」（※富と幸福の実現）の可能性を高める＝促進するという、「メカニズム＝ダイナミックス＝運動＝実行＝行為」の「現実性＝実現性＝有効性」の成就に「賭けている」。そう言えるように思います。そうなのです。これは「言葉の力」への信仰であると同時に「賭け」なのです。ただし、

* 「賭け」だと意識してはいけない「賭け」である。

という点が、決定的に重要です。

* 「森羅万象A（※無限大）」の代わりに「森羅万象B（※無限大）」を用いる。

という仕組みが大前提となっている。それにもかかわらず、さらに言うなら、

* 言葉の抽象性＝意味（※語義）＝イメージ（※運動＝身ぶり＝表情）

に我が身（＝自分という存在）を賭けた（＝「かけた」＝「たとえた」＝「こじつけた」）大ばくちであるにもかかわらず、その行為を「かけ」だとは絶対に意識してはならない真剣勝負＝自己催眠である、とも言えるでしょう。

上で書いたことで重要な部分を、以下にコピペします。

>（中略）こうした「仕組み」が働いているのだ、という「考え方」に触れた（or「染まった」＝「かぶれた」）ヒトが、以下に述べることを理解するためには、いったん上記の「考え方」があることを忘れなければなりません。さもないと、「筋道を立てて話す（or 考える）」と呼ばれている作業について考えるさいに、脳に無理＝負担がかかる恐れがあるからです。

>この種の本について考えるさいには、

＞*言葉の力を信じる。

＞というスタンスが問題になるので、ある種の「二重人格＝二枚舌」になっていただく必要があります。

＞これまで「たとえる」(1)～(9)において述べてきた内容とは、それくらいレベルという次元の違うお話を、これからしたいと思っています。

このようにくどくど書いていたのは、今引用した部分の、前に述べたような事情があるからなのです。ややこしいですね。分かりやすくするために、たとえ＝こじつけ＝話のすり替えをしましょう。

*

「神は存在するか？」という議論を例に挙げます。これは尻尾のないおサルさんが、ズレて、ヒトとなって以来の大問題ですから、「神そのものを思考の対象にできるか？」などといった類の官僚的な手続き上の議論は、パスします。うんと単純化して考えましょう。つまり、「神が存在する」と信じるヒトも、信じないヒトも、「神」という言葉を使っている点に注目するのです。これは、

*ヒトはある「言葉」を扱うさいには、その「言葉」になりきらざるを得ない。

と言い換えることもできます。「神」という「言葉」(※あくまでも言葉ですよ)が前提としてあり、その次に「存在する」「存在しない」(※あくまでも言葉です)がついて来るという感じです。別に、「神」という「実体」(※そんなものがあればの話ですが)の存在を実証したり、あるいは出会ったうえで、「神」という「実体」を前提にしているわけではないにもかかわらず、「言葉」(※あくまでも言葉です)には、

*Aの代わりにBを用いる。

という単純なメカニズム＝仕組み＝仕掛けが備わっているために、Bつまり「言葉」を扱った瞬間に、A（※これは、実体ではなく、あくまでも言葉です）を想定してしまうのです。この過程を順に説明します。まず、

*「神は

と発想します。

次に、

*存在する」

と言おう（or 考えよう）と、あるいは、

*存在しない」

と言おう（or 考えよう）と、

あとは、「どうでもいい」＝「野となれ山となれ」＝「刺身のつま」なのです。つまり、議論しても仕方がないことなのです。

大切なことは、「神\ [は\]」です。その「神\ [は\]」（※あくまでも言葉です）が、

* Aの代わりにBを用いる。

の「B」を装いながら、実は「A」の代用であることにこだわるか、こだわらないか、が決定的に重要です。こだわるなら、「不幸」（※かなり広い意味にとってください）にな

ります。こだわらないなら『幸か不幸か』に賭ける（＝『幸か不幸か』を保留する）」こととなります。

なぜ、前者が「不幸になる」のかというと、「ヒトでなし」＝「本来ヒトにとって必要ではない行為」＝ヒトにとって不自然（＝無用＝不要）な行為」だからです。なぜ、後者が『幸か不幸か』に賭ける（＝『幸か不幸か』を保留する）」だけで済むのかというと、その行為が「何もしない、何も考えない、何も言わない」ことと同義であり、それこそが「ヒトである」ことだからです。

* 「Aの代わりにBを用いる」という仕組みにこだわることは、ヒトとして逸脱した行為（＝おまけ）である。ズレてしまった尻尾のないサル、さらにズレた行為＝盲腸みたいなものである。

とも言えるでしょう。

*

話を戻します。「神は存在するか？」という議論は、「神\ [は\]」だけで、もう議論は尽くされていて、「存在するか？」はどうでもいいことなのです。それと、同様に、

*世界は、たとえ＝仮想現実である。

は、「世界は」で既に、話は終わっていて、「たとえ＝仮想現実である」かどうかなど、どうでもいいのです。「言葉」としての「神\ [は\]」も「世界\ [は\]」も、口にした、あるいは、頭の中で思考の対象とした瞬間に、ヒトの脳がすべきこと、または、成し得ることは終わっているのです。

あとは、

* 「賭け」＝「かけ」＝「たとえ」＝「こじつけ」

でしかありません。実は、

* 「神は」も「賭け」＝「かけ」＝「たとえ」＝「こじつけ」ではないか

と思っているのですが、まだよく考えていないことでもあり、またここでのお話とは関係がないのでやめておきます。

なお、今書いたことは「主部＋述部」といった言語学的モデルとも関係ありません。いつか、このブログで詳しく説明するつもりです。（※少しだけ、説明しますと、広義の言葉は「センテンス」ではなく「ぐちゃぐちゃしたかたまり」（＝イメージ）であり、狭義の書き言葉で「センテンス」と記されているのは、書き言葉としての「体裁」＝「都合」以上の何ものでもない。思考やイメージはセンテンスである必然性はない、ということです。）

*

ややこしいですね。飛躍して、結論だけを簡単に言います。例の10代のプロのスポーツ選手が口にしていう言葉、そしてそのヒトが実行（※この場合は、どこどこの試合で何位だったかとかいう、そのスポーツのプレイ＝成績と、いくら稼いだとかいう、成功者としての収入と、その他、大衆を感動させるために演出された言動の数々でしょう）してみせてくれていることは、上で述べた「賭け」が「成功する」可能性を示唆しているのです。

以上のように申し上げれば、分かっていたでしょうか？ しかし、あくまでも

* 「賭け」

です。誰もが「賭け」で勝つとは限りません。さらに言えば、そもそもヒトが「賭け」だと思いついて「ものごと」が「賭け」でない可能性も十分にあります。さもないければ、「賭け」であるはずがありません。「賭け」自体が、あるいは「賭け」とは、「不確実性」と同義なのです。話が、かけ離れてきました。戻します。

*

例のスポーツ選手について、ここで「賭け」と呼んでいるものは、通常、「努力」「才能」「運」「技術」「魅力」などさまざまな美辞麗句に「言い換え」＝「たとえ」＝「こじつけ」＝「すり替え」られて、流通しています。どれが「本当」なのかは分かりません。と言うより、「本当」かどうかはどうでもいいこと（＝「刺身のつま」）なのです。大切なのは、そのヒトがいて、言葉（※狭義の言葉です）を発し、プレイシ（※広義の言葉です）、世間を騒がせる信号を送っている（※広義の言葉です）という「現実」＝「事実」なのです。そうした現象の根底にあると想定される広義の言葉の仕組み＝メカニズムなど、どうでもいいのです。

というわけで、いちおう、申し訳程度に、「たとえる（10）」全体の結論を出しておきます。

* 「不幸」になりたくなければ、広義の言葉の「仕組み＝メカニズム」にこだわってはいけません。

です。

ただし、「二重人格＝二枚舌」になるという、「不幸」の回避の仕方もありそうです。こだわっているのに、こだわっていない振りをするのです。そんなふうには振舞えば、いくぶんポジティブに生きられるのではないのでしょうか。要は、本気になりすぎないことです。しょせん、「賭け」なのですから、「お遊び」だと割り切ることです。パチンコと同じです。のめり込んではいけません。

09.04.18 こんなことを書きました（その5）

◆こんなことを書きました（その5）

2009-04-18 18:11:00 | 言葉

今回は、2009-03-09 から 2009-04-17 に書いた記事をダイジェストしました。短い解説とキーワードを挙げてあります。

お読みいただければ分かりますが、途中でブログの削除・閉鎖が数回ありました。季節の変わり目にさしかかり、抑うつ状態と体調が急激に悪化したためです。心と体をコントロールすることの難しさを痛感しました。

*「要するに、まなかな、なのだ」2009-03-09：苦手とする古文にからむテーマを扱っています。文章における「性差」について考えようとするさいに、高校の古文の授業で耳にした『土佐日記』の成立過程を無視できないと気づき、大和言葉を記す仮名と、そのもととなった漢字＝漢文という2通りの表記体系の説明に必死に取り組んでいます。お勉強嫌いも手伝って必要な文献にあたっていないため、非常に杜撰（ずさん）な展開となっている。その結果、「装う」という言葉と、その言葉の身ぶり＝運動にこだわることで、「言葉を書く」という行為を分析してお茶を濁すだけに終わっています。キーワードは、「紀貫之」「土佐日記」「性差」「記号」「匿名性」「女装」「装う」「まなぶみ＝真名文＝漢文＝漢字」「かなぶみ＝仮名文＝大和言葉」「オネエ言葉」「オス」「メス」です。直接書かなかったキーワードは、「ロラン・バルト」「S/Z」です。

*「女心を男が歌う」2009-03-10：女心を男が歌うことの多い演歌という歌謡のジャンルは、日本だけのものだ。かつてそのように、米国人から指摘された記憶をもとに、言葉が性差をどう扱っているかについて、引き続き考えています。そうした作業に必要な官僚的な事務手続きとして、性差を論じる時に用いられているさまざまな言葉＝道具の定義を自分なりに行っています。ヒトの世界において「女」と「男」が実体として、そして役割として存在していることを前提とし、同時に、一方がもう一方を「装う」＝「演じる」＝「なる」＝「なりきる」ことが常態化していることも前提としたうえで、話を進めています。その過程で、前提としている「性差」そのものと「性差を演じる」という行為が、きわめて不安定な土台となっているという事態に気づき、その不確実性に戸惑い、これ以上議論しても話が進まないと感じ、議論を放棄して文章を終えています。【※性差にこだわらず、多種多様な役割をになって存在しているヒトの多面性へと議論を展開していけば、尻切れトンボな話にならなかったかもしれない、と後になって思いました。】キーワードは、「演歌」「性差」「女性学」「フェミニズム」「性同一性障害」「同性愛」「異性装」「性別違和感」「性自認」「半陰陽」「オネエさん」「おネエ MANS」「女／男」「雌／雄」「♀／♂」「子ども／大人」「記号」「役割＝役目」「装う＝演じる」「ヒトの多面

性」です。

※ここで、抑うつがひどくなり、息切れ状態になりました。

* ブログタイトル：「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-03-10～2009-03-15：抑うつに対抗するために、オヤジギャグをして気を紛らわそうと考え、その日のニュースや世相をネタに、だじゃれをしまくるというコンセプトだけで書くブログを数日間続けました。

※ようやく、3月26日になり、以下の「うつせみのあなたに」を再開しました。これ以降は、以前のように、メモを頼りに一気に長めの記事を書くことができなくなりました。記事を少しずつ書くつもりで臨み、区切りのいいところで投稿するという方法に変わりました。したがって、1日に数回投稿しています。ブログのテーマは、「言葉の仕組みと働きを探る」になりました。

* 「かわる (1)～(10)」2009-03-26～2009-03-29：大和言葉の多層性＝多重性＝多義性と積極的に戯れる、という方法を採用しています。タイトルがひらがなののは、そのためです。言葉の音声面と意味の両面に、徹底してこだわりつつ、言葉について語るというスタイルを目指している様子がうかがわれます。言葉のフェティシストのはしくれとして、駄洒落欲と哲学欲の2つを満たそうという貪欲な態度も感じられます。タイトルにある「かわる」という「言葉」に、「かわる」という言葉の「身ぶり」をになわせ、「わかる」という言葉の「イメージ」について語るという、少々込み入った「お遊び」をしています。その「お遊び」を実践しながら、「こじつける・こじつけ」を戦略として用いることを意識しはじめています。「わかる」という言葉の多義性とそのイメージを分析し、それが「かわる」に転じるという「こじつける・こじつけ」をし、そのめちゃくちゃな「こじつける・こじつめ」に自己満足しています。その自己満足を自己正当化するために、自分のしていることは学問や研究ではなく「お遊び」なのだ、と訴えています。それが、本来言葉と付き合う「まっとうな」行為なのだ、と居直ってもいます。文章が言葉の遊び＝駄洒落に満ちているために、要約しにくいシリーズです。キーワードは、「かわる」「わかる」「語源」「ひらがな」「表記法」「文字」「大和言葉」「漢文」「漢字」「感字」「当て字」「アルファベット化運動」「ハングル」「用字用語集」「漢和辞典」／「わかる」＝「分かる」＝「別る」＝「解る」＝「判る」／「かわる」＝「変わる(変る)」＝「代わる・代る」＝「替わる・替る」＝「換わる・換る」／「国語の乱れ」「インターネット」「ケータイ」「正しい」「正しくない」「身ぶり」「ジェスチャー」「パントマイム」「他言語」「言葉・言語の発生」「専門家」「アマチュア」「手話」「ボディランゲージ」「表情」「赤ちゃんの泣き声」「コミュニケーション」「失語症」「演じる」「演技」「シミュレート」「こじつけ

る・こじつけ」です。

*「なる (1)~(10)」2009-03-30~2009-04-02 : タイトルである「なる」ではなく、1字違いの「はる」から話を始めるという「お遊び」をしています。国語辞典で「春」の語源を調べてみた結果を報告する形で、大和言葉系の現代日本語の持つ「豊かさ=多義性=テキトーさ」を、具体的に示そうと努めています。ここでも「こじつける・こじつけ」を戦略として意識し、ポジティブに用いています。「はる」の反対は「なる」だというめちやくちなこじつけで、「なる」を登場させることにより、「なる」という言葉の「身ぶり=運動=イメージ」を説明しようとしています。また、「春夏秋冬」および「四季」に相当する語がない言語が存在することに話題を変え、言葉を成立させている「場=土地」という要素にも触れています。このシリーズでも「こじつけ」と「だじゃれ」が頻出しているため、要約は困難です。後半では、「なる」から「なりきる」へと話を移し、ヒトは言語活動において「言葉 (= 森羅万象) になりきる」という仮説を提起しています。キーワードは、「はる」=「張る」=「貼る」=「墾る」=「晴る・晴れる」=「霽る・霽れる」=「腫る・腫れる」=「脹る・脹れる」/「はらう」=「払う」=「掃う」=「祓う」/「外国語」「身ぶり」「手ぶり」「ジェスチャー」/「なる」=「成る」=「生る」=「為る」=「慣る・慣れる」=「馴る・馴れる」=「狎る・狎れる」=「熟る・熟れる」=「鳴る」/「spring」「fall」「autumn」「語源」「こじつける・こじつけ」「言語学」「春夏秋冬」「四季」「現地の言語」「支配者の言語」「(意味するものと意味されるもの間にある) 恣意性」「なりきる」「イヌ」「金魚」「ウマ」「品種改良」「突然変異」「ゲイ・サイエンス (= Gay Science) = 悦ばしき学問」「唯〇論」「存在の大いなる連鎖」「コンピューター」「地球温暖化」「大不況」「戦争」「正誤」「真偽」「善悪」「ポジティブ/ネガティブ」「認識=知覚=意識」「脳」です。直接書かなかったキーワードは、「フェルディナン・ド・ソシュール」「ジャック・デリダ」「ジャック・ラカン」「フリードリヒ・ニーチェ」『善悪の彼岸』「アーサー・ラヴジョイ」「岸田秀」「高山宏」「GS」「浅田彰」です。

*「たとえる (1)~(9)」2009-04-03~2009-04-08 : 「こじつける・こじつけ」を「たとえる・たとえ」=「比喩」という正統的な学問のなかに位置づけ、修辞法=レトリックの一種とみなす考え方を紹介しています。レトリックが、きわめてヨーロッパ的なものであり、日本語を扱うさいには、有効でないことに触れています。それを確認したうえで、あくまでも「たとえる」「たとえ」「たとい」「たとえば」「たどる」という大和言葉系の語と戯れながら、話を進めていくと断っています。「たとえる」という行為が「魔法」(※たとえです) に似た仕組みであることに読者の注意を喚起し、その仕組みを大前提として言葉 (= 言語) を論じるさいのパーツ=道具を、あくまでもアマチュアの「感想=印象」として定義しています。既存の学問や研究に対する不信感と、そのいかがわしさについての批判的な見解とを述べています。ただし、既存の学問の方法論とその有効性についても触れています。それ以後は、あくまでも「お遊び」としての自説を展開しています。直接的には書いていませんが、「ゲイ・サイエンス (= Gay Science) = 悦ばしき

学問」を実践しようと意識的になっている様子がかがわれます。その一環として、「たとえる・たとえ」を「なる・なりきる」＝「意識」＝「自我亡失状態」という考え方をイメージに「たとえる」作業に入っていきます。議論が暴走し始めたところで、「たとえる・たとえ」という作業が陥りがちな陥穽（かんせい）について触れ、自戒しています。抽象的になりがちだった議論を、具体的にしようとして、「たとえ」を使った、ある陳腐な文章を例に挙げます。その文章で用いられている「たとえ」をエスカレートさせ、アレゴリーにまで強引にもっていきます。ここで聖書と預言を持ち出し、話はかなり大きくなります。次に、「たとえば」という言い方から出発し、「仮定する・仮定」に話に移ります。この段階で、言葉の仕組みにこだわることの意味＝意義について、懐疑的になっている様子がかがわれます。のちに、自己啓発書について考える契機となった個所です。それを宿題とし、まず、高等な「だじゃれ＝こじつけ」について述べます。クロード・レヴィ＝ストロースの *La pensée sauvage* を例に取り、その「高等さ」について解説しています。キーワードは、「レトリック＝修辞法」「比喩」「隠喩＝暗喩」「直喩＝明喩」「言葉の仕組みと働き」「言葉」「言語」「言語活動」「表象」「表象作用」「代行＝代理」「記号」「記号作用」「学問」「学者」「専門家」「アマチュア」「自然科学」「社会科学」「人文科学」「考古学」「歴史学」「発達心理学」「エソロジー」「哲学」「言語学」「記号学」「人工知能（＝AI）」「数学」「コンピューター」「失語症」「医学」「生物学」「言語聴覚士」「脳」「知覚器官」「シナプス」「意識」「認識」「アレゴリー」「信号」「データ」「情報」「ノイズ」「ジョージ・オーウェル』『動物農場』『ジョナサン・スウィフト』『ガリバー旅行記』『パニヤン』『天路歷程』『ミルトン』『失樂園』『薔薇物語』『村上春樹』『Haruki Murakami』『エルサレム賞』『「卵」と「壁」と「システム』『「シャーマニズム』『「シャーマン』『「巫女』『「預言』『「予言』『「聖書』『「ヨハネの黙示録』『「ハルマゲドン』『「ブッシュ政権』『「ファンダメンタリスト』『「ノストラダムスの大予言』『「スピリチュアル』『「宗教』『「占い』『「政治』『「行政』『「仮定』『「仮想現実』『「デジタル化されたデータ＝デジタル化された情報』『「思いは実現する』『「夢はかなう』『「自分が変われば世界が変わる』『「言葉の物質性』『「言葉の抽象性』『野生の思考』『「野生の三色スマイル』『「ステファヌ・マラルメ』『「ジャック・デリダ』『「ジャック・ラカン』『「高山宏』『「広義の言語』『「狭義の言語」です。

※抑うつ、体調不良、そして言語の仕組みと働きにこだわることへの懐疑の3つが重なって、心身ともに最悪の状態になりました。

* ブログタイトル：「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-04-06～2009-04-09：新聞を読む気にもなれないので、各記事のタイトルが以前の同名のブログで採用していた「〇年〇月〇日をギャグる」から「〇年〇月〇日にギャグる」とトーンダウンしています。

※ ブログの新規投稿はいっさいやめて、しばらく何もしないでいる状態を続けて、ようやく落ち着きました。いつしか抑うつも和らぎ（※新しく処方されたお薬が効いたのか

もしれません)、「宿題」だった以下の「たとえば (10)」を書く気になりました。

* 「たとえば (10)」2009-04-17：しばらく文章を書いていなかったもので、いつものトリトメのない記事がさらにトリトメのないものになっています。言葉の仕組みにこだわっていると不幸になる、というのが、この記事の最も言いたいことです。言葉の力を信じる、というポジティブなスタンスで書かれている、自己啓発書と思考・発想法関連の書籍について考えていることをつづっています。ある10代のプロゴルファーがなぜあれだけ、この国の多くのヒトたちをひきつけるのかを例に取り、言葉の仕組みとしてはネガティブな面にとられがちな「Aの代わりにBを用いる」を別の視点に置き換え＝たとえ＝こじつけ、ポジティブな見方が可能であることを示しています。この記事の後半で触れた、「広義の言葉は「センテンス」ではなく「ぐちゃぐちゃしたかたまり」(＝イメージ)である」と、言葉の力を信じることは「賭け」である、という2つの考え方について書くことが、今後の課題だと決意している様子がうかがわれます。どうやら、「世界は、たとえ＝仮想現実なんかじゃない」教には「改宗」できなかったようです。キーワードは、「ビジネス書」「自己啓発書」「発想法関連書籍」「思考法関連書籍」「プラス思考」「ポジティブ／ネガティブ」「コーチング」「成功」「賭け」です。直接書かなかったキーワードは、「石川遼」「ナポレオン・ヒル」「ジェームズ・アレン」「デール・カーネギー」「スティーヴン・コヴィー」「地図は現地ではない」「思考は実現する」「NLP＝神経言語プログラミング」です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係ない。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」——「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

09.04.29 あう (3)

09.04.30 あう (4)

09.05.01 あう (5)

09.05.02 あう (6)

09.05.03 あう (7)

09.05.04 こんなことを書きました (その6)

09.05.05 スポーツの信号学 (1)

09.05.06 ドラマ信号論 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (2)

09.05.08 信号学的視線論 (1)

09.05.09 信号学的視線論 (2)

09.05.10 信号論 (1)

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論 (2)

09.05.12 信号論 (3)

09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

09.05.14 かく・かける (1)

- 09.05.15 かく・かける (2)
- 09.05.16 かく・かける (3)
- 09.05.16 かく・かける (4)
- 09.05.17 かく・かける (5)
- 09.05.18 かく・かける (6)
- 09.05.19 かく・かける (7)
- 09.05.19 かく・かける (8)
- 09.05.20 占い・占う
- 09.05.21 賭け・賭ける
- 09.05.22 書く・書ける (1)
- 09.05.22 書く・書ける (2)
- 09.05.23 こんなことを書きました (その8)
- 09.05.24 と、いうわけです (1)
- 09.05.24 と、いうわけです (2)
- 09.05.25 あられる・あらず (1)
- 09.05.26 あられる・あらず (2)
- 09.05.27 あられる・あらず (3)
- 09.05.28 あられる・あらず (4)
- 09.05.29 あられる・あらず (5)
- 09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第3巻

<https://puboo.jp/book/13667>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/13667>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13667>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第3巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
